
盗賊と領主の娘

くらの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊と領主の娘

【Nコード】

N6993L

【作者名】

くらの

【あらすじ】

過去の事件がきっかけで心に大きな傷を持った領主の娘レイピア。表はサーカスの次期団長、裏は盗賊団の頭という2つの顔を持った青年スキル。

2人のピンクダイヤモンドをめぐる攻防と恋の行方を描いたロマンチックファンタジー。

第1章 盗賊からの予告状1

コトリ。

レイピアの泊まっている宿屋の寝室に手紙が投げ入れられたのは、まだ日も昇って間もない頃のことだった。昨夜は連日の旅の疲れから早々に就寝してしまったため自然と眠りが浅くなっていたのだろう、その音は彼女の耳にしっかり届いた。

こんな時間に誰よ、と心の中で毒づきつつも気になってしまった以上このまま眠ることなどできるはずもなく、気だるそうに重い瞼をあげ、ゆっくりとベッドから身を起こした。

室内とはいえ朝は冷え込む。

ひんやりと冷たい床をヒタヒタと素足で歩いて扉に近づき、そこに落ちている手紙を拾う。

差出人を見て眉をひそめた。

長い間連絡を絶っていた父親からだった。

朝早くに起こされてしまったせいということも重なり、苛立ち、すぐにその手紙を捨ててしまいたい衝動にかられながらも何とかその思いを踏みとどめ、眠い目を擦りながら手紙の封を切った。

2年前、20歳の時ホットリープの領主の娘だったレイピアは父親と大喧嘩をして家を飛び出したのだ。原因は父にしてはささいなことだったかもしれない。けれど彼女にとってはとても重要なことだった。

それは母親の墓参りのこと。

母の命日に向けて1カ月前から父親と一緒に墓参りをするこ

を約束していた。しかし当日になって父は仕事で出かけてしまったのだ。彼が忙しいことは知っている。そして急に仕事が入ることもよくわかっていた。そんなたった1回のことで拗ねるほど子供ではなかったが、去年もその前の年も同じように墓参りの約束は破られていた。

元々あまり父親のことは好きではなかった。冷たくて家族のことを少しも見向きもしない仕事一筋の父。母親が死んでからは特にそう。ますます仕事に没頭するようになる始末だ。

長年積み重なった父親に対する恨みと、考え方の違いによる確執によってレイピアはとうとう家を飛び出したのだった。

家を飛び出してからは冒険者ギルドに所属して、冒険者として盗賊退治や獣狩りなどして生活費を稼いでいた。家も持たずに流れ者のような生活で各地を点々として。

……なぜ父は私のいる場所がわかったのだろうか。

レイピアはそのことが不思議で仕方なかった。

家にはもちろん自分の居場所を連絡した覚えはない。探偵でも雇ったのだろうか。

自分で私のところに来ないところがあの人らしいわ、と心の中で毒づく。

飾り気も何もない真っ白な紙で書かれた手紙は、父の字で「非常事態。家に帰って来い」と短く書かれていた。それ以外何も書かれていなかったのがとても彼らしかった。

その自分勝手にレイピアの都合など少しも考えていない父親の手紙に苛立ちを覚えて、くしゃくしゃと丸めてゴミ箱に投げた。しかし弧を描いて飛んでいった手紙は壁にぶつかって力なくポトリと床に落ちる。それがまたなんと腹立たしかった。

「何が帰って来いよ。今さら……何よ！」

出て行ったときは追っても来なかったくせに！

そう、レイピアの父親は今まで2年間、一切連絡をしてこなかったのだ。レイピアを探すこともしなければ家に連れ戻すこともせず……。

自分が居なくなったことすら気がついていないのでは？と思うほどだった。

緊急事態だか何だか知らないがあまりにも虫が良すぎる話ではないか。苛立ちばかりが心を占める。

しかし。

この手紙に書かれている非常事態とは何だろう。もしかして家に何かあったのかもしれない。

それとも父の身に何かが？

そう考えてすぐに否定する。あの父が病気にかかって弱るなど、どう考えてもありえないからだ。しかし無意識に気になるのか、胸の中に煙が入り込んだように気持ちが悪くなった。

第1章 盗賊からの予告状2

結局、レイピアはホットリップの自分の屋敷へ帰ることにした。

くだらない理由だったらすぐに出て行けばすむ。こんなスツキリとしない気持ちを抱えたまま次の冒険に出るよりは、ずっとましなはずだ。

ホットリップへの道のりはレイピアの泊まっている宿から馬車で3時間ほどかった。

レイピアが乗っているのは乗合馬車で賃金が安い。代わりに幌がボロボロになっていて、木でできた座席のイスには座布団もなく座りごちが悪かった。

大陸の外れの方にあるホットリップは街の中心にたどり着くまで延々と畑ばかりが広がり、穏やかでのんびりとした印象がある。畑はそろそろ始まる種まきのために次々と掘り起こされていた。田舎という言葉が似合うホットリップだったが、レイピアはこの光景が嫌いではない。

しかし同じような光景ばかりが続き飽きが出始め、朝が早かったことと春のやわらかい日差しも加わったおかげでうとうとと居眠りを始めてしまった。

ほどなくして御者に起こされた。門の前にさしかかった所で馬車から降りて別れを告げた。

2年ぶりに見る我が家は少しも変わっていないかった。

レイピアが屋敷を出た時期も今と同じような、温かく過ごしやすい季節だった。屋敷の建物はもちろんのこと、庭に咲く花々さえも全く同じ色取りだった。

レイピアの姿を見つけた庭師がハッと驚いた顔をするが、すぐに

恭しく頭を下げた。その見知った顔の庭師の姿にレイピアは安心感を覚える。

庭師の承諾を得ると、庭に咲いている沈^{しん}丁^{ちょう}花^けの花の枝を手折り香水代わりに胸元に挿し入れた。沈丁花は常緑の庭木で春になるとかわいらしい花を枝先につけ、その花は芳香性の強い甘い香りを漂わせる。

今のレイピアにできる精一杯のおしゃれだった。家を出てからは金銭的におしゃれなどする余裕もなく、先程乗った馬車だつて乗合のボロボロ馬車だった。

家を出たときから覚悟はできていたけれど、やはり父親から蔑んだ目で見られるのは嫌だった。

長い廊下を真っ直ぐ進んだ先は父親の居る書斎。

途中レイピアを知っている何人かの使用人に声を掛け、父の手紙について話を聞こうとしたが、誰もが眉を寄せて「まずは旦那様にお会いください」と答えた。とりあえず父が病気だとか、そういった類の話ではないことに安堵を覚えた。

ためらいがちに扉をノックすると中から低いレイピアの父と思われる声が返ってきた。ふう、と深呼吸をした後で扉を開ける。

書斎の真ん中にある革張りの椅子に腰を掛けていた父親はレイピアの方をちらりと見た後、表情どころか眉一つ動かすこともなく、再び机の上にある紙に視線を落とした。

久々に会ったというのにその態度は何！？

何の感動もないわけ？

もつともレイピアの方も久しぶりに会った父親に対して何の感動もなければ何の感情も湧いてこないが、あからさまにそういう態度を取られると腹が立つ。口の端を怒りの形に歪めたが、きわめて冷静に努めようとした。

こんな男のことでいちいち腹を立てるなんてエネルギーが勿体無い、とそう思っ

「お久しぶりですね。一体用件は何なのです？」

何の感情もこもらない声で言った。

一刻も早くレイピアはこの部屋から、そして屋敷から出たいと思った。やはり来るべきではなかったのだ。もう2度と顔も見たくない。

だから単刀直入に用件を聞く。

「この紙を見る」

父親の方もレイピアと同じように何の感情もこもらない声でたった一言。それだけ言い放った。

2年という歳月を経てもお互いの溝は埋まっていなかった。むしろますます深くなったのではないかとさえ感じる。

レイピアの父は黒髪を撫で付けて後ろへ流していて、スーツをきつちりと着こなしていた。お世辞にも愛想があるとは言えない男で、常に気難しい顔をしている。そしてその父は今、口を固く引き結んでいるためよりいっそう威圧感が感じられた。

父は何がしたいのだろう、と疑問に思いながらも素直にレイピアはその紙を受けとった。黒い紙に金色の文字で書かれた文面を見てレイピアはますます困惑した。

祝福の日にピンクダイヤモンドをいただきに参上します

黒のピエロ団

眉根を寄せて父親の方を見ると彼も険しい顔をしていた。

「なんです、これは」

まるで物語に出てくる怪盗がやるような予告状ではないか……。

「先週屋敷に送りつけられた。……予告状だ」

父の真面目な口調にレイピアは信じられない、と目をみはった。あまりにも衝撃を受けたので呆然として間抜けにもポカンと口を開けていたかもしれない。

真面目で石頭の父はこういった冗談をやるような人ではなかったからおそらく本当に送りつけられたものなのだろう。

一体誰がこんな馬鹿らしいいたずらを？

そしてこんな物を父は信じているのだろうか？

「誰かのいたずらではないのですか？」

あまりにも馬鹿馬鹿しくてレイピアは額を押さえてため息をついた。

「お前は……冒険者のくせに黒のピエロ団を知らないのか？」

知らない。そんな話は一度だって聞いたことがない。

「何なのですか？ その黒のピエロ団とは」

「今、全国各地を荒らしまわっている盗賊団のことだ。まさかこの領内に来るとはな……」

「その盗賊達はわざわざ予告状など出してから盗みに入るのですか

？」

レイピアの問いに父親は頷く。
盗賊というよりこれでは怪盗ではないか……。
もう一度レイピアはその黒のピエロ団とやらが書いた予告状に目を向ける。

ピンクダイヤモンド。

その文字に視線が止まる。

「あなたはピンクダイヤモンドを取られることを心配しているので
すか。だから・・・私を？」

冒険者としていくらか名声のある自分にダイヤモンドを守らせようとして、呼び寄せたというのか。

その意味を汲み取った父は、相変わらずむっつりと口を引き結んだまま頷いた。そこからは相変わらず何の感情も読み取ることはいかない。

ピンクダイヤモンドは確かにレイピアの屋敷にあった。そしてそれは生前母親が1番大切にしていたもので、唯一の形見の品でもあった。

父は母の形見だから盗まれるのを恐れているのだろうか。それとも宝石として価値の高いピンクダイヤモンドだからだろうか。

どうしてもレイピアには後者の方に思えてならなかった。1度も母の命日に墓参りに行くことがなかった父だったから。

母が生きている頃ですら愛情を向けている姿を見たことがなかったから。

そんな父のためにダイヤモンドを守るのは腹立たしかった。けれどむぎむぎと盗賊風情に母の形見をくれてやる気にはならない。

レイピアにとってもそのダイヤは母の思い出の詰まっている大切なものだ。

「わかりました。私がピンクダイヤモンドを守ってみせます」

自分でも驚くほどすんなりとその言葉が出ていた。

これは父親の為ではなく、自分の為なのだ。
母親の思い出を守るための。

部屋に入ってからレイピアはごろん、とベッドの上に寝転んだ。
唯一、自分が心を落ち着けることのできる場所。2年ぶりの自分の部屋に自然と父と対面して緊張していた筋肉がリラックスしていた。

再び予告状に目をやる。

祝福の日とはおそらく明後日の父の誕生日のことだろう。誕生日を祝って夜会が行なわれる。その浮かれた雰囲気を狙って来るものと思われる。

「わざわざ予告状を出すとはねえ」

よほどこの盗賊団は目立ちたがり屋か、自信過剰なのだろう。それか心底盗みという行為を楽しんでいるのかもしれない。そうでなければわざわざ捕まる危険を高くしてまでこんなことをするはずがないのだから。

いずれにしても盗賊の考えていることなど理解する気にならない。

すぐに屋敷の者に黒のピエロ団のことについて詳しく調べさせた。過去の犯行の手口などに目を通しておいた方がやりやすいと思ったからだ。

しかし、有名と言われている割にはその犯行について書かれている資料が少ないことにレイピアは顔をしかめた。ないよりはいくらかはましだろうだと思い、その資料に目を通す。

そこには黒のピエロ団のメンバーは複数いるらしいことや、狙われるのはいずれも領主や金持ちの貴族だということが書かれてあった。

なるほど、どうりで資料が少ないはずだ。

たとえ被害にあったとしても体面を気にするあまり届け出を出さない貴族が多いということか。

意外にもわくわくしている自分に気がついた。形見を取られるかもしれないという不安はあるものの、それよりも自信過剰な盗賊を一目見てみたいと感じているのだ。

レイピアは知らなかったが有名な盗賊団らしいので、捕まえることができれば冒険者としての名声も上がるだろう。

手の中でもてあそんでいた宝石のケースをベッドの上に置いた。黒のピエロ団が狙っているダイヤだ。あの後すぐに父の手からレイピアの手に渡されたのだった。

蓋を開けて中のピンクダイヤを取り出す。母の胸で光っていた頃とまるで同じ輝きにしばらく魅入っていた。

ピンクダイヤを身に付けている母親は宝石と同じくらい、いやそれ以上に美しかった。やさしくて綺麗で心があたたかい母はいつだってレイピアの自慢だった。

母のことを思い出してしまい、少しだけ悲しくなった。母が死んでからもう5年も経っているというのに、今だに思い出すだけで辛

くなる。楽しかった思い出よりも母を亡くしたあの日のことの方が記憶の奥底に根付いてしまってなかなか離れてくれないのだ。

絶対に守ってみせるわ！

レイピアはピンクダイヤに軽く口づけると、いつ盗賊がやってきても大丈夫なように身につけた。そしてベッドのすぐ近く、いつでも手を伸ばせる位置に剣を置く。

下手にしまいこんでいるよりも剣の腕がある自分自身が身につけている方が何倍も安全だと感じた。

第2章 2つの顔を持つ男

ホットトリップの街から少し外れた広大な空き地、くるぶしの辺りまで背を伸ばしている草むらの中に巨大な極彩色のテントが立てられた。

周りには何台もの馬車と、動物が入った檻。そして宿舎用に使われるいくつかの小さいテントが軒を連ねるようにして立っていた。これらのテントは宿舎用だけでなく衣装など小道具が置かれているものにも使われている。

そこに住んでいるのは、サーカスという見せ物をして街から街へ移り歩く旅芸人達だった。

彼らのステージである巨大なテントは、団員40人がかりでおよそ3日かけて立てられた。1日目はテントを支えるための高さ15メートル程の支柱を何本も立て、そして2日目にテントを張り、3日目でステージと観客席がつくられた。

テントから突き出ている鉄柱には赤と黄色の何とも派手なストライプの旗がひるがえる。

幸い穏やかで風のない日が続いたため、順調に作業は進んだ。

ようやく昨日になってその作業を終えた団員達はステージに向けてリハーサルや稽古といった自分の役目を果たしていた。

街では路上においてサーカスの来訪を告げるビラが配られ、店やら民家の壁やらいたるところにポスターが貼り付けられた。娯楽の少ない田舎のホットトリップは思いがけない旅人達の来訪に誰もが心を弾ませた。そうしてサーカスの幕が開く日を今か今かと待ち望んだ。

くあゝっと大きな欠伸をして1人の青年が宿舍用の青色のテントから出てきた。目を眠たげにとろりとさせて、前髪をかきあげている。

目的の人物を目ざとく見つけたリグは肩をいからせてその青年に寄って行く。

「若君！ 仕事は明日なんですよ！？ こんなところで寝ていてどうするんです。打ち合わせに出てくれないと」

今にも口から火を吹きそうな勢いでリグは怒鳴った。

若君、と呼ばれた青年は名をスキルという。彼はこのサーカス団の団長の息子にして次期団長の座にある。そのため彼は団員から「若君」と親しみを込めて呼ばれることが多かった。リグもそう呼んでいる1人である。

リグはサーカス団の一員として動物の世話を任されていて、同時にスキルを幼い時から世話をしている。ある意味育ての親とも言える彼の怒鳴り声にもスキルは全く悪びれる様子もなく、のん気に肩をすくめてみせた。それがまた彼の怒りをよけいに煽った。こめかみに青筋を浮かべて再度怒鳴り声を上げる。

「若君！！」

「あゝ、悪い悪い」

スキルは悪戯っぱく笑って片手を謝る形で顔の前に突き出して謝罪した。けれど実際のところ本当に謝っているかと言えば怪しいものだ。いや、むしろ少しも悪いと思っていない。長いつきあいのリ

グにはそれがわかる。

黙って立っていればスキルは男の自分から見ても良い男だと思う。年齢はまだ22歳と若く、サラサラとした金髪と整った顔立ち、すらりとした体格。ステージに上がった彼は貴族のような振る舞いと、それに似合わないスリリングな演技の数々で女性はおろか男性の心も魅了して止まない。実際スキルの母親は貴族だったらしいので血は受け継いでいるのだが……。

しかし普段の彼は貴族らしいところはちつともなく、まるで悪戯小僧のようだ。毎度のようにリグはこの風のような悪戯小僧に手を焼かされている。

再度怒鳴り声をあげようとしたリグは、スキルが今までいたテントから1人の少女が出てくるのを見つけて絶句した。

頭が真っ白になる。

テントから出てきたのは、シャンナリーという名の少女だ。艶やかな黒髪と薔薇色の頬をしていて誰から見ても「守ってやりたい」と思わせるような少女。そのシャンナリーは今や黒髪を少しだけ乱れさせて、身にまとった服にしわをつけている。頬を上気させて、マスカット色の瞳を潤ませて。

シャンナリーはリグと目が合うと、恥ずかしそうに目を伏せてスキルの後ろに隠れた。

テントの中で行なわれていたことが容易に想像がつき、リグは頭を抱える。

大事な打ち合わせを放り出して何をやっているんだろうか！

「若君、あなたという人は！ ああもう、こっちに来てください」

リグは頭を掻きむしった後、半眼でスキルを睨みつけると、半ば引きずるようにして彼の腕を引っ張って隣のテントに連れていった。

「これから明日に向けて大事な報告があります！」

リグはバン、と机を叩いた。

そして怒りが抜けきれていないらしく、震わせた手で報告書を取り出した。座っている椅子が小刻みにカタカタと揺れる。

スキルは興味がなさそうに再度くわくっと大きな口を開けて欠伸をした。だらしないとも言える行動だが、彼がやるとそれが1つの優雅な動きに見えてしまうのだから不思議である。しかしリグはますます苛々する一方だ。

カタカタと再び椅子が揺れる。リグの怒りを物語っているようだ。

「明日の打ち合わせはもう午前中に終わったはずだろう？」

「それは舞台の方です。私が今から言うのは明日のピンクダイヤモンドの件です」

リグの言葉にスキルは鋭く碧眼を光らせた。

「そうか、悪かったな。報告を聞こう」

短く謝罪をすると、スキルは先程の態度とはまるっきり正反対の真面目な顔つきになった。そして奥から2脚椅子を引っ張りだすと、リグに1つを渡し彼も腰をかけた。長い足を組んでその上に肘を乗せて頬杖をつく。一見すると不真面目そうなのだが、これがスキルにとって真面目に話を聞く体制であることをリグは知っている。

ようやく本気になったな、と安堵のため息をつく。

そう、このサーカス団こそレイピアの屋敷に予告状を送りつけた主であった。

表の顔はサーカスとして、裏の顔は盗賊として。全員が全員盗賊

稼業に手を染めているわけではないものの、スキルを筆頭として全国を股にかけて活動していた。

「領主宅には昨日1人娘が戻ってきたそうです」

リグは報告書に書かれた内容をそのまま読み上げる。

「戻ってきた？」

「はい。領主の娘は冒険者として旅に出ていたようです」

スキルはその言葉に興味を持ったように眉を上げる。

「領主の娘が冒険者……ね。単なるお嬢様じゃないということかな」

領主のお嬢様といったら僂げでシャンナリーのようなイメージがある。

リグから報告書を受け取るとしげしげとその内容を確認めた。レイピアという名前にスキルはおや、と目を見張る。レイピアといったら剣の名前ではないか。

レイピアは装飾を施された美しい剣ではあるが、領主の娘の名にしては相応しくない。

名前の通り剣のような鋭さを持っているのか、それとも単に名前だけのお嬢様なのか。一体どんな顔をしているのだろう。

あれこれと考えていたらリグの声で現実に引き戻された。

「当日は屋敷のどこかに隠すものだと思います」

スキルもこの意見に頷く。大方の貴族連中は予告状を出すときに見つかりにくい場所に隠そうとする。ここの領主もまた一緒だろうとスキルは考えたのだ。例えば娘が冒険者であったとしてもわざわざ

わざと胸に下げようなどとはしないだろう。

もつともどこに隠したとしてもスキルには見つける自信があったが。

狙った獲物を逃がしたことなど、今まで1度もない。例えばそれがどんなに盗み出すのが困難な物であっても同様だ。

「お嬢様の部屋を荒らすのは気が引けるが……仕方がないな」

くつくつと喉をならして楽しげに目を細めた。

リグは眉を寄せたが、スキルに意見することはなかった。彼は悪戯がすぎる傾向があるものの、盗賊としての腕を信頼しているからだ。

第3章 領主の娘と貴族の男1

ホットリープの領主の屋敷では、誕生日という名目の盛大なパーティーが開かれた。親族はもちろんのこと近隣の貴族達も招かれ、庭で行なわれた。

白いテーブルクロスで覆われたテーブルがいくつも並べられての立食形式で、招待客には料理人自慢の肉料理や魚料理やとっておきのワインがふるまわれた。

庭木には電飾がつけられ、控えめに明かりを灯す。

招待された者達はそれぞれ片手にワイングラスを持ち、話に花を咲かせる。

レイピアも領主の娘としてパーティーに参加していた。

レイピアは自分の瞳と同じ色の青いドレスを身にまとっていた。あまり派手すぎずシンプルなデザインのそのドレスは、着ている彼女をほっそりと見せた。

長い銀の髪の毛をアップにして耳元にはパールのイヤリング。そして首から大粒のピンクダイヤを下げた。ダイヤは世界中の月の光を集めたように眩しく輝いている。ダイヤを繋いでいるのは金色の鎖。こちらの方はダイヤをよりいっそう引き立たせるために控えめな光を放っていた。

パーティーの招待客は誰もがほうつとため息をもらして彼女の姿を見つめた。普段の彼女も魅力的だが、ドレスアップした姿はそれより何倍も魅力的だ。月の女神が人間の姿をしていたなら、まさしく彼女のことだろうと思うに違いない。

パーティーの参加者には混乱を防ぐためにも盗賊が侵入すること

は話していない。そのため事情を知らない者から見ればレイピアは何の不自然もない姿だ。しかし事情を知っている者から見たらあまりにレイピアは無謀な姿をしていた。盗賊に狙われているピンクダイヤモンドをこれ見よがしに身につけているからである。明らかにこれは盗賊に対しての挑戦に思える。

さあ、狙ってきなさい。

くすつとレイピアは真つ赤なルーージュをつけた唇を笑みの形に歪めた。

盗賊はもう中に入り込んでいるのかもしれない。レイピアはそれとなく会場の中を見回した。

今のところそれらしい動きはない。

先程から代わる代わる貴族の青年達がダンスを誘いに来るのがとても鬱陶しかった。これではまるで父の誕生日パーティーというよりお見合いパーティーではないか。

うんざりしつつも口元に笑みを絶やすことなく愛想を振りまいてレイピアはそのダンスに答えていた。もちろん盗賊かどうかを見極めるように目をギラギラと光らせながら。

何人かと踊った後でようやくダンスから開放される。

1時間近く踊っていて、くたくたになったレイピアは会場の片隅に置かれた椅子に腰かけた。

家を飛び出してからこんなふうにダンスを踊る機会もなければパーティーに出る機会もなかった。疲れが回るのは早いのも当然かもしれない。

しばらくそうして休んでいるとずっとワイングラスが差し出された。

ちらりと顔を上げて見ると、いつのまにか1人の青年が前に立っている。踊り疲れてくたくたになっていたから気がつかなかったのだろうか。

それにしても気配も、足音すら気がつかせないとは一体？

「どうぞ。先程から何も口にされていないようなので」

金髪で、背の高いその男はレイピアを気遣うように碧色の瞳を細めてにっこりと微笑んだ。その青年は白いタキシードで正装し、手にも白い手袋をはめていた。穏やかな顔つきと低くて耳に心地よく響く甘い声。まるでどこかの王子様のよう。

レイピアは青年に微笑み返すとワイングラスを受けとった。今宵のパーティーにピッタリな、月を浮かべた琥珀色のワイン。

「ありがとうございます。ちょうど喉が渴いていたところなの」

レイピアは白い喉をこくこくと鳴らしてワインを飲んだ後、優雅な仕草で口元をハンカチで拭ってから「おいしいわ」と微笑む。その様子を見守っていた青年は満足げな表情をすると隣に座つてもいいかどうか尋ねてきた。断る理由がなかったレイピアはすんなりと許可をする。

「挨拶が遅れました。私はスパニティ家のランスと申します」

優雅にお辞儀をした後、ランスはレイピアの手をとり甲に口づけた。この美貌の青年にはその仕草がひどくよく似合っていた。

レイピアはにっこりと微笑んでそれを受ける。

「私はこのホットリープ領主の娘のレイピアと申します、ランスさん」

「ランス」という言葉を少しだけ強めてレイピアは青年に向かって自己紹介をした。

「貴女のような女性にレイピアという名前は珍しいですね」

青年はそんなことを言い出したのはレイピアの容姿があまりにも剣の名に相応しくないと考えたからだろう。よい身分の娘らしく清楚なドレスに身を包んだ彼女からは剣のような鋭さがどうしても感じられなかったからだ。

「まあ、そうかしら。では私にはどんな名前が似合うと思います？」

そう返されるとは思っていなかった少し驚いた表情を見せるが、しかしほんの一瞬考え込むと「シャンナリー」という名前はどうかでしょう」と答えた。

「素敵な名前。由来は何かしら？」

レイピアが聞くと青年は悪戯っぽく笑って

「私の飼っている猫の名前です」

と答えた。

「まあ、私は猫の名前なんですか、ひどいわ」

レイピアはくすくすと笑って抗議の声を上げた。青年も穏やかに笑って返す。

傍から見ると2人の姿は恋人同士のように見えるのだろうか、先

程までうんざりするくらいダンスの誘いがあつたというのにランスが来てからはピタリと止んでしまった。しかしやはりレイピアとランスのことが気になるのか貴族の男性達は遠巻きにチラチラと視線を投げかけてくる。

レイピアはその視線に気がついていたが、あえて気づかない振りをする。ランスもおそらく気がついていいるのだろ。しかしランスはその視線を気にとめる様子もなくさつと立ち上がるとレイピアの手をとった。

首を傾げるレイピアに向けて微笑んだ。

「レイピアさん、私と一曲お相手を」

ダンスに誘っているのだ。レイピアは理解すると、肯定の印にドレスの裾を軽く持ち上げてお辞儀をした。そしてランスに手を引かれるままダンスのために設けられた中央の広場に歩いていく。

やわらかな月明かりに照らし出された広場。

その中心では曲に合わせてワルツが踊られていた。輪を描くようにして踊っている男女の中にランスとレイピアも入って行った。

輪の中に入るとランスによって左肩に手を回された。レイピアもそれに合わせて左手でランスの肩に手を回し、そして右手で彼の手を握った。4分の3拍子のテンポに合わせて優雅に踊った。

レイピアがランスの方に顔を向けるたびにパチリと目が合った。

彼の熱っぽい視線にレイピアはすぐにさつと目をそらしてばかりだったけれど。

「とてもダンスがお上手なのね」

「実はワルツはあまり踊り慣れていないですよ。いつあなたのドレスの裾を踏んでしまわないか緊張しています」

「まあ」

あんまりにもおどけた様子で言うものだからレイピアはくすくすと笑いが止まらなかった。

ランスはああ言っではいるけれど、踊り慣れていないどころか彼のリードの上手さは今日踊ったどの貴族の男よりも洗練されているように思えた。ステップは優美で軽やか。

自然と周囲の視線がレイピアとランスの2人に注がれたのは言うまでもない。

そうして30分くらい踊っていたところで急にレイピアの隣で踊っていた男女が倒れた。すぐに異変に気づいた周りの女性達が悲鳴を上げる。しかしその悲鳴を上げていた女性達も数分と経たずにバタバタと次々に倒れていった。

何か会場中に異変が起きたのは誰の目から見ても明らかだった。

来たわね。

レイピアはすぐに盗賊が仕組んだ罠だということに気がついた。おそらく食事やワインの中に眠り薬が仕込んであったのだろう。

ちらりと目の前にいるランスを見ると、彼は戸惑ったようにレイピアの顔をまじまじと見ていた。

くす、とレイピアはランスに向けて冷やかに笑い飛ばした。

「私が眠らないのがそんなに不思議？ 盗賊さん」

ランスと名乗った青年はおや、という風に目を見張ったかと思ったら、急にくつくつと楽しげに笑いだした。今まで穏やかに笑っていた青年とはまるっきり別人である。先程の微笑みが天使的な微笑

みだとしたら、今のは悪魔的といったところか。

「バレていたとはね。単なる貴族のお嬢さんではないということかな」

「ありがとう。私、優男は信用しないことにしてるの。もちろんいただいたワインは飲む振りをして後は捨てちゃったわ」

レイピアはワインを飲んだ後にそつと口元にハンカチを当てたのだ。傍から見れば単に口元をぬぐっているように見えたが、実はそうではなく飲んだワインを染み込ませていたのだ。

その様子をジェスチャーで示してからパチンと片目をつぶってみた。

「君はたいした演技力だね」

「あら、あなたには負けるわ」

この青年が近づいてきた時から、レイピアは盗賊ではないかと睨んでいた。

あまりに盗賊という肩書きの似合わないその青年に少々驚きはしたが……。

貴族らしく振舞う青年に合わせて、あえてレイピアは貴族の娘らしくしとやかに振舞っていた。まるで狐の化かしあいのように、途中でおかしくなって笑いをこらえるのが大変だった。もちろんランズという名が偽名ということもわかっていた。

「さあ、大人しく捕まってちょうだい」

レイピアはそれまでドレスの内側に縫い付けてあった短剣をさつと引き抜いた。

盗賊の青年は信じられない、といった感じで目を見開く。お嬢様

だと思っていた女がドレスの中から剣を引き抜くとは思ってもいなかったのだろう。

しかし隙をついたにも関わらず、レイピアが青年に向けて薙いだ短剣は寸でのところでひよいと避けられた。

青年は先程の驚いた顔はすでに内に潜めて今は涼やかな顔をしている。

「訂正だ。君はレイピアという名が似合っている」

「光栄ね」

レイピアの持っている短剣は刃渡り25cmほどのれっきとした戦闘用のものである。当然刃をつぶしてもいない。しかし盗賊の青年は短剣を向けられても恐怖するどころか実に堂々とした態度をしている。

余程自信があると見える。

一気に間合いをつめて斬りかかろうとするのだが、なかなか思うようにいかない。青年がふわりと逃げてしまうのだ。まるで風でも相手にしているように感じる。

レイピアはそれなりに剣の腕に自信があつた。けれども一向に斬りつけるどころか、かすめることさえもできない。青年はいとも簡単そうに間一髪でひよいひよいと避けていく。

傍から見れば2人の姿はダンスをしているようにも思えたかもしれない。しかし今や2人を除いて会場にいた人間全員が眠りこけてしまったため、その姿を見ることができなかったのだが。

「なぜ剣を抜かないの!？」

こうしてレイピアの剣を避けている間に青年が自分の剣を抜くチャンスはいくらでもあるはずだ。それなのにこの青年はそれをしよ

うとはしない。レイピアにとって不可解で仕方がなかった。

「盗賊は剣を振り回したりしないのさ。強盗になってしまっただろう」

軽口を言うように青年はレイピアに語った。そして武器を持ってきていないことを示すためにタキシードの胸元のボタンを外して開いてみせた。

「そんな強がりいつまで言ってられるかしらねっ！」

レイピアは馬鹿にされているような気がして腹が立った。青年が剣を抜かないどころか持つてきてもいないのは、まるで自分ごときに剣を抜く必要がないと思っているのではないかと、そんな気がしてならなかった。

余裕を持った涼やかなその表情も腹が立つ！

だが、そんな様子を顔に出さないようにして、きわめて冷静を装って盗賊に短剣を振った。

「君はとんでもないお転婆だ。さぞかし父親は手を焼いているだろう」

「そういうあなたこそ猫被りのエセ貴族じゃないっ！」

「ハハ、本当にお嬢様は気が強くていらっしやる。 気の強い女は、嫌いじゃない」

「何を……っ！」

挑発だとわかっていたけれどついカツとなってしまった。レイピアは冷静さを忘れて闇雲に剣を突き出していた。それを見逃す青年ではなく、いとも簡単にレイピアの手の甲を叩いた。その衝撃で思わず短剣を落とす。運の悪いことに落ちた短剣はちょうどレイピアの太股に突き刺さった。

レイピアは短い悲鳴を上げる。

それは青年にとっても予想外の出来事だったらしく、小さく舌打ちをするとレイピアの体をぐい、と引き寄せた。驚いて目を見開く彼女に青年は唇を寄せた。さっと口の中に何かが入ってきたが、それがあまりに突然のことだったので思わず飲み込んでしまった。「なにを……!？」と盗賊の青年に問いかけようとしたが、ろれつが回らずに実際にはうめくだけだった。

ぐらりと視界が揺れる。

即効性の眠り薬だ　気づいた時にはすでに遅かった。飲み込んでしまった薬を吐き出すこともできない。

体から力が抜けていくのを感じた。足で立っていることができず、あっさりと地面に倒れこんでしまいレイピアは急速に意識を失った。

次にレイピアが目を覚めたのは翌朝のことだった。

鈍く痛む頭を押さえて周りを見わたすと、貴族達が眠りこけている姿が視界に映った。そこでハッと気がついて胸元を確認する。

彼女の胸元に昨日まで輝いていたはずのピンクダイヤモンドは見事に奪い去られていた。

驚いたことはそれだけではなく、短剣が突き刺さったはずの太股には盗賊が着ていたタキシードの袖で止血がされていた。そして片袖を無くしたタキシードがレイピアの体の上にかけられていたのだった。

「あいつ……!」

レイピアはくやしさのあまりその白いタキシードを地面に叩きつけた。そしてギリと奥歯を噛みしめる。

ダイヤを奪われただけでなく、同情をかけられ止血までされた。

レイピアにとって屈辱という言葉以外、言い表すことができなかった。

「よくも……お母様のダイヤを……」

唇を噛み締め、体を震わせる。

「あの男……！ 許さない」

絶対に取り戻してみせるわ、とレイピアは心の中に復讐の炎を燃え上がらせた。

第3章 領主の娘と貴族の男2

テントに戻ったスキルは大歓声で迎え入れられた。団員にして盗賊仲間連中はバシバシとスキルの肩を叩いて仕事の成功を褒め称えた。

スキルが戦利品であるピンクダイヤモンドを掲げると団員の間からほう、というため息がもれた。大粒のダイヤモンドはスキルの手の中で輝きに満ち溢れていた。

近くにいた1人にピンクダイヤを渡すと、それを見るために次から次へと団員達に渡っていった。

「よう、スキル。今日の仕事の具合はどうだったよ？」

スキルの肩を思いつきり叩いて話し掛けて来たのはブレンという男だった。

もともとこのサーカスの団員達の間には上下関係というものが薄く、仲間意識の方が強い。それでもくだけきつた物言いから彼はスキルの親友であることが伺えた。

ブレンは活発な顔立ちに褐色の肌と黒色の髪をしていて、頭にバンダナを巻いている。

彼もサーカスの団員にして、「黒のピエロ団」の一員だったが今回の仕事に関してはスキル1人で出向いたため、そわそわと仲間達とスキルの帰りを待っていたのである。

ちなみにこのスキルとブレンの2人がつるむとたいてい口くなくとがないため、リグはしょっちゅう頭を悩ませていたりする。

「あー、成功といえば成功だ……」

齒に物の挟まったような言い方をするスキルにブレンは顔をしかめる。

「なんだ、お前らしくもない。いつもなら成功して当然って顔して帰って来るくせによ。あ、お嬢様は見れたか？ 美人だった？」

前情報から領主に娘がいるということを知っていたブレンはスキルのわき腹を肘でつついて尋ねた。

ブレンの言葉にスキルは眉間にしわを寄せた。

「あん？ どうかしたのか」

途端に不機嫌そうな顔になったスキルに不思議そうに首を傾げる。

「あー、ハズレだったのか。そりゃご愁傷様……」

「いいや、とびっきりの美人だった」

言葉とは裏腹にその表情は相変わらず不機嫌なまま。だったらなんでそんなに不機嫌なんだよ、と言いかけたブレンの言葉を遮る。

「その話は後だ」

ひらひらと手を振ってブレンから離れると、ため息をついて椅子に腰掛けた。ひどく疲れてしまった。するとそれまでじっと遠くで見守っていたスキルの母親のソアラが静かに彼の側に寄った。

「お疲れ様、スキル」

やさしい口調で労いの言葉をかけた。

おっとりとした雰囲気を持つ母親はかつて貴族の令嬢だった。どこをどう間違えたのかスキルの父親に惚れてしまい、家に勘当されてまで団長の妻として生きていくことを選んだ。旅芸人という職業に身を置いて20数年、しかしながら彼女の物腰や振る舞いは未だに衰えることがなく上品なものだった。

もちろんソアラも盗賊稼業のことは良く知っている。そしてそれがとても危険なことも悪いことであるのも。けれどもソアラはそれを承知の上でスキルの父親に惚れたのだ。

「上着はどうしたの？」

そうソアラに問われてスキルは慌てた。まさか令嬢に怪我を負わせてしまつてその手当てのために脱いできたとは言いづらい。

言えるわけがない。

ソアラは盗賊という仕事を認めているものの、人を傷つけることを大変悲しむ人だから。たとえそれが事故で故意に傷つけたのではないにしても。

「……汚れたので捨ててきました」

多少の後ろめたさを覚えつつもそう言うしかなかった。人の言うことを素直に信じてしまふソアラもそれで納得したらしく深く追及はしてこなかった。

「疲れたから少し休んでくる」

スキルは団員からピンクダイヤを受けとると休憩するためにテントに向かった。

テントに横になったスキルはくそつと小さく毒づいた。

彼は今、スツキリとしない気持ちを抱えていた。

理由ははっきりとしている。いつものようにすんなりと仕事が成功しなかったせいだ。

スキルは貴族というものが好きではなかった。鼻持ちならない態度、人を馬鹿にした態度……。サーカスの団員の娘を酒場の踊り子と勘違する貴族連中もいて、起こったトラブルも1度や2度ではない。

サーカスをして各地を点々と渡り歩いているスキル達は場所代として領主にお金を収めなければならなかった。ほとんどの領主はサーカスと聞くと下賤な芸人の集まりと馬鹿にしてとんでもない高額を要求してきた。

昔はサーカスの知名度も低く、そんな馬鹿高い金額を払えずに盗んだ金で支払いをしていたが、知名度も興行収入も上がった今や場所代を払うのは容易だった。けれど貴族連中が大切にしている宝物を盗んだときの快感が忘れられずにいまだに盗みを続けていた。わざわざ予告状を送りつけて盗み、貴族の悔しがる顔を見るのが好きだった。

けれど今日の盗みは。

お嬢様だと思っていた女が剣を抜いてきたことが誤算の始まりだった。そう考えてスキルは頭を振る。

いや、そもそもどこかに隠していると思っていたピンクダイヤを令嬢自ら身につけていたことだ。

一目剣の名を持つお嬢様を見てから屋敷の中を探そうと思い、わざわざ偽造した招待状で会場に入った。レイピアを見つけたとき思わず口笛を吹きたくなるような美人だと思った。しかし何気なく目を向けた胸元にピンクダイヤを身に付けていたときは驚いた。

そして飲んだと思った眠り薬入りワインをこっそり捨てていたことも。全て彼女はスキルの予想を裏切ってくれた。

結果としてダイヤを手に入れたのはスキルだったが、どうも気分が晴れない。逆にスキルの方がイライラとさせられてしまった。

月の光を集めてその背に流したような銀色の髪。

日焼けという言葉を知らないような白磁の肌。

あるとき、領主の娘として浮かべていたやわらかな笑顔がまさか作り物だったとは思ひもなかった。

短剣を引き抜いて自分に向かってきた、剣のような鋭さの性格。

あのおざやかな印象。

スキルはかぶりを振る。

いつまでも考えても仕方がない。もう終わったことなのだから。

スキルはそう思い、明日の公演に向けて休むことにした。

第4章 取り引き1

翌日。

朝から晩にかけて3回に渡る公演はいずれも拍手喝采で幕を閉じた。夜の公演が終わったのは9時であった。サーカスを見終わった観客達は子供も大人も、誰もが満足そうな表情をしてぞろぞろと出口の方に流れて行き、9時30分をまわったころには誰1人としてテント内からいなくなつた。

団員の1人である男がテント内に忘れ物はないかどうかチェックをしているところで1人の女に声を掛けられた。

「スキルさんに会いたいのですが」

凜とした声のその女性は帽子を深々と被っていて顔がよく見えなかったが、唇の形の良いことから男は美人だな、と想像した。帽子からこぼれ落ちるように背中を流れる銀色の髪の毛は澄んだ月を思わせるように美しかった。

もしも町中で見かける機会があつたなら間違いなく声をかけているだろう。最も、自分では相手にもされないだろうが……。

「若……いや、スキルさんに何の用事です？」

そう言いつつも男には何となく想像がついていた。この女性も花形スターであるスキルの追っかけの1人であると思つたのだ。こんな風にスキルに会いたがる女性は珍しくない、たくさんいるのだ。ところが次に女性が言つた言葉は驚くべき内容だった。

「スキルさんに借りた上着を返したいのです」

男は女性が手に持っていた上着に目を向ける。その上着はスキルが昨日領主宅のパーティーに忍び込むために着ていたものである。

ごくりと息を飲み込む。

嫌な予感が頭をよぎる。

男はその女性と上着を交互にまじまじと見つめると、腹を決めたらしく奥のテント街へと案内した。

奥のテントには公演を終えたばかりでまだ着替えも終わっていないスキルの姿があった。

照り付けられたスポットライトと激しい運動のせいで、背中にびっしょりと汗をかいて一刻も早く着替えをしたいと思っていた。そんなところに団員の1人の男が慌てた様子でテントに入ってきた。

「どうした？」

男のただならぬ様子にスキルは眉をひそめた。

「そ、それが……」

男が言葉を言い終えるより前にスキルはテントの入り口に立つ女性に目が向いた。

女性は被っていた帽子を脱ぐ。その見知った顔に驚いて目を開き、絶句しているスキルに彼女はとびきりの艶やかな笑みを向けた。

「ごきげんいかが？ ランスさん」

まぎれもなくその顔はスキルがピンクダイヤモンドを奪った領主

の娘だった。

第4章 取り引き2

レイピアがスキルの居場所を見つけられたのには訳がある。彼はタキシード以外何も証拠らしいものは残していかなかったし、そのタキシードですら彼の居場所を見つける証拠になるわけもなかった。けれどレイピアはあらかじめピンクダイヤが盗まれたときのために罠をしかけておいたのだ。

ダイヤに仕掛けた罠は盗賊にあっさりと見抜かれるかもしれないと思ったのだが、意外にも気づかれなかったためすんなりとスキルの場所を見つけることができた。

スキルの本名を知ったのもサーカスの宣伝用に配られていたビラからだった。

案の定盗賊のスキルは驚いていたため、レイピアとしてはとても気持ちが良いものだった。

「ふふ、びっくりした？ でも私もびっくりしたわ。あなたがサーカス団の次期団長だったなんてね」

「なぜここに……？」

スキルはレイピアの姿に動揺していたが、すぐに冷静さを取り戻してポーカーフェイスに戻る。

「ダイヤに仕掛けをしておいたの」

その言葉にスキルは懐に入れていたピンクダイヤモンドを取り出し、食い入るようにして見つめた。そして鎖の部分に何か小さな金属のようなものがくっついてるのに気がついた。鎖と同色の金色をしているため、今まで全く気がつかなかったのだ。

じつと見つめていたレイピアは満足そうに頷く。

「そう、それ。それはね、オリハルコンといって特殊な金属なの。盗賊さんならもちろん知ってるわよね？　それでこっちはオリハルコンを探す探知機」

これでもうわかったでしょう？　と言うようにレイピアは右手に持っていた探知機を、スキルの方に見せびらかすようにして掲げてみせた。

ちょうど探知機の画面中央部分で光が点滅している。

オリハルコンとは金属の中で1番の硬度を誇るものとして武器などに用いられる。非常に貴重な金属であるため、一般に出回っていることはほとんどない。ましてやホットリープのような田舎ならばなおさら。

つまりあらかじめピンクダイヤの鎖にオリハルコンさえくっつけておけば後は探知機を使って探すことが容易にできるのである。

レイピアが説明を終えると、それまで黙って聞いていたスキルは体を屈めるようにして笑いだした。

その様子にレイピアは怪訝な表情を浮かべる。

スキルからはすでに先程の動揺など微塵も感じられなくなっていたから。むしろ余裕すら伺える。

「君は本当にただのお嬢様じゃないようだな。だが賢くはない」

賢くないとはつきり面と向かって言われ、レイピアは顔を派手にしかめ口を尖らせる。

「それはどういう意味かしら？」

「言葉の通りさ。敵陣にたった1人で乗り込んでどうしようってい

うんだい？」

スキルの余裕を伺わせる態度はそのせいだった。
レイピア1人で何ができるのか、そう思っているのだろう。

「もちろん、ダイヤを返してもらうためよ！」

無謀なことは充分わかっていた。それが危険だということも。けれどそれ以上に母の形見であるピンクダイヤモンドを取り返さなくては、という思いの方が強かった。

レイピアは腰に差していた短剣をすっと引き抜くが、スキルは慌てる素振りも見せずにダイヤをわざとらしいくらいゆっくりと懷に収めると、肩をすくめてみせた。

「君の腕じゃ無理だ。俺からこれを取り返すことはできないな」

ピンクダイヤモンドの入った懷を指し、ニヤリと笑った。明らかに挑発だ。

馬鹿にして！

そう感じたレイピアはカッとなった。

「そんなのやってみなくちゃわからないわっ！」

「リグ！」

レイピアがスキルに飛びかかる前に、スキルは大声で人を呼んだ。その声にテントの前で控えていたリグが、ただならぬ気配を察してすぐさまテントの中に入ってきた。

目の端に男の姿を捕らえてレイピアの怒りがわなわなと込み上げた。

「ひ、卑怯者っ!!」

レイピアの言葉にスキルは心外だな、と言わんばかりに片眉を上げてみせた。

「卑怯だつて？　こうなるのを覚悟の上で来たんだろう」

リグによって両腕をあつさり捕らわれ、レイピアは怒りに顔を真っ赤にして暴れた。しかし拘束はいつそう強くなるばかりでその腕が解放されることはなかった。

「卑怯者　　っ！　これだから盗賊なんて!!」

スキルはレイピアの顎を片手でくい、と持ち上げると注意深く観察するようにその顔を覗き込んだ。

「なんなのよっ!？」

「黙っていれば美人なのに、勿体無いな」

「うるさいわね、ほっとしてよ!」

気性の激しい犬のように、まるで今にも噛み付きかねないレイピアの様子にスキルは肩をすくめると椅子に腰掛ける。

「卑怯者卑怯者卑怯者　　っ!!」

これだから盗賊なんてカスだわ、最低だわ、と悪態をつく。
その様子を眺めていたスキルはおもしろそうに目を細めて手をひらひらと振った。それがよけいにレイピアの怒りを煽ったのは言うまでもない。

「そういえばあなたって最初から卑怯だったわ！」

「うん？ 何のこと。もしかして眠り薬を飲ませたことかな？」

「そうよ！」

自分で言って、その場面を思い出したのか顔を真っ赤にする。それは怒りのためでもあるし別の理由もあるように思えた。

「私としても眠っている女性の胸元に手をかけることは非常に心苦しいことだったですよ。ああ、罪深き私をお許しください」

体を折って謝罪の意を示す。口調はランスのものだったが、その表情はどこか楽しげである。レイピアが怒るのを承知でわざとそんなことをしているのだ。

ぐつぐつと腸が煮えくり返りそんな気分でスキルを睨みつけた。

「この女性はどうするんです？」

状況がよくつかめていないらしく、困惑した表情のリグはスキルに尋ねた。

「そうだな、とりあえずテントに入れておけ。気性の激しい女だから縄で縛って転がしておくといい」

捕らわれてしまい、これから自分がどうなってしまうのか全く想像のつかないレイピアは顔を青くしたが、すぐにスキルのあんまりな言い方に顔を赤くして怒りに身を震わせた。

テントに連れて行かれる間際まで、青いギラギラとした瞳で射殺さんばかりにスキルを睨み続けた。

第4章 取り引き3

テントの1つに連れて来られたレイピアは、スキルの言葉通りリグによって縄で手と足を縛られた。もちろん短剣など武器の類は全て取り上げられた上で。

怒りに肩を震わせてレイピアはリグを睨みつける。意外にも睨みつけられた男は戸惑ったような、申し訳無さそうな表情をした。

「すみません、手荒なことをしてしまって」

謝られるとは思ってもいなかったレイピアは驚き、目を見開いた。よく見るとこの男、盗賊という言葉とは無縁のような顔立ちをしている。どこことなく穏やかでやさしげな感じだ。

「若君も普段はこんな命令を出すような人ではないのですが……。
一体何をしたんです？」

スキルは今まで1度だって女性に対して乱暴に扱ったことはなかった。盗賊という荒々しいことをしているけれどその点については彼なりに信条を持っているようなのである。

しかしレイピアへの扱いはまるで。

リグは困惑を隠しきれないでいた。

リグはテントの奥から椅子を一脚出すとレイピアを座らせて、縄の端っこを椅子の背もたれに縛り付けた。転がしておけと言われたが、さすがにそれはかわいそうだと思ったのかもしれない。ただレイピアの扱いを決め兼ねているらしくおどおどとした態度をしているが……。

レイピアは若君？と首を傾げたがすぐにスキルのことだと理解した。

「私は、ただピンクダイヤを取り返そうとしただけよ」

ぶいっとそっぽを向いてレイピアはそっけなく言い放った。

「じゃあ、あなたは領主の娘！？」

よほど驚いたらしく半ば叫ぶようにしてリグが言った。その大声にレイピアは顔をしかめる。ハッと気づいたリグは照れたように頭をポリポリ掻いた。

「あ、すみません。今まで若君を追ってきた貴族なんていなかったものですから。しかも……」

ちら、とレイピアを見る。

こんなお嬢様みたいな娘に　　と言いたらしい。

「そう、じゃあ今まであなた達が盗みに入った貴族達が無能だったということね。それともスキルの運が良かっただけなのかしら？」

レイピアはとげとげしい口調で言った。その言葉には絶対にスキルの腕が良いことを認めないという響きがあった。

言葉の端々から彼女の気の強さを感じ取ったリグは思わずぶつと吹き出す。

「何よ！？」

「い、いえ何でもないです」

レイピアに睨まれ、慌てて首を振る。

まさか敵陣に捕らえられてしまってもこんな風に悪態をつく貴族の女性がいるとは思いもしなかったのだろう。

リグは何となくスキルがレイピアを縛って転がしておけと言った理由がわかったような気がして、しばらく笑いが止まらなかった。その度にレイピアに睨まれてしまったけれど。

リグはその後すぐにスキルのテントに足を運んだ。今後どうするかを問うためだ。

テントに入るとすぐにスキルの不機嫌そうな顔が目に入った。椅子に腰掛けて、しきりに机をとんとんと指で弾いている。

やっぱりな、と思う。

スキルはレイピアの前ではうるたえることはなく、むしろ余裕すら見せていたけれど、内心ではかなり動揺していたはずだ。長い付き合いのリグにはその心の動きが手に取るようにわかっていた。

「若君、これからどうするつもりです？」

「そうだな……」

スキルが顎に手を当て考え込んだところで、テントに慌てた様子のブレンと何人かの団員が入ってきた。

彼らに目を向けると、スキルは苦々しい顔をした。

「なんだ、もう話が広まったのか」

相変わらず情報の回りが早いな、と呟く。

おそらくレイピアをテントまで案内してきた男が団員達に事の次第を話したのだろう。

「お前が盗みに入ったところのお嬢様が追って来たんだって!？」

お嬢様の行動にも驚いたものの、つまりはスキルが失敗を犯したということだ。それがブレンには信じられなかった。

今まで1度もそんな失敗はなかったというのに。

「ああ、ドジったみたいだ。今これからどうするか考えているところだ」

改めてスキルの口からドジったという言葉聞いて、ブレンは目の前が真っ暗になった気がした。

「お嬢様を逃がしでもしたら絶対にスキルの正体をバラすだろうよ」

吐き捨てるように言うブレン。

そんなことになったらスキルは捕まり、サーカスも彼ら自身も危うくなる。何よりブレンにはスキルが捕まるなどということが許せない。

貴族連中は傲慢で、自分勝手に弱いものに対してはどこまでも残忍だ。ましてや相手が盗賊とあつては。

おそらく、生きて帰って来れる可能性は低い。

そんなことは絶対に許せない。

「いつそのこと殺るか？」

ブレンの黒い瞳に危険な光が宿る。団員の中にざわめきが生まれるが、しかしスキルはゆっくりと首を振ることでその意見を否定する。

「じゃあ、どうするんだよ!？」

スキルは団員達を順番に見ると、決意したように口を開いた。

「俺はこれからあのお嬢さんと賭けをしようと思う」

「……それはもちろん、お前と俺達の身の安全を考えての選択だろうな?」

スキルが考えている賭けの内容はわからない。しかしスキルのことだからそれが仲間の安全を考えた上での1番の最良の手段なのだろう。

いつだってそうだ、態度が軽そうに見えるけれど誰よりも団員達のことを考えているのはこのスキルなのだ。

ブレンの言葉にスキルはニツと自信に満ちた笑顔を向けた。ブレンと団員達の不安をかき消すような笑顔を。

「もちろん。負けるような賭けをするつもりはないさ。こうなったのは責任は俺にある。責任をとらせて欲しい」

ブレンは一瞬考え込み、それから口元に微笑を浮かべた。

「わかった、それでこそ俺達のリーダーだ。俺はスキルを信じる」

気合を入れるようにしてバシンとスキルの背を叩いた。リグも団員達もそれに乗じるように大きく頷いた。

彼らは皆、スキルに絶対の信頼を置いているのだ。

第4章 取り引き4

リグがテントから出て行った後、レイピアは1人だけになった。何気なくテントの中を見渡してみる。ここは物置として使われているらしく、サーカス用の衣装などがダンボールに入っていていくつも積み上げられていた。先のすばまった天井には照明用のランプが取り付けられていて夜でも衣装の出し入れが行なえるように明るい光を放っている。

レイピアはなんとか縛られた手を自由にしようと悪戦苦闘してみる。しかし手を動かせば動かすほど縄が手にくい込んでくるため、すぐに諦めた。この後どうしようかと考えていたところでハツと思いつく。

「そつだ！」

ブーツの踵のところに小さい折りたたみナイフを仕込んでいることに気づいた。冒険をしているというのとトラブルがつきものなので、何かあったときのために用意しておいたのだ。それさえあれば縄を切ることができる。

今度は左足を器用に使って右足のブーツを脱がせようと悪戦苦闘する。

「くっ、このっ」

「……あとちょっとっ」

もう少しで脱げかかったブーツだったが、いきなりテントの幕を開けられて驚き、勢いよく飛ばしてしまった。飛んでいったブーツは見事にダンボールの中に突っ込んでしまい中の衣装が床に散らば

り落ちる。

ちょうどテントに入ってきたスキルと目が合い、レイピアはバツが悪そうに顔をしかめチツと舌打ちした。

一部始終を見ていたスキルは苦笑しながらブーツを拾い上げると、踵に仕込んであったナイフを取り外して同じくテントに入ってきたリグに放り投げた。折れたたみ式のナイフはペーパーナイフのようなもので、人を傷つけられる鋭さはないのだが、リグはついあわてて取り落としてしまった。

ちら、と責めるようにリグを見た後レイピアに視線を戻す。

「君は本当に貴族らしくないお嬢さんだね」

「お褒めの言葉をありがとう、ランスさん」

皮肉を込めた言葉を言っ、レイピアは口の端を笑みの形に歪めた。

こんな時ですら強気の状態を崩さないレイピアに苦笑してから、スキルは彼女の隣に椅子を置いて腰掛けた。

「君の処分が決まった」

その言葉にレイピアは表情を固くする。

「そう、殺すなら殺さないよっ！」

絶対に弱みを見せまいと噛み付くように言った。……心中では捕らえられたことへの不安と恐怖から心臓が破裂しそうなほどに早鐘をうっていただけだ。

「本人の希望ならそうして差し上げてもいいが、生憎君にはゲーム

に乗ってもらおうと思ってね」
「ゲーム？」

いぶかしげに眉をひそめるレイピアにスキルは悪戯っぽい笑みを浮かべて頷いた。

この男は何をしようとしているんだろう、探るような目をスキルに向ける。しかし生憎彼の表情からは何も読み取ることができなかった。いつものようにやとした笑いを浮かべているだけ。

スキルはふいに真面目な顔つきになると、懷からしゃりとピンクダイヤを取り出してレイピアの前に突き出した。目の前にあるのに手を縛られていて取り返せない悔しさにギリリと奥歯を噛みしめる。

「1カ月以内にこのダイヤを取り返すことができたなら君を解放してやってもいい。そして俺達を捕らえるなり好きにするといい」
「は……？」

いきなりスキルが持ち出した提案にわけがわからずレイピアは戸惑いの声を出した。

「もし1カ月以内に取り返すことができなかったら、君はこのダイヤを諦めて俺達のことと忘れるんだ。いいな？」

つまりピンクダイヤモンドをめぐって勝負をしようと言っているのだ。その声には否とは言わせぬ威圧感があった。だが、勇気をふり絞って問い掛けてみる。

「私がそれに乗らなくちゃいけない義務はないと思うけど？」
「君に選択の余地はない。断るつもりなら動物の檻にでも入れて一生幽閉するまでさ」

レイピアは言葉から感じられる冷たい響きに思わず背筋に寒気を覚える。今まで見ていたスキルからは想像できないほど何の感情もこもらない表情で見つめてくる。睨まれるよりもこちらの方がよりいっそう恐怖を感じる。

本気だ。

本能的にそう思い、カサカサに乾いてしまった唇を噛み締める。椅子に縛り付けられていなかったら間違いなく、恐怖に後ずさっていただろう。

「あなたでも……捕まりたくないと思うわけ？」

「俺が捕まるのは構わないが仲間までもが俺のミスで捕まるのは困る」

認めたくはないが、盗賊達は盗賊達なりに仲間への気遣いがあるらしい。もし断るようなことをすればスキルは間違いなく言葉通りレイピアを幽閉するだろう。

ごくりと息を飲んでさらに尋ねる。

「本当に……ダイヤを取り返せば解放してくれるの？」

「もちろん。約束しよう」

約束という言葉にレイピアはパツとスキルから顔を背けた。みるみるうちに怒りに顔を歪める。

「盗賊の約束なんて……どこまで信じられるかしら？」

どうせそんな約束守らないに決まってる！

吐き捨てるようにして苛立った口調で言った。突然のレイピアの豹変にスキルは戸惑うが、かまわず会話を続ける。

「確かに、お嬢さんにそう思われても仕方がないが、俺は約束は破らない」

そっぽを向いたまま何も答えようとしないレイピアにスキルはため息をつく。

「まいったな。だが、君にはどのみちゲームに乗ることしか選ぶ道はない。期間は明日から1カ月だ。リグ、縄を外してやれ」

それまで緊張と不安の入り混じった表情で黙って見ていたリグがスキルの命令に従って縄を外そうとしたが、急にテントの幕が開いたため動きを止めた。入り口の方に目を向ける。

スキルもそれを追うようにして視線を移動させる。
そして固まる。

そこからなんと悲しげな表情を浮かべたスキルの母親のソアラが入ってきたのだった。

「は、母上!？」

いつになく狼狽した様子でスキルは声を上げた。

しずしずとソアラはスキルの側に寄るとパチン、と彼の頬を打った。それはスキルにとってはたいしたダメージではなかったが、心に与えるダメージとしては充分だった。

呆然とするスキル。

ハンカチを取り出してハラハラと流れ落ちる涙を拭くソアラ。

「スキル。あなたはいつから女の子を縛り上げて楽しむような子になっちゃったの?」

私はそんな子に育てた覚えありませんよ、と言わんばかりにおつとりとした口調ながらスキルに非難の声を上げた。

「ご、誤解です！」

「女の子の心を射止めたいならこんなことをしては駄目。逆効果よ」
「だからっ、違います！」

なにやらソアラは激しく誤解しているらしい。

慌てふためくスキルをよそにソアラはレイピアの元にしずしずと歩いて行き、事のなりゆきを啞然として見ていたレイピアの縄を解いた。

「ごめんなさいね、息子には良く言って聞かせますから」

縄を解いたところでソアラが顔を上げるとレイピアと目が合った。
ふんわりとまるで日溜まりみたいな笑顔を浮かべているその顔、それは。

記憶の中にある女性と重なる。

「お……母様……！？」

解放された手を口元に当てて、レイピアは絶句した。

ソアラは5年前に他界してしまった自分の母親と似ていた。
レイピアの母親は銀の髪の毛で、ソアラは金髪だったけれど、どこことなくおつとりとした雰囲気と顔の造り、そして日溜まりみたいな笑顔がとても良く似ている。

母親ではない。

そう思いながらも、レイピアは自分の母親とソアラの姿を重ね合わせてしまった。

困惑した顔で小首を傾げるソアラにレイピアはたまらず抱きついた。

「お母様 つ！ お母様、お母様っ！」

ソアラの胸に顔をうずめたまま、レイピアは堪えていたものを吐き出すようにして子供みたいにわーっとなを上げて泣き出してしまった。

スキルもリグもソアラも突然のことに呆然としてその光景を見ていた。

レイピアはそのままソアラのテントに連れて来られた。ここから先は女の子だけの話があるのよ、とスキルとリグは追い払われテントにはレイピアとソアラの2人だけになった。

ひくっひくっとしやくりあげるレイピアの頭をソアラはやさしく撫でた。

ソアラはやがてのんびりした足取りで簡易コンロに向かっていき、ミルクを沸かした。沸いたミルクをカップにコポコポと注いでレイピアに手渡す。

温かいミルクに心を溶かされるように徐々にレイピアは落ち着いていった。その間ソアラは黙って静かに彼女の側にいた。

レイピアは気持ちがつっかりと落ち着いた頃に、自分がここに来た訳を1つ1つソアラに語り始めた。領主の娘であること。スキルを追ってここまで来たこと。

そしてソアラが母親と似ていることも語った。

ソアラはそのたびに頷きながら真剣に話を聞いた。

彼女も盗賊の仲間だ、けれどレイピアは自分でも驚くほど彼女に
対して素直になっていた。

「それで、レイピアちゃんはスキルとゲームをするの？」

ソアラの静かな問いかけにレイピアは表情を暗くしてさっと顔を
伏せた。

「私、彼の言う約束なんて信じられないんです」

「私達が……盗賊だから？」

悲しそうな顔をするソアラにレイピアは静かに首を横に振った。

「違います。そうじゃないけど……」

その頑なな態度にソアラは何やら察したようだった。

「レイピアちゃんは昔、約束でとても辛い思いをしたのね」

その言葉にレイピアはハッと顔を上げる。

「どうしてそれを……？」

ソアラは一瞬ためらった後、「女ですもの」と短く答えた。レイ
ピアに昔、何かあったことに気づきながらもソアラはその事を聞い
てくることはなかった。

それはソアラのやさしさだった。

そしてレイピアにはそれがたまらず嬉しかった。

「息子が決めたことだから、私にはレイピアちゃんにダイヤを返し

てあげることができないけれど……でも、できる限りお手伝いするわ」

がんばってダイヤを取り戻しましょうね、と言ってソアラは微笑んだ。

彼女はわかっているのだろうか……。もしレイピアがゲームに勝ったらスキルを捕らえるかもしれないということを。それを承知で応援してくれるのだろうか。

「息子は約束を破るようなことはしないわ。だからお願い、信じてあげて」

母親そっくりのソアラに言われてしまっではレイピアは頷くしかなかった。

ソアラを信じてもいいと思った。

そして彼女の言った言葉も信じてみようと思い始めた。

スキルの約束を信じてもいいのかしら？

……信じて大丈夫なのかしら？

不安はいくつもあつたけれどゲームに乗ることを決意した。それ以外、選ぶ道はなさそうだから。

第5章 長い1カ月の始まり1

目覚めたとき、視界を覆っていたのは青色の天井。その見慣れぬ光景にレイピアは違和感を感じたが、すぐに昨日の出来事を思い出した。

そういえば盗賊を追って来たんだっけ……。

慣れない枕のせいで朝早くに目が覚めてしまった。乱れてしまった髪の毛を手で撫で付けて辺りを見わたす。

1カ月間、レイピアの寝場所としてテントが与えられた。この青色のテントはそこそこ広く、ベッドを置いてもまだ余裕があった。もつとも荷物など持ってきていないレイピアにとってはベッドさえあればそれだけで充分だったが。

目覚めてしまったものの、この後どうしようかと思い悩んだ。

テントの外に一步踏み出したら盗賊達が其処此処にいるわけだから。

スキルの正体を知ってここまで追ってきたレイピアが彼らに歓迎されると思ひ難い。むしろ殺されてしまうのでは、という不安さえ募る。

我ながら無謀なことをしたな、と改めて思い少しだけ後悔する。せめて屋敷の人に行き先だけでも伝えておけばよかった。そうすれば少しは状況が良くなっていたかもしれない。

うーん、と唸りながら頼杖について考えていると急にテントの幕が開けられた。驚いてそちらを向くと黒髪の少女が立っていた。年齢はレイピアよりも2つぐらい年下に見える。

肩の辺りまで伸ばした黒曜石のような髪の毛は艶やかでウェーブがかかっている。そして唇には真っ赤なルージユ。けれど下品さが

少しも感じられないのは愛らしい顔立ちのおかげだろう。

レイピアが月のような美しさだとしたら彼女の美しさは太陽のようだ。

かわいい、と素直にレイピアは思った。

黒髪の少女は何も言わずにテントに入り、レイピアの側に寄っていくと全身を値踏みするようにして眺めた。どこことなく敵意を感じさせる視線が肌につきささる。

「な、なによ!？」

不躰な視線にむつとしたレイピアが口を尖らせる。

なぜ初めて会う人間にこんな視線を向けられなくてはならないのか……。

「なんだ、大したことないじゃん」

その少女はくりくりとした大きな瞳を細めて、せせら笑うようにして言い放った。

あまりにもその愛らしい顔と声から想像もつかないような言葉遣いとその内容にレイピアは啞然として、口をポカンと開けた。頭が理解するのを拒否している。

「なっ、なっ……」

声を出せずに口をパクパクとさせるレイピアになおも少女は言葉を続ける。

「スキルとゲームするらしいけど、あんたが勝てるわけじゃん。あたし達のリーダーなのよ?」

音をたてて椅子に腰かけると煙草をふかし始めた。
あまりにもその少女に似合わなすぎる姿にレイピアは呆然とする
しかなかった。

頭が理解するのを拒否しているのかもしれない。こんなかわいら
しい娘がこんなことを言うなんて、と。

それはスキル達がレイピアに対して思っていることと一緒にのだ
が、生憎自分のことはわからない。

「もしあんたがダイヤを取り返したとしても絶対にスキルを捕まえ
るようなことはさせないから！」

そこでレイピアは納得した。この少女はスキルが好きで、だから
こそレイピアが邪魔なのだと。

だが、レイピアもまたここまで言われて黙っているようなおとな
しい娘ではなかった。

「私とスキルのゲームでしょう？ あなたが口出しする権利はない
と思うけど」

レイピアは少女から煙草をひったくると床に落としてグリグリと
踏みつけた。少女は何するのよ！？という顔をして、マスカットの
ような緑色の瞳でレイピアを睨みつけた。

2人の間に見えない火花が音を立ててあがる。

「絶対にあんたみたいな女追い出してやるんだから！」

椅子を蹴飛ばすと少女はべーっと舌を出してテントから出て行っ
た。

嵐のような少女だ。

一方、テントに1人残されたレイピアはメラメラと闘志を燃やした。根が負けず嫌いの性格をしているため、黒髪の少女の「スキルに勝てるわけないじゃん」という言葉に憤慨した。

絶対に勝ってやる！

そうとなったらこうしてはいられない。一刻も早くスキルからダイヤを奪い返さなくては。

レイピアは盗賊連中のことをあれこれと気にするのをやめにして、ダイヤのことだけに集中しようと心に決めた。認めたくないが、少女の言葉が後押ししてくれたのは確かだ。彼女に感謝しつつレイピアはテントの外へ出た。

テントの外に出ると、何人かの団員達に会った。スキルを追ってきた女という噂はすでに広まっているらしく、その後もレイピアの姿を見ようと何人も集まってきた。彼らは話かけてくることもなければ、面と向かって悪口を言うわけでもない。ただ遠巻きにレイピアを見ているだけだった。スキルをまんまと欺いてここまで追ってくる事ができたお嬢様とはどんな人物だろう、そんな視線だった。しかしそこにある空気は好意的とは決して言えない冷たいものを感じた。

当然よね、私はスキルの敵なんだから。

そう割り切ることにした。

それでも少しだけちくちくと胸は痛んだが、たいして気にしていないふりをしてスキルの姿を探した。

だが、同じようなテントがいくつも並んでいるため、彼がどこに居るのか全くわからなかった。結果ぐるぐると同じような場所を歩くことになってしまった。

こそこそとテント街を嗅ぎまわっているとでも思われているのだ

ろうか、団員達の視線も痛い。

そこに朝食をのせた盆を片手にしたリグの姿を発見した。リグの方もレイピアの姿を見るなり探しましたよ、と言い朝食をのせた盆を突き出した。

「これ……私の？」

肯定の印にリグはにこりと微笑んだ。

「でも、私が食べてしまっている……？」

「もちろんです。それとも何も食べないまま1カ月も若君とダイヤの争奪戦する気ですか？」

1日2日でスキルからダイヤを奪えるはずがない、そう言われているようになんとなくおもしろくなかったが好意は素直に受け取ることにした。

お礼を言って盆を受け取った。盆の上にはハムを挟んだサンドイッチとオレンジジュースがのせられている。

レイピアはテントに戻ることなくその場でパクつく。

リグは目を丸くした。貴族の女性が！？と驚いているのかもしれない。

「行儀悪くてごめんね、でも今は時間が惜しいから。あなたは食べたの？」

「ええ、はい」

「そう、それじゃあこの後スキルの居場所とかテントの案内とかしてくれる？ まだよく場所がわからなくて」

今のところこのサーカス団の中でレイピアに好意的なのはリグとソアラだけなので、彼に道案内を頼むことにした。

レイピアはストローを挿したオレンジジュースを勢いよく飲み干す。リグはその様子に驚き、苦笑しながら頷いた。

第5章 長い1カ月の始まり2

「それじゃあまずはこのテント街から案内しましょう」

食事を終わるとすぐに案内をしてもらうことになった。歩きながらリグはテントの1つ1つを紹介していく。物置き場に使われている所だとか、団員の寝泊りしているテントだとか。そこでレイピアはふと気がつく。

「団員って3人で1つのテントを使っているの？」

どのテントも皆3人から4人で1つのテントを使っていて、1人でテントを占領している者などいなかった。

「ええ、そうですよ。若君は1人で使っていますが」

「私も1人で使っているわ。何だか悪いわ……。私は歓迎されていないのに」

「若君が決めたことですから、文句を言う人なんていませんよ。あなたが気にする必要はありません」

「スキルの命令は絶対なの？」

「ええ。もつとも命令でなくても、みんな若君のことを心から慕ってますから文句を言う人なんていないんです」

てつきり次期団長というだけで団員が命令に従っていると思っていただけにレイピアは意外だ、と思った。

人柄で団員の信頼を集めているということが。そしてリグもまたスキルを慕っている1人なのだろう。

それなのになぜリグは自分に対してやさしくしてくれるのだろう

か……？私はスキルの敵なのに。

レイピアは不思議で仕方なかったが、リグがレイピアに対して好意的なのにはちゃんと理由があった。お嬢様なのにそれを気取らないところとか、スキルに対して堂々と悪態をつくところとか……そんなところを好ましく思っているからである。

テント街を奥まで進んでいくと2人は今までよりも一回り大きい2つのテントにたどり着いた。他のシンプルなテントに比べてこの2つのテントは色合いもカラフルだった。

「この右にあるテントが団長とソアラ様のものです。そして左のテントが若君のものです」

右のテントは昨夜レイピアも訪れていたので知っていた。

リグは左のテントの前に立つと、声を掛けた。しかし中からの反応はなく、どうやらスキルはどこかへ出ているらしい。

「若君はいないみたいですね。まあ、そのうち会えるでしょう」

肩をすくめてリグは次の場所へ向けて歩き出した。レイピアも今すぐ会わなくてはならないという用事はなかったのだいていして気にしなかった。

次に2人が訪れたのは獣舎と呼ばれる動物達の檻だった。

テント街のように動物達の檻は規則正しく一列に並べられていた。中には象やライオンなどレイピアが初めて見る動物達もいたし、犬や猫など見慣れた動物達もいた。しかし感動するよりも先に動物達

の匂いと鳴き声に顔をしかめた。

この辺りには風を防ぐ木も立っていないため風が吹くたび臭いが漂ってきた。獣舎とテント街が離れて設置されている理由の1つにこのことが挙げられるのだろう。

「動物達の檻にはあまり近づかないでくださいね」

リグのその言葉に不思議に思ったレイピアは小首を傾げる。

「なぜかしら？」

「動物達は繊細なんです。調教師以外の知らない人が来ると人見知りしますから。勝手に餌を上げたり、もちろん触ろうとして檻の中に手を入れたりしないで下さい。手を食いちぎられても知りませんよ」

釘を刺すようにして真剣な表情でリグは言った。

見るからに恐そうなライオンと目が合い、レイピアはぶんぶんと首を縦にふった。

「ええ、食いちぎられるのはごめんだわ。餌になんてなりたくないわね」

その答えにリグは満足げに頷いた。

ここに来ることはもうないだろう。そう思いレイピアはそれ以上先に進むことを止めて、次の場所に案内してもらうことにした。

最後に2人が向かったのはステージである巨大なテントだった。テントには大きく太陽の絵が描かれていて、ポツカリと口を開ける

ようにして入り口がある。その周りには赤、ピンク、黄色など色とりどりの風船がくくりつけられていて、何ともかわいらしい。

リグの言葉によると、現実と夢の世界を繋ぐという意味で入り口には特に念を入れて飾り付けが施されるらしいのだ。

「昼間から公演があるので今はリハーサルをしています。ステージに案内することはできませんが、観客席の方へ行ってみましょう」

「リグはリハーサルに参加しないの？」

「私は動物の飼育担当ですから」

リグに案内されてテントに入る。

テントの中は鉄の支柱が所々に立てられているものの少しも圧迫感はなく、広く感じられた。ステージを囲むようにして馬蹄型に置かれた観客席は下から上にかけて階段状にせりあがっているため、とても見やすい造りになっている。

ステージの方に顔を向けると10人くらい人が集まっているのが目についた。その中にスキルの姿も見つける。取り込み中のようなので、レイピアとリグは観客席の1つに腰を下ろすことにした。

レイピアは団員の中に今朝の黒髪の少女も発見し、ハツとした。会話は聞こえないが、黒髪の少女はにこにこ誰から見ても愛らしい笑顔を浮かべて団員達に……特にスキルに愛想良くしていた。まるで先程とは猫を被ったように別人である。

「あつ、あの子！　ねえリグ、あの子の名前は？」

黒髪の少女を指差し、リグの服の裾を引っ張って視線を向けさせた。

「シャンナリーですよ。あの子が何か？」

レイピアのただならぬ様子にリグが首を傾げて尋ねてきたが、すぐさま何でもないと否定した。

シャンナリーという名前の響きをどこかで聞いたような気がして、レイピアはしばらく考え込んだ。シャンナリー、シャンナリーと口の中で反芻してみる。そしてハッと気づく。

パーティー会場で「私にはどんな名前が似合います？」と尋ねたレイピアにランスと名乗っていた時のスキルが「シャンナリー」という名前はとうでしょう」と答えたのだった。そしてその後に来を尋ねたら飼っている猫の名前だと言っていた。それを思い出してぷつと吹き出した。

黒髪の少女のステージ上での見事なまでの猫の被りよう。まさに大きな猫だ。

おそらくスキルは彼女の本性を知らないのだろう、あの時は適当に猫の名前だと言ったにしてもいい例えだと思った。

けらけらと突然笑いだしたレイピアにひたすらわけもわからず首を傾げるリグだった。

「スキルはサーカスでどんなことをしているの？」

すでにリハーサルは終わっていたらしく、レイピア達が入ったときにはスキル達は最後の打ち合わせをしていた。

「若君は空中アクロバットという演目を行なっています」

「空中あくろばつと？」

聞きなれない言葉にレイピアは首を傾げた。

そもそもレイピアはサーカスというものの自体見たことがなかった

から、空中アクロバットがどんなものか想像もつかなかった。それどころか空中ブランコや綱渡りすら知らない。幼い頃は深窓の令嬢として育てられ、つい最近までは冒険者として忙しく活動をしていたのだ。こういったサーカスなどの娯楽に興じることがなかったため、どんなものか知らないのも無理ないことだった。

「レイピアさんもお昼から行なうサーカスを御覧になってはいいかがです？」

リグの言葉にレイピアは「ええ……そうね」と曖昧に答えるだけだった。

正直なところレイピアには盗賊達がやる芸なんて……と軽蔑している気持ちがあるのだ。だから見たいとは少しも思わない。それよりもスキルがどこかに隠したかもしれないダイヤを探す気持ちの方がはるかに高かった。

早くダイヤを取り返して、さっさとここから逃げ出すのだ。

曖昧なレイピアの返事からそれを察したリグもそれ以上深く勧めようとはしなかった。

ようやく打ち合わせが終わったらしく、レイピアの姿に気がついたスキルはステージと観客席の間に張り巡らされた柵をひよいと乗り越えて近くにやってきた。

「おはよう、ランスさん」

レイピアはわざとらしくにこやかに笑いスキルと対峙するようにしてさっと椅子から立ち上がった。またしても「ランス」という言葉に力を込めて言うレイピアにスキルは苦笑した。

レイピアは彼の名前を知っていたものの、今まで正式に彼の口から名乗られることがなかったので、わざと皮肉たっぷりに「ランス」と呼ぶようにしている。

「おはよう、猫被りなお嬢さん。申し遅れましたが私の名前はスキルと申します」

わざとらしいくらいにスキルは恭しくお辞儀をしてみせた。
レイピアは口の端が引きつりかけたが気づかれないようにっん、とそっぽを向く。

「あら、存じてましたわ。だいたい猫被りはお互い様じゃありません？ パーティー会場で会ったランスさんと今のスキルさんは別人ですわよっ」

皮肉をたっぷりと込めてわざとらしく丁寧な口調でレイピアは返した。

スキルはおどけるような仕草でどこから取り出したのか、目と口の部分にしか穴の開いていない真っ白な仮面を取り出すとそれを被ってみせた。

「いえいえ、どちらも私の本当の姿でございます。私にはまるでこの仮面をつけたようにステージ用の顔と普段用の顔が存在するので。貴女の猫被りとは違いますよ」

「猫被りですって!？」

カツとなって青い目で睨みつけたレイピアに、くつくつとスキルは体を折り曲げて笑った。明らかにレイピアがムキになって怒っているのを楽しんでいる。

馬鹿にして！

完全にレイピアの方がスキルにからかわれているのがわかっていたので、それがおもしろくなかった。

何て口達者な盗賊なのだろう！

「母上から聞いたのだがゲームを受けてくれるようだね。それで朝から会いに来てくれたのかな？」

被っていた仮面を放り投げて、ようやく真面目な顔になったスキルが尋ねてくる。

レイピアはにや、と口の端を上げて笑うとスキルを指し、大きく息を吸い込んでステージの方まで響き渡るような大声を出した。

「そうよ、私は宣戦布告を言いに来たの！ 絶対にあんたからピンクダイヤを取り返してみせるわ！ それでもってあんた達みたいな盗賊を全員とっ捕まえて煮るなり焼くなり好きにさせてもらうから！」

レイピアはスキルだけでなく、ステージの方にいる団員兼盗賊にまで必ず捕まえてやると宣戦布告をしたのだった。

言いたいことを言ってスツキリしたレイピアはくるりと背を向けると、啞然としているリグを置いてスタスタと出て行ってしまった。啞然としているのはリグだけでなく、スキルもステージの方にいる団員達も一緒だった。口をポカンと空けて目を丸くしている。

どの顔にも貴族のお嬢様が怒鳴り散らして宣戦布告！？ という困惑の色が浮かんでいる。

いち早く立ち直ったスキルはぷつと吹き出すと体を屈めて笑い続けた。

第5章 長い1カ月の始まり3

ブレンは苛立ちを覚えていた。もちろん言うまでもなくレイピアに対してだ。彼もスキルと同じようにリハーサルのためにステージにいたのでレイピアの宣戦布告をバツチリと聞いていた。

（宣言布告だと！？ 俺達を煮るなり焼くなり好きにさせてもらうだと。ふざけやがつて）

あの小娘がゲームに勝って俺達もスキルも捕まえるっていうのか！？

冗談じゃねえ！

ブレンの苛立ちはピークを迎えて、木に拳を打ちこんだ。鈍く音をたてて打った部分が少しだけめり込む。

確かにブレンはレイピアを見て口笛を吹きたくなるような美人だと思った。けれどそれはスキルに害をなす者ではない場合だ。

レイピアの存在は危険だ。彼女がスキルの正体を知っている限り、スキルには常に捕まるかもしれないという危険性がつきまとう。

スキルはゲームに勝つ自信があると言っていた。もちろんブレンも信じている。しかし万が一ということもある……。

（あの女を追い出すことができればな……）

スキルに知られることなく邪魔な小娘を追い出す方法はないかと、うろつろ自分のテント内を考えながら歩き回る。

同じテントの2人の団員はブレンのいつものくせにたいして迷惑がる様子もなく自主トレーニングを積んでいる。

その時いきなりシャツとテントの幕が開けられ、ひょこりと黒髪の少女が顔を出した。シャンナリーだ。シャンナリーはテントを見回すが、男だけが3人生活している空間のあまりの荒れ果てように顔をしかめると、ブレンに向けて手招きした。

どうやらテントには入って来たくないらしい。

仕方なく、ブレンは外へ出る。

「なんだ、何か用か？」

ブレンはシャンナリーのサーカス団としての腕も、黒のピエロ団としての盗賊の腕も認めていて、仲間として信頼を置いていた。

シャンナリーがスキルに好意を寄せているのはもちろん、彼の前で猫を被っていることも知っているが、あえてスキルに言うようなことはしなかった。そこらへんは勝手やりな、という感じで。リグのように人の恋愛のことについて口を挟むような性分を持ち合わせていないのである。

ところがシャンナリーはたびたびつかいな問題を押し付けてくることがあって、ブレンはそのことで彼女が少し苦手だったりする。

「ブレン、お願いがあるの」

かわいらしく小首を傾げてお願いのポーズを取るシャンナリー。彼女の本性さえ知らなければ天使のように愛らしい仕草だと思うかもしれないが、ブレンにとってまさに小悪魔的といえる。い。

ああ、またか……とブレンは心の中で呟く。

シャンナリーが言うお願いはいつだってロクなことがない。そんなブレンの心中を無視して、シャンナリーは言葉を続ける。

「あのレイピアって女を追い出したいの！」

その言葉にブレンは初めてシャンナリーの意見に共感を覚えた。
同時にムクムクとからかい心が芽生える。

「はは〜ん、お前さてはあのお嬢様に嫉妬してるな？」

図星だったらしく、シャンナリーは瞳をギリリと光らせてブレンを睨みつけた。まるで射殺しそうなその視線におゝこわ、と肩をすくめるブレン。

「ま、安心しろよ。スキルはあのお嬢様に好意を寄せて1カ月間も側に置くわけじゃない」

「そんなの当たり前じゃない！ でも……っ」

「それでもスキルの側にいられるのは迷惑ってか。女ってなんでそうワガママかねえ」

「あんたにはわかんないのよっ。……あたしだってスキルの心さえ手に入れてれば……こんな不安な思いしないわ！」

体を小刻みに震わせて俯いたシャンナリー。

スキルは親友のブレンから見ても風のような奴で、例えどんな魅力的な言葉を持ってしても彼の心を一ヶ所に止めておくことなんてできなかった。女性関係においても同様で彼が誰か1人の女性に深く心を縛られるところなど見たことがなかった。

シャンナリーがそのことで不安になる気持ちは痛いくらいに伝わってきた。

さすがに罪悪感が生まれ、ブレンは謝罪をする。

「わ、悪かった。さっきはあんなこと言っただけで俺もあんたの意見に賛成だ。あの女を追いたいと思ってる」

シャンナリーはその言葉に目を輝かせて、パツと顔を上げた。

「本当！？　じゃあ協力してくれる？」

ブレンはわかったわかったと頷いた。けれど頷いてしまってから具体的な方法を教えられて口をひくつかせた。

シャンナリーが考えたレイピアを追い出す方法とはどれもが世間一般で「イジメ」と言われているようなものばかりだった。

例えば本人を前に悪口を言うとか、水をぶっかけるとか、靴に画鋲を……とか。ブレンが考えてもいなかったような陰険で悪質極まりない内容のものばかりだった。

よくそんなに考えられるもんだ。

女って怖いな……とブレンはしみじみ思った。

一方スキルのテントでは　。

リグがスキルにお説教（？）をしていた。

「若君……。あなたは何だってそう人を挑発するのが好きなんです？」

ふーっと深いため息を吐いてリグは額を押さえた。

まぎれもなくリグの言う「人」とはレイピアのことを差している。

「何のことだ？」

熱々のコーヒークップを片手にスキルはわざとらしく首を傾げた。

「また、とばけて。昨日のことといい、さっきのことといい言葉の端々にかいかいと皮肉がたつぷり入ってましたよ。めずらしいですね、あなたが女性にそんな態度をとるなんて。内心煮えくりかえっているからでしょう？」

スキルはリグの言葉に心外だ、とばかりに眉をひそめた。

「まさか。お嬢さんの行動に驚きはしても煮えくりかえってなどいないさ。お前の勘違いだろう」

それは半分事実だった。最初は腹立たしく思ったものの、今は怒りを持つどころかむしろ興味を覚えていたからだ。彼の周りにはあんなにも無謀すぎるほどの行動をする女性などいなかったから。

けれどそれは恋とかそういった類のものではない。純粹な興味……だ。

「そうですかねえ」

リグはまだ疑わしそうな顔つきでスキルを見る。

「そうさ。お前だってむさくるしい男に追い掛け回されるよりも美人なお嬢さんに追いかけられる方が嬉しいだろう？　思わず抱きしめて、キスしたくなるね」

ふふん、と笑いながら言うスキルの本気だか冗談だかわからない言葉に、リグは大きいため息をつく。

「若君……。最初に言っておきますがレイピアさんに手を出してはいけませんよ」

リグの言葉にスキルはおもしろそうに目を見開いた。

「なんだ、惚れたか？」

「はっ！？ な、なにを言ってるんです、違いますよ。拉致している上にあなたが手を出したりしたら縛り首どころじゃすまないから言ってるんです！」

リグは両手で首を絞めるジェスチャーをしてみせた。

とたんにスキルはつまらなそうに顔をしかめた。てっきりリグが恋にめざめてそんなことを言い出したのかと思ったからだ。今までスキルが見ている限りリグにはそういった浮いた話の1つも見当たらなかったから。

「なんだ、そんなことか」

「まったくもう、だいたい私とあの方では年齢も身分も違いすぎますよ」

ばからしいと言わんばかりに肩をすくめた。

リグの年齢は26歳、レイピアの年齢は22歳。わずか4歳しか違わない。そのことはたいして問題ではないのだろうが、リグとレイピアではあまりに身分が違いすぎた。片や領主の娘、片や盗賊の一味だから。

「そんなことたいした問題ではないだろ？ 要は本人同士が愛し合っているかどうかだ」

にやりと笑ってスキルはカップに残っていたコーヒーを一気に飲み干した。

第5章 長い1カ月のはじまり4

太陽が真上に昇った頃、辺りに軽快な音楽が流れ始めサーカスの開幕を告げる花火が打ち上げられた。それと共にたくさんの風船が一齐に空中に舞い上がった。赤、青、黄色、白、オレンジの色とりどりの風船は風に流されてふわりふわりと遥かなる天上をめざして飛んでいく。レイピアはそれを視界の片隅に捕らえつつ、ステージのあるテントとは逆方向に走り出した。

リグにサーカスを見てはどうかと勧められたものの、そんな気にはなれなかった。軽快な音楽と楽しそうな雰囲気になが躍らなかつたと言えは嘘になる。親子連れや恋人同士の嬉しそうな顔を見るたびにサーカスとはどんなものかしら？そんなに楽しいものなのかしら？という思いが胸に流れ込んだ。

ううん、わざわざ盗賊達のサーカスを見なくたっていつか違うサーカスを見ればいい。

レイピアはそう思うことによって、もやもやとした気持ちを振り払った。

それよりも今はダイヤを探すことの方が先だ。

レイピアが目指したのはスキルのテントだった。

彼は今、ステージに上がるためにテントにはいない。まさかステージ上にまでダイヤを持っていくわけにはいかないだろうから、どこかに隠してある可能性が高かった。そしてその可能性はやはりスキルのテントだとレイピアは考えている。

団員のほとんどはステージに詰めているので、テント街には人影が見当たらない。レイピアにはそれがありがたかった。

朝の宣戦布告をしてからというものの彼女に対する風当たりがいつそう厳しくなったからだ。団員の視線がいつそう冷たくなったのだ。団員のみんなはスキルを心から慕っているというリグの意見を聞いていたから覚悟はしていたけれど、やはり冷たい視線があるよりもない方が動きやすかった。

スキルのテントに着くと辺りを確認してからすばやく忍び込む。

中には誰もおらず、きちんと整理された荷物と簡易ベッドが最初にレイピアの目に飛び込んだ。注意深くテント内を見回すと、天井付近にワイヤーが張りめぐらされてそこに衣装がいくつも掛けられていて、他にも棚の上にコーヒースセットや簡易コンロがあった。

全体的に置かれているものが少なくて簡素なイメージを持った。すぐにまた別の地へ移動するため物をあまり置かないようにしているのかもしれない。

まずは棚から探すことにした。上から順に引き出しを開けて行くが、あまり物が入っていないかった。そのためレイピアは次に荷物、衣装のポケット、目につくところを端から順に探して行った。

2時間程探し回ったところで、そろそろサーカスの終わる時間だと気がつきあきらめて自分のテントに戻ることにした。

それから夕方の公演の時間もレイピアはスキルのテント内をうろうろと探し回ったものの、結局見つかることはなかった。

深夜。

レイピアは布団に横にしていた体をむくりと起こすと、上着を羽織って外へ出た。この時期は日中は暖かいが夜になると冷え込むため、ぶると身震いをした。このテントが建てられている空き地は街の外れにあることと風を防ぐ木々がないことも重なり夜間は特に

冷え込んだ。

辺りを見渡したが、人影はない。団員達は朝が早かったため、夜も比較的寝静まるのが早かった。

まだ起きている人がいるのか、ところどころテントから明かりが漏れている場所もあったが、真っ暗に近い状態で月明かりだけが頼りだ。

昼間の賑やかな雰囲気とは異なった顔を見せる夜のテント街はある種幻想的であると言えた。

しばしためらったが、覚悟を決めると忍び足でスキルのテントに向かった。

もちろん目的はダイヤ奪還だ。いくらスキルが素早くて隙が見つからなくても、寝ているときなら懷からダイヤを抜き取ることができるかもしれないと考えたのである。

昼と同じようにスキルのテントの前に立つと、辺りを注意深く見回してからすばやく入り込んだ。

暗闇に目が慣れてきたため、ぼんやりとベッドの上に眠るスキルの姿が見える。規則正しく聞こえる寝息に合わせて忍び足で近づいて行く。

サラサラの髪の毛を投げ出して眠っているスキルが視界に入った。いつものからかうような憎たらしくてたまらない瞳も閉じられている。眠っているときは無防備なのね、とそんなことを考える。

……馬鹿みたい、何を考えてるの。

軽く頭を振って馬鹿馬鹿しい考えを振り払うとスキルの懷に手を伸ばした。

ところが。

眠っていたはずのスキルがいきなりパチリと目を開けた。スキルは口元を笑いの形に歪めた後、ささやくようにレイピアの耳元で呟く。

「夜這い？」

「きゃあ!？」

その突然耳にかかった低い声に驚き、悲鳴を上げたレイピアは1メートルくらい飛びすさった。

その様子にスキルは寝転がった姿勢のままにやにやと悪戯っぽい笑みを見せる。明らかに今さっき目覚めたと言い難い。まるでレイピアがテントに入って来たときから気がついていたようなそんな様子である。

「た、狸寝入りしてたわね!？」

破裂しそうなほど早鐘をうつ心臓を押さえてレイピアは抗議の声を上げた。

対するスキルは体を起こし、涼やかな顔をして心外だな、とばかりに肩をすくめる。

「たった今起きたところさ」

「うそばかり! ずっと起きていたくせに」

レイピアは顔を真っ赤にしながら怒鳴って、ベッドに詰め寄る。

「お探しのものはこれ？」

しゃらりと音を立ててスキルは右手に持っていたピンクダイヤを掲げた。あつと息を呑んでレイピアは手を伸ばすが、むなしく空を切った。その手を逆にスキルに掴まれてしまい、いとも簡単にベッドに組み敷かれてしまった。

「手癖の悪いお嬢さんだね、お仕置きが必要かな？」

スキルの顔を間近に感じてレイピアは慌てふためいた。恐いくらいに真面目なスキルと目が合う。

「ちよつ……、離しなさいよ！」

半ば悲鳴に近い恐怖に引きつった声を上げる。

逃げ出そうにも華奢なレイピアには、覆い被さるようになるのしかかっ
てきたスキルを押し返すだけの力がなかった。捕らえられた両手
はスキルの右手によって難なく押さえ込まれてしまつて、外れるこ
とがない。沈み込んだベッドは逃げ道を与えてはくれない。やわら
かいはずのベッドなのに、ひどく背中冷たく固く感じられた。

スカートの裾をたくし上げられ、肌に触れるスキルの手の冷たさ
にビクリと体を震わせる。

「やだっ！ 何するの！？」

羞恥心に顔を真っ赤にして叫んだ。太股の辺りを探るようにして
撫でられレイピアはいやいやと首を振つて顔を背けた。

いやだ、こんなのは嫌！

今にも泣き出してしまいそうに目を潤ませたレイピアを見つめて、
スキルは口元に笑みを浮かべるとからかうようにして耳元で囁いた。

「傷はふさがったみたいだな」

その言葉と同時にパツとレイピアの両手を解放すると、スキルは
体を起こしてベッドの端に腰掛けた。

ゆつたりと足を組んでから、再び意地悪くにやにやとした笑みをレイピアに向けた。

「はっ？ な……！」

ベッドに横たわったままの体勢で体を固くしていたレイピアはわけがわからずにパクパクと口を動かすことしかできなかった。一体どういうことなのか。

「俺は傷の具合を確かめただけなんだけど。それとも違うことを期待した？」

レイピアはハッとして右の太股についた傷の存在を思い出した。パーティーの際にスキルとやりあった時についた傷。

けれど先ほどの行為は絶対にわざとやったとは思えない。何ていう悪質なはずら！

レイピアが慌てふためく様子を見ておもしろがっていたのだと思うと先程の恐怖はどこかへ吹き飛び、代わりに怒りがこみあげてきた。怒りに震えながら思いつきりスキルの顎を蹴り上げた。

「バカッ、最低！ ドスケベ

！……」

怒りにまかせてその顎を3回くらい蹴り上げたところでスキルにひょいと足首を掴まれる。

「夜更けに男の寝所に訪れるお嬢さんの方が悪い。今日は見逃すけど次に来たら襲っていいものと見なすぞ？」

心底楽しそうに言うスキル。

本気とも冗談とも取れないその言葉に、レイピアは頭の中を真っ

白にして何も言い返さないでいた。

「それともこのまま続ける？」

スキルの唇が足首に降りてきそうになって、レイピアは慌ててスキルを突き飛ばすと脱兎のごとくベッドから飛び出した。

「バカバカバカバカ変態っ！ 2度と来るもんですかつ！」

手元にあつたコーヒークップをスキルに投げつけて、真っ赤な顔をしてテントから逃げ出した。乱れた服と髪の毛すら直さずに。今のレイピアにはそんなことをしている心の余裕が少しもなかった。

背中から聞こえてくるスキルの押し殺した笑い声がなんとも腹立たしかった。

第6章 心の傷1

翌朝。

いつもなら気持ちの良い朝だった。テントの中に差し込む日差しはやわらかかったしいつまでも眠っていたくなるくらいに気温は温かった。

しかし。

気分はこの上なくらい最悪だった。自然とこの気持ちのいい朝ですら苛立たしいものに思えてくる。

レイピアはテントにあらかじめ取り付けられていた銀の鏡を眺めて盛大にため息をついた。目の下に大きな隈ができている。

理由は考えるまでもなかった。

昨日あれから悔しくて、憤慨して朝方まで眠れなかったせいだ。ようやく寝付いたかと思うと、悔しさで目が覚める。その繰り返しで結局ほとんど眠っていない。

考えてみるとここに来てからというものの、まだ1度もスキルにぎやふんと言わせていないばかりか、反対にレイピアの方がやられっぱなしなのだ。

「く・や・し

！！」

昨日のことを思い出してしまい、腹が立って頭をバリバリと掻きむしる。

ダイヤを奪い返すことはできないにしても、今日こそは……あの不遜で悪辣なスキルに一矢報いてやりたい。

「顔、洗ってこようかな」

限ができている上に寝ばけ眼では顔がしまらない。気分を変えるためにも顔を洗うことにした。

もちろんテント内に水道が通っているわけもなく、わざわざ水をもらいに井戸まで行かなければならなかった。

井戸はテント街の中央広場にある。正確にいうと井戸を取り囲むようにしてテントが建てられたのだ。この中央広場では井戸があることと広く場所が設けられていることから食事の炊き出しも行なわれている。

レイピアは井戸に取り付けられている滑車を使って水を汲み上げた。水は凍るように冷たく、顔を引き締めるのにちょうどよかった。

ザバーツ！！

突然の水音にレイピアはパチパチと目を瞬かせることしかできなかった。頭がようやく理解を示したところで、自分が水をかけられたことに気づいた。

パタパタと音を立てて髪の毛から水が滴り落ちる。

水浴びをするにはまだ季節が早い。

急速に寒気が体全体に襲ってきた。ぶるぶると体を震わせたのは怒りのせいだけではなく、レイピアは水をかけた主を見るためにキツと顔を上げた。

見ると3、4人の団員がレイピアを囲むようにして立っていて、中にはシャンナリーの姿もあった。その表情は楽しげに歪められている。

弱いものを見下す強者の顔、まさにそれだ。

「どついつつもりかしら？」

レイピアは頬を引きつらせながら、額に流れ落ちる水を袖で拭いて団員達を順に睨みつけた。

「それはこっちが聞きたいな。ゆうベスキルのテントで何をしていた!?」

もう噂が広まっているのか……とレイピアは心の中でうんざりした。スキルのテントへ歩いて行くところを目撃されていたのだろうか。

最初に口を開いたのは男の団員だった。

頭にバンダナを巻いた褐色の肌の男は黒い瞳をギラギラさせて睨んでくる。その褐色の肌の男は言葉になまりはないものの大陸の東の方の血を受けついでいるのだろうか、どこことなく異国風の顔立ちだ。そのことも加わって余計に威圧感が増す。

レイピアは弱みを見せまいと、両腕を腰にあてて堂々とした態度で対峙した。

「もちろんダイヤを取り返すためよ」

「本当にそれだけか？」

探るようなバンダナ男の視線を怒鳴りつけることではねかえす。

「それ以外に何があるっていうのよ!？」

あまりにレイピアが堂々としていたのでバンダナ男は隣にいる男と顔を見合わせる。それに業を煮やしたシャンナリーがウエーブのかかった黒髪を掻きあげると、一歩前に出てレイピアを指さした。

「みんなあんたがスキルを色仕掛けで迫ったって噂してるわ!」

一瞬、レイピアはその言葉の意味を理解することができなかった。

色仕掛けで？

迫った？

私が……………！？

「はあ ！？ 何よそれ！！」

「色仕掛けで迫ってダイヤを盗ろうとしたんでしょう！？」

だんだんと腹が立ってきた。

そんな風に思われていたとは。大体色仕掛けで迫るところか押し倒されたのはこっちの方である。その上、悔しくて眠れなかったのだ。

言いがかりにもほどがある。

「そんなことするわけないでしょう！ 大体、私にはそんなことしなくったって正攻法で取る自信があるわよっ！」

レイピアは憤慨して顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

「本当ね！？ その言葉聞いたわよ」

「もちろん本当よ」

シャンナリーはマスカットのような瞳を真っ直ぐレイピアに向けた。射るような視線を受けて負けじと睨み返した。

先にその視線を緩めたのはシャンナリーの方だった。

「それを聞いて安心したわ」

「安心していいわよ。私、男なんて大嫌いだから」

レイピアは吐き捨てるように言った。険しく、何者も寄せ付けないような表情で。

シャンナリーは驚きに目を見開くと、すぐに微笑むように目を細めてレイピアの耳元で囁いた。

愛らしい声で、歌うように。

「あたし、スキルと寝たことあるの」

それだけ言うところりと踵を返し、足取りを軽くして団員達を引き連れるようにして去っていった。

第6章 心の傷2

リグの朝はスキルに一杯のコーヒーを入れることから始まる。

スキルは朝早くから目を覚ましててきばきと早朝訓練に精を出しているかに思われがちだが、意外と朝が弱い。寝ぼけてぼんやりしている胃にコーヒーを流し込まないとすっきりと目を覚ますことができない性質だった。反対にリグは寝起きが良いため、いつの頃からか自然とコーヒーを入れる役を任される形になった。

今ではすっかりスキルの好みのコーヒーの濃さからミルクの量まで覚えてしまったほどである。

そして今日も水を汲みにヤカンを片手にして井戸までやってきた。するとそこにははずぶ濡れになってぼんやりと立っているレイピアの姿があった。レイピアは怒りとも悲しみとも取れないまったくの無表情をしていて、固く口を引き結んでいた。

これには朝からリグも仰天してしまった。しかし朝だったのが幸いだった、これが夜だったら間違いないヤカンを放り投げて情けない悲鳴でも上げて逃げ出していただろう。

「ど、どうしたんです！？ こんなにずぶ濡れになって」

リグは慌てて側に駆け寄り、タオルがないかポケットの中を探った。

レイピアはちら、とリグの方を見て

「集中豪雨」

と、たった一言それだけをポツリと呟いた。

「な、何言ってるんですか！ そんなわけないでしょう。これで拭いてください」

「いいわよ。すぐに乾くわ」

レイピアはそう言っているものの、とてもじゃないがすぐに乾くようには見えなかった。全身がぐつしよりと濡れていてで今もポタポタと雫を垂らしているのだ。

リグは強引にレイピアにタオルを渡すとすぐに拭くように促した。それからためらいがちに尋ねる。

「あ、あの……もしかして団員達に……？」

昨日のレイピアの宣戦布告で団員達の怒りを煽ったのはリグも感じていた。けれどこんな暴挙に出るとは予想もしていなかった。

何も言わないレイピアに肯定であると思なしたリグは「私が注意しましょう！」と憤慨した様子で言ったが、レイピアは首をゆつくりと横に振った。

「こうなることは予想してたから。それよりもリグも私から離れての方がいいんじゃない？ とぼっちりが行くわよ」

「私は大丈夫ですよ。若君の側近みたいなものですから。もしくは執事ってところですかね」

「ふうん、そうなんだ……。このタオルありがとね」

タオルを片手にレイピアはくりと背を向けるとそのまま歩いて行こうとした、リグはレイピアが泣いているかもしれないという思いにかられてたまらず声を掛ける。

「あ、あの……」

意外にも振り返ったレイピアは笑顔を浮かべていた。
少しも気にしていないという風に。

「泣いてると思った？ 残念、これくらいじゃ泣かないわ」

普通のお嬢様だったら、こんなことされて笑顔でいられるはずがない。泣いて逃げ帰っているだろう。

なぜこの女性はこんなにも強くいられるのだろう……？

リグには不思議でたまらなかった。

自然とリグはその疑問を口にする。

「辛いとは思わないのですか？」

「もっと辛いことを知ってるから……。だからね、これくらいへっちゃらなの」

レイピアの表情は穏やかに笑っているようにも見えたし、微かに憂いを帯びているようにも見えた。

レイピアの言葉の意味、その表情の意味。

リグにはそれがわからなかった。それを確かめようとする前にレイピアは背を向けて走り出した。

「もっと……辛いこと……？」

去ってしまったレイピアに問い掛けるようにポツリとリグは呟いた。

さすがにやり過ぎたか？とテントに帰ったブレンは思っていた。
しかしすぐにその思いを否定する。

これぐらいでいい。これぐらいやればさすがにお嬢様も泣いて逃げ帰るだろう……。

「ブレン、探しましたよ」

後ろからいきなりかけられた言葉にハツとして後ろを振り向く。見るとリグが腕組みをして立っていた。怒りのオーラが体中から発生していて、その不機嫌な表情から話の内容を聞かなくともわかってしまった。

「あなた達ですってね、レイピアさんに水をぶっかけた犯人は」

案の定、リグはそのことについて切り出してきた。

わざわざ団員達に聞きまわって来たのだろうか。リグの性格を知っているブレンはきつとそうに違いないと納得する。

リグはひそかに「お説教魔」というあだ名がつけられていた。つけたのは他でもないブレンなのだが……。昔からそうだった。いつも悪さをするどこまでも追いかけてきて説教をしてくる。正直うんざりしていた。

「そうだ。邪魔なんだ、あの女が」

少しも悪びれもせずにブレンは堂々とした態度を見せた。その態度にカチンときたリグは口を尖らせてブレンに詰め寄った。

「ブレン、あなたの一していることは若君とレイピアさんの勝負を汚すことなんですよ！？ わかっているんですか」

「そんなことわかってる」

「それならなぜ！？ 若君がこのことを知ったらさぞかし怒るでしょうよ」

ブレンは子供のようにぷい、とそっぱを向いて投げやりに言葉を吐き捨てる。

「それならスキルに告げ口するといい」

「な、なんですか告げ口って。あなたは子供ですか！？……ちょっとブレン聞いているんですか」

「とにかく、俺はあの女が出てくまで嫌がらせでも何でもしてやる」

これ以上言っても無駄だと思い、リグは口をつぐんだ。

スキルは団員に慕われるが、いささかその傾向が強すぎるようだ。今後のレイピアに対する風当たりはますます強まりそうだ。リグは同情を覚え、深くため息をついた。

第6章 心の傷3

「あたしスキルと寝たことがあるの」

シャンナリーの言葉が何度も何度も頭を反芻する。

可愛らしい声と憎たらしい顔で歌うようにつぶやいたその言葉。いくら消そうとしても忌々しいくらいにまとわりついてくる。

なぜシャンナリーはわざわざ自分にそんなことを言ったのだろうか。牽制のつもりだろうか。

馬鹿らしい。

スキルのことなど宝石を盗んだ盗賊にしか見えていないというのに。

不幸なことにレイピアは今着ている服しか持っていなかった。この服ですら昨日着たものと同じなのだ。まさか1カ月も滞在するハメになるとは思ってもいなかったから替えの服など持ってきていなかった。

とりあえずテントで乾かそうと考えた。

いつそのまま服を洗ってしまおうかとも思うが、そうすると着る服が無くなってしまふ。とりあえず今は乾かすことだけ考えてテントに戻ることにした。

顔を上げると団員達がレイピアを馬鹿にして笑う顔が見えるような気がして唇を噛み締めて俯いたまま走り続けた。

もう少しでテントにたどり着くという所で急に誰かに腕を掴まれ、顔を上げると目の前にスキルの驚いたような顔があった。

「一体何があつた？」

問いかけに対してレイピアは何でもないとそっけなく言っけとぶい、とそっぽを向いた。

「何でもくはないだらう！？ そんなにずぶ濡れで」

レイピアの投げやりとも言える言葉にムツと顔をしかめたスキルは肩に手を掛けて、その顔を覗き込んだ。しかしレイピアは首を横に振りながらその手を強引に振り払う。

「本当に何でもないわ。間違つて水を被つただけよ、だから放つておいて」

レイピアはなぜだかスキルに対して無性に腹が立つて仕方がなかった。

なぜスキルにこんなにもイライラするんだらう？

スキルを慕う団員から水をかけられたから？昨日の夜のことが原因で？それともシャンナリーの言葉に。

すぐさまその考えを否定した。違つ、きつと昨日の夜のことが原因だ。それに腹を立てているんだ。

とにかく放つておいて欲しい。

そう思いながらレイピアはそのままテントに入ろうとしたが、ムツとしたままのスキルが強引に手をつかんで引きずるようにして歩き出したので、かなわなかった。

「ちょっと！ 離してよ」

レイピアの抗議の声を無視してひたすらスキルは歩き続けた。そしてソアラのテントの前に立つとようやく手を離す。掴まれて

いた右手の部分は赤くなっていてヒリヒリと痛み、左手でさするとスキルを睨みつけた。

「痛いじゃない！」

「君が何も言いたくないなら俺も聞かない。ただその服は何かした方がいい。風邪でも引かれたら迷惑だ」
「な……っ」

反論しようと口を開きかけたが、事実その通りだったので口を引き結んだ。このままの状態でしたら本当に風邪を引いてしまう。スキルはテントの中に入ると、ソアラにレイピアへ服を貸すように頼み、そのまま出て行ってしまった。
言葉の通り何も聞くつもりは無いらしい。

「まあレイピアちゃん、その服はどうしたの？」

ソアラはずぶ濡れになっているレイピアに驚いた様子で目を見開く。そしておっとりとした動作でレイピアをタオルにくるませた。レイピアは先ほどよりは幾分か緩めたものの、いまだに不機嫌に歪んでいる顔で口を開く。

「集中豪雨です」

まあ、と驚いた声をあげたソアラは明らかに嘘だとわかるようなレイピアの言葉を信じたようだった。どこまでも純粹で人を疑うということを知らないらしい。

すぐにソアラはいそいそと洋服が入った衣装箱を開けて何着か洋服を持ってきてくれた。

どの洋服もとてかわいらしいのだが、やけにひらひらとした部分が多く露出の高いものだった。色は赤や黄色といった原色がつかわれていて普段レイピアが着ないようなものばかり。これをソアラが着ているのかというところではないように思える。ソアラの今着ている服はベージュ色の簡素なドレスだったから。

「あの……これ……」

そのひらひらとしたドレスをつまみ上げてレイピアは困惑した声を出す。

「こういうの嫌だった？ 私が若いときに着ていた服なんだけど。これなんて背中が露出しているからかわいいと思うわ」

若い頃に着ていたらしい。

ソアラがこんな露出の高い服を着ているのはとても想像もつかなかったが、もしかしたらステージ用の衣装として着ていたのかもしれない。それなら納得がいく。

レイピアはしばらく考え込むと、断ることにした。

「ごめんなさい。こういう服はちょっと……」

ソアラは残念そうな顔をしたものの、気を悪くすることなくすぐに次の服を持ってきてくれた。今度はレイピアが普段着ているような動きやすさを重視したシャツとスラックスだった。

「じゃあ私は向こうをむいてるから」

くるりと背を向けるソアラ。

着替えるレイピアに気をつかってくれたのだ。お礼を言って、濡

れて重たくなつた服を脱ぎ始めた。

「あ、そうだね。濡れたお洋服は……」

ソアラは言い忘れに気づいてレイピアの方を振り返るが、言葉を最後まで告げることができなかった。

あつ、と言葉を飲み込んで目を見開いた。その視線の先にはレイピアの背中があり、大きな刺し傷の跡があつた。

レイピアは慌てて渡された服を着てそれを隠す。

「ご、ごめんなさい……レイピアちゃん」

「あ……あの、だからさっきの服を嫌がったのね……」

何て言葉を言っているのかわからずに、戸惑うようにしてソアラが声を掛けた。

「ええ、まあ……」

ぎゅっと服を握りしめてレイピアは俯いた。

ソアラは悲しげに目を細めると、意を決したように口を開いた。

「もしよかったら……私にその傷ができた理由を話してくれないかしら？　もしよかったらでいいから……ね？」

気遣うようなソアラの言葉にレイピアは顔を上げた。

まるで母親にどうしたの？とやさしく尋ねられているようだった。

「どうして、ソアラさんってそんなにお母様に似てるんだろう？」

レイピアは今にも泣き出してしまいそんな表情をつくって弱々し

く笑う。

スキルや団員達の前で張っていた虚勢がソアラの前だといとも簡単に崩れてしまうのだ。

一昨日もそうだ。盗賊団のアジトに1人で乗り込んでしまい、本当は恐くてたまらなかつたけど精一杯弱みを見せまいと強がっていた。それなのにソアラを目の前にすると砂でつくられた城のように一瞬で壊れてしまう。ただの泣き虫で弱虫な本当の自分に戻ってしまふ。

レイピアは目に涙をいっぱい浮かべた。

「……聞いて……くれますか？」

「ええ。辛い事は全部吐き出してしまふと良いわ」

母親が生きていたら、胸に抱えていた辛い出来事を全部聞いてもらいたかった。そして「辛かったのね」と言っただけで抱きしめて欲しかった。

ソアラは今、母親の代わりにその思いを聞いてくれると言ってくれて、それがレイピアにはたまらなく嬉しかった。

嗚咽をもらしながらレイピアはゆっくりと話し始めた。

それは2年前の、レイピアが家を飛び出した頃のこと。

世間知らずのお嬢様だった自分が1人旅をするのはとても不安だった。そんな時に1人の青年に出会った。

彼の名前はユーザ。

ユーザは最初、レイピアが領主の娘だと知って戸惑いを見せたが一緒に組んで冒険をしてくれることになり、色々なことを教えてくれた。

剣の扱い方、簡単な食事の作り方、冒険の基本。世間知らずだったレイピアには何でもこなすユーザがとても魅力的だった。そして毎日が楽しかった。

レイピアはユーザを愛していたし、そして彼もまた自分を愛してくれているものだと思っていた。

いつしか2人は結婚の約束をするような仲になった。冒険者を辞めて結婚して、小さな家に住んで暮らそうと語り合った。

2人は最後の冒険として、盗賊退治をすることになった。簡単な冒険に思われたし、実際盗賊達もすぐに捕まえることができた。しかし。

「盗賊達を捕まえて、いざ冒険者ギルドに戻ろうとしたときに彼が私にした仕打ちがこれなんです」

レイピアは目を伏せたまま、背中の傷を指し示した。短剣のようなもので一突きした跡。一生残るであろうその傷は見ていて痛々しかった。

「私は当時冒険者ギルドの保険に入っていました。これに入っていると冒険中に怪我や死亡をしたときにお金の保証をしてくれるんです」

レイピアは保険金の受け取りをユーザにしていた。レイピアが信頼していたのは彼だったし、彼以外に頼る人もいなかったから。

そんなレイピアにユーザがした仕打ち、それはレイピアに怪我を負わせ、あたかも盗賊に斬りつけられたかのようにギルドに報告をしたことだった。

保険金を受け取った後、ユーザは病院で治療を受けているレイピアを置いてどこかへ消えてしまった。

「彼はきつと私を殺すつもりだったんです。けど……バカね、剣の腕は確かなはずなのに間違つて背中を刺すなんて。心臓を狙っていたら確実に殺せたというのにね」

レイピアは頬を伝う涙を拭うこともせずにくすぐすと笑い続けた。それはユーザに対しての笑いなのか、それとも裏切られた自分に対する笑いなのか、そこからは伺うことはできなかった。

結婚の約束までしていた男に裏切られたレイピア。

ソアラはなぜ一昨日のレイピアが「約束」についてひどく不快感をあらわにしたのか理解できた。

そしてその心の傷の深さも。

「レイピアちゃんは、まだその人を愛しているの？」

ためらいがちに聞かれた言葉にレイピアはゆっくりと首を振った。

「愛してない。……憎いの、でも復讐とかそんなことは考えてない。今はただ忘れたいだけ」

レイピアの何も感情を映さない硝子のような瞳に、たまらずソアラはそつと引き寄せて抱きしめると頭をやさしく撫でた。

母親が娘にするように。

ふんわりと甘い匂いのする香水も、やわらかい腕の温もりもずっとレイピアが求めていたものだった。

「辛かったのね……」

レイピアは耳に響くその言葉を受けていつそう涙がこぼれた。声を押し殺してそれからしばらく泣きつづけた。

「お母様……」

ソアラの腕にすがりついたまま、うわごとのようにつぶやく。
その時のレイピアはソアラと自分の母親を重ねていたのだろう。
けれどソアラはそれを知りながらあえて受け入れていた。

「ありがとうございます……。とてもスッキリしました」

ようやく涙も止まり、ソアラの体にうずめていた顔を上げると晴
れやかな笑顔を向けた。それを見たソアラも満足げな表情を浮かべ
て微笑んだ。

「ねえ、ソアラさん。このことは誰にも言わないでくださいね」

「スキルにも……？」

「もちろん。だって同情をかけられるなんてごめんだわ」

スキルにはこんな自分を知られなくなかった。まだ知り合って間
もないけれど、彼の性格からいつてレイピアの過去を馬鹿にしたり
はしないだろう。だが、同情されることも弱みを知られることも嫌
だった。それは屈辱以外のなにものでもないから。

「そう。あなたがそう言うのならスキルには言わないわ。2人だけ
の秘密ね」

ソアラは人差し指を唇に当てて悪戯っぽく笑った。その笑顔はと
てもスキルに似ていてやっぱり親子だな、とレイピアに思わせるも
のだった。

第7章 無謀なお嬢様1

翌日。

ソアラに苦しかった胸の内を全部吐き出したことによって、レイピアは久しぶりに晴れやかな朝を迎えた。

今日もがんばろう、レイピアは決意をあらたにした。

ユーザの件からもう2年たった。自分はいつまでもあの頃のようなお嬢様でもないし、強くなったと思う。昨日ソアラに話したことでもっと強くなれた。正直人に話すことでこんなにも心が軽くなるとは思わなかった。

内に溜め込んでいるよりも誰かに聞いてもらうことも時には必要なのかもしれないわね……。

まだ……がんばれる。

両手で挟むようにして頬を軽く打つと、レイピアは朝食をもらいに行くことにした。

朝の炊き出しは TENT 街の中央広場で行なわれていた。朝食を受けとると、広場の外れに腰掛けて食べ始めた。今日の朝食は焼いたふかふかのパンと温かい野菜スープだった。

食事はおいしかった。1人で食べることは慣れているけれど、やはり1人で食べる食事ほど味気ないものはない。もそもそその食事を食べていると、スキルがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

スキルはレイピアを見るなり何か言いたそうに口を開きかけたが、すぐに口を引き結んで隣に腰を下ろす。

「私、まだ座っていいって言ってないけど」

パンを頬張りながら、ちらりとスキルに目をむける。スキルは口の端を少しだけ上げて、肩をすくめる。

「つれないね。パーティーの日はすんなり座らせてくれたのに」

「あれは特別。あの日だって内心では喜んで座らせたわけじゃないわよ。……それで用は何なの？」

昨日のもやもやとした気持ちはいつの間にか吹き飛んでしまい、いつも通りのやりとりになっている。結局あのもやもやの正体はわからなかったが、気にすることもないだろうと思った。

「今日も公演があるから今のうちに君にチャンスあげようと思っ
てね」

そう言って懷を指さす。おそらくダイヤが入っているのだろう。スキルは連日のようにステージに上がっている。その間はダイヤをどこに隠しているのかわからないため、レイピアにはスキルと会っているときだけがダイヤ奪還のチャンスだった。

わざわざチャンスを与えるために足を運んだような物言いだ。その余裕たっぷりの態度にレイピアはむう、と頬を膨らませた。

「あら、敵に塩を送ってる場合かしら？ そんなことやっていると足元すくわれるわよ」

つん、とそっぽを向く。けれど視線だけはスキルの懷に向けていた。

「ハンデは必要だろう？」

「それは私の腕があなたよりも劣っているように聞こえるわ」

「否定はしないな」

くつくと笑いを噛み殺したように笑うスキル。心底レイピアとのやりとりを楽しんでいるように見える。もっとも楽しんでいるのはスキルだけでレイピアの方は楽しくとも何ともないが。

「あなたってどうしてそうっつかかってくるのよ。その口を何とかしたらどうなの？」

目をつり上げてレイピアはスキルを睨む。

いつも思うのだが、視線で人を殺せるならどれだけいいか。そしてたら目の前にいる憎ったらしい男を殺してやるのに。

「君につられてるだけさ。もっと君が素直な女性だったら俺も合わせるんだけどね」

「へえ、そうなの。でも生憎ね、私があなたに素直になる日なんてこの世が終わっても来るはずないんだから」

冷たく言い放って、残りの朝食を一気に喉にかきこんだ。途中器官に入って激しくむせこんでスキルに笑われたが、食事を終えるとさっさとその場から離れた。

スキルにわざわざチャンスを与えられたのが悔しかったから、彼の懷に手をつ込むことはしなかった。チャンスくらい自分で作ってみせるわ、と憤慨して。

それから4日が経った。

レイピアがここで生活するようになってから一週間になる。それにも関わらずあいかわらずスキルとの攻防戦に終わりは見えなかつ

た。レイピアにしてみれば3日もあれば決着がつくと思っていただけに、苛立ちは募る一方だった。

何度もスキルの懐に手を入れようとするものの、いつも寸前にひよいと軽くかわされてしまう。いい加減レイピアも頑なに認めようとしなかったスキルの実力を認めざるをえなかった。

寸前で避けられてしまうのは決して偶然ではない。

スキルは剣士でいえばかなり腕の立つ部類に入るのではないだろうか。ただし避け専門だが……。

私に勝てる相手じゃないわ。

ふう、とため息をつき、ハッとしてすぐにかぶりを振った。

弱気になったらそこでおしまいだ、自分自身に言い聞かせるように顔を挟み込むようにして両手で打った。

隙さえできれば、と思う。どんなにすごい腕の立つものでも隙さえつくことができれば。

そう考えてレイピアは再びため息をついた。あんなに完璧なスキルのどこをどうやれば隙なんて作ることができるのだろうか？

寝ているときですら無理だったというのに。ステージに上がっているときはダイヤの隠し場所すらわからない。

そして団員達もあいかわらずレイピアには冷たかった。一部団員（主にシャンナリー）からの嫌がらせ。彼らの意図はわかっていた、レイピアをここから追い出すためだろう。そのことがますますレイピアの気を重くしていた。

考えていても何も始まらないという結論にたどりついたレイピアは、スキルのテントに向かうことにした。すでに日課になっている攻防戦だ。

今日はサーカスは休みだということをリグから聞いた。団員達の休養を兼ねて1週間に1日だけ休みを取るようになっていいるらしいということとはスキルも1日テントにいるわけで　　レイピアにし

てみれば絶好の機会だ。

スキルのテントの前に来て、中に入ろうとしてぴたりと足を止めた。中から話し声が聞こえてきたからだ。聞き耳を立てていたわけではないのだが、自然と会話が耳に入ってきた。

そしてその声の主がシャンナリーだということに気づいた。

頭の中に浮かんだのは前にシャンナリーが言った言葉だった。

あたしスキルと寝たことあるの。

レイピアは顔を赤くしてその場からパツと一步下がった。まるで自分が盗み聞きをしているように思えたのだ。いくらレイピアでも恋人達が愛を語らっているところに踏み入れる趣味はない。けれどもすぐにそんな思いは杞憂であることがわかった。スキル達は単に会話をしているだけだった。

それでもここに居るのが気まづくなつたため、テントに帰ろうとしたときにシャンナリーの言葉が耳を打った。

あの愛らしくも憎たらしい声が。

「ねえ、スキル。私がレイピアさんを追い出してあげるから！」

その言葉に思いつきり頭を殴られたような衝撃が走った。

青ざめた顔で口元を覆って立ち尽くす。

もしかして……スキルが指示を出していたの？ 団員達に私を嫌がらせて追い出すようにって？

ぐるぐると頭の中をシャンナリーの言葉がよぎった。信じられない……という思いは次第に怒りに変わり、やっぱり盗賊のやること

なんてそんなものよね、という思いに支配された。

結局スキルには約束を守る気なんてなかったということだ。

姑息にも一部の団員達の手をつかってレイピアを追い出し、さもゲームを放棄させたように見せたかったのだ。

そうまでして体面を守りたかったのか。

握りしめた拳に爪が食い込む。

何て卑怯な男!!

血が滲むほど唇を噛みしめて、レイピアはその場から去った。

レイピアの耳には届かなかったが、その会話には続きがあった。

「ねえ、スキル。私がレイピアさんを追い出してあげるから!」

「やめろ、シャンナリ!。これは俺とお嬢さんの勝負だ。手出しはするな……」

彼にはちゃんと約束を守る気がある。レイピアには届かなかったが。

第7章 無謀なお嬢様2

頭の中はぐちゃぐちゃだった。

レイピアはテントに戻ると、毛布を頭から被った。思いつきり叫んで、泣きたい気分だった。

だが、泣くのはもっと悔しかった。

心のどこかでもしかしたらスキルは約束を守ってくれるのかもしれない……なんて考えてた自分があまりに馬鹿みたいで。そのことで涙を流す自分はずっと馬鹿みたいだったから。必死に涙をこらえて、枕に顔をうずめた。

なぜ信じようなどと思ってしまったのか。

相手は母の形見でもあるピンクダイヤを奪った憎らしい盗賊だというのに。約束を守ってくれる確証など最初からありはしなかったのに。

くやしい……！ くやしい！！

スキルの顔なんて見たくもない。心に芽生えたのは裏切りに対する怒りだった。親切にしてくれたリグの顔もソアラの顔すら今は見なくなかったし、信じられなかった。怒りは次第に憎悪に変わっていく……なのにどうして自分はこんなに傷ついているのだろうか。心臓がちくちくと痛んでたまらなかった。

そうして何時間も枕に顔をうずめたまま過ごした。昼の時間が過ぎたが、昼食を取りに行く気にはならなかった。

「レイピアさん？ 入りますよ」

ためらいがちに声が掛けられ、テントの幕が開いた。

レイピアはビクツと身をすくませるが、すぐに片手に昼食の盆を載せたリグを睨みつけた。それまで見たこともなかった、ナイフのような鋭い視線にリグは何事かと戸惑う。

「あ、あの……？ どうしたんです」
「出てって」

何者も寄せ付けない冷ややかな声でレイピアは呟いた。戸惑うリグになおも冷たく吐き捨てるように言い放つ。

「邪魔だつて言ってるでしょう！」

昨日までのレイピアから想像もつかないような荒れた様子にリグは声を失い、立ち尽くすことしかできなかった。

出て行く様子が無いリグにレイピアはチツと短く舌打ちをすると、ベッドから抜け出し彼を突き飛ばしてテントから出て行った。

後には突き飛ばされて、呆然とした顔で尻もちをついているリグの姿だけが残った。

「レ……レイピア……さん？」

テントから出るとすぐに、前にレイピアに嫌がらせをしてきたブレンとシャンナリーに出会った。ブレンの名前はリグに聞いたことがあるので知っていた。

また何か嫌がらせをしに来る気だったのだろうか。

レイピアは2人に射るような視線を向けた。殺気を孕んだ氷のような視線。しかしすぐにくつと侮蔑するように口元を歪めた。

「また何か仕掛ける気？　あなた達って、つまらないことしかできないのね」

「なんだと！？」

この言葉に怒りをあらわにしたのはブレンだった。

「だってそうじゃない。水をかけたり、脅しをかけたり。どれもこれもつまらない嫌がらせばかり。正々堂々勝負できないの？」

レイピアはくすつとブレンに向けて笑い飛ばした。思いつきり馬鹿にした仕草で　事実、馬鹿にしているのだ。

姑息で卑怯でどうしようもないくらい野蛮な連中！

「まあ、無理でしょうけど。金魚のフンみたいにスキルにくつついてる弱虫さんにはね」

「てめえ！」

ぐい、とブレンは怒りに任せてレイピアの胸ぐらを掴み上げる。しかし彼の気迫は、今の怒りに心を染めている彼女には伝わらなかった。表情を変えることもない。たとえ彼がナイフを取り出して彼女の白い喉元に突きつけたとしても結果は同じだろう。

「あら、本当のことを言われて怒ったの？」

ふふん、と鼻をならす。

嘲りをやめようとしないレイピアにブレンは本気で殴ろうと思った。右手を思いっきり振り上げたところでシャンナリーに止められた。いくら何でもそこまではやり過ぎだと思ったのだろうか。ブレンはチツと舌打ちすると、握りしめていた拳をしぶしぶ下ろす。

「そこまで言うならあんたと正々堂々勝負してやるよ！」

怒りに髪を掻きむしった後、ブレンは背を向けて獣舎の方へと歩き出した。冷ややかにそれを眺めつつも、レイピアは後に従った。

獣舎の前にはレイピアとブレン、シャンナリー。そして険悪な空気を感知取って、何かと興味を持った見物人の団員達が詰めかけた。お互いに何が始まるのかと顔を見合わせる。その中にスキルやリグの姿はなかった。

「何をする気なの？」

ライオンの檻の前でブレンが立ち止まった。

レイピアは両腕を組んだまま、ちらりとライオンを見るとガラスのような琥珀色の瞳と目が合った。王者の名にふさわしいしなやかな体躯と立派なタテガミ。こんなにも近くで見たのはリグに案内されたときを含めてたったの2回だった。

大勢で檻の前に詰め掛けているためそのライオンは気がたっているのか、しきりに尻尾を揺らしてうろうろしている。見ようによっては獲物を待ち構えている姿にも見えるかもしれない。

ブレンはくつと口元を歪めて笑うとライオンの檻をゆっくりと指した。

「俺とお前で勝負をしよう。この檻の中に10秒間手をつ込んでいられたら勝ちだ」

団員達の間にはざわめきが生まれる。ブレンは何を言っているんだ！？と口々に言い出した。

しかしレイピアは戸惑う様子を見せることなく淡々とした口調で

質問をする。

「勝つたらどうするの？」

「お互いに言うことを聞く。俺が勝つたらあんたには出て行ってもらおう」

「じゃあ、私が勝つたら今後一切邪魔をしないで欲しいわ」

言いながらレイピアは皮肉げに口元を歪めた。

「でももし私が勝つたとしても、姑息で薄汚い盗賊のあなたがそんな約束を守るわけないわよね。果たして私とその勝負をやる意味があるのかしらね？」

ブレンはカツとなった。

姑息で薄汚い盗賊だと！？ 約束を守るわけがないだと！？

「約束は守る！ ただしお前が勝つた場合のみだ。もっともお嬢様に勝負をする勇氣があるとは思えないがね」

へつと小馬鹿にした笑いを浮かべる。

それはあまりにも馬鹿らしい勝負だった。ブレンですら本気で言ったわけではなく脅しのつもりで言っただけだ。レイピアが怖気づいて、今度こそ逃げ帰ると思つて。

レイピアだって普段の彼女ならこんな勝負を受けるはずがなかった。自分の腕を食いちぎられる危険があるというに。
けれど。

「いいわ、受けてたちましょう」

怒りと憎しみで冷静な判断を失っていたレイピアは受けてたつこ

とにした。

動物の檻には近づかないでくださいね、と言ったリグの言葉さえもはや頭の隅から消え去っていた。

なんだか全てがどうでもいい気がしてきた。

ただ、今は目の前にいるブレンに一矢報いてやりたかった。啞然とさせてやりたかった。

馬鹿にして。お嬢様だから怖がって逃げ帰るとでも思っているの？ そんな弱い人間に見られているのか。舐められたものだ。

再び、団員達の間になわめきが起こった。

「やめなさい！」

「馬鹿なことはやめるんだ！！」

団員達の中からそんな言葉が次々に出る。今まで空気のようにレイピアを扱っていた彼らからの初めてのコンタクトである。

レイピアは何の感情もこもらない目で彼らを一瞥するが、すぐに視線を外した。まるで彼らを景色に溶け込んでしまった静物のようにしか見ていないようだ。そして檻の前に近づく。

「一緒に手を入れるの？ それともどちらか1人？」

「どちらか1人だ。まずはどっちからやる？ 俺はどちらでもいいぜ」

挑むような視線を受けてレイピアはすっと前に出た。

「私からやるわ」

「本気か？ ビビってるんならやめといた方がいいぜ」

「やめる？ 冗談じゃないわ」

ごくり、とブレンは息を飲み込んだ。

レイピアは深呼吸をして、震える足を何とか静めた。

決意は決まった。

「こんなのでビビってたら冒険者なんてやってらんねーんだよ」

半ば金切り声で叫んで、鉄格子の隙間に手を突っ込んだ。途端に団員達の間から悲鳴があがる。

レイピアは震える声でカウントを取り始めた。

「1……2……」

時間がひどく長いように感じられた。

それまでうろうろと檻の中を歩いていたライオンは、いきなりの侵入者に驚き、怒りをあらわにした。4秒を数えたところで急に咆哮を上げ、レイピアの腕に食らいついた。

最初、レイピアは何が起こったのかわからずに短い悲鳴をあげるだけだった。けれど檻に引っ張られる感覚と団員達の凍りつくような悲鳴に自分が噛み付かれたのだと理解した。

それでも、檻に引きずり込まれないようにその場に踏ん張って、かすれた声でカウントを取る。

「5……6……7……」

怖い。

このまま腕をちぎられるかもしれない。

恐怖のために、どっと冷たい汗が吹きだして、急に目の前が暗くなって耳鳴りがし始めた。ガクガクと足が震える。

もうだめだ……

そう思ったとき。

「何をしている!？」

「離せ、ライ!!!」

さまざまな悲鳴が入り乱れる広場に、ひととき大きな怒鳴り声が2つ響き渡った。レイピアの耳にはぼんやりとしていてハッキリと聞こえなかったが、その声は前者がスキルで後者がリグのものだとおぼろげながら理解できた。

飼育係であるリグの命令に従ったライという名のライオンは、すぐにパツとレイピアの腕を離し、申し訳なさそうな顔をした。

レイピアは恐怖のために崩れ落ちるようにして地面に倒れこんだ。ガクガクと体全体が震える。右の腕は恐くて見れない。痛みとぬるぬるとした感触から血で染まっていることは確かだ。

冷たい汗が額から流れ落ちる。

「あ、あとちよつとだったのに……」

レイピアは青ざめた顔で勝負の邪魔をしたリグを睨みつけた。彼の顔はレイピアの顔と同じくらいに青ざめている。

「あとちよつとだったのにどうして邪魔するのよっ!」

側に来たリグを怒りにまかせて何度も殴りつけた。右手で殴ったために、リグの服は血で染まる。

「何で……っ何で邪魔するのよ!」

しかしその腕はスキルによって簡単に掴まれてしまった。

「何す……っ」

抗議の声を上げようとしたレイピアだったが、言葉は最後まで続かなかった。乾いた音が辺りに響く。

左頬に走る痛み。

レイピアはスキルに平手打ちされたことを知った。

キツとスキルを睨むために顔を上げて、困惑した。スキルは怒りとも悲しみとも取れない表情をしていたから……。

「な、なによ……卑怯者のくせ……に……」

なおも抗議をしようと声を出そうとするが、限界だった。

レイピアは肩で大きく息をしはじめる。そして耳鳴りと共に目の前が暗くなり、だんだんと意識が遠のいていった。

第7章 無謀なお嬢様3

次にレイピアが目を覚ましたのはベッドの中だった。右手に何の感覚もなかったため、腕がくっついていて不安になってそっと毛布の中を覗き込んだ。

右手はちゃんとくっついていていた。包帯でぐるぐる巻きになっていたが。

おそらく縫ったのだろう、麻酔が効いているために腕に感覚がないのだ。

いつのまに……？

疑問が頭に浮かぶが、すぐに考えるのをやめる。

頭がひどくぼんやりしていて考えるのが面倒くさい。そのぼんやりとした瞳で天井を見上げると、銅製のランプが目映った。風に揺られるテントと共にそのランプもゆらゆらと揺れる。

「レイピアさん、入りますよ」

ためらいがちに声がかかる。聞きなれたその声はリグのものだった。

レイピアは毛布を被って眠っているふりをした。あんなことがあった後だったから顔を合わせづらかった。リグもレイピアが眠っていると思ったため、すぐに出て行ってしまった。単に起きているか確認に来たのだろう。

リグがいなくなると、再びぼんやりしはじめ、いつの間にか眠ってしまった。

痛い。
腕がちぎれそうなほど痛い。

「う……」

強烈な腕の痛みを覚えてレイピアは再び目を覚ました。麻酔が切れたのだろう。先ほどまで何の痛みも感じなかったのに、今は腕がちぎれるくらいに痛かった。そして体も熱っぽい。

怪我が原因かしら……？

動く左手を額にのせてみると、案の定熱かった。これからもつと熱が出るかもしれない。

「今……何時だろう……」

あれからどれくらい時間が経ったのだろうか。薄暗く、ランプが火を灯していることから夜なのは間違いない。

カラカラに乾いた喉を押さえてぼんやりとした目で時計を探す。

その時ふいに頭上から声がかかる。

「7時だ」

不機嫌そうなその声の主はスキルだった。驚いて声の方を向くと、彼はすぐ側に腰を掛けていた。

慌てて毛布を被ってしまおうと思ったが、腕に痛みを覚え派手に顔をしかめた。

「あまり動かすな。15針も縫ったんだ」

「15針も!？」

後が残るわね……と思いながらレイピアは包帯に巻かれた腕を見

た。怪我の具合を聞いてますます気が遠くなりそうだった。

すぐにテント内は重い沈黙に支配された。スキルは不機嫌な顔をしたまま、じつと腰掛けてレイピアを見つめている。いや、睨んでいるといった方が正しいかもしれない。

レイピアが気まずさを覚え始めた頃、ようやくスキルが沈黙を破った。

「どうしてあんなことをした？」

怒りを含んだような声とその迫力にレイピアはぐ、と息を詰まらせ、つん、とそっぱを向いて唇を引き結んだ。

「意識を失う直前に言った裏切り者ってどういうことだ？」

「その言葉のままよ。あなたが卑怯なことするからじゃない！ 団員を使って私を追い出そうとするなんて！」

「な……んだって!？」

スキルは一瞬レイピアの言葉が理解できなかった。そんなことをした覚えはないし、指示したこともないからだ。

しかしレイピアはスキルの驚きを凶星を言われて戸惑っているものと解釈した。顔に怒りの色を浮かべて睨みつける。

「約束を守る気なんてなかったくせに、何が『俺は約束は破らない』よ、笑っちゃうわ。所詮盗賊の約束なんてそんなものなのね」

言いたいことを全部言うと、レイピアはげえげえと熱のために荒い息をした。

「ちょっと待て、一体何のことを言ってるんだ」

「とばけないで！ 聞いたんだから。あなたとシャンナリーが話し

ているところを」

スキルは少しの間考え込んで、ハツとする。もしかしたらレイピアが言っているのは朝のことかもしれない。

……しかしスキルはちゃんとシャンナリーに「やめろ」と言っただけだ。

「俺とシャンナリーの会話のことを言っているのなら誤解だ。俺はそんな指示なんて出してない。シャンナリーにもやめろと言った」「うそばかり、だから盗賊なんて大嫌いよ！」

「おい、落ち着け……」

レイピアがスキルに向けて右腕を振り下ろそうとしたため、慌ててその腕を押さえ込む。

「触らないでっ！ 大うそつきの約束破り！ あっちへ行って！」

そこまで言っただけでスキルを突き飛ばしてから、ハツとした。スキルが傷ついた顔をしてレイピアを見つめていたからだ。

なぜ彼がそんな顔をするのかわからなかった。

嘘をついていたくせに……何故？

思わずズキリと胸が痛む。

「そうか。俺の言うことは信じられない……か。それなら勝手にするといー」

スキルはかぶりを振って椅子から立ち上がると、レイピアから背を向けて出て行ってしまった。

あつさりと取り残されたレイピアは呆氣にとられた。

スキルがもつと言いつて思っていたからだ。

最後の言葉はまるで別れの言葉のようだった。見捨てられてしまったような、そんな気分になる。

「な、なによ……もつと否定しなさいよ……」

違うなら、違うとハッキリ言えばいいのに。

熱があると人は弱くなるのかもしれない。レイピアはまさにそれだった。

自分からあつちへ行けと言ったにも関わらず、いざスキルが出て行くと途端に寂しさを覚えた。

「う……っ」

熱と腕の痛みと心の痛みのせいで涙がポロポロと溢れて止まらなかった。枕に顔をうずめて傷みをこらえて泣いた。

「なによ……なんなのよ……」

ヒクヒクとしゃくりあげ、顔を横向きにした。目からこぼれ落ちた涙は重力に逆らいきれずに横に伝って布団に流れ落ちた。

しばらくすると急にテントの入り口が開き、レイピアは目を見開いた。

先ほど出て行ったはずのスキルが戻ってきたからである。泣き顔を見られまいと彼から背を向けるようにして寝返りをうった。

「ど、どうして……？」

「俺も言い過ぎたと思って……それに君が泣いていると思った」

「な、泣いてなん……かつ」

そう言いつつも、震える声は泣いていたことを物語っている。ふつとスキルが微笑んだ気配が肩越しに伝わった。

スキルはゆつくりとレイピアに近づくと、そつと体を自分の方に向かせた。しかしレイピアは涙でべしよべしよにした顔を見せまいと必死に毛布で隠して抵抗した。

「意地っ張り。泣くのはそんなに恥ずかしいこと？」

「あなたに見られるのが嫌な……だけよっ」

「そうだった、君は素直じゃなかったね」

ふーっと大げさにため息をつく。それからポケットから薬を取り出すとレイピアの方に差し出した。

「痛み止めだ」

しかし毛布を被ったまま、レイピアは受けとらなかった。

「いらない！ 私のことなんて放っておけばいいのよ」

ありがとう、とたった一言。

レイピアのためを思って薬を持ってきてくれたスキルに本当はそう言っただけなのに。

自分の心と正反対の言葉を口にしてしまった。

先ほどのわだかまりを引きずって出た言葉だった。

スキルにはそれがわかっていただけから、腹を立てることはしなかつ

た。ただ、行動を起こしただけ。

水と一緒に痛み止めを口に含む。

次に顔を覆っていた毛布を強引にひっぱり上げると、スキルはレイピアに口づけ、薬を流し込んだ。左手はレイピアの頬を、右手は覆い被さるようにベッドについて逃げられないようにして。

「むー……っ!？」

突然降り注いできた口づけに驚き、レイピアは動かせる左手をフル回転させてスキルの背中を叩きつづけた。けれどレイピアが薬を飲み込むまでスキルは唇を離そうとしなかった。

重ね合わせた唇がやけに熱いのは熱のせいだろうか……。

熱のせいなのか何なのか頭がくらくらしとして思考が閉ざされてしまい、とうとう抵抗をやめて薬を飲み込んだところで、ようやく解放された。

「な、なにを……っ!」

手の甲で口をぬぐい、熱のために赤くなっている顔をさらに真っ赤にして、レイピアは抗議の声を上げた。

「悪かった。こうでもしないと君は薬を飲んでくれなそうだったから」

意外にもスキルは謝罪の言葉を口にした。だからレイピアの怒りはしゅるしゅると収まってしまい、唸ってそっぽを向くだけだった。

「色々とはあるがそれは明日にしよう。ただ、これだけは言っておきたい。俺は約束を破ってなんかいないから……おやすみ」

レイピアは布団をかぶったまま、何も答えなかった。
スキルもそれ以上もとめなかった。

じつと布団の中で息をひそめていると、彼が立ち上がった気配とテントから出て行く気配が伝わってきた。

彼の言葉が本当なのか嘘なのか、レイピアには判別がつかなかった。

本当のような気もする……けれど心のどこかでまたユーザのときみたいに裏切られるかもしれないという不安があった。

裏切られるのは怖い、だから信じるのも怖いのだ。

ちくちくと痛む心、そして腕の痛み。

レイピアはなかなか寝付けずにいた。

第7章 無謀なお嬢様4

待つて

待つて

どこに行くの、ユーザ？

叫びながらレイピアには彼がどこに行くのかわかっていた。ユーザは自分の元からいなくなるのだ。

いくら泣いて叫んでも、ユーザは決して振り返ることはない。

今日もそのはずだった。

けれど違った。

彼はレイピアの方を振り返ったのだから。レイピアの頬を伝う涙をそっと拭うととびきりの笑顔を向け、そして差し出した右手をぎゅっと握った。

痛いよ、ユーザ

ユーザに握られた手、いや腕がひどく痛む。彼に握られているのは手の方なのに……。なぜだろう。けれど痛みよりも胸に生まれたのはほっとするような安心感だった。

再び、ユーザが歩き出そうとする。

待つて！ 待つてよ！

私を置いて行かないで。ずっと側にいて！

慌てて追いつがる。

白くてもやのかかった地面を走る。一生懸命走っているのになかなかユーザに追いつくことができない。それでも置いていかれないように前に進んでいく。

いつもは無視して行ってしまうのに、今日の彼はなんだか違った。レイピアを待つようにして足を止めた。

逆光のせい？

顔が良く見えない。でも微笑んでるのはわかる。恋人に向ける、とびきりの笑顔だ。

行かないよ。ずっと側にいるから

ささやくように、やさしい言葉が返ってきた。

その言葉が嬉しくって、レイピアはつい悪ノリをする。

愛してるって言うて。……ね？

ユーザは一瞬ためらった後、照れたように目を細めて

愛してるよ、レイピア

胸がきゅん、とするくらいにやさしく言った。

ああ、これは夢なんだな

レイピアはそれが夢であることを理解した。ユーザは決してそんなことは言ってはくれない。けれど夢でも彼が言ってくれたことに変わりはない。

とても……嬉しかった。

ユーザは右手でそつとレイピアの頬に触れると、ゆっくりと顔を近づけた。レイピアはその意味を察し、瞳を閉じる。ユーザの唇はほんの少し冷たかったけれど、とてもやさしい口づけだった。恋人達ができる、甘い口づけ。

ユーザ

私もね、私も……

愛してるよ

頭にひやりとした感覚を覚え、レイピアの意識は急速に覚醒していった。

何かとてもいい夢を見ていた気がする。まだ夢を見ていたかった気もするが、あまりよく覚えていない。

「ん……？」

右腕がちりりと痛んだのでそちらの方へ顔を向け、ぎよつとして目をみはった。手のひらを包み込むようにしてスキルが握っていたのだ。しかも肝心の本人はというと、いつもの彼らしくもなく髪の毛を乱れさせて椅子に腰掛けたままスヤスヤと眠りこけていた。

「なつ、なつ……なんでっ!？」

昨日スキルは確かにテントから出て行ったはずである。わけがわからずレイピアは狼狽するばかりだった。

その気配に気がついたスキルはぼんやりと目を開けて身じろぎをする。慌ててレイピアはスキルの手を振りほどくと勢いよく体を起こす。その途端頭の上に乗っていた濡れタオルが毛布の上に転がり落ちた。

「えっ、え!？」

左手で濡れタオルをつかむ。

それから昨日の熱が嘘のように引いていることに気づく。

もしかしてスキルが……？

看病してくれたというのか。

みるみるうちにレイピアの頬が赤く染まっていった。狼狽し、困惑し、慌てて毛布にくるまる。

「あ、あ、あの……スキルが……これ？」

すっかり動揺しながら毛布の隙間から濡れタオルをちょこんと出す。スキルがガシガシと頭を搔いて欠伸をする気配が毛布越しに伝わってくる。

「ん……、ああ」

朝が弱いのか、半分眠っているような返事だった。しかしレイピアは信じられない思いでスキルの言葉を聞いていた。困惑して震える左手で口元を押さえる。

なぜ。

どうして酷いことを言った私にこんなに良くしてくれるの？

……母がいなくなつてから今までこんな風に誰かに看病されたことなんてなかった。一晚中付き添つて、手を握ってくれる人なんていただろうか？

いつもレイピアがベッドに倒れているときは1人きりだった。

あの時も・・・ユーザに刺されて病院のベッドで寝ていたときも……。

本当に裏切るつもりだったら……騙すつもりだったらこんなことはしてくれない。

レイピアは昨日スキルにぶつけた言葉を後悔した。そして昨日の行動も。1人で子供みたいに癪癪を起こして、馬鹿な行動をした。スキルに頬を叩かれて当然ではないか……。

つーとレイピアの頬に一筋涙が零れ落ちる。

「どうした？」

寝ぼけ眼だったスキルはそこでようやく目を覚ましたらしく戸惑った声で尋ねてくるが、ゆっくりと首を振る。

「……看病されるのって……とても温かいものなのね。ずっと……忘れてた」

途端にふつとやわらかくなったスキルの視線が何だか照れくさくて、視線を外したまま言葉を続けた。

「あ、あの…ありがとう…」

レイピアはぶつきらばうに……小声でお礼の言葉を呟いた。

しばらく何の返事も返ってこないから不思議に思つて顔を上げると、スキルが顔をしかめているのが目に飛び込んできた。しかも熱

を測るようにレイピアの額に手を置いてきたのである。

「なによ」

半眼になって問い掛ける。

「いや、熱があるんじゃないかと思って……君がとても素直だから」
「失礼ねっ！　だいたいあなたがいつも私をからかってくるからじゃないの！」

「ああ、それでこそ君らしいな」

いつもは腹を立ててしまいうからかうようなスキルの口調が、今日は何だか心地良かった。

「若君……ちょっといいですか？」

テントの外から声がかかる。

リグはためらいがちにテントの中に入ってくるとレイピアの方を向く。目が合うと途端に太股で近づいてきた。思わず昨日のことで怒鳴られると覚悟していたレイピアは身を強張らせるが、それはいつまでも来る気配がなかった。恐々と顔を上げてみるといつの間にかリグがへなぐつと床に崩れ落ちているのが視界に映った。

「よかったあ……」

彼の口から出たのはその一言だけだった。けれど彼の気持ちは充分にレイピアに伝わった。昨日は心配して眠れなかったのだろう。リグの目の下はうつすらと青くなっていて、表情もことなくやつ

れている。

リグはほっとして胸をなで下ろしたのもつかの間、すぐに目を吊り上げて得意の説教を始めた。

「まったくもう、あなたときたら本当に無茶ばかりするんですから！ あれほど檻に近づいちゃ駄目だと言ったでしょう!？」

「腕に傷まで作って……もうこんなことはこれっきりにして下さいよ！」

「ああ、もうまるで若君が2人いるみたいですよっ！ 2人とも私に心配かけるのが天才的に得意なんですから！ …… って聞いているんですか？」

それまであたふたとレイピアの傷の具合を見たり、熱がないか測っていたリグは行動を中断してじろっとレイピアを睨む。けれど笑いは当分収まりそうになかった。あまりにもその説教がリグらしくて。心配してくれる人がいてくれるのが嬉しくて、心が温かくて。なんとか笑いを噛み殺して、レイピアはリグに向き直る。

「こんなことはもうしないわ、約束する。ごめんなさい……」

心からの言葉だった。

けれど、リグときたら驚いたような表情でスキルと同じように熱を測るようにしてレイピアの額に手を置いてきたのだ。

「まったく、失礼な人達だわ」

憤慨した口調で言いつつも、レイピアは顔をほころばせていた。

それは今までスキルとリグが見たことがないくらいとびきりの笑顔だった。

眩しそうにレイピアの笑顔を眺めていたリグは、ようやく自分がここに來た使命を思い出したようにハッと顔を強張らせた。それから一瞬考え込んでちらりとレイピアの方を見た後、ためらいがちにスキルに耳打ちをする。どうやらレイピアにはあまり聞かせたくない内容らしい。

「これから……ライを……します」

レイピアが聞き取れたのはそのくらいだった。ライとは昨日レイピアを噛んだライオンのことだ。

ライは一体どうなったのだろうか？

スキルはリグの言葉に神妙な顔で頷くと、席を立った。

何かあったのだろうか……？

ただならぬ様子にレイピアは体を起こしてためらいがちに尋ねる。

「ライオンが……どうしたの？」

そこで初めてレイピアに気づいたようにハッとした後、2人はお互い顔を見合わせる。

「何か……あったの？」

再び問い掛けてみる。

重い雰囲気嫌な予感が生まれる。

やがてためらいがちにスキルが重い口を開く。

「ライはこれから処分される」

声のトーンは同じなのに、その言葉だけがやけに静かになったデント内にひときわ大きく響いたように感じられた。すつと背筋が冷たくなる。

「どうして！？　だって……あれは私が原因でしょう。あのライオンが悪いわけではないわ」

「一度でも人を噛んだ動物は処分されることになっている。……これは規則だ」

ピシヤリとした物言いに、レイピアはなおも抗議の声を上げようとしたが、スキルの苦いものをただよわせた顔に思わず閉口する。彼にとってもこれは辛い決断なのだ。

団員の上に立つ立場のスキルが規則を破ったのでは下に示しがない。

「でも……でも……」

レイピアはその後に続ける言葉が見つからなくて、唇を震わせてうつむいた。

第7章 無謀なお嬢様5

若い雄ライオンのライはサーカスで火の輪くぐりと玉乗りをしていた。

炎のようなタガミと金色のしなやかな体躯。その雄々しいライオンが調教師の手によって従順に技をこなしていく様は人々を魅了してやまなかった。つい最近デビューしたばかりだったのだが、瞬く間に人気を集めていった。

しかし。

ライの最後は静かなものだった。

食事に混ぜられた毒。苦しまないように一瞬で逝けるものが使われた。

ライはそのことを知っているのか、知らないのか静かに食事を食べ続けていた。

あんなにも雄々しくて王者の威厳を見せていたライはうずくまるようにその場に倒れこむと、いとも簡単に、あっけなく……眠るようにして息を引き取ったのだ。

レイピアはその光景を見ていられないと思った。けれど、必死で目を背けないようにしてその光景を焼きつけていた。

スキルには来るなど言われたけれど、レイピアにはその光景を見なければいけなかったのだ。

私のせいなんだから……。

私が馬鹿な行動をしたんだから……。

すでに事切れているライと鉄格子ごしに向かい合う。冷たい鉄格子が妙に生々しかった。

若い雄ライオンのライは死んでもまだ威厳に満ちていた。

これからまだ活躍する機会があったというのに。

未来はまだ続いていたというのに……。

人の手によって突然切られてしまった未来。

「ごめんね……」

はらはらと自然に涙が溢れてきた。涙を拭うこともせずじっとレイピアはその場で涙をこぼした。

ライの最後を看取りに来たスキルも、リグも団員達もじっとその場でその光景を見ていた。そうしてしばらく泣いた後、レイピアはスキルや団員達の方に向き直り、その場で膝を折った。

その光景に言葉を失って、団員達は息をのむ。

「ごめんなさい……っ」

両手をついて、深く頭を垂れる。

「私は……っ、あなたたちの大切なライオンに酷いことをしました」

かすれた声で「ごめんなさい」と呟きながら何度も何度も頭を下げる。

はらはらと瞳から落ちた涙は地面に染みをつけた。黄土色の土がその部分だけこげ茶色に変わる。

「違っつ、あんたじゃない……俺が悪いんだ！」

その静寂を破ったのはブレンだった。

それまで啞然としてレイピアの姿を見ていたブレンはとうとう見

かねて声を出した。

「俺が……馬鹿な提案をしたから……」

レイピアの側に駆け寄ると、ブレンも同じように団員達の方に向き直って膝を折って土下座をした。

レイピアもそれに合わせて頭を下げる。
ざわめく周囲。

黙ってその様子を眺めていたスキルは、やはり無言のままブレンとレイピアの腕を掴んで立ち上がらせた。

「もういい……もう充分だから」

スキルの言葉に刺激されたように団員達はすぐにレイピアとブレンの側に駆け寄ってきた。

誰もがすまなそうな、照れたような顔をしてレイピアを見る。

「そうだよ、もう充分だよ。顔をおあげ、美人が台無しじゃないか。ほらブレンも……」

「今まであなたのこと貴族で鼻持ちならない態度の女って誤解してたよ……ごめんな」

それは今までの彼らからは想像がつかないくらい温かい声だった。その声が嬉しくて、またレイピアは涙をこぼした。

その事件がきっかけになったのに間違いなかった。
初め、団員達はレイピアを見たときに「貴族の娘」「スキルの敵」ということからあまり好意を持っていなかった。

けれど昨日のレイピアはまさしく貴族の娘ではなく、1人の人間として土下座までして自分達に謝罪をしたのだ。それがとても好ましかった。同時に自分達が彼女に持っていた偏見を恥じた。

相変わらずレイピアがスキルの敵であることには変わりはないけれど、今では少し見方が変わっていたのだった。

なぜなら……2人のやりとりはとても楽しそうなのだ。

お互いに皮肉ばかり言い合っているが、どう見ても仲の良い2人がじゃれあっているとは思えない。

この様子ではレイピアがもし賭けに勝ったとしてもスキルを捕まえることはまずないと思った。

だから団員達がレイピアと仲良くなるのにたいして時間はかからなかった。

「今回のことは全面的に俺が悪かった……処分は受ける」

そっぽを向いたまま、ぶっきらぼうにブレンは言った。スキルはため息をつく、目を細めてブレンの頭を軽く小突く。

「それはさっきの土下座で充分聞いた。いつまでも気にするな」

スキルはブレンのした行いについて深く追求をしなかった。

なんとなく予想はついていたから。ブレンはスキルのためにレイピアを追い出そうとして熱くなっていたのだろう。そして今回の騒動が起きた。

ブレンとレイピアの様子からいつて2度とこんなことは起きまい。だから、あえてほじくり返そうとは思わなかった。

「それでも……俺はライの件で処分を受けなくちゃならない」

頑としてその場から立ち去らないブレン。おそらく彼はスキルが処分を言い渡すまでいつまでもここに居座りつづけるだろう。長い付き合いのスキルには、容易に想像がついた。

仏頂面であぐらをかいている頑固な親友に対して苦笑する。

「なんて頑固な奴だ。我が親友ながら恐れ入るよ」

「親友だからって特別扱いはナシだ。どんな処分でも受ける」

どうしたものかとスキルは考え込む。

ブレンを罰する気はない。もちろんレイピアも。2人はすでにそれ相応の償いはしたのだから。

しかしそれではブレンは納得しないのだろう。

「それじゃあお前はこれから2週間の謹慎だ」

「わかった」

謹慎とはステージに立てないことを意味している。2週間はかなりのブランクになるのだが、しかしながらそれが当然であるようにブレンは頷いた。

「ああ、謹慎中はリグの仕事でも手伝ってやれ」

名案が浮かんだとばかりに手を打ってスキルはにこりとブレンに笑いかける。

真面目とも冗談とも取れないようなスキルの発言にブレンは派手に顔をしかめて抗議の声をあげる。

「リグの！？ 勘弁してくれ。あいつの側に一日中いたらお説教の嵐で胃に穴があく！」

それはブレンの言い分だったが、リグにとっても同様だろう。

「ブレンと一緒に行動なんてしたら私の胃がもちませんよっ！」
きつとそう言うに違いないが、ここはリグに我慢してもらうことにしよう。

「性根をたたき直してもらえるかもしれんぞ？」

「へっ、それだったら俺だけじゃなくてお前も一緒にやるべきだね」

お互い軽口を叩き合った後、顔を見合わせて笑った。

第8章 戸惑い1

あの事件から2日経った今、団員達がレイピアに対して妙に好意的になっていた。食事を取りに行くときも、顔を洗いに行くときも決まって声を掛けてくれる。

シャンナリーと一部団員の嫌がらせは完全には言えないが確実に少なくなってきたので、たいして気にならなくなっていた。

団員達のレイピアへの態度が変わったように、彼女の団員達への態度も少しずつ変わりつつあった。積極的とまではいかないが、関わりを持つとは思っているらしく団員達の顔を覚える努力をしていた。

レイピアが得た情報としてはこのサーカスには60人もの団員が生活していて、1人1人がきちんと役割を持っているということだった。

空中ブランコをする者、綱渡りをする者、道化師、調教師、小人として活躍している子供の団員までいた。ステージに使われる音楽の演奏も彼らが行なっていたし、ライトの調節や様々な雑用をこなす者もいた。

サーカスを良く知らないレイピアにとっては空中ブランコや綱渡りと聞いてもピンと来なかったが、練習する彼らを見る限り人間離れした技をやるうとしていることがわかった。

彼らは実に気さくでレイピアを見つけてはバシバシと肩を叩いて快活に笑うのだった。

まるで仲間のような扱いだ。

不思議とレイピアはそれが嫌ではなかった。むしろ嬉しく思っ

いる。

しかし

。

「ほらほら、さっさと食べとくれよ」

声を掛けられてハツとして顔を上げると目の前にアリーが立っていた。アリーはこのサーカス団で彼らの食事を作ることを任されていた。ふくよかな体型をしていて、ハキハキ物を言うタイプの女性である。しかしながら彼女は団員達の母親的役割をしているため誰からも好かれていて、レイピアも彼女を好いている1人だった。最初のうちはアリーのストレートな言い方に辟易することがしばしばあったけれど今ではだいぶ慣れてしまった。

「ええ、ごめんなさい」

「なに考え事してんだい、右手が不自由なんだから余計食べるのが遅くなっちまうだろう？ 食器が片付かないったらありやしない」

しかしその口調とは裏腹にアリーは片手にもっている鍋のスープをすくい上げてレイピアの器に盛りつける。なみなみと注がれたスープは今にもこぼれてしまいそうだ。

「こんなに食べられるかしら？」

レイピアは包帯をぐるぐる巻かれた右手で不器用にスプーンを使ってそれを飲む。傷は少しだけ痛むが、動かせないほどではない。

「あんたは細いからもつと食べなきゃ駄目だよ」

アリーはそう言ってバシバシとレイピアの背中を叩いて快活に笑う。思わずつられるようにしてレイピアも笑ってしまう。

「ああ、やっぱりあんたは笑うとかわいいよ。いつもそうしてな、男が放っておかないよ」

アリーの言葉にレイピアはたいして興味がなさそうに肩をすくめるだけだった。

「あら、レイピアにはスキルがいるじゃない」

思わずブホッとレイピアは飲んでいたスープでむせて、恨みがましい目で口を挟んできた少女を睨んだ。そのレイピアと同じ年頃の娘は名前をシアと言って、スキルの空中アクロバットのパートナーでもある。

美しい栗毛色の髪の毛をポニーテールにされていて、その顔は人懐っこさを感じさせる。そして彼女の顔にあるそばかすは立派なチャームポイントになっていた。

彼女とは昨日友達になったばかりだ。

シアはレイピアがここに来た時から興味を覚えて話し掛けてみたかったが、きつかけがなかったので声を掛けられずにいたという。あまり年の近い親しい友達のいなかったレイピアにとって彼女の存在はくすぐったいけれど嬉しいものだった。

シアは人懐っこい笑顔を浮かべると「あら、違うの?」と言って首を傾げてみせた。

「冗談じゃないわよ。何でスキルなの」

「だってスキルがこんなにも1人の女性にかまうことってなかったもの」

そう言ってシアは意味ありげににやにや笑う。おそらく彼女はこの手の恋愛話が好きなのだろう。昨日もあれこれとスキルとの話を

聞かせて欲しいと興味津々で尋ねてきたくらいだ。おかげで夜通しでスキルとの出会いから今までのことを話す羽目になった。彼女が考えているような甘やかな感情をスキルには抱いていないということと話すと、少しがっかりした様子だったが。

レイピアはいい加減うんざりした顔つきで盛大にため息をつく。

「馬鹿らしい。だいたいスキルにはシャンナリーがいるじゃない」

「ああ、それはねえ……レイピア」

シアは少しだけ困ったように眉をひそめて言葉を濁らせる。

「スキルって特定の女性に執着しないのよ。だからね、あいつが色んな女の人と関係を持つのはお互い合意の上なの。割り切っているの。シャンナリーとのこともそうなのよ。だから……えーっと……つまりシャンナリーは恋人というわけではないのよ」

一言一言シアは言葉を選びながらしゃべった。スキルとシャンナリーの関係を否定しているようだが、結果としてスキルの悪癖を暴露する形になっている。レイピアは冷ややかな目でシアを見る。

「不特定多数と関係を持つてるわけね。最低……」

そこでシアはハッとしたように首を横に振る。

「あ、でもねスキルがあなたに対する態度はちよつと違うのよね。とっても楽しそうっていうか。あなたが来てからはスキルの悪い癖も治ったみたいだし。これはもう脈アリかなって」

1人納得したようにシアはうんうんと頷く。

実際、レイピアが来てからはスキルのテントに女性が入り出す
ということは無かった。

「スキルが私をかまうのはダイヤの争奪戦をしているからよ。それ
以外何でもないわ」

「あなた本気で言ってる？　だとしたらかなり鈍感よ」

「私はスキルに弄ばれて捨てられるのなんてごめんだわ。……それに男なんて大嫌いな、そういう話はして欲しくないわ」

不快感をあらわにしてレイピアはそこで話を打ち切った。もう何も聞きたくないと言わんばかりに立ち上がる。

かつて恋人だった男に裏切られた。

そんなレイピアの過去を知らないアリーとシアは急に不機嫌になったレイピアにただ困惑した顔を浮かべることしかできなかった。

団員達と仲良くなれたのは嬉しい、けれど。

いつかそれは終わりのくる関係でしかなかった。1カ月という期間が終われば、それまで。

たとえゲームに勝ったとしても、負けたとしても同じこと。別れは必ずやってくる。

そのことがレイピアの心にしこりとして残っている。

彼らと仲良くなれば、なるほどそれは大きくなって心に黒い染みを落としていく。空気のように扱われていた時はそのことで心を重くして、今度は仲良くなったことで心を重くしている。なんて矛盾しているんだろう。

何を弱気になっているのかしらね。

私はただピンクダイヤを取り返す、そのことだけ考えていればいい

いんだから。

レイピアはテント街から少し外れた所に生えている大きな木に寄りかかってそっとため息をついた。

「よう、何シケた面してんだよ」

突然後ろからかけられた声にぎくりと動きを止めてその主、ブレンをまじまじと見る。

ブレンと顔を合わせるのはいのことがあった日以来だ。しかも彼が今までレイピアにこんなにもくだけた口調で話しかけてきたことは1度もなかった。

また何か企んでいるのでは、という疑念が浮かんで自然と身を固くして警戒する。

「はっ、嫌われたもんだな」

ブレンはたいして気にする風でもなく肩をすくめてみせる。

レイピアはブレンが苦手だった。彼が近くにいるだけで居心地の悪さを感じる。こないだまで嫌がらせをされていたことが理由の1つにある。しかしそれだけではない、別の理由があるように思える。それが何なのかレイピア自身ハッキリとわからなかった。今まで

レイピアの視線はブレンの褐色の肌に留まる。ホットトリップ周辺ではあまり見かけないその肌の色は大陸の東に住む人間特有のものだ。大陸の南にあるホットトリップと東の方では髪の毛の色も、肌も顔立ちも、そして生活習慣までも全く異なっている。ブレンはおそらく東の出身なのだろう。

褐色の肌。

……そうか、ユーザの肌の色と一緒になんだわ。

ユーザの肌も彼と同じような褐色の肌だった。ブレンとユーザの容姿は全く異なっているため、今まではブレンに抱いていた居心地の悪さの正体に気がつかなかったのだ。

レイピアが黙り込んでじっとブレンを見据えていたので、不審に思ったブレンは顔をしかめる。

「なんだよ？」

「……いえ、なんでもないわ。あなたこそ何の用なの？」

「俺がここに来たのは……つまり……え　　っと」

言つべき言葉を頭の中で整理できていなかったらしく途端に言葉を詰まらせてモゴモゴと口ごもる。動揺しているのか手のひらを握ったり、開いたりして落ち着かなく宙に彷徨わせている。

今度はレイピアが怪訝な顔をする番だ。

「……何が言いたいのか？」

レイピアの冷めた問いかけにブレンはごほんと咳払いをして言葉を続ける。

「あー……つまりだ、その、何ていうか……今まで悪かったな」

語尾の方は半ば怒鳴りつけるような形で言い放って、すぐにそっぽを向く。レイピアの位置からブレンの逸らした顔がわずかに上気しているのが伺えた。レイピアは微かな驚きをもってその言葉を聞いている。

わざわざその言葉だけを言いに来たのだろうか。

「確かに俺のやったことはつまらないことだったな。そのことについては謝る。でも、まだあんたのことを認めたわけじゃないぜ。とりあえず今のところはスキルに害がなさそうだから放っておいてやるよ」

一気にまくしたてて言いたいことだけ言ってしまうとブレンは顔を背けたままの体勢で走り去って行った。

第8章 戸惑い2

サーカスの芸の基本とは訓練に訓練を重ねることである。そしてひとつの芸の形が仕上がったら、あとはひたすら同じ事をくり返す。疑問は不要、迷いは禁物。

スキルは早朝の訓練を行っていた。パートナーであるシアとの練習はすでに終えて、ステージにいるのはスキル只1人。

彼のサーカスでの役目は空中アクロバット。天井に張られた一本のロープを使って、指の力を頼りに体重を支えてさまざまなポーズを取りながら演技をする。

このアクロバットは天性の体のしなやかさだけでは不十分で、筋肉も充分に鍛えられていなければならない。そうでなければ反りかえった筋肉を元に戻したりすることはできないから。

訓練とはいえ、アクロバットには相当の体力を消耗する。すでにスキルの服は汗のせいでピタリと体に張りついてしまっていた。額から流れ落ちる汗を手の甲で拭い取る。

今の季節は春だから良いものの、これからの季節を考えると気が重い。中にはその暑さと厳しい訓練ゆえに倒れてしまうものもいるほどだ。

一通り訓練を重ねた後、スキルは床に腰を下ろして休憩をした。力いっぱい空気を吸い込んでまるで猫のように伸びをする。

「ご飯だよ。まったく、こんな時間まで訓練かい？」

そう声をかけて、朝食を載せた盆を片手に現れたのはアリーだった。そのぶすつとした声からは決まった時間にご飯を食べてくれないと困る、という非難めいたものが伺える。スキルはたいして気にする様子もなく片手をあげてアリーを迎えた。

「やあ、アリー。わざわざすまないね。いつもならリグが届けてくれるはずんだけど……リグはどうしたんだ？」

いつもなら朝食を持ってくるはずの、今はこの場にいないリグの姿を探す。

「リグならまだ動物達の世話をやっているよ。ブレンが今日から手伝ってるっていうけどあれじゃあ余計に仕事を増やしてるだけだね」

アリーの語るところによると、ブレンがつまづいた拍子に動物の餌をぶちまけてしまつて、それを運悪く頭から被ってしまったリグとで後片付けをしている最中なのだという。

話を聞いたスキルは思わず苦笑をもらした。

「笑い事じゃないよ。あんたは昔っからリグを困らせることしかないんだから」

アリーはまるでいたずら小僧を叱る母親のような口調で言う。事実いつも温和でのほほんとしているソアラはめったにスキルを叱ることがなかったから、変わりに叱るのはアリーとリグの役目だった。

「あの娘のことだつてそう。気づいてるのかい？ あの娘は心に傷を持ってるよ。笑うとかわいいつてのに、つんけんしててめったに笑わないんだから」

「なんとなくはね、気づいていたよ」

あのととき。

レイピアが腕に怪我をして熱を出して眠っていたとき。

何度も寝言でつぶやいていた言葉がある。

ユーザ。

不安そうに眉根を寄せて痛いであろう右手を伸ばして誰かを捜し求めるように何度も宙にさまよわせた。

おそらくそのユーザという人物と何かがあったのだろう。あの事件のときのレイピアの過剰なほどの荒れた様子も少なからずその事が関係しているのではないかと思う。

生憎それが何であるかは鋭いスキルでもさすがにわからなかったが。

「あんたはそれがわかってるのにあの娘っこをいじめてんのかい！？」

まったくなんて悪ガキだろうね、そう言ってアリーは腕組をしたまま盛大にため息をつく。

スキルは苦笑して肩をすくめる。

「俺にもどうしてだか……。ああ、きつとあれだね、好きな娘にいたずらをしたくなるっていうやつ。あれはそうか……。こんな感じなのか」

1人で納得したようにつぶやくスキルに、呆れかえったようにアリーは聞こえよがしにもう一度ため息をつく。

「何言ってるんだい、いつまでたってもでっかい子供みたいなんだから」

「正直あのお嬢さんに対してどう接していいのかわからないんだよ。……いつも怒らせるか泣かせてばかりだ」

「まったく不器用な子だよ。経験は人一倍多いくせして肝心の女心

がわかってやしないんだから……いいかい、これだけは言っとくよ。あんたがああ娘っこに本気で惚れちまったってんなら喜んで応援するよ。こんなめでたいことはないからね。でもね、そうでなかったら……遊ぶつもりなら深く関わるのは止めておきな」

今度こそあの娘の心は壊れちまうからね。

そう言ったアリーの言葉にスキルは「肝に命じておくよ」と、それだけ返した。

アリーの意見は正しい。

レイピアの心はガラスのようだ。性格はレイピアというその名にふさわしく鋭いものがある……けれどそれは表面上のもの。

実際の彼女は触れると壊れてしまうガラスのようにもろい。あのつんけんとした態度はそうやって人から自分の心を遠ざけているように思える。……心を守っているのだ。

だからこそどう接してよいものか戸惑う。

ゲームの対象としてレイピアを見ているのなら話は簡単だった。極力関わらないようにして、ピンクダイヤを守っていれば良いだけなのだから。

なのに、ついレイピアの顔を見ると引き寄せられるように近づいてしまう。

わざと挑発したり、からかって怒らせたり。レイピアの反応1つ1つを見るのがいつの間にか楽しくなっていた。

自分は彼女に惹かれている。

そう思うようになったきっかけはあの事件。

ライのために涙を流したレイピアの姿がたまらなく美しいと思っただ。けれどそれはほんのきっかけにしか過ぎなくて、たぶん最初に一目その姿を見たときから惹かれていたのだろう。

いつもなら……少しでも好意を持った相手がいたら、すぐに口説

いてしまつというのに。しかし、どうしてもその一步が踏み出せずにいる。

俺らしくもない……。

前髪を掻きあげて自嘲する。

スキルには悪い癖がある。

口説いた女性と長く続かないのだ。いつも関係を持った上で、終わりにする。その繰り返し。

自分でも悪い癖だと思っっているけれどどうしようもないのだ。

彼女達に対してすぐに冷めてしまふ自分にいつだったかリグが言った言葉があった「きつとそれはあなたが彼女達に対して本気ではなかったということでしょうね」と。

レイピアに対しての気持ちも、同じなのかもしれない。

単に普通の娘よりも毛色が変わっているから側にいて楽しいだけで、一度でも関係を持ってしまうば、そこで終わってしまう気持ちなのかもしれない。

今度こそあの娘の心は壊れちまうからね。

アリーの言葉が頭の中で反芻する。

そう、だから迂闊に踏み込めない。

「若君

っ！」

凄まじい程の足音を立てて、サーカスのステージに駆け込んで来たのは顔を怒りで真っ赤にしたリグだった。その後からブレンも同

じように顔を真っ赤にして入ってくる。

何事かとスキルとアリーは顔を見合わせて首を傾げる。

「どうして私がブレンと仕事をしなくちゃならないんですかーっ！ブレンときたら手伝うどころか余計に仕事を増やすんですから！」「俺だってお前なんかと仕事なんかしたかねえや！　口を開けばお小言ばかり言いやがってー！」

ぎゃあぎゃああとリグとブレンは顔を向かい合わせて怒鳴りあった。スキルは先程アリーが言っていたブレンが餌をこぼしてリグに引っ掛けたという言葉思い出す。

リグを見ると服のところどころに野菜をすりつぶした餌がくっついていていた。

「朝から賑やかなだな」

笑いを噛み殺して声を掛けると、途端にリグがキツと睨んで振り返った。そして恨めしそうな顔をしながらスキルに詰め寄る。

「若君~~~~っ！　もしかしてこれは私に対しての新たな嫌がらせですか！？　そうでしょう、そうなんでしょう！？」

「嫌だな。俺は純粹にリグの負担を軽くしてあげようとブレンを手伝いに向かわせたというのに」

心外だな、とばかりに顔を曇らせる。彼を知らない者から見れば、心やさしい青年が純粹にリグの身を案じているように映るかもしれない。顔だけは穏やかなので余計にタチが悪い。

「そんな顔しても騙されませんよ！　……ああ、もうどうしてあなたは私を困らせてばかりなんですか！」

とうとう泣きそうな顔で詰め寄られたので、今度ばかりはスキルが折れることにした。

さも残念そうに顔を歪めて。

「仕方ないな、ブレンには違う仕事についてもらうとするか……。そうなるとりグには余裕ができるな……。じゃあ違う仕事を引き受けてもらおうしよう。もちろん受けてくれるな？リグ」

スキルに浮かんだ笑顔はまさしく新しい悪戯を思いついた子供の顔そのものであった。笑顔であるものの、スキルの物言いには有無を言わせぬ迫力がある。

嫌な予感がしたリグが何とか断ろうとするより前にスキルが差し出したのは1枚の紙。

紙には鮮やかな色彩を使ったイラストが描かれている。
その長方形の紙はサーカスのチケットだった。

「これは……？」

「サーカスの招待状さ。もちろんあのお嬢さんにね」

今度は何をたくらんでいるんだろう……？

サーカスのチケットを受けとったままリグはちらりとスキルの顔を伺う。生憎その顔からは何も読み取ることができなかった。

第8章 戸惑い3

「レイピアー！ さっきブレンと話してたって聞いたけど……あのバカ、またあなたに変なこと言ったんじゃないでしょうね？」

慌てた様子でレイピアのテントに駆け込んできたシアは開口一番、そう言った。

いつも何かしら出来事があるとあつという間に団員達の間の話が広まってしまうのである。噂話や事件の話が好きな団員が多いのだろ。今度はどこからそんな話を聞きつけてきたのかしら、と疑問に思いながらもレイピアは首を横に振る。

「ううん、そんなんじゃないわ」

「そう？ それならよかった。ブレンって単細胞ですぐにカーッとなるし、どうしようもないバカだけどあれもスキルを思っでの行動だったのよ、許してやってね」

まるでシアは自分のことのようにレイピアに対してすまなそうな表情をする。

「あのバカってばいつも行動に考えなしだし、結局自分の足を自分で踏んで自爆するタイプなのよね」

「……ねえ、シアってブレンが好きなの？」

しきりにブレンをけなししているシアだったが、その口調に含まれている微妙な雰囲気をかぎとったレイピアは確信を持ってつぶやいた。途端にシアは顔を真っ赤にして慌てふためく。

「なな、なに言ってるのよ！ そんなわけないじゃない！ あいつはただの幼なじみなんだから」

「あなた達って幼なじみだったの？」

「そうよ。小さい頃から一緒にいるからあいつは手のかかる弟みたいなもんなの。だから特別な感情なんてないんだってば！」

「ふうん、まあそういうことにしておくわ」

むきになって否定するシアの様子がおもしろくてたまらないという風にレイピアは唇を笑いの形に歪めて肩をすくめる。そのレイピアの含み笑いにシアは反対におもしろくなさそうにむー、と唸る。

「レイピアって……どうして自分のことには鈍いのに人のことになると鋭いのかしら」

「何か言った？ シア」

「なんでもない……」

「あ、あのお取り込み中すいませんが……」

ためらいがちにテントの外から声がかかる。恐らくレイピアとシアが話し込んでいたからテントの中に入るタイミングを決めかねていたのだろう、リグは遠慮がちにテントの中に入ってきた。

「どうしたの？ リグ」

「これを受け取ってください」

そう言ったリグから手渡されたのは一枚のチケットだった。

「何なの？ これ……」

レイピアはそれを片手に持ってひらひらと振る。

「サーカスの招待状ですよ、若君からあなたへ」

「どうして私が招待されるのかしら？ 何か罫でも仕掛けてあるのかしらね」

チケットを口元に押し当てて考え込む仕草をするレイピアにリグはさあ、と苦笑いして曖昧に答える。リグ自身スキルがレイピアを招待した理由をわかっていないのだろう。

「前にも言ったと思うけど、私はサーカスなんて見る気はないわよ」

それは本心だ。

その思いは前とは違う理由からだけど。

かつて持っていた盗賊に対して軽蔑しきっていた気持ちは自分でも驚くほどに無くなっていた。

彼らは気さくで、親切で、楽しい。それを好ましく思っている自分がいる。だからこそこれ以上、踏み込んではいけないと思った。

ゲームが終わる日のために。

彼らのことを深く知りすぎてはいけないと思った。

離れられなくなってしまふから。

レイピアは頑ななまでにサーカスを見ることを拒んだ。途方に暮れて困り果てたリグに助け船を出したのはシアだった。

シアはレイピアの手を握って懇願する。

「私からもお願いよ！ サーカスを見てちょうだい。レイピアに私のアクロバットを見て欲しいのよ」

「お願いします、レイピアさん。きつと若君はあなたにサーカスの楽しさを知ってもらいたいのかもしれません！」

ここに来てからというものの何かと親切にしてくれたリグ、そして友達のシア。2人に懇願されてはさすがのレイピアも断り続けることができなかった。

もともと押しに弱い性格なのである。

「わかったわよ、でも……つまらなかったらすぐに出てくからね！」

サーカスの開演時間までまだ時間がある。

シアもリグも開演前の準備のために出て行ってしまった。テントに1人になったレイピアはチケットを握りしめたままベッドに横になった。

相変わらず右手はまだ痛む。

あの事件から全てのものが少しずつ変わってしまったような気がする。

団員達のレイピアに対する態度、レイピアの団員達に対する態度、そして……

スキルとの関係。

あの事件の後も相変わらず皮肉ばかり言い合って、ダイヤをめぐる攻防戦をくり返している。右手を怪我しているにも関わらず一切手加減をしないスキル。だから初めは考えすぎかもしれないと思った。

けれど……何かが違うのだ。

たとえば食事をしているとき。

ふと背中に誰かの視線を感じる。振り返ってみると必ずといって

いいくらいにスキルがいる。目が合ってもスキルは逸らせるどころかいつまでも、いつまでもじっと見つめてくるのだ。だからレイピアの方がギクシャクとして先に逸らしてしまう。

たとえば包帯を巻き直しているとき、傷に良く効くと言って薬草を持ってきたスキル。不器用な仕草で包帯を解くレイピアを見かねたスキルが代わりに包帯を解いて傷に薬草を塗りこんだ。ところが処置が終わっても一向にレイピアの手を取ったまま放そうとしない痛々しそうな顔をして傷口を見つめる彼に対して戸惑った声を出す。とそこで我に返ったように顔を上げ、その数秒後にはいつものものからかうように口元に笑みを浮かべた表情に戻っている。

何かが変だ……。何かが少しずつ変わっている。

でも考えるのはよそう。

鈍るから。

迷いが生じるから。何も考えてはいけない。

考えて良いのはピンクダイヤモンドを取り返すこと、ただそれだけだ。

第9章 楽しいサーカス1

「さあ、楽しいサーカスが始まるよ!」

レイピアが向かった先、赤と白で縁取った券売所の前では奇妙な格好をした男が身振り手振りをまじえて、今から始まるサーカス・ショーを面白おかしく紹介していた。

その男の服装は水玉模様のだぶだぶズボンに赤と白のストライプのシャツという何とも派手な服装をしている。奇妙なのは服装だけではなくその顔。

黄色の毛糸で作られた髪の毛をカツラのように被り、顔は真っ白で真っ赤に塗りたくられた唇は頬の辺りまで伸びている。そしてまん丸の赤鼻。

その男は団員の誰かが変装しているものなのだろう、しかし声も顔も変わっているため誰なのかはわからない。レイピアが奇妙なものを見るような目で男を見ていると、男も彼女に気がつきその奇妙で、もともとから笑っているようなその顔をさらに笑みの形に歪める。

「おや、お嬢さん。そんなに目をまんまるくしちゃって。私がそんなに奇妙ですかい? 私はピエロって言うんですけど……ああ、ご存知ない。それじゃあ親愛の印にこの風船をどうぞ」

そのピエロはやけに動作を大げさにして片手に持っていた風船の束からその1つをレイピアに差し出した。

「え、あ……ありがとう」

戸惑いながら赤色の風船を受けとる。風船など手にしたのは生ま

れて初めてだった。幼い少女のようにレイピアの心臓はドキドキと高鳴る。

いいな〜と後ろから声上がる。サーカスを見に来た子供達がすぐ側でレイピアの持つ風船を羨ましそうに見上げていた。ピエロはそんな子供達に向かって手招きをする。

「ほらほら焦らないでこっちおいで。風船はまだまだたくさんあるよ」

その言葉に誘われるように子供達は一気にピエロを囲んだ。それを視界の隅に入れつつ、レイピアはテントの中へと足を運んだ。

テントの中はすでに熱気が立ち込めていた。座席の部分はよく見えるようにとライトで照らし出されて、そこだけがやけにハッキリとテントの中に浮かび上がっている。

チケットに書かれた席番号を探して歩き回っていると急に1番前の座席からさつと手が上がった。リグである。

「レイピアさん、こっちですよ」

手招きしてレイピアを呼び寄せるリグの隣には足を組んだブレンも腰をかけていて、何で俺がこんな所に来なくちゃなんねえんだ？とその表情は語っている。

「どうしてあなた達がここにいるの？」

「1人で見てもつまらないだろうから……って」

「スキルが言つたの？」

「ええ。私は仕事が終わって暇ですし、ブレンは謹慎中ですからね」

うつせーよ、と仏頂面でブレンが言う。

確かに周りを見ると親子や恋人同士ばかりで、1人で見にきている者などいなかったからそのさりげない気遣いをありがたく思った。風船を椅子にくくり付けてから腰をおろす。椅子はそれほど固くもなく、ほどよく綿を詰めた布が敷かれてあったので座りやすかった。

「もうそろそろ始まりますよ」

観客席を煌々と照らし出していたライトが徐々に消え、ステージの中央だけに光が集められるとそれまで賑やかだった観客席は一斉に静まりかえった。

それが始まりの合図。

「ようこそ我がサーカス団へ！」

朗々とした声がテント内に響き渡る。ステージの中央にはいつの間にか現れた黒い燕尾服とシルクハットを被った壮年の男が両手を掲げて観客達に感謝の言葉を述べた。

その壮年の男はサーカス団の団長、つまりスキルの父親である。レイピアは2度ぐらい会ったことがあるが、その時の団長のイメージというと豪快で荒々しい感じで本当にスキルの父親だろうか？と思わせるような人だったが、今ステージで観客に声をかけている団長の振る舞いはどこことなく貴族的で紳士的に見える。

それは団長だけに限ったことではなくて、団長の側に控える団員達も皆別人のように顔つきが変わって見える。やがて挨拶を終えた団長が服をひるがえしてその場から立ち去ると、軽快な音楽が鳴り始めてステージ左右の照明が舞台を照らしてキラキラと輝き出した。すでにこの時点でレイピアの心はサーカスという名の魔法に捕まってしまった。うつとりと頬を上気させて調教師の指示に従って器

用に足を動かして玉乗りをするクマやくるくと踊るようにとんぼ返りする曲芸師を見つめた。

演目の組み方もまた見事なもので、空中ブランコのようにスリリングで見えていて冷や冷やしたかと思えば、すぐにピエロの芸によって笑いが起きる。スリリングなものとはつと一息つく演目が交互に組まれているのだ。

観客まで引つ張り込んでのピエロの道化は本当におもしろくて、笑いすぎて思わず涙をこぼしそうになった。

「すごいよね……私、こんなに楽しいものを見たのは生まれて初めてよ！」

興奮したまま、両手を握り締めて言うレイピアにリグは微笑みの形に目を細め、ブレンは腕を組んだままの姿勢で得意げな顔をした。

「あたりまえじゃねえか！　なんたって俺達のサーカスだぜ」

「ブレンは謹慎中ですけどねえ」

「だー、うつせえぞリグ！」

お互いの口をひっぱりあって喧嘩ごしになるブレンとリグにレイピアはくすくすと笑いをこぼした。

「次の演目が始まるわ。何かしら？　……あ」

レイピアはステージを見つめたまま、固まる。その視線の先にはふわりと妖精のように軽やかにステージに立つシャンナリーの姿があった。彼女はマスカットの瞳と同じ色のステージ衣装を着ている。その衣装は肩とお腹の部分が露出していて体のラインがくっきり出るタイプのものだったが、シャンナリーが着ると愛らしい顔立ちゆえに少しも下品さが感じられない。その愛らしい顔でにこやかに観

客席に手を振るものだから男性客はおるか女性客の視線もシャンナリーに釘付けになった。

「続きましては我がサーカス団でも指折りの美女、シャンナリーによるナイフ投げでございます！」

やけに大げさな身振り手振りで舞台進行をするのは道化師の姿をした団員だった。

観客達がわきあがる中、レイピアだけは釈然としない思いを抱える。

なぜか観客の方に向けられているはずのシャンナリーの視線が、レイピアただ1人に向けられているように思えて仕方がなかったからだ。

「この演目はお客さんの中から1人に手伝ってもらいます。そうです……それじゃあその女性に手伝ってもらいましょう」

シャンナリーは愛らしい声で言って、真っ直ぐレイピアの方を指差した。

一斉に観客の目がレイピアに注がれる。

「わ、私……！？　なんでっ！」

ステージに上げられるなんて一言も聞いていない。

慌てふためいてリグに助けを求めるが、彼も今初めて知ったという風に首を左右に振ってみせた。

「私もこんな話は聞いてません……。でも、シャンナリーのナイフ投げの腕前は一流ですから怪我する心配なんてありませんよ」

声をひそめて、レイピアに耳打ちする。

「違うの、そうじゃなくって……」

私が心配してるのは　　。

そう言いかけて口を引き結んだ。

レイピアにはシャンナリーが何か企んでいて、仕掛けてくるのではないかと思えてならないが、しかしリグもほとんどの団員もシャンナリーの本性に気付いていない。きっと何を言っても信じてはもらえないだろう。

「大丈夫ですよ。さあ、ステージの方へどうぞ」

にこやかに笑うシャンナリーの姿はまさに小悪魔そのものに思えた。

ため息をつくと覚悟を決めたレイピアはステージの上へと足を踏み入れた。

「あいつ……何する気だ？」

ただ1人、シャンナリーの本性を知るブレンだけは眉をひそめてつぶやいた。

第9章 楽しいサーカス2

ステージに上がったレイピアはシャンナリーの指示されるままに演出のために用意された木の的の所に導かれた。その的はちょうど人間の背丈ぐらいの高さで、4カ所から金属の鎖が延びている。シャンナリーはその鎖でレイピアの両手と両足をゆっくりとした動作で繋ぎ始めた。

「一体どういっつもりなのよ？」

観客には聞こえないように声をひそめてレイピアは抗議の声をあげる。するとシャンナリーは観客からは見えないように真っ赤なルーージュで塗られた唇を笑みの形に歪めた。

「あら、そんなに警戒しなくってもいいじゃない。あたしは純粹にあなたにサーカスを楽しんでもらおうと思ってこの場に招待したのに」

「嘘ね。その目は私が憎くてたまらないって言ってるわ」

レイピアが鋭く指摘すると、ふいにシャンナリーの顔つきが変わる。マスカット色の瞳に炎を灯してレイピアを睨みつけた。

「……それなら話が早いわ。あたしが何を言いたいかわかる？」

「さあ、皆目見当もつかないわ」

「ふざけないで！ スキルのことよ。自業自得で怪我したくせにスキルに看病されるなんて……っ！」

「ああ、それで怒ってるわけ？ そんなの逆恨みもいいところよ。私はスキルに看病してもらいたいなんて頼んだ覚えはないわ」

「なんですって!？」

レイピアの言葉にシャンナリーは怒りに顔を染める。今にも飛びかかって来そうな雰囲気だが、さすがにこの大勢の観客のいる前では何もしてこようとはしない。彼女にもプロとしての意識があるのだ。

レイピアはそんなシャンナリーに向かって冷たく言い放つ。

「いい加減迷惑なのよ。前にも言ったけど……私は男なんて嫌い、スキルだって一緒よ。だから勝手に勘違いして突っかかって来ないで!」

「勘違い? 本当にそっさい切れるの?」

ドクン

シャンナリーの問いかけにレイピアの心臓が1回だけ大きく脈をうった。

「……いい切れるわ」

「本当に? スキルが一晩側に居たのよ。何も感じなかったの? 何とも思わなかったの?」

探るような視線を向けられる。心の中まで見透かされるような、そんな視線だ。

嫌だ、ひどく不快だ……。

喉がカラカラになる。

「……っ思わない! 思うわけがない」

一瞬我を忘れて大声で怒鳴りそうになってしまい、かぶりを振って声をひそめる。

シャンナリーはそんなレイピアの様子から、あまり信じた様子ではなかった。疑わしげに眉をひそめて視線を向けたままにいる。

「ふうん、本当かしらね？ でも、どっちにしてもあなたを放っておくわけにはいかないわ。あなたは自分では気がついてないのかもしれないけど毒を持ってるんだもの」

「毒……？」

シャンナリーの言葉の意味がわからず困惑する。

毒とは人を死に至らしめたり、麻痺させたりするあの……？
そんなものが私の中にあるというの？
そこまで考えて、レイピアはますます困惑する。

「……その毒はいつかスキルに悪い影響を及ぼすかもしれない。だから今のうちに摘み取っておかなくっちゃ！ ねえ、あたしがあなたに対して持っている感情って何かわかる？」

無邪気な笑顔を浮かべて問い掛けてくる。

「憎いんでしょう？」
「ちよつと違うかなあ」

かわいらしく言った後、シャンナリーは氷のような薄笑いを浮かべて言葉を続ける。

「『殺したいほど憎い』かな。さあ、ナイフ投げの時間ね」

シャンナリーは身をひるがえすとレイピアから6メートル程離れた場所に移動して、アシスト役の団員から手渡されたナイフを4本

手に持った。

そのナイフはライトに照らされて鈍い輝きを放った。
思わず息をのむ。

「果たして鎖に繋がれた女性は無事に席に帰ることができるのか！
？ それはシャンナリーの右腕一本にかかっています！」

舞台進行の道化師が熱をこめて解説する。

「ちよつと……っ！」

抗議の声は観客の拍手によってあっさりとかき消されてしまい、
両手と両足を縛った鎖がピンと張ってレイピアの行動を遮った。

もし仮に言葉の通り本気でシャンナリーがレイピアめがけてナイフを投げてきたら？

手元が狂ったということであっさり処理されてしまうのだろうか
……？

そんな嫌な考えが頭をよぎる。

シャンナリーが真っ直ぐレイピアの正面に立ってナイフを構えた。

「冗談でしょ……？」

かすれた声で絶望的にうめく。 そんな彼女の思いもおかまいなしに、無情にもシャンナリーの手から離れたナイフは真っ直ぐレイピア目掛けて飛んできた。

ヒュッ

空気を切り裂く音が響く。

「きゃあっ！」

耐え切れず目をつぶって悲鳴を上げたその一瞬後には、レイピアの耳元をかすめてナイフが後ろの木の的へと突き刺さった。ナイフが的に刺さった衝撃が木の的ごしにビィインと伝わってきてレイピアはさつと顔を青ざめさせた。

気がつくとも4本のナイフは全て投げ終わっていて、いずれもレイピアに突き刺さることはなく後ろの的に刺さっていて、観客の拍手が沸き起こっていた。

どつと鼻の頭に玉のような汗が吹き出す。

いつの間にか近づいてきたシャンナリーの手によって両手両足を繋いでいた鎖が外されるとレイピアは崩れ落ちるようにしてその場にへたり込んでしまった。

震える膝を抱える彼女にシャンナリーは手を差し伸べる。

「驚かせてしまったみたいね、ごめんなさい」

観客に聞こえるように声を少し大きめに言う。その言葉はレイピアに向けられたものでないことは明白だった。にっこりと口元に笑みを浮かべるシャンナリーの目は少しも笑っていないからだ。

実行はしなかったけれどシャンナリーは本気で自分を殺したいくらい憎んでいる、本能的にそのことを感じ取って再び背筋に冷たいものが伝う。

「さあ、この勇気ある女性にもう一度温かい拍手を！」

よろよろとおぼつかない足取りで席に戻るレイピアに大きな拍手が送られる。

それがやけに耳についた。

「さあ、いよいよ次で最後の演目になります！ 我がサーカス団の星、スキルとシアによる空中アクロバットでございませう！」

道化師が言った直後に大歓声が上がった。その半分以上は若い女性によるものでいずれも熱を帯びたものである。

思わずその歓声に圧倒されて耳を塞ぐ。

「な、なに？ この黄色い歓声は」

「若君は特に女性に人気がありますからねえ。でもまさかここまですごいとは思いませんでしたか」

こんなにスキルに人気があったなんて。
レイピアにはそのことが信じられなかった。しかしその考えが一変するのはこの直後のことだった。

地上10メートルの地点にある足場から姿を表したのはスキルとシアだった。

シアはステージに映えるように濃い目の化粧をどこしており、普段の化粧つけのない姿からは想像もつかないくらい別人になっている。

「シア、きれい……」

思わずそうつぶやく。

そしてスキルは全ての運命が変わってしまったあのパーティーの夜のときのように額にかかる前髪をワックスで後ろに流している。

動きやすさを目的とした黒を基調とした服を纏っているが、金糸で刺繍が施されていて派手すぎず、地味すぎないデザインになっている。

登場したスキルとシアはお互い固く手を繋いだまま、ゆっくりとした足取りで天井に張られたロープの所まで歩き出した。

スキルはシアを片手に抱え上げるとロープにぶらさがった。

次の瞬間には何の躊躇もなく手を放し、シアが空中に投げ出される。

レイピアはあつ、と息を吞むがシアは難なく彼の足につかまることで落下することを防いだ。そして2人はお互いにポーズを取ってしばらくの間空中で静止する。それが終わるとスキルが足を折り曲げてシアをすくい上げ、片手に抱きしめる。

もちろん2人は命綱などつけていないし、下にはネットも張られていない。しかし2人は「信頼」という名前のロープで結ばれているような気がした。

次々と技を披露していくスキル達を見ながら、レイピアは彼が前に言った言葉を思い出していた。

私にはまるでこの仮面をつけたようにステージ用の顔と普段用の顔が存在するのです。

その言葉はレイピアをからかうために言ったものだと思っていたが、どうやらそうではないことがわかった。

今、ステージにいるスキルはまるで別人。普段の皮肉げに歪めた口元は跡形もなく、その姿は神秘的にさえ見え、女性が黄色い声を上げるのも何となく理解できた。

そして最初はシアの方ばかりに向けていた視線も徐々にスキルの姿を追うようになってしまった。動作の1つ1つを目に焼き付けるようにして食い入るように見つめた。

芸が終わり、割れんばかりの拍手が起こっている間もレイピアはぼーっとしていた。

「おい、終わったぞ!？」

「……え？ ええ……」

ブレンとリグに声を掛けられ、そこでようやく夢から覚めたように我に返った。

第9章 楽しいサーカス3

サーカスの公演が終わった後レイピアはリグに連れられるまま舞台裏に足を運んでいた。

体から熱気がおさまらない。

まだサーカスが続いていればいいのに……。

いつまでも終わらずにいればいて欲しい。

どうして楽しい時間はあつというまに過ぎてしまうんだろう。

サーカスが終わってしまったことへの寂しさがレイピアの胸の中を駆け巡った。サーカスが終わった、たったそれだけのことなのになぜか胸が締め付けられるような苦しい思いに捕らわれる。

舞台裏には団員達が詰め寄せていて、汗を拭きながら今日のステージの成功を喜び合っていた。

「レイピアさん、俺達のサーカスどうだった？」

「ちゃんと見てくれたかい？」

レイピアの姿を見つけるなり団員達は次々に声をかける。とても素敵だったわ、と素直な感想を述べると特に若い男の団員達は大喜びをして飛び上がった。

シャンナリーの姿が視界の隅に映るが、あえて何も言わないでおくことにした。今彼女に文句を言ったところでレイピアの立場が悪くなることは容易に想像がついたし、わざわざ不快な思いまでして話し掛ける必要はないと思った。

それにシャンナリーの気持ちがわからなくもないのだ。嫉妬、それはレイピアも何度か抱いたことのある感情だった。かつてユーザが別の女性と話をしている、それだけで胸がひどくざわめいて不快になったことがあった。

同じ女としてその気持ちがわかるから一重に彼女だけが悪いとは言いい切れない。きっと自分もシャンナリーが誤解を抱くような言動をしているのだ。

シャンナリーに「一晩中側にいて何も思わなかったの？」そう言われたとき、一瞬言葉を言い淀んだ。そして彼女に答えた言葉は半分真実で半分嘘だった。

何も思わなかったわけではない。

スキルに看病をしてもらったあの日、確かにレイピアの心は乱れた。しかしあの時は単に熱のせいで心が弱くなっていただけだ。心が辛くて寂しくて助けを求め、怒ってテントから出て行ったスキルに戻って来て欲しいと望んでいた。

溺れた子供が誰かに助けを求めるように、弱くなったレイピアの心は誰かに助けを求めている。だからあの時スキルに向けた感情は恋とかそういう類のものではないし、そんなものになるはずもなかった。

自分はもう決めたのだから、2度と誰も好きにならないと。誰にも頼らないで生きていくと。

「レイピアー！ わざわざこっちまで来てくれたのね。ね、私達の空中アクロバットはどうだった？」

メイクを落としたばかりのシアが駆け寄ってきてレイピアに飛びついた。

「見ててハラハラしちゃったわ。……でもとっても素敵だった。綺麗

麗だったわ、シア」

「えへへ、嬉しいな。その言葉スキルにも言ってあげると喜ぶと思うよ。あ、スキルは外にいるからね」

聞いてもいないのにそんなことを言ってくるシアにレイピアは不快に顔を歪めた。

シアのことは気に入っているけれど、何かにつけてスキルの話を持ち出してくるところはあまり好きじゃなかった。いや、むしろ不愉快で仕方がない。

「別に……私はスキルにそんなこと言うために来たわけじゃないわ！」

「はいはい、レイピアはダイヤを取り返しに行くのよね」

シアはレイピアが少なからずスキルに対して好感を持っているのではないかと思っている。しかしそのことを指摘するとレイピアは余計意地を張って違うと言い張ってしまう。この数日で彼女の性格をおおよそ把握したシアはあえて言葉を続けるのをやめた。

「そうよ、その通りなんだから！」

念を押すよう言い放って不機嫌な表情のまま外へ向かったレイピアを見てシアはくすくすと笑いをこぼした。

「全く素直じゃないんだから」

すっかり辺りは薄暗くなつてしまいテント街には所々に明かりが灯りはじめた。

ほんの少し湿り気を帯びた風がレイピアの頬を撫でる。もうすぐホットリップに短い雨季がやってくることを告げる風だった。

今年もまた嫌な時期がくるわね。

風で乱れてしまった髪の毛を整えながらそんなことを考えた。しばらく歩き回っていると、井戸の所に腰掛けて髪の毛を洗い流しているスキルの姿を見つけた。おそらく髪の毛を固めたワックスを流しているのだろう。タオルを押し当てて頭をぬぐっているところで目が合う。

レイピアは言おうかどうしようか躊躇したが、サーカスを見た感想を素直に述べることにした。

「サーカスに招待してくれてありがとう。私、サーカスのことよくわからないけど心が弾んだわ。……楽しかったんだと思う」

スキルは水分をしつとりと含んで額に張り付いてしまった前髪を手で掻きあげながら、口元を綻ばせた。

「最高の誉め言葉だね、嬉しいよ」

「でも、どうして今になってサーカスに招待してくれたの？」

「うん？ 俺が君を招待するのに何か特別な理由があると思うかい」

どうしても彼が何か企んでいるようにしか思えなかった。だから遠まわしな言い方はやめて率直に尋ねることにした。

「……思っわ。何を企んでいるの？」

「はは、鋭いね。でもそれなら話が早い、実は君にサーカスの手伝いをしてもらおうと思ってね。実際サーカスがどんなものか見た方がやりやすいだろう？」

そう言うてにつこり極上の笑みを浮かべた。

今、この男は何と言ったのだろっ？

サーカスの手伝いをしてもらっ……？

「な、な、な……なんですって

ムゲッ！？」

声を張り上げたレイピアの口をすかさずスキルが片手で押さえ込んだ。

「そんなに大声を出すとみんながビックリする。もう少し声のボリュームを下げてくれた方が嬉しいな」

ふがふがと文句を言っているレイピアをそっちのけで言葉を続ける。

「ブレンが謹慎になったから人手が足りなくなっちゃってしまっただね。アシスト役でいいからステージに立って欲しいんだ」

「んむむむ っ！ ぷはっ、あのねえ！ だからって何

で私がステージに立たなくちゃならないのよ！？」

「君にとって悪い話ではないと思うんだけど？」

途端に暴れるのを止めて、興味を持ったように見上げてきたレイピアの瞳と目が合って、思わずふっと口元を緩める。

「ステージに上がってくれるなら舞台裏の出入りは自由に許可しよう」

それはつまり、ピンクダイヤモンド争奪の機会が増えるということだ。今まで部外者だったレイピアは舞台裏に上がることを禁止さ

れていた。当然スキルがステージに上がっている時間はダイヤを狙うことが出来なかった。

「それは……確かに悪い話じゃないわね。でも、私なんかがステージに立つても大丈夫なの？」

「その点はおう団長の許可を取ってるから大丈夫。言っただろう？ 人手が足りていないって」

ブレンが謹慎になったいきさつはレイピアにも大きく関わりのあることだった。ライの事件だ。そのことについて2人共お咎めなしになったが、ブレンは自ら処罰を受けることを望んだ。そのことを人づてに聞いて、彼1人が処罰を受けることに罪悪感を抱いていた。私1人が変わらぬ生活を続けていてもいいのかしら、と。

「わかった、ステージに出るわ」

少しでもライの罪が償えるのならサーカスの手伝いをしてもいいかもしれないと思った。

レイピアの衣装はソアラが決めてくれた。背中の部分と腕の部分、つまり傷跡が隠れるような衣装を。シャンナリーが着るような原色を使った華やかな衣装とは違い、アシスト役であるレイピアの衣装は機能性を重視したもので、黒一色のいたってシンプルなものだった。ほっと一安心した。ドレスやステージ衣装のようなひらひらとした動きにくい服装はどうも苦手なのだ。冒険者としての性なのかもしれない。もしあのひらひらした露出の高い服を着てステージに出ると言われたら、すぐに断っていただろう。

仕事内容は演出用の小道具をステージの中央に運ぶといったごく単純な作業で、怪我した右腕に全く負担がかからないものだったため、仕事内容を教えられた翌日にはさっそくステージに出るはめになった。

最初はガチガチになって緊張していたレイピアだったが2、3日経つうちにすっかり慣れてしまった。

合い間を見てはスキルとダイヤの攻防戦。例によってレイピアが負け通しだったのは言うまでもないけれど。

第9章 楽しいサーカス4

「さすがに疲れたわ……」

ぐったりと倒れこむようにステージに寝転んで、レイピアは誰に言うでもなく呟いた。

今日の最終公演が終わり片付けも終了したが、あまりに疲れてテントに戻る気力もなければ着替えもする気力もなかった。ステージに立つようになってから1週間。体には確実に疲労が溜まり始めていた。

「あー、いたいたレイピア！」

レイピアよりも動いていて疲労も濃いはずなのに、そんな様子は微塵も感じられないようなシアの明るい声が響いた。首だけをめくらせて見るとシアは両手にグラスとワインを持って上機嫌に歩いて来る。

「ふっふっふ、こっそり持って来ちゃった。さすがに疲れたでしょ、レイピア。今日はこれ飲んでぐっすり眠ろうよ」

「そんなの飲んで明日の公演に差し支えないの？」

「まあまあ、固いこと言わないの」

言うが早いかシアはさっそくグラスにワインをたっぷりと注ぐ。

「私、あまり飲めないんだけど……」

「まあまあ、ちょっとくらいいいじゃないですかー。はい、乾杯」

ひたすら上機嫌なシアは、渋っているレイピアのことなどおかないなしにグラスを合わせてから一気に飲み干す。その様子を唾然として見ていたレイピアだったが一口、二口とゆっくり飲み始めた。すぐに胃のあたりがカーツと熱くなって、しだいに体全体に広がっていく。

疲労が溜まっているところに酒を流し込んだのが悪いのか、顔が真っ赤になって頭がふらふらし始めた。

「あらあ、レイピアって本当に飲めないのね。顔が赤いわよ。かわい〜」

そんなレイピアの様子を見て楽しそうにケラケラ笑うシアは、すでに3杯目のグラスに手を伸ばしていた。

「だ、だから言ったじゃない……っ。飲めないって」

「あはは。これ以上飲んで二日酔いになったら困るからレイピアはもう止めといた方がいいかもね」

「シア……まだ飲むの？」

口元を押さえて半眼になってうめくレイピアをよそに彼女は4杯目のグラスに手を伸ばした。まだまだシアにとっては飲んだうちに入らないようだ。

酒豪、シア。

「げ、酒くせえ!？」

いち早くステージの異変に気がついたのは忘れ物を取りにきたブレンだった。見るとレイピアは顔を真っ赤にしているし、シアはぐ

いぐいとワインを飲んでいた。何杯目かわからないがかなりの酒豪であるシアのことだ、恐らく4〜5杯は軽く飲んでいるのではないだろうか。足元には空いたワインの瓶が1本転がっている。片手に持った2本目の瓶も空になりかけている。

「あら、ブレンじゃない。あんたも飲むう？」

「飲むう？　じゃねえよ、何やってんだよ……」　　「たたく。おい、お前明日の公演大丈夫なんだろうな？」

呆れかえった顔でレイピアの方を見る。

「だ、大丈夫……よっ！」

頭をふらふらせながらもレイピアは頷いてみせが、すぐに気持ち悪くなったらしく俯いてしまった。

「レイピアもがんばってるんだし、ちょっとぐらいいいじゃない、ね？」

「まー……な。確かにがんばってるかも……な」

ぶすつと仏頂面のまま照れくさそうに頭を掻いてみせる。

「まあ、今のところこいつとシャンナリーの間でトラブルがないのが幸いだな。そのせいでサーカス団内でごたつきがあったら困るしな」

「シャンナリーとトラブル？」

「ん、ああ。お前は知らないんだっけ？　シャンナリーがナイフ投げのときにこいつをステージに上げたのを」

「そんな話知らないわ！」

シアは初耳だとばかりに首を横に振る。シャンナリーがナイフ投げをしている間に舞台衣装に着替えたり化粧をしていたシアが知らないのも無理はない。

「てつきり俺はシャンナリーが何かすると思ったんだけどな……」

小道具の入った箱に近づいたブレンはおもむろにナイフ投げに使われたナイフのうちの1本を取り出した。くるとそのナイフを手の中で弄ぶ。

ぼーっと虚ろな目をしたレイピアがブレンの動きに反応するように顔を上げた。

視界に飛び込んできたのはナイフ。

そしてそれを手にしているブレンの姿
褐色の肌。

「あ……」

記憶が、よみがえる。

ちょうどもうじきやってくる雨季の季節。雨が滝のように降り注ぐ、冷たい嵐の日のことだった。

短剣を手にした褐色の肌の男が、逃げるレイピアをどこまでも追いかけてきた。

「アア……っ」

背中に突きたてられた短剣。

嘘だ、こんなことは現実ではない、そう思った。

しかし生々しいくらいに背中には激痛が走っていて、雨と共に地面に流れ込んだ真っ赤な血が現実であることを告げていた。

倒れたまま、見上げた先には「悪いな、レイピア」そう言って氷

のような薄笑いを浮かべている男の顔があった。
レイピアが愛していた男の顔が。

「ん？ なんだよ」

青ざめた顔で体を振るわせたレイピアを見たブレンが、不思議そうな顔をして一歩近づく。

それが、引き金。

いきなりレイピアは首を左右に振って頭を抱えた。

「嫌あああ

っ！！」

絶叫に近い悲鳴を上げて、半ば這いずるような形でブレンの側から逃げ出した。

「おい、どうしたんだよ！？」

ブレンはわけがわからずに逃げ出したレイピアの後を追いかけて、悲鳴を聞いて何事かとステージにやってきたスキルと合流する。

「どうしたんだ！？」

「いや、俺にもわかんねえって」

「嫌だ……来ないで……来ないでえ……………」

うわごとのようにつぶやきながらなおも逃げようとするレイピア。やがてステージの端にたどりつくと、ガタガタと震えてその場にうずくまった。視線だけはブレンの方に向けていて、その瞳には恐怖の色が濃く浮かんでいる。

「来ないで、来ないでユーザア…………っ！！」

それは拒絶というよりも懇願に近い悲鳴だった。
額にはうっすらと汗を浮かべて目を見開き、唇を震わせた。

「ユーザ……？」

スキルはレイピアの口からこぼれ落ちたその名に眉をひそめた。
一体どうしたんだ？そう尋ねようにも、今にも倒れてしまいそうな
ぐらゐに顔を青くして震えるレイピアには何を言っても言葉が届か
ないように思えた。それにこれ以上追い詰めるわけにもいかない。

「ブレン、お前を恐がってるみたいだ」

「……みたいだな」

困惑した表情のままブレンは肩をすくめると、レイピアの視界か
ら外れるようにして後ろに下がった。それとほぼ同時にスキルが体
を震わせているレイピアの方に手を伸ばす。

レイピアは伸ばされた手をすり抜け、助けを求めるように彼の体
にすりついた。一瞬スキルは体を強張らせるが、すんなりとそれ
を受け入れた。背中にあわした腕ごしにレイピアの震えが伝わって
くる。その震えを止めようとして腕に力を込めてきつく抱きしめた。
レイピアは拒まなかった。普段の彼女ならば放せと言わんばかり
に拒絶するはずなのに。そんな心の余裕もないぐらゐに取り乱して
いる。

「……助けて……」

スキルの胸に顔をうずめたままつぶやいた。
よく耳を凝らしていないと聞こえないような消え入りそうな声だ
ったけれど、確かにレイピアはそう言った。

「一体何があっただんですか!？」

騒ぎを聞きつけたリグはすぐにステージに駆けつけた。

「それが私達にもよくわからないのよ。突然レイピアが取り乱してしまつて……あ、スキル」

シアの視線はスキルに向けられた。彼は取り乱したレイピアをなんとか落ち着かせてテントへ運んで戻ってきたところだ。

「レイピアの様子はどうなの？」

「今は落ち着いてベッドで横になってるところだ」

「本当にレイピアさん……どうしてしまっただんでしょう。ブレン、あなたが何かしたんじゃないでしょうね？」

ジト目に向けられたブレンは「んなわけないだろう!？」と慌てて首を横に振った。

「ブレンを恐がっていたというより、あれは……ブレンを違う誰かと重ね合わせているみたいだった」

レイピアの怯えた表情、大きく見開かれた瞳。
そして。

「ユーザって叫んだ」

「そつえばそんなこと叫んだな」

スキルの言葉に頷いてから、ふと何かを思い出したようにブレンは顎に手を当てて考え込む。ユーザ、ユーザと口の中で何回も反芻する。

「ブレン、心当たりがあるのか？」

「んー……。俺と同じ国の出身のやつにそんな名前の奴がいたなあ、と思って。まさか同一人物だとは思えないけどな」

「有名なのか？」

「有名っていえば有名かもしれない。なんせ悪党の親玉みたいな奴だったから。……まあ俺達も人のことは言えないけどな、同じ穴のムジナって奴だ」

ユーザ。

レイピアが熱を出した夜に何度もつぶやいていた名前だ。

「どうした？ スキル」

スキルが苦いものを含んだような表情をしていたから、不思議に思ったブレンが眉をひそめる。肩をすくめてスキルはその場を動き出した。おそらく再びレイピアのテントに向かうためだ。

「やっぱり、本人にそれを尋ねるのは無粋なのかな？」

その際に独り言のようにポツリとスキルは洩らした。

第9章 楽しいサーカス5

ベッドの中でレイピアは重い頭を抱えてうなだれていた。お酒のせいで気分が悪いことが原因の1つにある。そしてもう1つの原因それは。

ブレンとユーザが重なって見えたこと。
ぎゅっとレイピアは唇を噛み締めた。

あの日から2年経った。

当時はささいなことがきっかけで先程のように取り乱すことが多かった。例えば短剣やナイフのような刃物を見たり、褐色の肌を見たり、大雨の日だったりと全てユーザに関わることが原因で。しかし最近ではそんなことも無くなり安心していたというのに……。

いつまでユーザの影がまとわりついてくるのか。

いつになったらこの心が解放されるのか。

心が、重い。

「気分は、どう？」

スキルの声に慌ててレイピアは枕に埋めていた顔を持ち上げた。テントに入ってきたスキルとそこで目が合う。思わず先程彼にすりついてしまったことを思い出し、顔を赤らめて視線を逸らした。どうかしてる、取り乱していたとはいえ1番弱みを見せたくない相手に助けを求めてしまうなんて……。

「もう大丈夫……」

弱々しく返事をする。

そんなレイピアの心中を知ってか知らずか、スキルは特に気にする様子もなく、ごく当たり前のようにベッドの前に椅子を置いて腰掛けた。

テントの中にはそれきり沈黙が訪れる。

気まずさを感じて彼の方に視線を向けるが、何やら考え込んでいる様子で声を掛けるのをためらってしまうような雰囲気である。

しばらくするとスキルの方から口を開いた。

ポツリと独り言のようにつぶやく。

「ユーザ……」

レイピアは思いもかけないその言葉に目を見開く。

今1番聞きたくなかったものだった。レイピアが耳を塞ぐよりも先にスキルが言葉を続ける。

「ユーザって……誰？」

真っ直ぐレイピアの目を見据えたまま問い掛けてきたのである。

「だ、誰だって……いいじゃない。どうしてそんなこと聞くのよ」
「……知りたいから」

レイピアは困惑する。

今までスキルがレイピア自身のことについて問い掛けてきたことなど1度もなかったはずだ。

それは必要の無いことだったから。

レイピアとスキルの関係は、あくまでも盗賊と宝石を盗まれた領主の娘。その関係ですらゲームの終了とともに終わってしまうもの

でしかないのだから。

「あなた、こないだから変よ……っ。何か、変。態度が違うんだもの……！」

レイピアは何となく感じていたが、なるべく考えないようにしていた疑問を口にした。

真っ直ぐ見据えてくるスキルの瞳はいつもと違う風に見える。彼が最近になってからときどきレイピアに向けてくる視線と同じ種類のもの。

熱を帯びた、視線。

だからいつものように睨み返して受け流すことはできなくて、レイピアは視線を下に向けることによってなんとか逸らした。

「ふうん、気付いてたんだ……？　じゃあ俺がユーザについて尋ねる理由もわかるんじゃない？」

「わ、わからないわよ」

首を振るレイピアにスキルは頬杖をついたまま盛大にため息をついた。鈍すぎる、そう言いたげに。

それからふ、と真剣な顔つきになった。

「君が好きだから、って言ったら？」

「な、何を……っ！」

レイピアは弾かれたようにスキルの方に顔を向けて怒りをあらわにした。

人が落ち込んでいるというのに、こんな時によくそんなことが言えるものだ！

顔が真っ赤なのは怒りのせいでもあるし、彼の言葉の内容のせい

でもあるように思える。

「そうやってからかって！ 冗談にしても悪趣味すぎるわ……っ！」

「冗談？ まさか。俺はいつだって本気なんだけど」

「な、なに言ってるのよ！」

スキルの口調はいつものように軽くて、どこから本気でどこから冗談なのか全く区別がつかない。きっと全部「冗談なんだ、そう思う」としても心臓だけは意志に反してバクバクと早鐘をうつ。

「もう2回もキスした仲なのに」

「バ……っ！ あ、あれはキスなんて呼ばないわ」

2回のキスは両方ともレイピアに薬を飲ませるためだけの行為。無理矢理でレイピアの気持ちなどおかまいなしの、愛情の欠片もないもの。

「それじゃあ今度はちゃんとしたキスをしようか。それとも思いつきり濃厚なのにする？」

からかうような響きを言葉に含ませてスキルは身を乗り出した。うろたえるレイピアをよそに、慣れた手つきで耳の辺りの髪の毛に指を差し入れる。

「ちょ……っ、何考えてるのよ!？」

「キスのこと」

「そういう意味じゃない !」

レイピアは腹が立った。

こんなにも自分は戸惑っているというのに、当のスキルは涼しい

顔しているのだから。

いや、今はそんなことをいつている場合ではない。

一刻も早く逃げなくては。

そう思っているのに、体が動かない。

掴まれた右手がやけに痛くて抵抗すらできない。

だんだんとスキルの顔が近づいてくる。

「や、やめ……っ！ やめてっ！」

ぎゅっと目を閉じて、思いっきり顔を背けて体を震わせた。

しかし、いつまで経っても口づけが来る気配がなくて、恐る恐る片目を開けてみると飛び込んだきたのは体を2つに折り曲げて笑いを堪えるスキルの姿だった。やがて堪えきれなくなったように思いっきり吹きだした。

「く、くく。はっ、はは！ 傑作」

状況が飲み込めず呆然としていたレイピアだったが、徐々に理解するにつれて体を小刻みに震わせ、みるみるうちに顔を赤くしていた。

からかわれた
！

「こ、この……」

「この……っ！……！」

「大馬鹿
！！！！！！」

パシーン！

テント内には頬を張る音だけがやけに大きく響き渡った。

「イタタ……。半分は本気だったんだけどなあ」

「もうその手には乗らないわ！」

苦笑いしながら頬を押さえるスキルと、険悪な顔でそれを睨みつけるレイピア。

怒りが収まらずに握りしめた拳がぶるぶると震えた。

怒ったせいで先程まで沈んでいた気持ちほとんど吹き飛んでしまった。沈んでいたことが馬鹿みたいに思えてくる。スキルがそれを狙っていたのかどうかは定かではないけれど、どちらにしても腹が立つのは事実だった。

先程のは、落ち込んだ者を相手にやる行為ではない。悪趣味にもほどがある。

「最低、変態、ドスケベ人間！ 出てって。私はもう寝るんだから！」

「ひどい言われようだね。傷つくじゃないか」

ちつとも傷ついた様子などなくにつこりと極上の笑みを浮かべるスキル。

「あーのーねえ、私は今気分悪いの、早く寝たいの、あなたにかまってる余裕なんてないの、わかる？」

「それじゃあ子守唄でも歌ってさしあげましょうか？ お嬢さん」

わざとらしくいくらいに恭しく胸に手をおいて歌う素振りをみせる。

「余計に眠れないわよ!!!」

これ以上何を言ってもレイピアの方が腹が立つだけのような気がする。□では絶対に勝てないのだ、この男には。

「あーもう、勝手にすれば!」

スキルを追い出すことを諦めたレイピアは、布団を被ってさつさと彼の方から背を向けた。その際に思いっきりドスをきかせた声で釘をさした。

「言っとくけど、変なことしたら殺すからね!」

「はいはい」

本当に何を考えてるのか。

いつものことだけど、今日は特に意図が読めない。

何のためにここに留まるのだろうか。様子を見にきただけならもう帰ってもいいというのに。

「……ねえ、そんな風にただ座ってて退屈じゃないの?」

肩越しに視線を向けると、肩をすくめるスキルの姿が映った。

ちよっかいをかけられるのは腹が立つけれど、黙ってそこに居られるというのもなんと居心地が悪い。こんな状況で眠れるはずがない。

もしかして本気でユーザの話を聞きたいと思っているのだろうか? だから帰らずにこの場に留まるのだろうか。

「……少し、話でもしましょうか」

「いいね。どんな？」

「そうね……女を騙した酷い男と、騙されていることも気付かずにいた馬鹿な女の話」

体に残っているお酒のせいで口が軽くなっていたのかもしれない。誰かに話を聞いてもらいたかったのかもしれない。気がついたら言葉が口について出ていた。

レイピアは自嘲気味に笑った。

伏目がちの表情からは悲しみと、微かな怒りと、苦しみが混じったような色が伺える。

「うん。聞かせてくれるの？」

「きつとこんな話つまらないわよ」

「それでも……聞きたい」

レイピアは覚悟を決めるとポツリポツリと話し始めた。

2年前の、あの日の事を。

第10章 2年前の、あの日1

爽やかな朝だった。

空は青くて雲1つない。

まるでレイピアの新しい旅立ちを祝福しているように頬を撫でる風が心地良い。

両手いっぱい荷袋を抱えてレイピアはホットリープの街を歩いていた。

目的は1つ、この街を出て冒険者になること。

レイピアは幼い頃から冒険というものに憧れを抱いていた。けれど冒険者になるためにこれからどこへ行つて、何をしたらいいのかわからなかったから今はホットリープの街をぶらぶらと歩いている。今まで家から1人で外へ出たことなどなかったから、不安もあるけれどそれ以上に心は弾んでいる。大嫌いな家から、そして父親の元から離れられたことが嬉しくてたまらない。

屋敷を飛び出したのは今朝のこと。

元々あった確執が今朝になって埋めようがないくらいに広がったからだ。仕事だ、そう言つて父は1カ月も前から約束していた母親の墓参りを放り出した。少しも悪びれることなく当然のような顔をして仕事に向かおうとした。

腹が立ったから思いっきり平手打ちをした。人を引つ叩いたのは初めてだったから手は痛かったけれど、それ以上に心の方が痛かった。

少しは私とお母様の心の痛みを知ればいいんだわ！

それなのに父はレイピアの気持ちを知るところかさっさと仕事に行つてしまった。悔しくて悲しくてレイピアは出て行くことを決意

をして、すぐに荷物をまとめると屋敷を飛び出した。
もう2度とあの屋敷に戻ることはない、そう思つて。

初めは目に映る景色が珍しくて、目を輝かせて歩き回っていた。
かわいい雑貨のお店を覗いたり、普段食べたこともないような珍しいお菓子を買ったり。屋敷から持ち出したお金や宝石があつたので金銭面では当分困らないだろう。

しかし楽しくてたまらなかつたというのに、だんだんと日が沈んでいくにつれて気持ちも沈んできた。勢いで屋敷を飛び出したものの、これからどうしたらいいのだろうかと途方に暮れる。

歩き慣れていないせいもあつて、足はへとへとでとつくに限界を迎えていた。

宿を取りたいと思つたが、お嬢様として育てられてきたレイピアには宿の取り方もそして肝心の宿の場所もまるつきりわからなかつた。

「どつしよつ……」

夜になると急に冷え込んできた。寒さから身を守るようにして胸の前で荷袋を抱え込む。こんな風に冷え込むことなど予想してなかつたから、荷袋には薄着のものしか詰めていない。そのことがいつそうレイピアの心を沈ませた。

伏目がちにした青い瞳が潤んでいく。

いつの間にか路地の奥の方に来ていたらしい。ハッと顔をあげる
と今までまばらにあつた人通りがまったく無くなっていた。

積み重なつた空き箱が路上の半分を覆い尽くしていて、息苦しさ
さえ感じるような、そんな場所。

やがてしばらく歩いていると一件の店から漏れる明かりが目飛び込んできた。その明かりに引き寄せられるようにレイピアは近づいて行った。

おずおずと扉越しに中を覗いてみると、中には見たことも無い光景が広がっていた。たくさんテーブルにたくさんの椅子、そして談笑しながらグラスを傾ける人達。

何のお店かしら？

酒場というものを見たことがなかったレイピアにはその店が何なのか見当もつかなかった。

楽しそうな場所であることはわかった。

すると急に扉が開き中から人が出てきた。中に入ることもなく突っ立っているレイピアに不思議そうな視線を向けると、そのままその人達は暗い路地へと消えていった。それをぼんやりと見送ってから、意を決したように店の中に入った。

外とはうってかわって店の中は熱気に包まれていた。酒の匂いと煙草のきつい匂いに思わずレイピアは顔をしかめて口元を覆う。

店内を見回した後、どうしたらいいのかわからなくて入り口で所在なげにポツンと佇む。

カウンターには店主らしき男がいて、夜中にたった一人で現れたレイピアに怪訝そうな目を向けると近づいてきた。

「こんなところに何の用だい？　ここはあんたみたいなお嬢さんの来る場所じゃないよ」

男はレイピアの服装から良い身分の娘であることを判断したのだろう、そんなことを言った。恐らく親切心から出た言葉だろう。

「あ、あの……私、道に迷ってしまっ……」

顔を俯きがちにして声を震わせた。

「だったらなおさらこんな所に来るべきじゃない。ここは裏通りの酒場だ。荒くれ者達がいっぱいいるだろう？」

店主の男が顎で店内を指し示す。その方向を恐る恐る見ると、30歳前後の大男達が酒を片手にしながらレイピアの方に視線を向けてにやにやと下卑た笑いを浮かべている。そればかりでなく彼女と同じ年頃の男達までもが舐めまわすようにレイピアの全身を見つめてくる。

裏通りの酒場に女が1人で入り込むほど危険なものはない。本能がこの場に留まることを危険だと告げ、ぞくりと肌があわ立つ。

青ざめた顔で震えるレイピアを見て店主の男はため息をつく。

「どこに向かおうとしてたんだい？」

「や、宿屋へ……」

親切にも店主の男はレイピアのために、わざわざメモ帖に宿屋への行き方を書いてくれた。「気をつけるんだよ」そう言ってくれた男に何度もお礼を言って早々と酒場を後にする。

早くここから離れなくては、そう思いくたくなった足に鞭をうつ。しかし、すぐに酒場から追いかけて来たらしい男達によって囲まれる。

「よお、オネーチャン。俺達が宿屋まで案内してやろうか？」

頬に傷のある大男が口を開いた。

明らかに酔っ払っていて、口元はにやにやと笑みの形に歪めている。

レイピアにはこういうときの対応がちつともわからない。何しろ酔っ払いに囲まれるなど初めてのことだったから。だから無言で首を横に振ることしかできなかった。すぐにでも逃げ出したいのに足がガクガク震えて言うことを聞かないのだ。

どうしよう、どうしよう。

頭の中は真っ白になっていてパニック寸前にまで陥っている。

男は強引にレイピアの腕を掴むと暗い路地の方へ連れて行こうとした。

「や、やめて……っ！」

裏返って、ほとんど声にならない声で叫ぶ。

レイピアは本当に恐怖を感じているときは声が出ないことを知った。大声を出して助けを求めたいのに、それができない。

「ハッハッハ。聞いたか？ やめて、だってよ。何てかわいらしい声なんだ」

「それに美人だな、こんな極上の女そうそついねえや」

大男の手が背中の中まで伸ばしたレイピアの髪に触れる。その瞬間ぞつと鳥肌が立って、思いつきり大男の足を踏みつける。レイピアにできる精一杯の抵抗。痛みには堪えきれず叫び声を上げた大男の手を振りほどき、逃げ出した。

先程の店にさえ逃げ込めばあの店主が助けてくれるかもしれない、そう思っ

しかしすぐに別の男がレイピアの肩を掴んで路上に叩きつけた。石畳の固い路上にしたたかに背中を打った衝撃で思わず咳込む。

「この女……っ！」

足を踏まれた男は怒り狂って馬乗りになると、レイピアの胸倉を掴み上げて思いつきり拳を振り上げた。

殴られる。

そう思った瞬間、大男の体がいきなり吹き飛んだ。酒場の外壁に沿って積み上げられた木の箱の山へと頭から突っ込む。

驚いてレイピアが見上げると、そこには男が立っていた。ホットリップの辺りでは滅多に見かけることのない褐色肌の異国風の男。

背中まである黒い髪のを一本に束ね、闇の中でもギラギラ光るタイガーイエローの瞳は氷のように冷たい。腰には剣を差して皮の胸当てをつけ、剣士風の格好をしている。

近寄るだけでスタスタに切り裂かれてしまいそうな、抜き身の刃のような男だとレイピアは思った。

「邪魔だ、酒場に入れねえだろうが」

その男は忌々しそうに冷たい声で気絶してしまった大男に言い放つと、呆然と座り込むレイピアなどまるで眼中にないように通り過ぎた。

「て、てめえ！」

大男の仲間は顔を真っ赤にして怒りをあらわにすると褐色肌の男に殴りかかった。

「低脳なサルが！」

男は吐き捨てるように言い放つと腰に下げている剣に手を伸ばすことなく、襲い掛かってきた男達を次々と素手で殴り倒した。剣を抜くまでもない、そう考えているのだろう。

数十秒もしないうちに全員を地面に叩き伏せた。

「クソツタレ。手が汚れたじゃねえか」

そう毒づいて、褐色肌の男は再び酒場に向けて歩き出した。

「あ、あの……っ、ちよつと待……」

その迫力に圧倒されながらも、レイピアは何とか勇気を振り絞って褐色肌の男を呼び止めた。

振り向いた男は冷ややかな目でレイピアを見た後、いきなり胸倉を掴んで酒場の外壁に押し当てた。その勢いにケホ、とむせ込む。

「そもそもの原因はおまえか？」

レイピアは目を見開いた後、申し訳なさそうに俯いた。

「は、はい。ごめんなさい……」

男はレイピアの身なりの良い服装を見てつまらなそうにため息をついた。

「どこぞの貴族の馬鹿女か。どういつつもりで来たか知らんがさつさと消えちまえ」

目障りだ、と言われそのあまりにきつすぎる言葉にレイピアは心を切り裂かれるような、そんな気持ちだったが深々と頭を下げる。

「あ、あの……ありがとうございます」

「勘違いするなよ。あのサル共が邪魔だったから退かしたただけだ」

「それでも……っ、助けてもらったことに変わりはないから。あり

がとうございます。私の名前はレイピアと言います。このお礼なら何でもしますから！」

男は何の感情ももらない目で見ていたが、レイピアの発言に考え込むそぶりをした。

「ふ……ん。何でもする、ね。よく見るとなかなかの美人じゃないか」

一瞬男の目に剣呑な光が浮かんだ。

男はレイピアの顎を強引に持ち上げると、戸惑い震える唇に自らのそれを重ねた。さらに口づけを繰り返そうとするが、レイピアが何の反応も示さなかったので興ざめたように舌打ちをすると男はレイピアを突き放した。よろ、とよろける。

「少しぐらい抵抗しろよ。つまらねえ……」

レイピアは唇を押さえたまま目を見開いた。

「今の……って」

今のって……今のって……。もしかして……。

呆然とするレイピアに男は盛大にため息をついた。

「おいおい、まさか本当にお嬢様なのか？ キスも知らないなんて」「は、話には聞いたことがあるけど……」「マジかよ……」

呆れかえったように頭をガシガシと掻く。しかしその表情には悪びれた様子は少しもない。ふいに何かを思いついたように、男はレイピアの手を強引に引いて歩き出した。

半ば引きずられそうなほどの力に戸惑いの声を上げる。

「あの、どこに……？」

「大方家出でもして行くところがないんだろう？　しばらく面倒見てやってもいいぜ」

「でも……私、あなたのこと全然知らないもの……」

その言葉に男はつまらなそうに顔をしかめる。

「そうか、それじゃあな。せいぜい同じ目に遭わないように気をつけろよ」

意外なほどにあっさりとレイピアの手を離すと、そのまま歩いて行く。人気のない路地に取り残されそうになって慌ててレイピアは男を呼び止める。いつまた変な男にからまれるかわからない状態なのだ。

「ま、待って！」

振り返った男はにやりと笑って手を突き出した。

「来いよ、レイピア」

それは獲物を追い詰めた野性の獣のような笑みだ。その獲物が決して自分の元から逃げることをできないのをわかっているような

そんな笑み。

事実レイピアは男から逃げることはできなかった。

惹かれましたから。

名前も、年も、職業も、何1つ目の前の男のことを知らないというのに　それでも惹かれた。

男の、孤高の狼のような野性的で荒々しいところに。凍った月を思わせるような冷たすぎるほどのタイガーイエローの瞳に捕らわれた。

おずおずと手を伸ばす。

「……私、足手まといになるかもしれないけど……がんばるから……だから、連れて行って」

突き出された男の手をぎゅっと握った。

置いていかれないように、決して離れてしまわないように。

第10章 2年前の、あの日2

森の中を素早く歩くのは至難の業である。

雨上がりなどは特に最悪で、歩くたびに泥が靴の裏に張り付いてくる。草木も湿っていてそこを通るたびに容赦なく服がしっとりと水を含んでいく。

踵の高くなった靴は長時間歩くために作られたものではない、ましてや森の中をそのような靴で歩くなど論外である。すでにレイピアの足にはいくつものまめが出てつぶれてしまっている。

スカートで歩き回っていたため、剥き出しになった部分は草で切れていくつもの傷ができていたし、そのスカートですら泥まみれで見えるも無惨な状態。

ほとんど泣きたい気持ちでレイピアは森の中を歩いていた。

前を歩く褐色肌の男はレイピアのそんな様子などおかまいなしにどんどん進んでいく。

休憩をしたいなんて言ったら呆れられて置いて行かれそうなので、言えるはずもなく必死になって後を追いかける。

男の名前はユーザと言い、冒険者をしていてそれで生計を立てていると語った。それ以外のことは一切語らず、レイピアもあえて尋ねなかった。誰にでも語りたくないことの1つや2つはあるだろうし、自分もまた何が原因で家を飛び出したのか語りたくはなかったから。

昨日あの後すぐに雨が降り出したにも関わらず、ユーザはホットリープの街を後にした。

行き先はどこかわからない。

わからないけれど、黙々と後を追った。

夜通し歩いていることになる。徹夜をしたことなど初めてで、頭はふらふらして足が痛くてたまらないけれど、何とか氣力をふりしぼって歩いた。

一歩歩くたびにナイフで切られるような激痛が走る。

ぬるぬると変な感じがする。恐らくまめがつぶれたところから血が出ているのだ。レイピアには傷の具合を確かめる勇氣がなくてそのまま我慢して歩いた。

それから1時間ほど歩き、森が開けたところまで来るとユーザは腰を下ろした。まだまだ森を抜けるまでは時間がかかるのだろぅ。

ようやく休憩できる！そう思ってレイピアもそこから少し離れた位置にへたり込む。

木々の隙間から見える太陽が真上に来ていることから、昼を取るために休憩したのだ。

「あの……私達これからどこへ行くの？」

おずおずと尋ねたレイピアにユーザは乾燥した干し肉を何枚か放ってよこした。

「セレイラの街に行ってお前の冒険者登録をする。まずはそれだな」

セレイラの街。

そこがどんなところかわからず、あれこれ想像しながらレイピアは頷いて固い干し肉を頬張る。干し肉など初めて食べたのでそれが何の肉なのか良くわからないし塩気ばかりが気になってあまり美味しいとは言えないが、お腹は空いていたので食えることができた。

「それからどうするの？」

「さあ、どうするかなあ」

ユーザはくく、と喉を鳴らして笑った。
ひどく不安を煽る笑いだと思った。そんな不安そうにユーザを見つめるレイピアに気がついたのか、彼はくしゃりとレイピアの髪の毛を撫でた。

「そう心配するな、悪いようにはしない」

たった一言。

その言葉を聞いただけでレイピアは自分でも驚くほど胸が軽くなった。この人を信じてもいいんだ、そう思った。
やがて干し肉をすべて食べ終わったユーザは木の根元に寝転がって、うとうとと居眠りを始めた。

ユーザに何かお礼がしたいと思った。

お礼としてお金を払うのは少し違う気がする、それよりももっと誠意のこもったもの。例えば彼のために何かをすること。

（そうだ、果実を取ってプレゼントしよう！）

ここに来る途中、赤い果実がなっている木を見かけた。雰囲気からいって甘いお菓子の類は好みそうにないが、過日のような自然の甘さのものなら食べるだろうと思った。

今のレイピアにできる精一杯のお礼だった。
思い立ったらすぐに行動に移す。

ユーザからなるべく離れないようにして森の中を歩き回る。
意外とあっさり果実のなる木は見つかった。真っ赤な大粒の実をたくさんつけている低木。今まで1度も見たことがない果実だ。

レイピアの手に届く範囲だったのでその果実を1粒摘むと口の中に放り込んでみる。

口の中にふわりと甘い味とほどよい酸味が広がる。

自分の手で摘んだ果実は屋敷にいたときに食べたどんな果実よりもおいしく感じられてついつい調子に乗って何個も口にする。

そして手に持っている皮袋においしそうな果実を選んで放り込む。喜んでくれるといいな、と思いながら。

「さて、と。これくらいでいいかな……」

ついつい袋いっぱいには果実を放り込んでしまっていて、気がつくとき時間がだいぶん経っていて慌てて元の場所に戻る。

ところが、ユーザの姿はそこにはなかった。辺りを見回しても静まり返っていて人の気配がしない。

置いていかれてしまったのだ。

いや、もしかしたら本気で連れて行ってくれる気など最初からなかったのかもしれない。

嫌な考えが頭をぐるぐると回ると、悲しくてみるみるうちにレイピアの目に涙が浮かんた。それでも何とか唇を噛み締めて堪えると荷物を抱え込んで走った。男に追いつくために。

どうか追いついて！

祈るような気持ちでレイピアは走った。

足が痛んだがそんなこと気にしている余裕はなかった。目まいがして気分が悪いけれどそんなことも気にしてはいられなかった。

肩で大きく息をしながら、目に入る汗を手の甲で拭う。全力で走った甲斐があつて、なんとかユーザの後姿を見つけることができた。

「なんだ？ 帰ったんじゃないのか」

レイピアの方を振り返ったユーザは驚いたように目を見開いた。姿の見えなくなったレイピアが家に帰ったと思い込んでいたのだらう。

よかった、置いていかれたわけじゃなかったんだ。

安心すると一気に今まで溜まっていた疲れが押し寄せ、レイピアの体はぐらりと傾いた。地面に倒れた時に手にしていた皮袋を下敷きにしてしまつてぐちゃりと潰れてしまったが、そんなことを気にする余裕もなく意識を手放した。

ひどく両足が痛んだ。

焼けるような熱さと痛みが両足を襲い、レイピアの意識は無理矢理覚醒していった。ゆっくりと目を開けると最初に目に飛び込んできたのは、呆れかえったようなユーザの顔だった。

「……あ！」

慌ててレイピアは起き上がる。しかし途端にひどい目まいを覚え、よろけたところをユーザによつて抱きかかえられた。

不安で不安でたまらなかった心に差し伸べられた手。

初めてこの男にやさしくされたような気がして、嬉しさと安心感から今まで溜め込んでいた涙がボロボロと溢れ出した。

「よ、よかった……よかった！ お、置いていかれたかと思っ……うわああああん」

レイピアは小さい子供みたいに声を上げて泣いた。その間、ユーザはじっとレイピアを支えたままでいた。

やがて涙を出し尽くしたレイピアは思い出したように果実を入れた袋を探す。しかしそれは無惨にも地面の上でつぶれていた。

「果実……つぶれちゃった……」

落胆の色を見せうなだれるレイピア。

「それを取りに行ってたのか？」

「うん。あなたにお礼がしたくって必死になって取ってたらしいの間に時間がいっぱい経ってて……あなたは居なくなってるし、森は暗いし……」

思い出して、また不安になったのかひっく、としゃくりあげる。

「馬鹿な女……。何で他人のためにそこまでする必要がある？」

ユーザは理解できない、そう言いたげな目でレイピアを見た。

「ユーザ……」

「……言えよ、どうせ何か魂胆があるんだろ？」

タイガーイエローの瞳が暗く陰り、レイピアは胸ぐらを掴まれる。いとも簡単に体が持ち上がり、つま先立ちの状態になる。

「何をたくらんでる？」

ぎり、と喉を締め付けられるが何とかかすれた声をしぼり出す。

「違うわ……そんなじゃない。だって……嬉しかったんだもの。来いよ、って言うてくれたユーザの言葉が。私、行くところがなくて心細かったから……だから、お礼をしようと思ったの。つぶれちゃったけど……」

「お前の言ってることはよくわからねえ……。理解不能だ」

首を締め付けていた手が緩む。

ユーザはひどく混乱した頭を落ち着かせるために右手で額を押さえると、そのまま倒れこむようにレイピアにもたれかかった。

苦しみをこらえるような　　まるで子供が痛みを必死でこらえているみたいな傷ついた表情をしている。

「両親ですら……何の見返りもなしにそんなことしないし、子供すら平気で捨てる。ましてや他人なんて……そう、思ってた……なのに……どうしてお前は……」

「ユーザ……」

レイピアがどこかユーザに対して感じていた微かな安らぎの正体を今理解した。

父親に約束を破られて家を出たレイピア。

両親に捨てられたユーザ。

痛みの程度は遥かに違っていたけれど、2人はお互いに同じ痛みを持っていて、そしてお互い心の奥底で親に対して愛情を求めている。

似ているのだ。

似ているからこそ最初に会ったときに安らぎを感じた。

そつとユーザを包み込むようにして背中の方に手をまわした。顔をあげた彼と目が合う。

「俺が……怖くないのか？ 正体すらわからない奴だぞ」

「最初は少しだけ怖かったけど。でも、今は平気。ユーザは私を助けてくれた人、私にとっては光みたいなの」

はにかむようにして笑う。

「変な女……。最初に見た人間を親だと思い込んでついてくるヒナみたいな奴」

そう言つてレイピアを見つめるユーザの瞳は氷のような冷たさではなく、微かではあるがやわらかいものへと変わっていた。

ユーザはレイピアから体を離すと袋からつぶれてしまった果実を取り出し、それを口の中に放り込んだ。目を見開くレイピアの前でゆっくりと味わうように咀嚼してから飲み込む。

「……ふん、まあまあだな。今度からは枝の先端からじゃなく幹に近い方に生ってるものを取れ。その方が甘い」

出来の悪い教え子を諭すように言った。

急にやさしくなった態度にレイピアは戸惑いを覚えながら男を見上げた。

「……悪かったな。お前お嬢様だったんだよな」
「え？」

ユーザは傷だらけになったレイピアの足元に視線を落とした。草木によって傷つけられた足は血が滲んでいて痛々しい。

「無理して歩いてたんだろ？ 今度からは痛くて歩けないとか、ちゃんとさええ」

「うん。ありがとう……ユーザ」

セレイラの街に無事に着いたレイピア達は、冒険者登録をしてそれから2カ月の間に3、4回ほど冒険に出た。

ユーザはレイピアに剣の扱い方や料理の作り方などありとあらゆる生活技術を教え込み、驚くべき吸収力でレイピアは成長していた。

そして時が経つにつれて2人の距離も縮まっていた。

幸せ。

その2カ月を表現するのにこの言葉ほどふさわしいものはないだろう。

レイピアはユーザを愛していたし、そして彼もまた自分を愛してくれているのだと思った。彼はそのことを言葉にすることはなかったけれど、驚くほどやさしくなった瞳がそう語っている。これから先も、この幸せな日々が続いていくのだと信じて疑うことはなかった。

第10章 2年前の、あの日3

セレイラの街の宿屋に滞在するようになって2カ月経ったある日のこと、ユーザとレイピアの元に1組の男女が尋ねてきた。

朝早くにノックの音が鳴り響いた。

その音で目が覚め、部屋着のままレイピアが扉を開けると1組の男女が廊下に佇んでいた。

明らかに宿屋の従業員とは服装が異なっている。女の方は太股の辺りまで大きくスリットの入ったロングスカートに胸の大きく開いた真っ赤なシャツ。男の方は皮の胸当てと腰巻をした冒険者風の服を着ていたからだ。

一見するとチグハグとも言える2人。

「あのう……どちらさまでしょうか？」

不審に思いながらおずおずとレイピアが声を掛けると女性の方が口を開いた。

「ユーザに用があつて来たのよ。いるんでしょう？」

妖艶。

目の前の女性を一言で表すとまさにその言葉がピッタリだろう。真っ赤に塗られた唇に手を当てて艶やかに笑う。その仕草1つ1つが魅力的で、レイピアにはない色気というものがある。女であるレイピアですらドキリとしてしまうほどだ。

肌の色は褐色で豊かな黒髪。恐らくユーザと同じ地方出身の女性。

「ユーザに……？ 何の用ですか」

こんな綺麗な人がユーザに何の用があるというのだろうか？
少々ムツとしながら尋ねる。

女性は面白そうにくすりと笑うと、問いかけに答えることなくレイピアの脇をすり抜けて寝室の方へ向かった。その後にも男も続く。

「ちょ、ちよつと！ 何なの！？」

慌てて男の手を掴んで引き止めるが、軽く睨まれることによって制される。

頭は禿げ上がっていて、屈強な体格をしている。左目のところに剣のようなもので傷つけられた跡が縦に走っていてその顔で睨まれると迫力があり、思わずレイピアはたじろぐ。

それでも何とか寝室まで追いかける。

レイピアが中で見た光景は　　。

「起きて、ユーザ。あなたいつからこんなに寝起きが悪くなったのかしら？」

まるで愛しい恋人を起こすようにユーザの耳元で甘い声を出して、髪に手を差し入れている女性の姿だった。

レイピアは口を金魚みたいにパクパクさせてその光景を呆然と見つめる。

「な、な、何を　　！？」

その声に反応するようにユーザがのろろと重い瞼を上げる。そしてその視線が目のある女性とぶつかる。ユーザは飛び起きるようにして体を起こすと、毛布をベッドの端に寄せた。

「アルジェリカ……！？それにオリバまで……」

どうしてここに？そう問い掛けるようにユーザは目を見開いた。

「ふふ、そんな驚いた顔しないの。あなたが全然私達に連絡をよこさないから私達の方から尋ねてきたのよ。まさか迷惑だなんて思っていないわよねえ？」

アルジェリカと呼ばれた女性はまさに今、獲物を捕らえようとしている猛禽類のような目でユーザを見つめた。無言のままの彼になおも言葉を続ける。

「それにしてもあなたがまさか女と行動を共にしているとは思わなかったわ。あなたの好みってこういうタイプだったかしら？まるで清純なお嬢様って感じね」

くすくすとレイピアを見て笑いをもらす。
人を見下しているような、そんな笑い。まるで自分の方が女として上だというような。

レイピアは怒りと屈辱でカッと顔が赤くなる。

「ああ、それともこの娘って今度の……」

「黙れ、アルジェリカ」

アルジェリカの言葉は最後まで続くことなく、ユーザの怒りを含んだ声によって遮られた。

機嫌を損ねたようにふん、と鼻を鳴らしてアルジェリカはそっぽを向く。

「ユーザ……？」

今度の……？

アルジェリカは何を言おうとしていたのだろう？

ひどく不安を覚えてユーザに視線を向ける。するとその視線に氣付いたユーザはレイピアの顎を掴んで引き寄せるとサッとくちづけた。続けて瞼と頬にも唇を落とす。

「心配するな」

そうユーザは言うものの、何となく誤魔化されたような氣がしてならなかった。確かめようとするが、それを遮ったのはアルジェリカのくすくす笑う声だった。

「あらあら、ずいぶんかわいがっていらっしやること」

珍しいものでも見たように、アルジェリカは面白そうに口元を歪める。

「アルジェリカ」

タイガーイエローの瞳が氷のように鋭くなり、「まあ恐い」とアルジェリカは肩をすくめた。

「そんなに怒らないで欲しいわ、軽い冗談なのに。お嬢ちゃん、少しだけユーザを借りるわよ？」

踵の高くなった靴をコツコツ鳴らして扉へ向かうとユーザを手招きした。ため息をつき、レイピアの頬から手を離すとユーザもまた扉へと向かって歩き出した。

「ちょっと待

！」

慌てて追いかけるレイピアの襟元を掴んでオリバが止めた。その際にぐい、と引っ張られたのでわずかに首が締め付けられる。

「オリバ、レイピアに触るな」

鋭く一喝する。どうやら力関係ではユーザの方が上のように、男は素直にその手を離れた。彼からレイピアを引き離すとユーザは子供をあやすようにレイピアの頭を撫でた。

「少し話をしてくる。ここで待ってろ、いいな？」

有無を言わせぬ口調で言うと、アルジェリカとオリバと共に出て行ってしまい、レイピアはわけもわからず1人取り残されてしまった。

1時間。

2時間……。

時計の針だけがチクタクと時を刻んでゆく。

いくら待ってもユーザが帰ってくる気配がなく、レイピアの不安は募るばかりだった。

何を話しているのだろうか？

あの人達は一体誰なんだろう？

ユーザの過去も、そして彼自身のことすらもほとんど知らずにいる自分が齒がゆい。

ため息をついてぼんやりと窓から外の景色を眺めた。
雲がのんびりと流れていく。

ドンドン、ドンドン……。

いきなり部屋の中の静寂が破られた。

それは扉を叩き壊してしまいそうなほどの激しい勢いのノックだった。レイピアは驚き、恐る恐る扉へ向かう。

「ユー……ザ？」

問い掛けるが返事はない。代わりに返ってきたのは扉を押し開ける音だった。そしてそこから顔を出したのは先程ユーザと出て行ったはずのオリバと、何人かの男達。はっと息を呑むレイピアなどおかまいなしにどんと部屋に押し入ってくる。

「ユーザはどうしたの？」

「あの人はもう戻って来ねえよ」

ふん、と鼻を鳴らしてオリバはレイピアをまるで小動物でも見るように見下した目で見た。

「そんなことない！戻って来るって言つたもの」

「馬鹿な女。そんな言葉を信じてるのか？ あの人が最初からお前みたいな女を相手にするとでも思つたのか？」

オリバと男達はお互い顔を見合わせて笑いあう。

「お前はもう見捨てられたんだよ」

別の誰かがにやにやしながらつぶやいた。

何を言っているんだ？この男達は……。

レイピアはカサカサに乾いた唇をぎゅっと噛んで、男達を睨みつけた。

「そんなの信じない、ユーザは絶対そんなことしない！ いい加減なこと言わないで！」

彼がそんな男でないことはここ2カ月一緒に過ごしてきたレイピアが1番良く知っている。彼の口から直接その事を聞かない限り、信じられなかった。

「キーキー喚くな、うるさい。おい、いいから連れてけ」

オリバが耳を塞いでうんざりした顔をする。

顎でもって扉の方を指し示すと、男達は手にしていた縄でレイピアの両手と両足を縛りあげて肩に担いだ。

「何するのよ!？」

「さあてね、どうするかはこれから決めるところだ」

「は、離しなさいったら！」

ジタバタと手足を動かせるだけ動かして抵抗する。そして愛しい者に助けを求める。

「ユーザ、ユーザ……っ！」

「うああああああ!？」

レイピアと、彼女を抱えていたはずの男の叫び声が上がったのはほぼ同時だった。

男は手の力が抜けたようにレイピアを地面に落とすと、そのまま床へと勢い良く倒れこんだ。仰向けに倒れた男は左肩から右腹にかけてざっくりと斬られたらしく、おびただしい量の出血をしている。床に転がったレイピアが痛みを堪えて顔を上げると、そこには血に濡れた真っ赤な剣を手にしたユーザが立っていた。

「平気か？ レイピア」

無表情のままレイピアを縛っていた縄を外すと、ユーザはオリバに向き直った。微かにオリバの顔が青ざめる。

「……レイピアに触るなって言っただけだよ？ オリバ」

その氷のような目と怒りを含んだ声音に射竦められるように、オリバはガタガタと震えながら後ずさりをはじめた。

「ち、違う……俺は……良かれと思って……」

「誰の女だと思ってる？」

「……あ、アアう」

恐怖が先でもはや言葉にならない。

血に染まってもなお鋭さを失っていない剣を片手にして、ゆっくりとユーザは壁にへばりつくようにして立ちすくむオリバに近づいていく。

「誰の女だと思ってるんだ？」

まるで小さい子供にでも言い聞かせるように、一言一言を区切りながらゆっくりと言う。

「や、やめてくれ……」

オリバは懇願するように額に汗を流しながらかすれた声を出した。

「俺を怒らせるとどうなるかわかっててやったんだろう？ そうだよなア、オリバ！」

オリバが目を見開いてひっと息を呑み込むのと、ユーザが手にした剣が真横に払われるのはほぼ同時だった。

皮膚と肉を裂く鈍い音が室内に響き渡った。

ほとばしる鮮血。

左手首が床に転がり、パツクリ開いた傷口から大量の血が吹きだした。

部屋中に生臭さと鉄臭さが充満する。

「その手癖の悪い右手も落としてやろうか？ ん？」

くく、と喉の奥で笑う。

心底可笑しそうな、狂気を孕んだ笑み。

「きゃああああ！」

口元を覆って悲鳴を上げたのはオリバでもレイピアでもなく、息を切らしながら部屋に入ってきたアルジェリカだった。オリバは死に至ってはいないものの、すでに気絶をしまっていたから。

「ユーザ！？ なぜ……っ！」

「アルジェリカ、お前もわかってるはずだろう？ 俺を怒らせた罪は重い」

ずっとユーザの目が細まる。

静かな声音。

こんなユーザは初めて見る。

彼が人を斬った所はここ2カ月の間に何度か見たことがある。しかしそれは剣を向けてきた相手に対してだ。

オリバはただ震えて懇願していた。無抵抗だった。それを。

声も出せず、目を見開いてレイピアはぐったりとしているオリバを見つめていた。

「……こんな、こんなことをしてただで済むと思っているの？」

「さつさと消える、アルジェリカ。今なら見逃してやる」

「許さない……ユーザ……」

アルジェリカは瞳に憎悪という名の黒い炎を灯してユーザを睨みつけた。

「2度は言わない」

アルジェリカに切っ先を向ける。

ユーザの腕ならば彼女の細い首を体から切り離すことくらい容易いだろう。ぎゅ、と悔しそうに唇を噛み締める女。

「もう止めて！」

緊迫した空気を破ったのはレイピアだった。

「もう、止めて……ユーザ」

その声に反応するように、残った男達は気絶したオリバともう1人の男を抱えると足をもつれさせながら逃げ出した。アルジェリカも最後にもう1度憎悪の瞳をユーザに向けると扉から出て行った。

ユーザはカタカタと震えるレイピアを抱え上げて、隣の部屋に移動した。ベッドにレイピアの体を横たえると、自らもその隣に腰掛ける。

「……あの人達は一体……誰？」

震えが収まり、だいぶ頭の中が整理されたところで口を開く。

「あの人達はユーザの知り合いなの？ どうして……私のところに来て……あんなこと言っただろう……」

あの人が最初からお前みたいなのを相手にするとでも思っただのか？ お前はもう見捨てられたんだよ、そう言っていた。そしてアルジェリカと共に出て行ったユーザは何を話していたのだろうか？

無表情のまま、押し黙るユーザ。

「どうして何も言ってくれないの？」

「言って、信じるのか？」

そこでようやくユーザが口を開く。

氷のように冷たい声。それは2カ月前に出会った時の、レイピアを空気に冷たい扱って関心を持たずにいた頃の冷たい響きだった。

ユーザなのに、まるで知らない人のようだ。
レイピアの脳裏にオリバの左腕を難なく落とし、狂気に歪めていたユーザの顔が浮かぶ。

怖い、と思った。

それと同時に困惑が生まれた。オリバのあの震えよう、以前にも彼が怒ったところを見たことがあるような、そんな怯え方だった。彼らが知っていてレイピアの知らないユーザ。

そして今、目の前にいるユーザ。

どちらが本当の彼なのだろう？

「正体すら分からない俺の言葉を信じられるのか！？」

ユーザはレイピアの体を押さえ込むようにしてベッドに沈み込ませると、強引に唇を重ね、それを角度を変えながら何度も、何度も繰り返した。

左手で顎を押さえ、開いた口に強引に舌が差し入れられる。

「ん……うっ、……んーっ！！」

ユーザの体を押しつけようとするがビクともしない。それどころか片手で押さえ込まれ、彼の自由な方の手がレイピアの胸元のボタンにかかる。ブツツという音とともにボタンはあっさりとはじけ飛んで、白い素肌があらわになる。

今のユーザはユーザであって、ユーザでない。

心が荒んでいるような状態。

心の中が見えない状態。

恐くてたまらない。

「……っ、嫌だ！ やめてユーザ！」

「嫌だつたら払いのけてみるよ」

力でかなうはずなどない。そんなことユーザ自身が1番良くわかつているはずなのにそんなことを言う。そしてさらに彼の力が強まり、息ができなくなるほどきつく抱きしめられる。

「痛い……っ、ユーザ、苦し……っ」

荒々しいけれど、その抱擁はユーザの感情が流れ込んでくる程の救いを求めているような、すがりつくようなものだった。

レイピアはぐったりしたように、手足をシートに投げ出した。途端にユーザはレイピアを押さえつけたままの姿勢でつまらなそうに顔をしかめた。

「何で抵抗しない？」

苛立ったようにつぶやく。

「だって……ユーザ……辛そうな顔してる」

冷たい瞳だが、傷つき今にも泣き出してしまいそうに見えた。

先程の恐いくらいの荒々しさは、心の中に渦巻いている痛みを消すためのもの、救いを求めるもの。そんな風に思える。そつとレイピアは彼の頬を両手で挟んだ。

「ユーザ、苦しいんでしょう？ 何も言いたくないなら……それでいいから」

氷のような瞳はレイピアの言葉によって戸惑いの色へと変化した。

「くそっ……」

ユーザは舌打ちすると、レイピアの体を離してベッドの端に座った。そしてうめくように、言葉を絞り出した。

「悪い、レイピア……。俺は……」

ユーザは額を押さえすまなそうに顔を歪めた。

「俺は……お前にまだ言っていないことがある。でも、今はまだ言えない……言えないんだ……」

「ユーザ……。いいの、気にしてないから。だって……私にとってのユーザは今のユーザなんだから」

やはりレイピアにとって今のユーザが本当の彼のように思える。そしてそれを信じている。

そつと背中越しに彼を抱きしめる。ぬくもりが感じられた。とても心地良いあたたかさ。

「私は今、目の前にいるユーザが好きなんだから……」

ユーザは毛布にくるまるようにして眠るレイピアを包み込むように抱きしめる。身じろぎをして思い瞼を上げると、やわらかく微笑むユーザの顔が映って、安心したようにレイピアもまた微笑む。

いつもの彼だ。

「悪い、無茶しすぎたな……」

そう言つて、汗で額に張りついてしまったレイピアの髪の毛を梳き上げるとその部分に唇を落とした。

「うっん、大丈夫」

毛布にくるまったままユーザに寄り添う。

その体温が温かくて心地よくて、瞼を閉じると再び眠りに引き込まれた。

第10章 2年前の、あの日4

アルジェリカ達の一件があつて以来、ユーザが考え込むことが多くなつた気がする。

冒険に出ているときも、食事をしているときも、レイピアが話し掛けているときもどこかの空でぼんやりしている。

それが気のせいでないことが確信できたのは、ユーザの元に送られてきた一通の手紙だった。真っ白な封筒には宛先しか記載されておらず、差出人は不明。

その手紙を読んだユーザは顔を強張らせた。レイピアがその手紙を覗き込もうとすると、見る前に懷にしまい込んでしまった。

結局その手紙には何を書いてあるかわからなかったけれど、それからというもの彼はますます難しい顔をして考え込む日々が続ぎ、漠然とした不安が胸をかすめた。

「レイピア ……。俺は冒険者を辞めようと思ってる」

ある日突然ユーザの口から発せられた言葉に、最初それが何を意味しているのか理解できなかった。

冒険者を辞める？

辞めて一体どうしようというのか。

「一体どうして辞めるなんて……？」

「俺だけじゃなくお前も冒険者を辞めるんだよ。この街を出てどこか小さい村に移って……2人で暮らさないか」

「え……？」

目を瞬かせて、ユーザを見る。彼は照れたように頭をかいて、おもむろにズボンのポケットから小さい箱を取り出した。

「鈍いな。お前ってハッキリ言わないと駄目なんだろうな……」

ユーザがその小さい箱を開くと、中には銀の指輪が輝いていた。結婚を申し込むときには、飾りも何もついでいないシンプルなデザイン^{デザイン}の銀の指輪を相手の指にはめることがホットリープ地域の古くからの風習だ。

求婚された者はそれを拒否するならば指輪を地面に落とす。受け入れるならば指輪にキスを落とす。

「……俺と結婚して欲しい」
「……！」

その指輪はピッタリとレイピアの指にはまった。呆然と見ていたレイピアだったが、やがてゆっくりと行動を起こす。

答えは迷うはずもなく決まっている。

そつと銀の指輪に口づけた それは求婚に答えるという証。

「ありがとう……ユーザ」

幸せいっぱいの笑顔を浮かべる。

あの不安はきつと気のせいだったのだ。

こんなにも幸せなんだから。

「俺はこれから最後の冒険に行ってくる。これが終われば……全て終わる」

そう言って空を仰ぎ見るユーザの瞳には決意めいたものが宿っていた。

「最後の冒険……？ どこに行くの」

「盗賊退治……そんな類のものだ」

「もちろん私も連れて行ってくれるのよね？」

レイピアの問いにユーザは静かに首を振り、「お前は連れて行かない。ここで待っていてくれ」ときっぱりと言い切った。

「どうして!？」

「お前を危険な目にあわせたくないんだよ……。それに、これは俺のケジメでもあるんだ」

ハツとレイピアは顔を上げた。

『俺は……お前にまだ言っていないことがある。でも、今はまだ言えない……言えないんだ……』

そう言っただけ苦しい表情をしていたユーザの姿を思い出した。

もしかしたら彼の言うケジメとは過去の清算なのかもしれない。

レイピアの知らない、ユーザの過去。

「ユーザ……」

「昔の俺は……お前に言えないような汚いこともたくさんやった。この手は血で真っ赤に染まってる。そんな過去の姿をお前には見られたくない……わかってくれ」

辛そうなユーザの表情に心が揺れたが、それでもレイピアは首を

横に振ってここで待つことを拒否した。

「私はそれでもいい！ ユーザの手が血に染まっても……結婚したいと思ってる。それでも連れて行ってはくれないの？」

彼の過去がどうであれ、関係ない。そう思っているのに肝心のユーザ本人が頑なにレイピアに過去を知られることを拒んでいる。いや、恐れていると言った方が正しいか。

いつか彼の方から話してくれる日を待とうと思っっているけれど、結婚の申し込みをした今でさえ話してくれようとはしない。

それがひどく悲しかった。

レイピアの覚悟を知ったユーザはしばらく考え込んだ後、観念したようにつぶやいた。

「わかった。お前がそう言うなら……来いよ」

セレイラの街から2時間ほど歩いた場所。

そこには何軒かの家が立ち並び集落になっていた。その家はいずれも壁が崩れ落ち、窓は割れていてまともな家が一軒も見当たらない。

人の気配は全く感じられず、生活感もないことから廃墟であることが容易に想像がついた。

歩くたびに枯れた草がカサカサと揺れる。

空を見上げるとどんよりと黒い雲に覆われていて今にも雨が降りそうで、それがまた不気味な雰囲気漂わせている。

「ここが……本当に盗賊達のアジトなの？」

不安を覚えたレイピアはおずおずとその疑問を口にする。ユーザはしーっと口元に人差し指を当てると辺りに人がいないか確認し、声をひそめてレイピアの疑問に答える。

「これは見せかけだ。こうして廃墟の状態なら誰も近づかない。自警団の連中もまさかこんなところに盗賊達がひそんでいるとは思いませんいかな……」

セレイラの街には治安維持を目的とした住民組織の自警団が存在している。そうして街で起こる犯罪の対処を行なっている。またこの組織は冒険者ギルドとも通じていて、犯罪者を捕まえるために賞金をかけることによって冒険者にも協力を求めているのだ。

レイピアとユーザの今回の目的も盗賊達を自警団へ引き渡すためにある。

「奴らは廃屋の地下にいる」

ユーザはまるでここに何度か来たことがあるような慣れた足取りで、一軒の家に近づくと、半分朽ちた木の扉を軋ませながら開き、注意を払いながら中に入る。レイピアもその後続いた。

かび臭さと湿気が中にはたち込めていて、顔をしかめ左手で鼻を押さえる。空いている方の右手はいつでも抜けるように腰に差した剣に添える。

「いくぞ、レイピア」

少しだけ振り返ったユーザに頷いてみせる。
それが合図。

腰に差した剣を引き抜くと、2人は一気に地下室へ続く階段を駆け下りると中へと滑り込むようにして入った。その地下室は大広間のような広い造りになっていて、中に何人も男達が椅子に座って酒を煽っていた。

「全員動くな！」

ユーザは地下室全体に響くような大声を出した。

男達は酒を飲んでいるせいもあってか、状況が理解できずに呆然と椅子に座ったままユーザとレイピアの方を向いた。

レイピアはその男達の中にオリバの姿を見つけ、目を見開いた。左手首を失い、その部分を包帯でぐるぐる巻きにしているが間違いない。

「……オリバ……」

ユーザもそれに気がついたようだったが、その顔には驚きの色はない。最初から彼がここにいることを知っていたような、そんな表情だ。

やはりオリバとユーザの間には何かあるのだ。

ただの知り合いではない、何かが。

アルジェリカの姿は見えないが、彼女もまたユーザとの間に深い関わりがあるのだろう。

今まで考えないようにしていたことが、レイピアの中で漠然とした思いながらも形成され始めた。

もしかしたらユーザは。

「ユーザさん……」

オリバは椅子から立ち上がり、ユーザの手にしている抜き身の剣を見て険しい表情をした。

「まさか……俺達を売るつもりか？」

その言葉に周りにいる男達もざわめく。「まさか……！」「そんなはずはない！」そう言いながら。

「いつから自警団の犬になった！？ あんたは……」
「黙れ！」

オリバの声を遮るように怒鳴ったが、それでもオリバは続けた。

「俺達を……仲間を売るというのか！」
「やめろお！」

しん、と一瞬地下室が静まり返った。

「仲……間……？」

愕然としてレイピアはつぶやいた。
考えまいとして必死で胸の中にしまいこんでいた考えが的中してしまった。もしかしたらユーザは アルジェリカとオリバの仲間だったのではないかと。

クク、と心底楽しそうにオリバは笑う。

「そうさ、俺達の仲間なんだよ。もう10年ぐらい昔からな
うぐっ」

「黙れって言うてるだろうが！」

ギリ、とユーザはオリバの首を左手で締め上げ、右手にしていた剣で一気にオリバの腹部を貫いた。ボタボタと血が流れ、ユーザの服もまた返り血で真っ赤に染まる。

「正確に言つと仲間だった……だ。過去形なんだよ」

ユーザは懷から手紙を取り出すと腹を押さえてうめくオリバの目の前で破り捨てた。彼の元に送られてきた差出人不明のあの手紙だ。

「こんな手紙をよこしやがって……悪いが俺はもうお前らと行動を共にする気はない。もう2度と干渉して来ないのなら見逃してやる」

氷のように冷たい声だったが、そこにはまだかつての仲間に対しての思いが残っているように感じられた。あくまでも自分に干渉さえして来なければ自警団に突き出す気はない、と。最後の警告だ。

「ククク、フフ……ハハハ！」

血溜まりの中でオリバは狂ったように笑い始めた。

「何がおかしい？」

「俺達から離れて……その女と幸せになるとも言うつもりか？」

「そのつもりだ」

ユーザの答えに今度は嘲るように喉の奥で笑う。

「そんなこと本当にできるとでも思っているのか？ 血に染まったその手が今さら洗い流せるとでも思つて……っがぁ!？」

ぞぶり。

オリバの腹に突き刺していた剣を抜いて再び突き刺した。致命傷になる位置、心臓へ。

ユーザの動きにためらいは微塵も感じられなかった。

「喋りすぎだ」

吐き捨てるように言い放ったその口調は驚くほど冷たくて、もはや何の感情もこもっていない。かつての仲間に対しての思いも、もはや存在しない。

「がはっ……。馬鹿なことを……。所詮悪人は悪人でしかないのさ。幸せなんか訪れやしない。……………っ」

最後の方の言葉はよく聞き取れなかったが、オリバはユーザの耳元に顔を寄せて何かをつぶやいた。それが彼の最後の力だったのだろつ。ニヤリと背筋がぞつとするような笑みを浮かべて絶命した。呆然としたように立ち尽くすユーザは口元に手を当て、顔を蒼白にしている。

「ユー……ザ？」

レイピアが手を伸ばすとユーザはそれを乱暴に振り払い、手にしていた剣の柄を思い切り握り締めた。

「くそっ……。何だと……。？……ちくしょうっ！　ウアアアアア
！！」

突然ユーザは血に濡れた剣を闇雲に振り払い、近くにいた男を斬り捨てた。

抵抗らしい抵抗を見せない男達を2人、3人と次々にその手にかける。人を斬ったために刃こぼれが生じているにも関わらず力まかせに剣を振るう。その切れ味の悪さから一撃で絶命できない者が苦しみにのたうち回った。

転がった瓶から漂う酒の臭いとむせかえるような血の臭いが入り混じる。

地獄絵図のような光景だった。

なぜこんなことになったのだろうか？

オリバは最後に何を言ったのだろうか？

レイピアはユーザを止めることもできず、ただ恐怖に震えてその場に立ち尽くすことしかできなかった。

雷鳴と共に雨が降り出す。

滝のような雨は返り血に染まった2人の体を洗い流すが、心に残った苦々しさだけは洗い流すことができなかった。

セレイラへ帰る道のり、レイピアもユーザも何も喋らなかった。

何も映さない虚ろになったユーザの瞳を見て、掛ける言葉が見当たらなかったのだ。

あの後、生き残っていた何人かの盗賊達を柱に縛り付けて、レイピア達はギルドへ報告するために帰ることにした。

生き残った、とは言っても剣による傷を受けていて重症を負っている者達ばかりだったが。

セレイラの街まであと少しという場所に差し掛かったところで、ふいにレイピアの髪の毛が掴まれ、ザクリという音と共に雨の中に

散った。背中まで伸ばした髪の毛が肩の辺りまで切られたのだ。

「な……何を……？」

頭が真つ白になりながら振り返って見ると、ユーザは短剣を手にしていて、その短剣をレイピアに向けた。驚愕に目を見開く。

「ユーザ……どうして？」

なぜ彼がこんなことをするのか。信じられない思いで見つめるが、ユーザは何も答えなかった。代わりに暗い闇の中にタイガーイエローの瞳だけがギラギラと光っていた。

振り上げられた短剣を見て、とっさに左に避ける。少しだけ右腕が切れ細い糸のように血が流れた。

殺……され……る？

本能的にそう感じた。

逃げなくては、殺されると。

レイピアは背中を向けて逃げ出した。

雨を含んだ服は何倍にも重くなってレイピアの動きを阻むが、それでも必死に逃げた。ユーザが追いかけてくる気配が背中越しに感じられる。

「嘘だ……何で……こんなことに……」

これは夢？

悪い夢……？

銀の指輪を見る。間違いなくその指輪はレイピアの左薬指で静かに輝いていた。どこからが現実でどこからが悪夢なのかレイピアには判別がつかなかった。

照れたように結婚を申し込んできたユーザ。

あれは・・・何だったのだろうか。

あれすらも夢だったのだろうか。

わからない。

何もかもわからなくなってしまうたけれど、ただひたすら走った。逃げるために。

しかしレイピアの足ではユーザから逃げきれはるはずもなかった。突然後ろから突き飛ばされたような衝撃が走り、雨でどろどろになった地面に勢い良く倒れこんだ。遅れて背中に痛みが生じる。

「アア……っ」

背中に突きたてられたナイフを肩越しに見つめて、悲鳴を上げた。傷口からは真っ赤な血が雨と共に地面へと流れ込んでいる。

「悪いな、レイピア」

レイピアが力を振り絞って顔を上げると、口元に薄笑いを浮かべているユーザの顔が見えた。

その笑みはどんな鋭いナイフよりもレイピアの心をずたずたに傷つけた。暗くてよく見えないけれど、きっとユーザの瞳は氷のように冷えきっているのだろう。

やがて彼は踵を返してゆっくりと歩き出した。

「ユ……ザ……」

なぜ？ どうして？

そう言いたいのに声は出なくて、右手を伸ばす。けれどその手は歩き出したユーザには届かない。

「……、……………」

背中を向けたままユーザは足を止めて何かをつぶやいた。

「聞こえ……な……い」

滝のような雨はユーザの言葉をかき消し、やがて姿すらも消し去った。

凍るように冷たい雨の中、レイピアは動くこともできずその場にうずくまってゆっくりと目を閉じた。

これは悪い夢なんだ……。

次に目が覚めた時にはきっとこの悪夢は終わっているのだ。

「悪い夢でも見たのか？」そう言って笑うユーザの姿がある。

そう信じたい……。

第10章 2年前の、あの日5

白い天井が視界に映る。

視界に映る全てのものは真っ白で、いつその頭の中さえも真っ白になってしまえたらいいのに、もう何も考えないで済むように。

レイピアが目を覚めたのは病院のベッドの上だった。背中に鈍く残っている痛み。切られて短くなった髪の毛。その2つの事実があの出来事が夢でないことを物語っていた。

夢だったらどんなに良かったか。

いつそのまま目を覚まさずにいられたらどんなに良かったか。

「目が覚めたようだね」

低い声がレイピアの耳をうった。

病室に入ってきたその初老の男は、白衣を着ていることから病院の医者であることに間違いない、しかしレイピアは虚ろな瞳で天井を見上げたまま答えようとはしなかった。

「君は3日間も眠りつづけていたんだよ」

医者はゆっくりと状況を説明し始めた。なるべくレイピアが傷つかないように、言葉を選びながら。

倒れているレイピアを発見したのはセレイラの街道を頻繁に利用している行商人だったこと。そして手術を終えた背中の傷は完全に跡が消えないということ。

静かに話を聞いていたレイピアはまるで魂が抜けてしまったよう

な声で医者に問い掛けた。

「ユーザ……どこ……?」

医者は首を傾げ、困ったように眉をひそめる。レイピアの体に刺さっていた短剣には『ユーザ』という名前が刻まれていた。おおよそ何が起こったのか予想のついていた医者はその問いに答えず、代わりに別の言葉を口にした。

「君に面会が来ているよ。女性の方なんだが……」

そう言っただけで扉の向こうに立っていた女性を招き入れ、自身は氣を利かせて部屋を後にする。レイピアが虚ろな瞳を向けるとそこに立っていたのはアルジェリカだった。真っ赤で毒々しい血のような色の花束を両手に抱え、ゆっくりとした足取りで近づいてくる。

「な……んで……」

なぜアルジェリカがここにいるのか。

目を見開き、唇を震わせた。

まるでレイピアの言いたいことが全てわかっているようにアルジェリカは口を開いた。

「お見舞いに、ね。それからユーザのことを聞きたいだろうと思っ
てね」

花束を半ば強引にレイピアに押し付けると、ベッドのすぐ側に置かれていた椅子に腰を下ろした。

「ユーザは今、私達の元にいるわ。もうあなたの元には帰らない」

その言葉に弾かれたようにレイピアはアルジェリカの方を見つめた。ユーザがなぜアルジェリカの元にいるのか、全く訳がわからない。

アルジェリカはくすつと口元を綻ばせると言葉を続けた。

「あなたは騙されていたのよ」

「私……が？ ……嘘、そんなことない……」

首を何度も横に振ってその言葉を否定する。

「どうしてそう言いきれるの？ じゃあなぜユーザはあなたを刺して居なくなってしまったのかしら。冒険者ギルドでかけられていたあなたの保険金を受け取って」

レイピアは凍りついたように動けなくなった。

「保険金を受け取った……？ ユーザが……？」

「そうよ。その顔だとやつと気がついてきたようね。さあ思い出してごらんさい、あなたに保険をかけたのは一体誰だったのかを」

記憶をたぐり寄せる。

レイピアに保険をかけた人、それは ユーザだった。

セレイラの街について冒険者ギルドに登録した際に、レイピアに冒険者保険に入ることを進めた。この保険に加入していれば怪我や死亡などいざという時に保障してくれるものだった。そしてレイピアは彼に言われるまま保険金の受取人をユーザにしていた。

「ち……違う！ ユーザは……違う！」

必死で否定をする。

認めたくない、認めてしまったらユーザと過ごした日々は全て嘘になって崩れ落ちてしまうから。考えないように何度も何度も首を振る。しかしアルジェリカの言葉が止まることはなかった。残酷なまでに冷え切った言葉をレイピアに向けた。

「そもそもユーザは本当にあなたを愛していた？」

「も、もちろん愛されていたわ……」

やさしかったユーザの瞳。

幸せだった日々。

あれが全部嘘偽りだったなんて信じられない。

「本当に？ 彼に愛していると……そう言われたの？」

レイピアは顔を強張らせた。

『愛している』

自らが言うことはあっても彼の方から1度も言われたことは無かった。ユーザと過ごした日々をいくら思い返しても、見つからなかった。

どんどん頭が混乱して、呼吸すら困難になる。

「言われたこと……ない……でも、でも……」

だんだん言葉は弱々しくなっていき、それ以上続けることができなくなってしまう。もう何も見つからなくて、わからなくて愛されていたと言い切ることができなかった。

「ユーザは誰も愛さないのよ。……そういう男」

そう言って目を細めるアルジェリカの瞳は切なげな色をしていた。ユーザは誰も愛さない、その中にはアルジェリカ自身も含まれているのだろう。

「私達はね、盗賊まがいのことをしたり、あなたみたいな世間知らずの小娘に保険金をかけて殺したり花街に売り飛ばしたりするのを仕事にしているの。……あなたは運が良かったわね」

運が良い。それはレイピアが殺されたり花街に売り飛ばされたりしなかったことを言っているのだろう。しかしアルジェリカはすぐにその言葉を訂正した。

「……でも、そうとも言えないわね。ユーザに愛されていると思いつながら死んだ方がよっぽど楽だったのに」

かわいそうにね、と同情の入った声でつぶやいた。

「もうユーザの事は忘れることね。そしてこれからは人を疑うことを覚えた方がいいわ。所詮この世の中は裏切りと憎しみばかり

頼れる者なんて誰一人いないのよ」

頼れる者なんて誰一人いない。

その言葉はレイピアの胸に深く刻み込まれ、同時に胸をえぐった。アルジェリカは懷から短剣を取り出すと、レイピアにそれを渡した。『ユーザ』の名前が刻まれた、レイピアの背中を刺したあの短剣だ。医者から受けとったのだろうか。

「これからどうするかはあなた自身で決めることね」

そう言い残すとアルジェリカは踵を反して病室を出て行った。

残されたレイピアはその短剣の柄を掴むと、のろのろとした動作で研ぎ澄まされた刃の部分を喉元にあてた。

もう何もかもがどうでも良くて、今はただ楽になりたかった。短剣で喉をかき切れば楽になれる。

アルジェリカと入れ違いになるように再び病室に戻って来た医者
はレイピアのその姿を見て、慌てて駆け寄り短剣を取り上げる。短
剣は硬くて真つ白な床の上に落ちてカシャン、と乾いた音を上げた。

「何を馬鹿なことを……っ！」

医者の叫びはレイピアの耳には入っておらず、白く曇ったガラス
のような虚ろな瞳で天井を見上げていた。
まるで魂を失ってしまった抜け殻のように。

「何で……私……生きてるの……」

レイピアは微かに聞き取れるか、取れないかの声でつぶやいた。

「何で……死ななかったの？ 私……」

いつそあの時、ユーザに刺された時に死んでしまえばよかった。
目が覚めなければよかったのに。
そうしたらこんな風に辛くて、心がバラバラになってしまいそう
な思いを抱えずに済んだのに。

何日も何日もベッドの上で過ごす生活が続いた。背中傷は癒え

たけれども、心の傷の方は癒えることがなかった。医者が言葉を語りかけても決して心も口も開かず、声すら失ってしまったのだとは思われるほどだった。

レイピアは病室に備え付けられていた鏡を手にとって自分の顔を覗き込んだ。

生気を無くした顔は青白く、頬がこけてしまっている。食事もなくに取らずガリガリに痩せ細った体。レイピアの姿はまるで別人のように変わってしまったていた。

誰なの、これは？

愕然とした思いで鏡の中の自分を見た。

いつから自分はこんな風に弱くなってしまったのだろうか。

屋敷に住んでいた頃は、独りぼちでも平気だったはずなのに。

母が亡くなつてからは特にそう。使用人はみんな良い人達ばかりだったが、やはりどこかよそよそしくて本気でレイピアに接してくれる人なんて誰１人いなかった。その中でも平気でいられた、独りぼちなんてちつとも寂しくなかったはずなのに。

１度覚えてしまったぬくもりはレイピアの心を弱くした。

ユーザというぬくもり。

「ふふ、アハハ、アハハハッ」

狂ったように、笑い出した。

何の疑いも持たずに、ただひたすらにユーザを信じていた自分があまりに滑稽で、惨めで悲しくなった。

最初出会った時に意図があったからこそレイピアを連れて行ってくれたという事実。本当はそのことに薄々気がついていたのに、気がつかなかったふりをしていただけなのかもしれない。初めて差し伸べられたその手があたたくて、離れてしまうのが恐くて。

馬鹿な自分 そう思うと同時にたまらなくユーザを殺した

いほど憎らしく思った。

自分が味わった思いをユーザにも味わわせてやりたい。

愛していたからこそその憎しみ。けれど憎しみながらも心の底ではいまだに彼を愛している自分がいて、それがたまらなく滑稽だった。ボロボロと目から涙が溢れ出す。

「あはは……っ、あ……うっ……うっ」

笑いながら、泣いた。

ユーザへの思いが涙と共にすべて流れてしまっただけと泣いた。

「お医者様、私 病院を出ようと思います」

「病院を……！？ 傷の具合からして充分可能なことだ。しかし……」

医者が危惧していることを見越したレイピアはくすつと笑った。

「大丈夫です、もうあんな馬鹿な真似はしません。私は……生きようと決めたから」

そう言い、真っ直ぐに医者を見たレイピアの瞳には決意のこもった強い光が宿っていた。病院に運ばれて来たときの弱々しく、絶望を抱いた瞳からは到底想像もつかないものだった。

レイピアのはっきりとした生への意欲を見た医者は納得したように頷き、それから静かに問い掛けた。

「……これから……どうするつもりだね？」

「私にはもう帰る場所がないから……。この街を出て、冒険者とし

て1人でやっていこうと思います」

寂しげな表情でつぶやいた。

「そのう……君が良ければこの病院で働けばいい。無理して行くことはないんだよ」

「……ありがとうございます。でも……この街は思い出が多すぎるから……、良い思い出も悪い思い出も。それに今は1人になりたい……」

1人になって冒険に出て、あれこれ考える暇がないくらいに働いて、全てを忘れてしまいたい。

「そうか……」

レイピアの固い決意を知った医者はその以上何も言わなかった。

荷物をまとめ、全ての仕度を終えたレイピアはセレイラの街の大噴水広場に足を運んだ。小さい子供連れの夫婦やカップル、友達同士の集まるその場所はこの街の象徴であり憩いの場でもあった。

レイピアとユーザがセレイラの街を訪れたときに初めて立ち寄った思い出の場所。そしてこれからのレイピアの出発場所でもある。

2カ月以上滞在することによって見慣れてしまったこの光景。もう2度とここに戻ってくることはないだろうと思うと少し胸が痛んだ。

「……強くなれるかしら？ 私……」

もう誰にも頼ることなく1人で歩いて行けるくらいに。
いつでも前を向いて生きていけるくらいに。

レイピアは真っ直ぐ天を仰いだ後、左手の薬指にはまった銀の指輪を引き抜き大噴水に向かって放り投げた。小さい水飛沫を上げて噴水に飛び込んだその銀の指輪は、すぐに水に呑みこまれて消えてしまった。

「さようなら……」

セレイラの街と、そしてユーザに別れを告げた。

第11章 過去との決別1

「それから後はずっと冒険に出ていて、今に至るわけ」

話を始めてからもうだいぶ時間が経ってしまったようで、時刻は深夜を回っていた。

全てを話し終えたレイピアはほう、と息をついた。その表情は悲しみや辛さを含んだものではなく無表情で、そこからは何の感情も伺うことができなかった。

スキルもまた無表情で、レイピアが話をしている間は口を挟むことなく静かにじつと聞き入っていた。

話を全て聞き終えたスキルは辛かったね、とかそういった同情的な言葉は一切言わず

「強いんだな、君は……」

と、それだけつぶやいた。

ライの事件によってレイピアの内に秘められていた心の傷の存在は知っていたけれど、まさかそこまで大きいものだとは思わなかった。その思いの強さにより自らの命を絶とうとまでしたレイピア。

最初出会った時、真っ直ぐ挑戦的に自分を睨みつけてきた彼女からは到底想像がつかないものだった。言い換えれば、その傷の存在すら他者に気付かせないほどにこの2年で立ち直ったというわけだ。いや、完全に立ち直ったとは言い切れないだろうが。

それでも強い、とそう思った。

「強い……？ さあ、どうかしら」

レイピアは曖昧に笑って肩をすくめる。

「……でも、そうね。1年ぐらい前からはもうほとんど思い出すことはなくなってきたの。忙しく動き回って何も考えないようにしてたから・・・駄目ね、慣れないお酒なんて飲むものじゃないわ」

喋り疲れたのかレイピアは毛布を被り、浅くため息をつく。

「少し疲れたみたい……もう眠りたい……」

「そうか……おやすみ」

すうすうと驚くほど早く寝息をたて始めたレイピアに、スキルはそつとつぶやいた。

一方、レイピアのテントの入り口前にはリグが佇んでいた。

レイピアの様子を見に来るつもりで来たリグは、スキルとレイピアの間に交わされていた会話が自然と耳に入ってしまったのである。盗み聞きするつもりは少しもなかったというのにその話の内容から耳が離せなくなっていて、とうとう最後まで聞いてしまったのだ。

リグはその話の内容に衝撃を受けていた。

そして団員達に嫌がらせを受けていたときに、辛くないのですか？と尋ねたリグに対してもっと辛いことを知ってるからこれぐらいなんともないと言って寂しそうに笑ったレイピアのことを思い出した。

あの時の彼女は、このことを言っていたのだ。

そう考えると同時に、たまらなく胸が押し潰されるような思いに捕らわれた。あまりにもかわいそうで、抱えているその傷が大きす

ぎて。

うなだれるように頭を俯かせていると、急にシャツとテントの幕が開いた。慌てて目元を拭い顔を上げると、驚いた顔のスキルと目が合った。まさか自分がこんなところにいるとは思いもしなかったような、そんな表情だ。

「あ……若君……」

「リグ……。お前……」

しかしすぐにスキルは表情を元に戻すと、レイピアのいるテントを気にしながら声をひそめ、場所を移すことを提案した。

2人はスキルのテントに移動し、リグはコーヒーを2人分入れると片方のカップを彼に手渡した。

「一体いつから盗み聞きが趣味になったんだ？」

そう言いながら呆れかえったような表情で受けとったコーヒーを飲むスキル。その言葉にリグは慌てる。

「ちち、違いますよ！ ただ、そのう……レイピアさんと若君の様子を見に来たら会話が偶然耳に入って……それで……」

偶然耳に入ったとは言ってもその後ずっと聞いていたわけで、結局のところ盗み聞きしたことに違いないので、ごによごによと最後の方は消え入りそうな声で言った。

スキルは頼杖をついた体勢でふーっと盛大にため息をつく。

「まあいいさ。聞いてしまったものは仕方ない」

「あの……それで若君……あなたはレイピアさんの話を聞いて、どうするつもりだったんですか？」

おずおずと問い掛ける。

「どうするかって？ 別にどうもしゃしない、今まで通りやるだけさ。話を聞いたのはただの興味本位だ。お前だって興味があつたからこそ盗み聞きしてたんだろう？」

「それは……まあ。でもあなたはそれだけじゃないでしょう？」

ある種の確信を含んでリグは言い切った。その態度に引つ掛かるものを感じたらしいスキルは眉をひそめる。

「妙に突つかかるな、何が言いたい？」

「若君は……そのう……レイピアさんが好きなんでしょう？」

リグの言葉にスキルはわずかに動揺したように見えた。

彼はこの考えに自信があつた。スキルはすぐに平静を装つて「そんなことあるわけないじゃないか」と肩をすくめて誤魔化したか、ほぼ間違いない。

スキルは良くも悪くも冷静すぎる所がある。血気盛んな団員達のまとめ役として時には仲裁に入ったり、冷静に物事を判断するように幼い頃からありつづけてきたのだから仕方のないことかもしれない。

そのスキルは今、レイピアとピンクダイヤモンドをめくってゲームをしている途中なのだ。相手に情を入れ込んでしまったらそこでゲームは公平ではなくなるわけだから、普通相手の過去など聞くものではない。ましてやそれが辛い過去ならなおさらのこと。それを侵してまで踏み込んでしまったのである、あの冷静なスキルが。

今までの彼からは考えられないことだった。

そしてもう1つ。

ライの事件でレイピアが怪我を負ったあの日、見てしまったのだ。レイピアの様子を見に行くと、テントにはすでに誰か人のいる気配がした。なぜかそのままテントの中に入るのがためらわれて、外からそつと中を覗くとスキルが彼女を看病している姿が目に入った。スキルがあんな風につきっきりで誰かの看病をしたことがあっただろうか、と首をひねらせているリグにさらに衝撃的な光景が飛び込んだ。

何やらうなされているように「ユーザ」とつぶやくレイピアの手を握り、スキルはしきりに「大丈夫、行かないよ」とささやいていた。

あれは あの表情は。

彼は気がついていたのだろうか？

レイピアを見つめるその瞳が切なげに細められていることを。それは愛しい人を心配する表情そのものだった。

スキルは少し苛立ったように口調を強めて言う。

「仮にリグの言うとおりだとして、それで俺に何を望むんだ？ 彼女の傷を癒せとでも言うつもりか？」

「それは ……」

言葉を濁らせるリグ。

「俺はカウンセラーじゃない。人の心をボロボロに傷つけることはできても、癒すことなんてできやしないよ。それはお前が1番良くわかってるはずだろう？ 最低の人間だからな、俺は」

スキルは薄く、自嘲気味に笑った。

恐らく、女性に対して本気になれない彼自身の悪癖のことを示しているのだろう。お互いそのことを同意して割り切っていた上での関係だとしても、途中からスキルを本気で愛してしまい泣いた女性は数多くいた。「別れたくない」「本当の恋人にして欲しい」と泣いてすがつても、1度彼女達への思いが冷めてしまったスキルは決してそれに答えようとはしなかった。

スキルと「ユーザ」は本質的に似ているのかもしれない。

誰も愛さない、誰も愛せないところが。

レイピアを本当の意味で癒せる者がいるとしたら それは彼女を本気で愛することのできる者だ。スキルは自分がそれに当てはまらないことを知っているから、レイピアに深く踏み込まないようになっているのだろうか？

彼の表情はいつもと変わらないものだったけれど、少なくともリグにとっては苦しそうに見えた。まるで自分の感情を心の奥底へ押し込めているような……。

リグは先程答えられなかった言葉の続きを口にした。

以前「レイピアさんに手を出してはいけませんよ」とスキルに釘をさしたことがある。けれど今は違う。

「私はあなたがレイピアさんを癒す、そうなることを望んでいますよ」

きっぱりと言った。

心からの願いだった。

第11章 過去との決別2

なぜ聞いてしまったんだろう。

尋ねるつもりなど少しもなかったというのに。あんな過去を聞いてしまった以上、自分はこれから同じようにレイピアに接することができるのだろうか？

『ユーザって……誰？』

気がついたら口から出ていた。

レイピアがその言葉に驚いた以上に自分自身が驚いていた。同時に心の奥底でユーザのことを気にしている自分がいることに気づかされた。

ユーザ。

レイピアの口からその名が紡がれるたびに胸の辺りがざわついた。彼女がユーザのことを深く愛していたという事実。死すら考えてしまうほどの強い思い。

心の中にユーザに対しての怒りや憎しみや不快感に似た感情が生まれる。

『嫉妬』

その感情を一言で言い表わすのにこれほど相応しい言葉はない。

スキルは自分の中に初めて生まれた嫉妬という感情に戸惑いを隠せないでいた。

ゲームの終わりまであと2週間。

2週間という期間は長いようで、短い。それこそあつという間に

過ぎ去ってしまう。

スキルはピンクダイヤモンドを手のひらの上に出して眺めた。本当はもう、このダイヤをレイピアに返してしまっても構わないと思っている。このダイヤにはあまり未練が残ってはいない。それよりもっと価値があつて、魅力的なものを見つけてしまったから。

レイピアという名の、女性を。

たぶん彼女がゲームに勝つたとしても自分達サーカスの団員を自警団に突き出すつもりはないだろう。それがわかっている以上、こんなゲームなどもうすでに何の意味もないのだ。それでも彼女にこのダイヤを返さない理由は只一つ。

返したら、レイピアは行ってしまうから。

ダイヤを取り返した彼女にとってこの場に留まる意味は何もない。彼女を離したくない、だからこそ絶対にダイヤを返すわけにはいかない。

彼女の心を癒すこともできないくせに……その資格さえないというのに、離したくないと思っている自分がいる。

……何て身勝手なんだろう。

いつそレイピアの心も何もかも無視して、無理矢理にでも彼女自身を手に入れてしまいたいとさえ思う時がある。しかしそんなことをしたらレイピアの心は今度こそ壊れてしまうかもしれない。あの深くて美しい青色の瞳は曇ったガラスのように何も映さなくなってしまう。怒ったり、笑ったりする表情を2度と見れなくなってしまうかもしれない。

それが怖い。

それとも自分のことを最低だと罵り、憎むだろうか？

それでも彼女が自分のことを忘れ去って冒険者として再び旅立ってしまうよりも、一生忘れられないくらいに憎んでくれた方がよっぽどいい。

そういう意味でユーザはレイピアの一生忘れられない男だ。
少し、うらやましさを感ずる。

スキルは深くため息をつく、ダイヤを再び胸元にしまい込んだ。
すでに慣れた重みのはずなのに、なぜかいつもよりもそのダイヤは
重く感じられた。

翌日。

スキルはサーカスの団長である父、ヴォイルに呼び出された。い
つも通り公演の打ち合わせのことかと思っていたスキルはヴォイル
の爆弾発言ともいえるその内容に衝撃を受けることになった。

「近々お前に団長の座を譲るっ！」

それがヴォイルが開口一番スキルに言った言葉だった。まるでこ
の玩具は飽きたからお前にやる、とでも言うような口調で。

元々破天荒な性格をしていて突拍子も無いことを言う父親だと思
っていたが、これにはスキルですら啞然としてしばらく言葉も出な
かった。

団長が交代するということはサーカスの大改革であると言える。
今まで行なってきたサーカスの演目は全て団長であるヴォイルによ
って決められてきた。ところがその権限がスキルに移り変わるとい
うことはまた一から演目や団員の役割を決め直さなくてはならない。
それを行うことによって初めて『ヴォイルのサーカス』から『スキ
ルのサーカス』に移り変わるのだ。

いつかはその時期が来るとは思っていたけれど、少なくとも今は
その時期ではないとスキルは考えていた。

また厄介なことを提案してくれたものだ、そう思い頭痛を堪える

ように片手で頭を押さえる。

「……父上……本気ですか？」

「本気かって？ 愚問だな、本気に決まってるだろーが。せっかくかわいい息子のスキル君に譲ってあげようっていうんだから好意はありがたく受けとりなさい」

「……それにしたって時期が早すぎやしませんか？」

「そんなことはないさ。俺だってお前ぐらいの年の時にはジジイに後を継がされたもんだ。最近体のあっちこっちが痛くてしょーがねえから隠居してのんびり生活したいんだよ」

そう言っつてヴォイルは肩を回してボキボキと骨を鳴らす。それからどこから取り出したのかパンフレットを2、3枚出すとひらひらとそれを振ってみせた。

「ふっふ、すでに夫婦で行く7日間の旅行計画を立てている最中だ。お前みたいなクソガキが出来ちまったから若い頃ソアラとラブラブ生活が送れなかったしなあ……」

「それは父上の責任でしょう……」

スキルがジト目で睨みつけるとヴォイルは「まゝそうとも言っかな」と言っつてカッカツカと快活に笑った。しかしすぐに真顔に戻すとガリガリと照れくさそうに頭を掻き始めた。

「……まあ、あれだな。ソアラには迷惑かけっぱなしだったからなあ……。せめてこれからは樂をさせてやりたいと……思ってる」

ヴォイルの目にははつきりとした決意の念が込められていた。

ソアラとヴォイルが出会ったのは彼が団長に就任して間もなくの頃だった。その頃はサーカスの知名度も低く、経済的にもかなり苦

しくて盗賊稼業で何とか全員の生活を繋いでいるといってもいい状況だった。それでも貴族の令嬢だったソアラは家から勘当同然になつてまでヴォイルを選んだ。サーカスの団長の妻ということで貴族の娘だったソアラには、体力的にも精神的にも苦勞は耐えなかっただろう。心の中で家に帰りたと思ったことは何度もあるだろう、

しかし今まで彼女が弱音を吐いたことは1度もなかった。スキルもそのことを充分承知しているし、母であるソアラには充分な休暇を取ってもらいたいと思っている。

だが。

「父上の考えはわかりますが……今は……まだその時期ではないと思います」

その含みのある言い方にすばやく察したヴォイルは納得したように頷く。

「おう。あの貴族のお嬢ちゃんのことだろ？ まあ、何も今すぐ団長になれって言ってるわけじゃない。嬢ちゃんの件が終わってからでもいいさ。……とりあえず考えといてくれや」

ヴォイルはあまり気の進まない様子のスキルの背中をバシバシと豪快に叩いた。

レイピアは少し後悔していた。

スキルに対して過去の話などするつもりはなかった。慣れない酒のせいで口が軽くなっていたのかもしれない。

しかし過去を話すことによって変わるかに思われた2人の関係は表面上ではたいした変化は見られなかった。

あの日から2日間お互いに変わらずダイヤをめぐって争った。

変わらないスキルの態度に安堵を覚えていた。同情されて手加減されるなんて屈辱なことこの上ないし、何としてでもピンクダイヤモンドは自分の実力で取り戻したかったからだ。

今日はレイピアは舞台衣装に身を包んで、シアと談笑しながら舞台裏で出番を待っている。シアはレイピアに気をつかっているのか、どことなく気にしている素振りがあったもののあの件については触れてくることはなかった。

「今日はいいい男いるかしら」

シアはくると自分の前髪を指にからめながらつぶやいた。これは彼女が毎回毎回ステージに立つ前に言っている言葉なのでレイピアは苦笑する。

「シアっていつもそればかりね」

「だってかっこいい人がいた方がやる気も出るってもんじゃない？あ、そうそう。レイピア昨日は休んでたから知らないだろうけどかっこいい人がいたのよ！」

両手を握りしめてうつとりと目を輝かせる。そんなシアにレイピアはジト目を向ける。

「あなた……ブレンはどうしたのよ？」

「レイピアってばわかってない！それとこれとは別なの」

拗ねたように頬を膨らませるシア。

「レイピアだって好きな人がいても、他にかっこいい人を見ちゃっ

たりするとドキツと胸がときめいたりするでしょ？」

「さあ、どうかしら……？」

「レイピアって一途なタイプ？ 真面目なんだからあ。……あゝあ、今日もあの人来てくれるといいなあ。なゝんて、無理だらうけどさ」

ぺろつと舌を出して微笑む。

シアはこういう何気ない仕草がひどく愛らしい。レイピアはこんな風に微笑むことができないのでうらやましいと思ってしまう。

「レイピアもさ、もうちょっと色々と周りに目を向けてみたらどうかな？ きつといい発見があるかもしれないわよ。ね？」

その言葉はこここのところあれこれと悩み、塞ぎこみがちなレイピアに対してのシアの精一杯の気遣いなのだろう。

「ありがとう、シア」

その心遣いに胸の辺りが温かくなるのを感じた。

自分の出番が回ってきたレイピアはステージに立ち、団員達のアシスト役として小道具を出して手渡したりせわしなく動き回った。

ステージに立った初めの頃はガチガチに緊張してほとんど観客席を見渡す余裕さえなかったのに、今ではすっかり余裕がある。今日も観客席は満員だった。

いい男いるかしら？？といったシアの言葉を思い出し、思わず頬がゆるむ。何気なく観客席1人1人顔を観察する。老若男女、さまざまな年齢層がいる。

その中で1人だけ席に座るでもなく腕を組んで立つ人の姿があった。なぜわざわざ席に座らずに立っているのだらうと不思議に思い、

自然と吸い込まれるようにレイピアの視線がそちらに向く。
そこで息を呑んだ。

その人に似ている誰かを、レイピアは知っていた。
立ち姿がひどく良く似ている。しかし……。

まさか、ね。

レイピアは一瞬、自分の脳裏に浮かんだその考えを慌てて振り払う。薄暗くてよく見えなかったから勘違いしているだけだろう。彼はレイピアがホットリープの出身であることを知っている。だが、こんなところにあの人がいるはずがないのだから。

レイピアは再び自分の役目に専念することにした。

今日の最終公演は夕方までだったので、それが終わる頃には辺りは薄暗くなり始めていた。

「お疲れさまー！」

「おう、お疲れ！」

口々に団員達が言葉を交わす中を進んでレイピアは衣装もそのままだに外に駆け出していた。ちょうどお客が出口に流れ出ていくところに出くわす。

目をこらしてじっとその流れを見つめていても、目当ての人物は見つからなかった。

やはり自分の勘違いだったのだ。

きっと過去のことを話していたから客の姿があの人と重なって見えてしまっただけなのだ。

……馬鹿馬鹿しい。

疲れているのかもしれない。早く休もう、そう思ってたかぶりを振るとレイピアは歩き出した。

団員達は舞台裏に詰め寄せているためテント街には人の気配が感じられなかった。とぼとぼとその中を歩き、井戸まで来ると水を汲み上げて一気に飲み干した。

水の冷たさにぼんやりとしていた意識が覚醒する。

その覚醒した意識は背後に迫った気配を察知した。振り返ろうとするが、すでに一足遅くその気配の主はレイピアの両腕ごと抱きしめていた。後ろに引きずられるようにして、そのまま地面に尻餅をつく。

「……っ!？」

とっさに何が起こったのか分からず半ば恐慌状態に陥りそうになる。両腕を動かして振りほどこうとしてもその拘束が緩むことはなく、代わりに低い声が耳をうった。

「ずっと探してた……」

レイピアはそのままの体勢で凍りついた。

もつずいふんと聞くことのなかった懐かしい声。

湿らせたばかりの喉が一気にカラカラに渴いていく。かろうじて首だけを動かしてその声の主を見る。

「久しぶりだな、レイピア」

もう見ることは一生ないと思っていたタイガージェロの瞳。褐色の肌、後ろで1本に束ねた漆黒の髪の毛。

見間違えるはずもない。やはりあの時観客席で見た人は……この男だったのだ。

ユーザ。

かつてレイピアが愛した男が、そこにいた。

第11章 過去との決別3

「……な……」

なぜ？

なぜあなたがここに？

そう言いたいのに言葉は出てこなくてただ掠れた声でうめくだけだった。頭の中は真っ白になって、体に力が入らない。

レイピアは目を見開いたまま、ただユーザの顔を見つめることしかできずにいた。

ユーザの姿は前よりも体つきが逞しくなったように感じる。2年前よりも少し短くなった髪の毛。何よりも印象が変わってしまったのはその顔。左の目元には短剣のようなもので切られた傷跡がある。彼はレイピアと目が合うとにやりと笑った。獲物を追い詰めた野性の獣のような笑みで。

その笑みはレイピアに懐かしさよりも恐怖を与えた。

ユーザがここに来た理由。

そんなことは考えればすぐにわかる。なぜもつと早くに気がつかなかったんだろう。

彼は自分を殺しに来たのだ。あの時できなかった止めを刺しに。

手足が痺れ、体が震える。

「……は、離して……っ」

レイピアは両腕でもがき、ユーザの拘束を解くとその体を思いつ

きり突き飛ばした。けれども彼女の力ではたいしたダメージにはならず、少しよろめく程度にしかならなかった。何とか震える膝を立てて、ゆっくりと後ずさりしながら彼との距離を取る。

「わ……私を殺しに来たの……？」

声が震え、まるで別人のような声になる。

その問いに微かにユーザの瞳が暗くなったような気がした。

「馬鹿、違う。迎えに来たんだ」

そう言ってレイピアの前にゆっくりと手を差し伸べる。

『来いよ、レイピア』

あの日、レイピアの前に手を差し伸べてくれたユーザの姿と重なる。一瞬、時が戻ったのかという錯覚さえ起こる。そんなことあるはずがないのに。あの頃には決して戻れないのだから。

「迎えに……？　嘘、嘘ばかり。私は……そんなに愚かじゃない。何度も騙せると思わないで……」

言葉とは裏腹に、口調は限りなく弱々しかった。ユーザは焦れたように半ば強引にレイピアの手を取り自らの方へ引き寄せようとする。

「離せっ！　私に……私に触らないで……！」

レイピアはその手を振りほどき、駆け出した。

同じだ。

あの時と全く同じ。

違うのは雨が降っていないことと、ユーザがまだ短剣を手にしていないことだけ。しかしそれも時間の問題だった。彼の腰のベルトには短剣と長剣が1本ずつ差し入れてあった。抜くのは容易いだろう。

また何もできないまま、背中を刺されるのだろうか？ いや、今度こそ心臓を刺されるに違いない。

嫌だ。

そんなのは嫌だ！

自分はもうあの時のように何が起きたのかもわからず、ただ震えて逃げ回っているだけの人間ではないはずだ。

このままでは駄目。

いつまでも逃げていては……駄目だ。立ち向かわなくては……。

できるのだろうか、彼を相手にそんなことが。

いや、やらなくてはならない。

レイピアは荒い息のまま近くのテントに滑り込んだ。誰のテントなのか考えている余裕もなく、中に入ると武器になるものを探した。テーブルの上に果物と、そしてナイフが置かれてあるのを見つけずばやくそれを手にする。

追いかけるようにしてテントの中に入ってきたユーザに、真っ直ぐそのナイフを向ける。あくまでも果物を切るためのものだから戦闘用には向かないけれど、それでも殺傷能力は充分ある。

「何のつもりだ？」

ナイフを目にしたユーザは険しい表情をつくる。

「これ以上近づかないで、外へ出て。そうしなければ……刺すわ。本気よ……」

「やめろ、レイピア。手元が震えてるぜ？」

そう指摘されカツと頬が熱くなる。

「うるさい！……早く……っ今すぐ出て！」

手にしたナイフに力を込める。レイピアは本気だった。これ以上ユーザが近づくとつもりなら刺すことも躊躇いはなかった。

胸の中にどす黒い感情が生まれる。

奥底にしまい込んでいた感情、憎しみだ。

復讐のためにユーザを探した時期もあった。自分が傷つけられた分だけ彼にも同じ思いをさせるために。けれどそれがどんなに虚しいことかわかっていたから、彼を追いかけることを諦めた。彼のことも、胸にチリチリと疼く憎しみも忘れてしまおうと思っていた。それなのに。

ユーザは両手を上げて降参の印を示すと入り口に向かって歩き出した。その後にレイピアも続く。これからどうするべきなのか考えているとふいに足を止め、振り返ったユーザが口を開いた。

「変わったなレイピア」

「……変わった？ 私か？」

じつとレイピアを凝視するように開いていたタイガーイエローの瞳がゆっくりと細まった。

「ああ、綺麗になった」

ユーザの言葉にわずかにレイピアは動揺し、ナイフを持つ手が震えた。その隙を見逃すような男ではなく、すばやくナイフを片手で

抑えた。カランと音を立ててナイフが地面に落ちる。そして空いている方の片手で銀の髪の毛を一房掴んだ。あの時ユーザに切られて短くなった髪の毛は2年の歳月を経て再び背中の辺りまで伸びていた。

髪の毛を梳き上げる仕草は残酷なまでにやさしかった。キリ、と唇を噛み締めてタイガージェロの瞳を睨みつけた。

「それに、昔はこんな顔しなかった」

ユーザの手が髪の毛から頬へと移動する。

2年の歳月でユーザの容姿が変わったように、レイピアもまた変わった。

幼さを残した無垢な顔立ちに酸いも甘いも知り尽くした成熟した女性のものへと変わっていたし、性格もまた同様だった。

冷やかに相手を笑い飛ばすことは難なくできても、はにかむようにして笑うことなどもうできそうにないと自分自身自覚していた。

「そうでしょうね、あなたの知っているレイピアはこんな風に憎しみに満ちた表情なんてしなかったでしょうね」

ユーザの手を振り払うと、吐き捨てるようにして言い放った。
感情が高ぶり、激情が溢れる。

「……変わらなかったら生きていけなかったのよ！ あなたを憎んで、憎んで、憎まないと生きていけなかったのよ！！」

そこまで言うとは幾分か冷静さを取り戻したらしいレイピアは、声のトーンを落として言葉を続ける。

「今さら……何の用があるっていうの。私を殺して保険金を取る？
それとも人質にして身代金でも要求するおつもり？」

その声は冷ややかなものだった。

ユーザの瞳が暗くなる。傷ついた少年のようにひどく幼く見えた。

「レイピア……」

「今度はそうはいかない……あなたの思い通りになんてさせない……
っ！」

レイピアはすばやくナイフを拾い上げると、そのまま彼に向けて一閃する。しかし寸での所で避けられてしまい僅かに服を裂く程度だった。

「剣を抜きなさいユーザ！ 私だってただでは殺されてやらないわ」

レイピアに剣を教えたのはユーザだ。

いくつもの実戦を積み上げ何人もの人間を斬り殺してきた彼と、レイピアの腕では天と地ほどの差がある。その上レイピアは右手がまだ完治していない状態なのだ。勝ち目など最初からあるはずがない。

それでもこのまま大人しくしているわけにはいかなかった。

「俺の話聞いて言っても……無理みたいだな」

その様子を見て、諦めたようにため息をつく。ユーザは腰の短剣を引き抜き、真っ直ぐレイピアの方に向けた。

「俺が手加減できない性格なの……知ってるよなア？ レイピア。
覚悟は、いいのか？」

一言、一言区切るようにしてゆっくりと言う。

短剣を手にしたユーザの顔つきが変わる。野性の狼のような獰猛な顔。

背筋に恐怖が走り、ごくりと白い喉が上下する。それでも瞳だけは真っ直ぐ睨みつけ、ユーザに動揺を気取られないようにした。

「もちろんよ。私と戦って、勝ったら殺すなりなんなり好きにする
といいわ」

「そうかい。俺もそっちの方が話が早くていい」

短剣の切っ先をペロリと舐めると薄く笑った。

「行くぞ！」

ひゅつと空気が切れる。

次の瞬間には刃と刃がぶつかり合うキンという金属音。レイピアは最初の一撃をナイフによって辛うじて受け止めたが、勢いが殺しきれずに衝撃を負い2、3歩後退する。テントの中はあまり動けるスペースがなくこの2、3歩はかなり不利になる。

「そんなもんか！？ お前の腕は！」

手加減はできないと言いつつ、彼が本気を出していないことは明白だった。彼の腕ならば最初の一撃でレイピアを吹き飛ばすことなど軽いだろう。けれどユーザはあえてそれをしなかった。レイピアの攻撃を最小限度の力で受け流し、弱った獲物を相手にするようにじりじりと追い詰めていく。

そんな状態だったから真っ先に息があがったのはレイピアだった。

「まだよっ！」

荒い息をしながらもナイフを握る手は決して緩めなかった。しかし次にレイピアが攻撃をしかけた瞬間、右腕が疼いた。痛みに似た疼き。ライによって負った怪我の部分。反射的に右腕は痛みを和らげるためにその動きを鈍らせる。ナイフの動きもそれに伴って鈍る。

「遅いっ！」

間合いを一気に詰めたユーザは短剣の柄でナイフを弾き飛ばすと、そのままレイピアの腕をからめとって体ごと地面に叩きつけた。

「きゃあ！」

受身を取ることもできずまともに背中から叩きつけられ、一瞬呼吸が止まる。

「ゲホ……っ」

体を折り曲げるようにして咳き込む。

レイピアの手から離れたナイフはカラカラと地面を滑るようにして手の届かないところまで行ってしまった。なんとか体を起こそうと試みたが、ユーザによってあっさりと押さえつけられ適わなかった。

「俺の、勝ちだな」

そう言って薄く笑った。

タイガーイエローの瞳が薄暗いテントの中でさえギラギラと光っていた。

「うつ……」

レイピアの目から涙がボロボロと溢れ出す。

ぜえぜえと荒い息をしているレイピアに対してユーザは呼吸一つ乱していない。傷一つつけるどころか、呼吸すら乱させることができなかった。

悔しかった。

何一つ彼に適わないのだ。

彼と離れてから約2年、1人で生きていけるように必死になって剣の腕をあげた。それ以外レイピアがすりつくものは何もなかったから。全てを忘れるようにそれに打ち込んだ。

それなのに、この結果。

惨めでたまらなかった。

「俺が憎いか？」

ユーザはレイピアを組み敷いた体制のまま静かに問い掛けた。

「憎い……憎いわ」

一瞬ユーザの瞳が揺らいだように見えた。

しかしすぐに心底可笑しそうにくく、と喉の奥で笑った。

「何が……おかしいの」

「俺を……愛しているからこそ憎いんだろう？」

その言葉にレイピアは弾かれたようにユーザを睨みつける。

「何を言って……っ！愛してなんて！愛してなんていない！」

胸にあるのはギリギリと締め付けるような憎悪だ。それ以外の感情などあるはずがない。

「そんなくだらない質問をするために来たの？ 違うでしょう。……さっさと殺しなさい」

レイピアは全てを諦めたようにだらりと両手の力を抜いた。目を固く閉じ、やがてくる心臓への衝撃に備えた。

私が死んだら悲しむ人がいるかしら？

そう考えて、リグとシアとソアラなら涙を流して悲しんでくれるかもしれないと思った。

あの人は？

スキルはどうだろう。

少しは悲しむだろうか？ いや、もしかしたら心の奥で喜ぶかもしれない。ダイヤを取り返そうとしつこいぐらいに追っかけてくる女がいなくなるのだから。そう考えたらひどく胸が痛んで、潰れそうになった。

つー、と溜まった涙が流れる。

その涙が拭い取られる。

不審に思ったレイピアがわずかに目を開けるが視界は覆われている。近づいたユーザの顔はそのままレイピアの唇を塞いだ。

「……っ！」

「……殺すために来たわけじゃない」

唇を離したユーザが静かに言葉を紡いだ。

「……迎えに来たんだ……」

レイピアは目を見開く。

唇を震わせて掠れた声を出す。

「嘘だ！ そんなの……そんな嘘に騙されないわ……今さら……今さらっ……！」

首筋に下りた唇がレイピアの言葉を遮る。ユーザの意図するところを察したレイピアが手足を動かし抵抗する。

「やめてっ！ 離せっ！ 離しなさいユーザ」

レイピアの抵抗も虚しくユーザは首筋を吸い上げ、白い肌に赤い痕を残す。まるで自分のものであることを主張しているかのような印。

「レイピア……」

切なげな吐息をもらすとレイピアを抱きしめた。

「そこまでしておいてもらおうか」

冷やかかで、それでいてぞっとするような声音が背後から響いた。ユーザが振り返ると、そこにはテントの幕をすくい上げるようにして手に持ったスキルが立っていた。

第11章 過去との決別4

「スキル……ル……」

レイピアは驚愕に目を見開く。

彼が来るとは思ってもいなかった。

助けに来てくれた？ そう思い安堵するが、それも一瞬のこと。彼の顔を見た瞬間にぞくりと恐怖が走った。

スキルの表情は無表情なものだったが、静かな怒りの気配がピリピリと空気を通して伝わってくる。少なくともレイピアは彼がこんな風に怒っているのを見たことがなかった。

「レイピアを離せ」

スキルの視線は真っ直ぐユーザの方を向いていた。

公演が終了し、テントで椅子に腰掛け一息ついていたスキルの耳に鈍い音が届いた。地面に体を打ちつけたような音。すぐ後に掠れたような悲鳴が上がった。その悲鳴は間違えるはずもない、レイピアのものだった。

「何……だ？」

ドクドクと心臓が早鐘をうつ。

嫌な予感を覚えたスキルは勢い良く立ち上がると、椅子が派手に床に転がってしまったことにも構うことなく駆け出していた。

音のするテントの幕を開いて、固まった。知らない男がレイピアを組み敷いて争っている。いや、スキルはこの男を知っていた。

ユーザだ。

目の前の男はレイピアの語ったユーザの容姿に合致するし、何より直感的にそう感じた。

「そこまでしておいてもらおうか」

そこで初めてスキルの存在に気付いたユーザが振り返る。タイガ―イエローの瞳と目が合うが、すぐにレイピアの無事を確認するために彼女に視線を滑らす。

顔を青ざめさせているが無事だ、怪我もしていない。視線がレイピアの顔から首筋に下りる。

白い肌に残った赤い痕。

その痕を認めた瞬間カツと胃の辺りが熱くなった。

「レイピアを離せ」

再びユーザと視線がぶつかる。お互い一步も譲らないとばかりに睨みあう。

ユーザは抱きしめていたレイピアの体をゆっくり離すと、向き合う形でスキルと対峙した。

「お前は？」

「……スキル。ここのサーカス団の人間だ」

「サーカス団の人間、ね」

ユーザはつまらなそうに鼻を鳴らすと再びレイピアを引き寄せた。ピクリ、と微かにスキルの眉が動く。

「見ての通り俺はレイピアに用事がある。気を利かせて席を外せよ」
「彼女が嫌がつているようにしか見えなくてね。放っておくわけにはいかない」

「俺はレイピアに剣で勝った。それで充分だ」

その言葉を聞いた瞬間、スキルの顔が陰しくなった。

「だったら選手交代だ、今度は俺が相手をする。あんたがレイピアに用事があるように俺にも譲れない用事がある。彼女を渡すわけにはいかない」

「ふ……ん。……成る程……」

反対にユーザは口元を歪めおもしろそうに笑う。

「そういうことか。尚更こっちとしてもレイピアを譲るわけにはいかねえな」

タイガーイエローの瞳がギリリと光る。腰に差した長剣に手をかけると素早く引き抜きスキルの喉元、わずかに切れるか切れないかの位置に鋭くなった切っ先を向けた。

レイピアが声鳴き悲鳴を上げる。顔を青ざめさせ、膝を震わせる。しかし剣を突きつけられた当の本人は眉をわずかにひそめただけで微動だにしなかった。

「ほう、微動だにしないか。その根性はたいしたものだ。いや、単に動けなかったただけか？」

今ひとつスキルの力量を見極めることができず、不満そうに口元を歪める。

「ずいぶん荒っぽい挨拶だな。こちらとしても礼儀に法った挨拶を返さなくては失礼にあたるというものだ」

「くく。おもしろい、やってみるよ。決まりだな　剣で白黒つけようぜ？」

テントの入り口に歩き出したユーザがくい、と人差し指を曲げてスキルを招く。外で勝負をつけようと言っているのだ。確かにこの狭いテント内では行動に制約がありすぎる。お互い本来の力を出すことはできないだろう。スキルは険しい顔のまま頷くとユーザの後に続いた。

それまでショックで呆然としていたレイピアはハッと我に返ると慌ててスキルの後を追いかけて、その袖を掴んで引き止めた。

「無茶よ！　あなた、これから自分が何をしようとしてるのかわかっているの！？　ユーザは剣の腕で生活してきたのよ。敵うわけがないじゃない。大体なぜあなたがこんな馬鹿げたことをする必要があるの？」

スキルは足を止め、レイピアの方に顔だけ向けると意味ありげに微笑んだ。

「なぜ、ね。さあどうしてだろうね？　あいつが気に入らないから、ゲームに決着がつかないうちに君を連れて行かせるわけにはいいかない、このどちらにも当てはまりそうで……実はそうじゃない」

謎かけのような言葉をつぶやいた。彼の言っていることが何を示しているのかわからなくてレイピアは眉をひそめた。

「意味が……わからないわ」

「それじゃあ考えておくといい。時間はたっぷりありそうだから」

再びスキルは歩き出した。

井戸のある中央広場まで来ると、見知らぬ剣を持った男とスキルの物々しい雰囲気を感じ取った団員達が遠巻きに見つめながらざわめいていた。

「俺達が見せ物ってわけかい？」

ユーザは自らの肩にトントン剣を押し当てながら鼻を鳴らした。しかしその表情は鬱陶しいというよりも面白がっている感がある。

「連中は暇だからな。話題に飢えているのさ。おい、リグ」

団員達の中にうろたえているリグを見つけ、呼びつける。

「わ、若君……」

「剣を持ってきたくれ。刃を潰してないやつがあつただろう？」

しばらくしてリグが戻ってくるとその手に剣が握られていた。サカスの演目用に買い、まだ刃を潰していないものだった。

カトラスと呼ばれる長さ60cmほどのサーベル型の剣。それは元々船乗り用のもので、船上での戦闘を想定されて比較的短く、丈夫に作られている。

スキルは剣を受けとるとその重さを確かめるように上下に動かしてみた。

「丁度いい重さだ」

刀身を鞘から引き抜き、眺める。

レイピアは再び駆け寄り、スキルを引き止めようとする。

「やめて……本当に殺されるわよ！」

「嬉しいね。心配してくれるの？」

緊迫した雰囲気の中ですらスキルはいつもの涼しげな表情を崩してはいなかった。

「馬鹿！ 何言ってるのよ……茶化さないで。あなたはユーザの腕を知らないからそんな余裕でいられるんだわ！」

「それを言うなら君だって俺の腕を知らないだろう？」

「あなたの腕……？」

スキルの腕前など知るはずもなかった。剣を握ったところなど見たことがなかったし、第一前に自分自身で「盗賊は剣を振り回したりしないのさ。強盗になってしまっただろう」と言っていた。剣を避ける素早さで言えば天下一品だろう。しかし避けているだけでは到底ユーザに敵うはずがない。

「君はどちらを望んでる？ 俺が勝つか、ユーザが勝つか」

「……え？」

レイピアが一瞬答えを詰まらせると、スキルの碧色の瞳が微かに翳りを帯び、唇の端が上がったように見えた。

とん、と肩を押される。それは決して強くない力だったが、レイピアはヨロリとよろけ、2、3歩後ろに下がったところをリグに受け止められる。

「頼んだぞ、リグ」

決意を秘めたような口調だった。

涼しげな表情から真剣な表情へと変わる。そして背を向けて歩き出した。

リグにも止められる雰囲気ではないのがわかっているのだろう。無言で頷いてレイピアの肩を支えた。

「リグ、お願い……2人を止めて！」

リグはそのレイピアの懇願に対して無言で首を振った。

「どちらか死んでしまいかもしれないのよ!？」

「……私達には止められないんです。止められないんですよ、レイピアさん」

スキルもユーザもお互いに譲れないものがある。

一步も譲れないし、譲る気もない。だからこそ、戦う。戦うことでしか決着をつけることができない。

男の意地というやつだ。

第三者が口を挟めるはずなどない。

「そんな……」

動かないリグを見てとうとうレイピアは諦めた。そして唇を引き結び、ユーザと対峙するように立つスキルに不安げな瞳を向けた。

第11章 過去との決別5

2人は剣を構えて対峙した。相手の最初の出方を伺うようにお互い睨みあう。

長い沈黙が続き、焦れて最初に動いたのはユーザだった。

「せいぜい楽しませてくれよ？」

地面を蹴り上げ一気に間合いを詰めてくる。唸りを上げて風が切れ、スキルは体をわずかに左に傾けることでその一撃を交わした。速い。

しかしユーザがこの最初の一撃に本気を出していないことは明らかだった。恐らくスキルの腕がいかほどか確かめているところなのだろう。

ニイツとユーザの口の端が上がる。

よく避けたな　そう語っているように見えた。

腰をひねり続けざまに剣を叩き込んでくる。そう、叩き込んでくるといふ表現が最も相応しいものと思った　つまり攻撃が重い。カトラスで受け止めるものの、そのまま体ごと数歩飛ばされる。柄を握る手が痺れる。それでも剣ごと叩き斬られなかっただけ幸いというべきだろう。

やはり、強い。

一筋縄ではいかないようだ。

「ほお。俺の剣を止めたか」

「まあね。これでも少しは剣を使ったことがあるんだ」

スキルの剣の腕は盗みのためにあるわけではなく、純粹に護身用

のためにある。旅芸人である彼らが街から街への移動中に山賊の類に襲われることはたびたびある。幼い頃から自分の身と、団員達を守るためにとヴォイルに鍛えられていた。

あくまでも護身用のためだからあまり戦い慣れしていない。

なんとかユーザの攻撃を巧みに剣で受け流すが、避けきれずに服が何箇所か切れ、腕や足にも細かい傷ができた。

それはたいした出血量にはならないが長期戦になればなるほど、じわじわとスキルの体力を奪っていく。

「どうした？ 守ってばかりいないで仕掛けてきたらどうだ」

何度目か剣を交わした後、ユーザが挑発めいた言葉を放つ。

冗談じゃない。

スキルは内心で舌打ちをしていた。

久々に触れた剣の感触に慣れるのと、ユーザの斬撃を防ぐだけで精一杯の状態なのだ。

だが、負けるわけにはいかない。

渡すわけにはいかない。

内心の焦りを悟られないように表情だけは冷静を装う。

「それじゃあ、お言葉に甘えてっ！」

お互い一步も譲るまいと鏑迫り合っていた剣をはじき、その勢いに乗って一閃する。素早いスキルだからこそできる芸当。

ユーザの手になっている剣はロングソード。両刃の剣だ。

スキルの手にしているカトラスはロングソードよりも刀身が短い。そのため余計に間合いを詰めなくてはならないが、重さがない分非常に扱いやすいものだった。

力と鋭さを兼ね備えたユーザの腕に対しスキルは素早さと技を生

かしたものの。彼の特性をより生かす上でもカトラスは非常に役立った。

キン、と乾いた音が上がる。
微かな手ごたえ。

「……ッ！」

ユーザの首にかかっていた金の鎖が切れて床に散った。鎖で切れたのか、剣で切れたのか判別がつかなかったがその頬には糸のような血が流れる。

手の甲で無造作に拭くとユーザは獰猛な笑みを浮かべた。それはまるで最高の獲物を目の前にした狼のようだ。

「クク、おもしれえ……」

不気味なほどに楽しげな声。

つー、とスキルの頬に汗が流れ落ちた。

レイピアは両手を胸の前で合わせ、祈るようにその光景を見つめていた。

「どうして……こんなことに……」

唇を噛み締める。

スキルの動きは驚くほど滑らかだ。巧みにユーザの攻撃をかわし、自らも仕掛けている。両者の腕前はほぼ互角。正直スキルがこれほどまでの腕前だとは思わなかった。

いや、レイピアは彼の腕前を知っていた。

ピンクダイヤモンドを取り返そうとしても決して彼は隙を見せることがなかった。それが何よりの証拠ではないか。

きつと心のどこかで認めたくなかったのだ。

スキルが強いという事実。

決して自分が適わないという事実を。

スキルの腕前が相当なものであることはわかったけれど、レイピアの心中が安らぐはずもなかった。時に息を呑み、時に短く悲鳴を上げながら戦いを見つめる。

両者はお互いに斬撃を繰り返す隙が生じるのを狙いあう。激しい金属音。このまま決着がつかないのではないかと思い始めたその時、スキルの体がふいに傾いた。

バランスを崩したらしい。あの時断ち切ったユーザの金の鎖に足を取られたのだ。

レイピアにはその光景が信じられなかった。

いつも飄々として、完璧すぎるくらいに完璧なスキルが自らが断ち切った鎖に足を取られる光景など。

ユーザが薄く笑い、スキルに剣を向ける。

殺されてしまう。

スキルが。

そう思ったら体が動いていた。

「ユーザアア！！」

レイピアはナイフを握りしめた手を突き出し、そのまま抱きつくような形でユーザの元に飛び込んだ。そしてその体　　わき腹の辺

りにナイフを突き立てていた。

決して慣れることのない肉を裂く嫌な感触。すぐ後に温かい、真つ赤な液体が溢れ出してレイピアの手を染めた。

青いレイピアの瞳にユーザの驚愕に見開いた瞳が映りこむ。

彼の瞳には深い愁いの色が浮かんでいた。

「レイ……ピア……」

うめくような掠れた声が耳をうつ。

ユーザは膝をつき、ゆっくりと力が抜けるように地面に倒れ込んだ。

「あ……あ……」

呆然とレイピアは自分の真つ赤になった手を眺め、その手を自らの頬に当てた。べっとりとした血がつく。頭が真つ白になる。

崩れ落ちるように地面に座り込み、ユーザの体から流れる血を見つめていた。どんどんと流れ、地面に染み込んでいく血。まるで地面が貪欲なまでに彼の血を吸い取っているようにさえ見える。

刺すつもりなどなかった。

スキルが危ないと思ったら体が自然に動いていたのだ。けれど、心のどこかでこうなることを望んでいたのかもしれない。ずつと、復讐を果たしたかったのかもしれない。自分が味わった痛みを彼にも味わわせてやりたくて。

だがこの苦々しさは何だろう？ 後に残ったものは晴れやかな気持ちではなく、胸を締め付けるほどの後悔の念だった。

ナイフを抜かなくては……。

このままだと、ユーザが……。

のろのろとした動作でユーザの体に刺さっているままのナイフに手を伸ばした。しかし、触れることができなかった。

「引き抜くなっ！」

駆け寄って来たスキルがレイピアの手首を掴み、行動を阻んだのだ。

「だって……ユーザが……死、死んじゃう……っ」

荒い息づかい。

顔色を青ざめさせ力なくうずくまるユーザ。傷の具合はわからないけれど、このまま放っておいたら死ぬかもしれない。

「離して。離してったら！ナイフを……ナイフを！」

激しい混乱によって半ば恐慌状態に陥ったレイピアはスキルの手を振り払おうと、もがき激しく暴れる。

「レイピア！」

鋭い叱咤の声にビクリを身を震わせる。焦点の定まらなかった瞳がそこでようやく落ち着きを取りもどした。

「わからないのか！？ このナイフが栓の役目をしている。引き抜くと一気に血が吹き出すぞ。このまま医者到着を待つんだ！」

鋭くそう言い放つと自らの上着を脱ぎ、ユーザの出血している傷口を覆うようにして被せる。団員達に指示し、あるだけの布を集め

させるとその上に次々と覆い被せ、手際よく応急処置を施していった。

その間、レイピアはどうすることもできずただ震えて見守ることにしかなかった。

一通り応急処置が終わるとスキルはレイピアの方に顔を向け、ゆっくりと、言い聞かせるような口調で言った。

「大丈夫だ、ユーザは死なない」

落ち着いた、耳に心地よく響く声。

その声に励まされるようにレイピアはもう一度ユーザに目を向けた。息づかいが荒いもののちゃんと体が呼吸のため上下している。

安堵の念が押し寄せる。スッと視界が暗くなるのとそれはほぼ同時だった。

第11章 過去との決別6

あの後駆けつけた医者によって手術を施されたユーザは大事には至らなかった。鍛えられた体だったためナイフはそれほど深く彼を傷つけなかったのである。

一夜明けた今はスキルのテントで眠っている。気を失ったレイピアもまた自分のテントで休息をとっていた。

テントに入ってきたスキルを一瞥し、少し顔を俯かせてレイピアは尋ねた。

「ユーザは……？」

「無事だよ。今は俺のテントで眠ってる」

「……そう……」

ホッと安堵の表情をつくったように見えたがそれも一瞬のこと、すぐにポツリと抑揚なくつぶやいた。

それきりレイピアは押し黙り、毛布を被り頭からすっぽりと顔を隠す。

「ユーザは、これから旅に出ると言っている」

ピクリ、とわずかにレイピアの肩が動く。それを横目で見ながらスキルは言葉を続ける。

「会わないの？」

「今さら会って、話することなんてないわ。あんな裏切り者に会

ってどうしろっていうのよ！ あの人には2年前私を殺そうとしたのよ」

はじかれたように顔を上げスキルを睨みつける。彼はそれを正面から受け止め、なおも静かに言葉を続けた。

「逃げるの？」

「……ッ！？」

「そうやって逃げて、一生ユーザに怯えつづけるんだ？」

そのスキルの静かな問いはレイピアの胸を貫くのに充分すぎるほどだった。

なぜ彼はユーザに会えなどと言うのか。

わかっているくせに。レイピアが彼に会いたくないと思う理由を知りながらあえてそれをしるという。

みるみるうちに顔を怒りに染める。

「……ッ！ あなたには……あなたにはわからないわよ。愛していた恋人に裏切られて傷つけられることの苦しさが！ ユーザなんて会わない。会うつもりなんてない！」

「もし、ユーザが裏切ったのに理由があったとしても？」

「そんなの決まってる！ お金のためよ。それ以外に何があるっていの！？」

これ以上は聞きたくないと言わんばかりに言葉を荒げ、吐き捨てるように言い放つ。

「それは君がユーザに直接聞くべきことだ。ただ、俺に言えるのはユーザは2年前のあの時君を殺すつもりはなかったということだけさ」

しん、とテントの中が静寂に包まれる。

「殺すつもりが……なかった？」

口の中がカラカラになり、何とか掠れた声をしぼりだした。

「そんな嘘、信じない。信じられるわけがない！」

「もし殺す気だったら背中ではなく胸を刺していた。戦ってみてわかった。あいつ程の腕があつたら君を殺すのにまず仕損じることはない」

「……………ッ！」

「例え間違つて背中を刺してしまったとしよう。なぜあいつは短剣を引き抜かなかった？ 君の背中に刺さったままで放つておいた？」

昨日の光景がよみがえる。

ユーザの体に刺さったナイフを引き抜こうとした時、

『引き抜くなッ！』

そう言つてスキルはレイピアの腕を押さえ込んだ。

もしあの時、ナイフを引き抜いていたら？ 彼は出血多量で死んでいたかもしれない。

もし2年前のあの時、背中に刺さったナイフをユーザが引き抜いていたら？

彼がその結末を予想できないはずがない。

確実に殺すためにその方法を選ばないはずがない。

「あ……………」

のろのろとベッドから起き上がる。

「なぜわざわざ発見されやすい街道近くで君を刺した？」

「あ……あ……」

目を見開き、震える唇を押さえて呆然と立ち尽くす。

「本当……に？ あの人には本当に私を殺すつもりじゃなかった……？」

スキルはその問いには答えず、代わりに別の言葉を口にした。

「このまま会わずにいたら、きっと後悔する」

その言葉が、引き金。

気がつくと体が動いていた。初めはゆっくり。だんだんと早足に。

「私……私……っ。確かめてくる」

きゅっと口を引き結ぶと堪えきれなくなったように、駆け出していた。

レイピアがテントから出て行くのを見送った後、スキルはテントの壁に体をもたせかけて浅くため息をついた。

彼女を行かせてよかったのだろうか？

もしかしたら、レイピアはこのままユーザの元に帰ってしまうかもしれない。

それでも、このまま放っておくことができなかった。
永遠にユーザを憎み続けるレイピア。

永遠に誤解の解けぬまま、それでも彼女を思い続けるユーザ。このままではどちらも不幸でどちらも救われないような気がして。

全ての真実を知る権利がレイピアにはある。そして、その上でどう行動するかも全て彼女次第。ただスキルは少しだけ、出口の見えない闇の中を歩き回るレイピアの道標になっただけ。

「全く　　何やってるんだか……」

くしゃりと前髪をつぶし、自嘲気味につぶやいた。

スキルとレイピアが会話をする1時間前に話は遡る。

スキルは自分のテント　ユーザの眠る場所に向かった。

幕を開け、中に入ると彼の微かともいえる気配を敏感に反応したユーザは薄く目を開ける。体を起こし、その痛みに顔をしかめた。

「……痛ッ!」

「あまり体を動かさない方がいい」

ユーザは包帯で何重にも巻かれたわき腹を見、浅くため息をついた。

「……俺は……そうか、レイピアに……」

昨夜の出来事を思い出したのか、その瞳は深い愁いを帯びている。

「なぜ手当てをした？」

スキルの方に首だけめぐらして睨みつけるようにして言った。
まさに手負いの獣だな、とスキルは思う。傷つきながらも決して相手には屈しない力強さを感じる。敵ながら見事なものだと思う。

「決まってる。死なせるわけにはいかなかったからさ」

「俺はお前の敵だぜ？」

「あんたが死ぬとレイピアが悲しむ」

「ハッ。それで俺を助けたのか？ お人好し野郎」

鼻で笑い飛ばしたユーザに軽く肩をすくめてみせる。

「さあ、どうかな。自分の利になることしかない性格でね。そういうわけだから感謝する必要はないよ。それより、これからどうするつもりだ？」

「……これから……か。また1人旅に戻るつもりだ」

かぶりを振り、薄く目を閉じた。全てのことを諦めてしまった表情だ。

「レイピアには……会わないのか？」

「可笑しな奴だな。レイピアを渡したくなくて戦いを挑んできたのに、今度はその逆をするのか？」

わき腹を押さえたままの状態で皮肉っぽく笑う。

「結果はうやむやになってしまったけれど、レイピアが行動を起こさなかったら負けていたのは俺の方だ」

「経過がどうであろうと、結果がこれだ」

ユーザは怪我を負ったわき腹を指し示した。

「レイピアの心は俺を拒絶した」

それがわかった以上、もうここに止まる理由はない。そう言い、薄く笑う。

「あんたは、それでいいのか？」

スキルの問いにわずかにユーザは眉を寄せる。

「誤解されたままでいいのか？ あんたがレイピアを裏切ったのは……理由があるんだろう。少なくとも、裏切ったように見せかける必要があつた……違うか？」

ユーザは微かに目をみひらいた。

「……なぜそう思う？」

「彼女は気がついてないみたいだったが……話を聞いている限りではあんたの行動には矛盾があつた。最初は何となくそう思ったただけだね。それが確信に変わったのは闘ってからだ」

「……………」

「それほどの腕がありながら胸ではなく背中を刺したのはどうしてだろう？ ってね」

長い沈黙が続き、突然ユーザが臉を覆い隠すように手を当て体を震わして笑い始めた。

「……ククク。ハハッ。レイピアには伝わらなかったのに、お前だ

けが全部お見通しってわけか」

自嘲気味な口調。皮肉めいた笑い。それら全ては自分自身に向けたもの。

見ていて痛々しくなる思いがした。

「レイピアはあんたに裏切られたという思いが強かったからな。そこまで考えることができなかったんだろう。俺のような第三者だからこそ、気がつくこともある」

「そうか……。確かに、お前の言うとおり俺にはレイピアを裏切ったように見せかける必要があった。あいつを、レイピアを守るために」

第11章 過去との決別7

呼吸を乱しながら、レイピアは真っ直ぐスキルのテントへ向かった。テントの幕を開くと、全ての身支度をしたユーザがベッドの上に腰掛けていた。ちょうど、出発の準備が終わったらしい。

怪我もあまり塞がっておらず、血も足りない状態なのに本当に彼は旅に出るつもりだったのだ。

「ユーザ！」

振り向いたユーザは驚き、信じられないという表情でレイピアを見つめ返した。タイガールイエローの瞳と視線がぶつかる。

ゆっくりと彼との距離を詰める。

キリ、と苦しくなる胸を押さえつけ、静かに問い掛ける。ずっと聞きたかった答えを得るために。

「どうして……あの日……私を裏切ったの？」

目を見開くユーザ。

一瞬戸惑った表情をし、「アイツめ……」とレイピアをここに寄越したスキルに対して小さく舌打ちをした。

「答えて欲しいの。……私には聞く権利があるはずでしょう？」

長い沈黙の後、ユーザはおもむろに語り出した。

「……盗賊団のアジトに乗り込んだことを覚えてるか？」

2年前。

最後の冒険としてオリバ達のいる盗賊団のアジトに行ったときのことだ。

もちろん、覚えている。忘れてくても、忘れられるはずがない。まるで昨日の出来事のように鮮明に覚えている。

レイピアは黙って頷いた。

「あの時オリバが死ぬ間際、言ったんだ。所詮悪人は悪人でしかない。血に染まった手を洗い流すことはできないと。そして　こうも言った。俺達を裏切ればレイピアを殺す……と」

ごくり、とレイピアは息を呑みこんだ。語られる内容に動揺を隠し切れない。

「お前が狙われるかもしれないということは薄々わかっていた。だからこそ　あいつらが動き出す前に決着をつけようと思ったが、……あの時点ではもうすでに遅すぎた」

吐き捨てるように、苦々しげにユーザは言い放った。

「アルジェリカが俺達を殺すために組織の人間をかき集めていやがった。　だが、レイピアを裏切り、自分達の元に戻るならお前を見逃してやると……言ったんだ」

「だから……あなたは……？」

ユーザは答えなかった。

しかしレイピアは全てを理解した。

彼は全てを1人で抱え込んで、レイピアの身を守るために裏切ったふりをしてアルジェリカ達の元に戻ったのだ。

保険金を受け取ったのもそのため。

あの時病室に来たアルジェリカ。あれは本当にユーザが裏切ったかどうか確認するためだったのだろう。

「アルジェリカ達とは、その後……？」

「決着はつけた。組織の奴らは残らず自警団に突き出してやった。中には殺した奴もいたが……覚えちゃいない」

額を押さえ、ため息をついた。

ひどく苦しげで、ひどく疲れた表情だった。

2年間、彼はたった1人で戦い続けていたのか……。レイピアは言葉を詰まらせるが、それでも半ば叫けぶように言う。

「何でっ、一言言わなかったのよ！？ 全部1人で抱え込んで、全部1人で決めて！！ 話してくれたら、言ってくれてたら ……

！！」

「今の状況は違っていたか？」

レイピアの言葉を遮る形でユーザが言った。

「そうよ。きつと……私達は恋人同士でいられたわ……」

「だが、あの時はそれが1番最善の方法だと思った。俺のような男に関わったばかりに一生奴らに命を狙われるよりは……」

「言ってくればよかったのよ！ 理由さえわかっていたらあなたに刺されたって決して恨みはしなかった」

……ユーザが全ての事を片付けるまで何年でも、何年でも待つていたのに。

それなのに。

「もう2度と……お前と会うつつもりはなかったんだ。俺と関わると

ロクな目に合わない。だから」

「だから、何も言わずに刺して、一方的に関係を終わりにしようとしたの？ そんなの自分勝手すぎるわ！ 何が幸せで、何が不幸なのか……それを決めるのは私自身なのに」

激情が溢れ、レイピアは声を荒げた。

「どうして選択肢の中に2人で戦うという道がなかったの？ あの時の私は幸せだった。敵に狙われていつ死ぬかわからない状況だったとしても……きつと幸せだった……。愛してる人に裏切られたと思うよりは、ずっと……！」

涙が頬を伝った。

この2年間 レイピアの歩んだ道、ユーザの歩んだであろう道、そのことを考えると涙が止まらなかった。

片方は相手を憎みつづけ、片方は憎まれながらも相手を守るために戦いつづけた。

どちらも報われなくて。どちらも傷ついて。それを思うと悲しくてたまらなかった。

「レイピア……」

ユーザはそつとレイピアの体を引き寄せ、その腕に包み込んだ。

「俺と、もう一度旅に出ないか？」

「ユー……ザ」

「2度とお前と関わらないと決意したこともあった。だが お前を忘れることなんて……できない」

ユーザの腕の中。

2年前を少しも変わることのないぬくもり。ずっと帰りたかった場所。忘れることのなかった場所。
ボロボロと涙が溢れる。

「ユーザ……。ユー……。ザ」

けれど。

レイピアはそっとユーザの体から自分の身を離れた。
そのぬくもりは変わらないけれど、自分の心は2年という歳月中で変わってしまったから。

「レイ……。ピア……」

タイガーイエローの瞳が翳りを帯びる。

レイピアは静かに首を振った。

「ごめんなさい……。ユーザ。……。もう戻れない。一緒には行けない……。2年の歳月は……。長い。人を変えるのに十分な年月だわ」

自らの涙を拭い、ユーザを真っ直ぐ見据える。

「2年前の私はあなたを愛していた。でも、今は違う」

今は 違うの。

静かに、けれどはっきりとそう告げた。

「そうか……。お前はもう見つけたんだな。自分の道を」
「自分の道と呼べるものがどうかはわからない……。でも、私には……
……やらずにいいことがある……」

ピンクダイヤモンドを取り戻すこと。それが今の自分の
たった1つの、居場所。

レイピアの心がもう自分には無いことがわかるとユーザは静かに
頷くだけだった。

「あなたはこれからどうするの……？」
「さあな。……あてもなく旅でもするさ」

そう答えるユーザの顔は寂しそうだったけれど、自分の気持ちを
告げることができた為か晴れやかなものだった。

大小2本の剣を腰のベルトに差し入れ、ユーザは立ち上がった。

「お前は鈍いからな。一応言っておいてやる。お前の側には……お
前のことを心から思い、大切にしてくれる奴がいる。……早く気づ
いてやれよ」

ユーザの言葉が誰を指しているものなのか、そしてその時一瞬脳
裏に浮かんだ顔が誰だったのか。しかしレイピアは即座にその
思いを否定した。

何も言わず、ただ首を横に振った。

微かにユーザは苦笑しただけで、それ以上触れることはなかった。

「……元気だな」

ユーザは微かに微笑み、そっとレイピアの肩をたたいた。

その瞬間、感情が溢れた。

楽しかった思い出、悲しかった思い出、全てが脳裏に浮かんで。
胸が苦しくなって、切なくなっ

「私……ずっとあなたを憎んでいた。出会わなければよかったって思った時もあった。でも……。でも……。今は、違う。あなたに出会えてよかった……。2人で旅をして……。恋人になれ……。て、……。っ」

とうとう堪えきれずにしゃくりあげ、最後の方はほとんど声にならない。

ユーザと恋人になれてよかった。心からそう思った。あの日彼と出会えたからこそ、彼に恋をしたからこそ、今の自分はある。

「俺のために泣いてくれるのか？ それだけでもう充分だ」

お前にもう1度だけ会えてよかった。

そう言ってレイピアの涙を拭くと、背を向けた。

「待つて。……。聞いてもいい？ あの日、あなたが去る時何て言ったの……？」

レイピアを刺した後、立ち去る間にユーザが残した言葉。
雨の中に消えた言葉。

ずっと気になっていたその言葉。

ユーザはわずかに顔だけ振り向かせ、口を開いた。

「……『愛してる』って。そう言った」
「……ッ！」

レイピアに背を向け、歩き出す。
ユーザの頬につー、と涙が伝った。それはレイピアを愛してい

た、証。

彼はもう2度と振り返ることはなかった。振り向いてしまったらきっと耐え切れなくなってしまうから。

「ありがとう……さようなら……」

両手で顔を覆い、レイピアはぺたりと地面に崩れ落ちた。静かに涙を流す。

「ユーザ……ユーザ……、ユーザ」

彼の姿が見えなくなって、消えてしまうまでレイピアは彼の名をつぶやき続けた。

第12章 サークスの夜1

ユーザがいなくなった。

今まで思っていた憎しみは全て誤解で、彼はレイピアのことを裏切ってはいなかった。全ての真実を知った。本当ならこういう場合、心が晴れやかになるものだけれどレイピアの胸はポツカリと穴が開いた気分だった。

大切なものを失ったような、何かが胸の中から出て行ってしまったような……。

寂しさが心に残った。

今、レイピアがやらなくちゃいけないこと、それはピンクダイヤを取り返すこと。けれど、正直今のレイピアは行動を起こす気分ではなくなっていた。

舞台も休んでいる。

そしてスキルとも顔を合わせることを避けている。今回のことで彼には世話になったのだから、お礼を言わなくてはならないのに行動を起こさぬまま日にちが過ぎていく。

スキルもレイピアに気をつかってか、テントに顔を出すことはなかった。

「レイピア、いる？」

テントの外から声が掛かった。

「シア？ 入っていいわよ」

「お昼ご飯持って来たよ。一緒に食べよう」

両手にお盆を2つ抱えて、シアが入ってきた。盆の上にはスパゲティとサラダと鶏肉を煮込んだスープが乗っていて、それを手際よくテーブルに並べていく。

シアはこうしてレイピアがテントの中に引きこもってからも良く世話を焼いてくれた。リグとソアラもまた同様で何かと理由をつけてはテントを覗きに来るのだった。

レイピアは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

彼女は先日のユーザの引き起こした騒動を目の当たりにしている気になっているであろうに、それにも関わらず何一つ尋ねてこようとはしない。そしてレイピアもまた何一つユーザのことやそれに關わることを話していないのだ。

「シアは……どうしてそんなに良くしてくれるの？」

「どうして……って。友達じゃない。当然よ」

思い切ってレイピアが尋ねてみると、シアはごく当たり前のような顔をして、いともあっさりと返されてしまった。

「だって……私、シアに何一つ話してない。それなのに……」

「それなのにおかしい？ そうかな、私はそうは思わない。それにね……何となく聞かなくてもわかってたから」

レイピアが弾かれるようにして顔を向けると、シアは穏やかに笑い、口を開いた。

「私もね……まだレイピアに話してないことがあるの。……私ねえ、昔貴族に騙されたことあったんだ」

その言葉の内容とあっけらかんと語るシアに、レイピアは驚いたように目を見開き、息を呑んだ。彼女はレイピアを静かに見据えた

後、ゆつくりと語り出した。

「お客さんだった人にサーカスで働くのを辞めて、自分の所に来ないかって言われたの。その時の私って馬鹿だったから、その誘いに乗っちゃったんだ。たぶん、好きって言われの初めてだったから舞い上がったたのね」

言葉を発することもできずにいるレイピアに特に気にする様子もなくシアは淡々と続けた。

「でも実際は違ってた。その人は私のことを好きでも何でもなく、花街に売り飛ばそうとしてただけなんだよねー。そのとき助けてくれたのがブレンとスキルだったの。2人ともすごく怒ってたなあ。元々あの2人って貴族が好きじゃなかったから余計にね」

その光景を思い出したのかくすくすと口元に手を当てて笑う。

「騙されたことがわかって、当時はすごく辛かったけど……今はもう笑って話すことができるんだ。これは乗り越えた証拠なんだって思ってる。レイピアも……いつか、そうなる日が来るといいね」

胸が詰まる思いだった。

辛かったことを、何でもないという風に笑って話す。気丈に振舞うシアにたまらなくなって。

「そう……ね。そうなる日が……来るといいな」

時間が経てばなんとかなるものよ、そう言ってシアは穏やかに笑う。

「シアは強いね」

シアの肩に頭をもたせかけた。

「ふふ、やだレイピアったら。酔っ払ってるの？　なんか、かわいいぞ」

くすくす笑いながら、目元を綻ばせた。そうして母親がするみたいにレイピアの頭をやさしく撫でた。

「これからレイピアはどうするの？　どうしたいの？」

「私は……」

考え込むように間を空け、やがて少し苦しそうな表情でつぶやく。

「私は……ピンクダイヤモンドを取り返したい……。たぶんこれが、今の私の……たった1つの居場所」

シアはそのレイピアの様子がひどく追い詰められているように感じてならなかった。今のレイピアはピンクダイヤを取り戻すことしか頭がない。いや、そのことしか考えないようにしている。前々からそういった傾向はあったけれど、今日は特にそれが強く現れているように思える。

そうすることで心を守っているのかもしれない。

だが　もしピンクダイヤを取り返したら、レイピアはどうするのだろうか？

彼女の心はどうなってしまうのだろうか？

シアにはそれが気がかりでなかった。

「これだけは覚えといて。私はレイピアの味方だっていうこと。た

とえ ピンクダイヤモンドを賭けた勝負が終わったって……
私はあなたの友達」

レイピアはしばらく答えなかった。間を空けて やがてポツリ
とつぶやくように言った。

「ありがとう……シア……」

シアの肩に顔をうずめた。

だから、シアは気がつかなかった。レイピアの瞳が微かに翳りを
帯びていたことに……。

「最初は……騙すつもりだった」

あの日、全ての真実をスキルに語った後ユーザはその言葉をつぶ
やいた。

微かにスキルは顔を上げ、彼を見た。その表情は何の感情も映さ
ず、そこからは何も読み取ることができなかった。

「セレイラの街に着いたら、あいつを売り飛ばすなりなんなりして
金を稼ぐつもりだった。けど あいつはいつの間にか、どんど
と俺の中に入り込んできやがった。純粹で、屈託ない性格に癒され
ていたのかもしれない いや、事実癒されていたんだろうな」

スキルは静かに、その言葉を聞いていた。

「初めて、誰かを幸せにしてやりたいと思った。この血に染まった
手でも、あいつ1人くらい幸せにしてやれると思っていた……。だ

が、やはり罪人は罪人でしかないということだ。汚れきった手が洗い流せるはずがなかった。もう、どう足掻こうとも抜けられない蟻地獄に陥っていたんだ」

その表情が苦渋に満ちたものへと変わった。やがてユーザは俯かせていた顔を上げてスキルを見、ポツリとつぶやく。

「お前は 同業者の臭いがする」

静かなその問いかけにスキルは頷いてみせた。やはり、同業者にはわかってしまうのだ。何気ない仕草や雰囲気から。隠すつもりはなかった。

「……ああ、俺もあんたと同じように盗賊だ」

「そうか……。やめられるなら、今のうちにやめることだな。……いつか……俺のようにそのツケを払う日が来る」

重い言葉だった。

経験した者だけが語ることのできる、言葉。

レイピアが塞ぎこんでテントに引きこもっている頃、スキルは公演のために忙しく動き回っていた。

スキルはここ数日間で、レイピアへの思いが止められないくらいに強く成長したのをはつきりと自覚していた。シャンナリーやかつて関係を持ったことのある女性達に抱いた軽い思いではなく、今まで他の誰にも抱いたことがないくらいの強い思い。

愛しいという思い。

離したくないという思い。

その思いを自覚している以上、レイピアが気がかりではないと言ったら嘘になる。しかし、今はしばらくそっとしておいた方がいいような気がした。

彼女はユーザと一緒に行く道を選ばなかった。けれどもそれで気持ちの整理がついたかというところ 答えは、否。

2年の歳月は決して短くない。

2年間心を占めていた苦しみから解放されたからといってすぐに気持ちを切り替えることなどできないだろう。

だが、スキルに時間がないのもまた事実だった。

勝負の終わる期日は確実に近づいてきているのだから。

スキルは1つの覚悟を決めると、父であるヴォイルの元に向かった。

「父上、話がある」

ステージでのリハーサルを終え、一息ついているところを見計らってヴォイルに声をかけた。

ヴォイルはそのただならぬスキルの雰囲気にも眉をひそめた。

「おう、どうした？ 改まって」

「俺に団長の座を譲ってほしい」

一瞬、呆然とした表情をするものの、次の瞬間には満面の笑みを浮かべてバシバシとスキルの背を叩いた。

「お前……そうか！ とうとう決心してくれたか。で、いつからだ

？」

「今すぐにでも。といっても今日は無理でしょうから明日にでも式を行なうて欲しい」

そのスキルの急すぎる申し出に、さすがのヴォイルも目を丸くする。普通、こうした団長交代には最低でも5日ぐらい準備期間を設けた後に式を行なうものである。

「明日あ！？……そりやまたずいぶんと急だなあ……」

「無理は承知の上ですよ。今回は少し……時間がなくてね」

いつになく焦った様子のスキルに珍しい物を見たばかりに、ヴォイルはにやにやと口元を歪める。

こういうところはひどく似ている親子である。

「ふうん、まあ息子のワガママを聞いてやるのもパパのお仕事ですしね？ いいぜ、明日に決定だ」

「ありがとうございます」

スキルは頭を下げた。

「よせやい。もともとこっちが先に無理言っただ。まあ、これで俺も無事にソアラとラブラブ旅行に行けるわけだ。いやー妹ができちゃうかもね、スキル君」

「冗談とも本気とも取れないヴォイルの言葉にスキルは呆れ返ってため息をつく。

「いい年して……。20歳以上も年の離れた妹なんて冗談じゃない」
「素直に喜ぶとかできないもんかね。一体いつからこんな風にかわ

いなくなつちまつたのかねえ？」

「なんせ父上の子供ですからね……。その時点でかわいくないのは決定してますよ」

「まー。ほんつとかわいくないクソガキですこと。髪の毛の色と目元がソアラに似てなかったら愛の百叩きの刑に処すのに。あーあ、パパはこんなスレまくったクソガキじゃなくなつてかわいーい娘が欲しかったなあー」

もちろん俺に似て愛らしい子がいいなあ……。とつぶやいた。

父上に似てる妹なんて不気味すぎる、その言葉を何とか飲み下し、聞き流した。

第12章 サークスの夜2

「パーティー！？」

寝耳に水とばかりにレイピアは素っ頓狂な声を出した。

「ええ、そうです。今夜は若君の団長就任パーティーがあるんですよ」

リグはにこりと笑って告げた。

「団長……？ スキルが……？」

レイピアは呆然としてつぶやいた。

いつの間にそんなことになったのだろうか？

自分がテントに引きこもっている間に、一体何があったのだろうか。

「あの……私、イマイチ状況が掴めないんだけど……団長の身に何かあったの……？」

「ああ、レイピアさんはご存知なかったですね。団長が体を壊したとかそういう理由ではなく、単に引退したいと言い、若君がそれを引き継ぐ形になったんです。正式に決まったのはつい昨日の話なんですよ」

スキルが団長になったことが余程嬉しいようで、リグはまるで自分のことのように嬉しそうに言った。頬が緩みきっている。

「レイピアさんも出席してくださいね」

リグの言葉にレイピアは困り果てた顔をした。

「あの、でも私……パーティーなんて……。服も持っていないし……」
「大丈夫ですよ。シアに言っておりますから。彼女に借りてください」

「でも……でも……」
「レイピアさん」

何とか理由を見つけ欠席しようとしたレイピアの言葉を押しとどめる。

「必ず出席するようにと、若君が言っていましたよ」

ぐつと言葉を詰まらせた。

自分の気持ちたちが全て見透かされているみたいでひどく居心地が悪くなった。それでも渋々と頷く。

「……わかった……」

それを満足そうに見届けると「ではパーティー会場で」そう言つてリグは出て行った。

正直、パーティーに参加することに乗り気ではなかった。騒ぎたい気分ではないし、今は1人になりたい気分だが。

いつまでもこんな気持ちでいるのは良くないことだと思うのだ。前を向かなくては。歩き出さなくては。また、弱いままの自分に戻ってしまうから。

それからレイピアは日が暮れるまでの2時間、嵐のようなシアとソアラによって着せ替え人形にさせられることになる。

「まあ、レイピアちゃん。とっても似合うわ」
「本当！ レイピアかわいい」

両手を合わせてうつとりしながらソアラがつぶやき、シアもまた目をキラキラ輝かせた。

「もし私に娘がいたらこういう風に着せ替えしてみたかったの」

そう言ってソアラはにっこりと笑った。

レイピアが今着せられている服は赤色の服。最初は青色の服、次は紫色の服、これが3枚目の着替えになる。いい加減疲れ、どの服でもいいじゃないかと思うが2人はそれを許してくれそうにはない。衣装箱をあさっていたシアは白い服を取り出してきた。

「ね、ね、ソアラ様。こっちの白い服なんてどうかしら？ レイピアに似合いそう」

「あら、素敵。レイピアちゃんこっちの服も着てみて」
「また……ですか？」

恨めしそうに見上げるとソアラとシアはもちろんとばかりに頷いて見せた。

「2人とも私のことより自分達の仕度をすればいいのに……」
「あら、私達は見ての通りもう準備は整っているもの。ねえ、ソアラ様」

「ね、シアちゃん」

2人は顔を見合わせてにつこり笑いあった。言葉通りシアもソアラもパーティー用の洋服を身にまとい、綺麗に化粧も終わっていた。レイピアはおもしろくなくて頬をふくらませてむくれる。

「大体、こんなにお洒落しなくってもいいんじゃないの？ 団員間でやるパーティーなんだから」

「駄あゝ目。だからこそ気合入れなくっちゃじゃない！ みんなすつごい気合入れるのよ。それとも何？ レイピアだけ普段着でその場から浮きたいの？」

「う……それは……嫌かも……」

「でしょう？ こういう機会でもなくっちゃなかなかハメを外せないんだから。ほら早く着ないと。パーティーが始まっちゃうよ」

促されて渋々とレイピアは白い服を受けとると、着替え始めた。

その服はワンピース型で膝より少し長い丈。裾と袖の部分にレースがついている。その見た目の軽やかさといい、服の薄さといい今の季節に良く合っている。

「きゃあ、それいいじゃない！ それに決まりね」

シアはレイピアを見るなり飛び上がって喜んだ。

「さあ、次は髪の毛と化粧よ」

腕まくりし、今度は化粧に取り掛かった。

「わぶつ。シア……。化粧なんていいってば……」

レイピアは今にも泣き出しそうな、情けない声を上げる。

「駄目駄目、今日くらいしくちゃ。レイピアって普段お化粧してないでしょ。元が良いから化粧しなくっても綺麗だなんて、うらやましいったらないわ」

私なんてソバカスが気になって仕方がないのに、などぶつぶつ言いながら粉をはたいていく。ひと通り化粧が終わるとシアは化粧箱の中から手のひらに乗るくらいのガラスの小瓶を取り出した。

「最後は香水」

「香水なんていいってば……」
「遠慮しないの！」

言うなり半ば強引にシュツとレイピアの首筋に噴きつけた。
ふわりと爽やかな香りが辺りを漂った。今までかいたこともないその香りにレイピアは首を傾げた。

「この香りは……？」
「スズランよ」

バラや柑橘系の香水なら見たことはあるけれど、スズランの香水はめずらしい。ふうん、と感心しながらレイピアはしげしげとその香水瓶を手にとって見た。

得意げな顔でにっこりとシアが笑う。

「この花は私のレイピアのイメージなのね。スズランってかわいくって綺麗でしょう？ それで ちよっと毒があるところ」

くすくす笑うシアにレイピアは顔をしかめた。

スズランの根に毒があるのは誰でも知っている事実。

「……………。そんなに毒っぱいの？ 私って……………」

前にシャンナリーにも毒があると言われたことを思い出した。

「ああ、気を悪くしないでね。悪い意味じゃなくて良い意味だよ。
レイピアの持つてる毒は人を痺れさせちゃうの。んふふ」
「痺れさせる……………ねえ」

それって良い意味になるの？

そう思ったけれど、あえて口には出さないことにした。

「レイピアちゃん、このスカーフなんてどうかしら？」

顔をこれ以上ないくらい幸せいっぱいに綻ばせて、ソアラが持つてきたのは青色の厚さの薄いスカーフだった。ソアラはこのスカーフを探すために今まで席を外していたのだろう。

「私が若い頃に使っていた物だけど……………」

ゆつたりとレイピアの首に巻きつけた。そのスカーフの色といい涼しげな薄さといい白いワンピースにとても良く映えた。

「わー、いい感じいい感じ」

手を叩いて喜ぶシア。

「よかったわ。このスカーフ、レイピアちゃんにあげるわね」

「え、で、でも……っ」

「いいのよ、レイピアちゃんに使ってもらった方がスカーフもきつと喜ぶわ」

「……それじゃあ……、ありがとうございます」

照れくさそうにレイピアは首に巻かれたそのスカーフに触れた。

丁度その時、楽師達の演奏する軽快な音楽が鳴り始めた。それはパーティーの始まりを告げる合図。

「よし、思いっきり楽しむぞー！」

待つてましたとばかりにシアは勢い良く立ち上がった。テントの外からは早くも団員達の笑い声や歓声が上がっている。

「ほら、レイピア早くー！」

急かすようにしてシアが手をパタパタ振る。

ため息をついて立ち上がるとシアの後に続いた。

第12章 サークスの夜3

「ああ、若君……。立派になりましたね……」

ハラハラと落ちる涙を拭いながら感慨深げにつぶやいたのはリグだった。団長達が全員集まった中央広場で、サーカスの正装である燕尾服を着たスキルの団長就任挨拶は無事終了した。

いつも苦勞ばかりかけられていた彼が今、こうして団長の座に就いている。ついこの間までは考えられないことだった。

「おめでとー！」

団員達は次々と祝福の言葉を述べる。

「若君、私は今日という日をこんなにも嬉しく思ったことはありません」

「おいおい、もう呼び名は『若君』じゃなくって『団長』だぜえ？」

そのリグの様子に呆れかえったようにブレンはため息をつく。

「いいんです。私にとって若君はいつまでたっても若君なんですから！」

そう言うリグの顔には誇らしげな表情が浮かんでいた。

挨拶を終えたスキルはもう一度口を開いた。

「堅苦しいことは抜きにして今日は思いきり楽しんでくれ。だがその前に1つ、言っておきたいことがある」

何だろうと首を傾げる団員達に対して彼は高らかに宣言した。

「今日をもって黒のピエロ団を解散したい」

ザワ

その突然の宣言に会場全体が震えるようにざわめいた。

それもそのはず、彼らの盗賊稼業はサーカスの創始者でもある曾祖父の時代から続いているものだった。ある意味伝統ともいえる盗賊稼業の終結宣言は彼らに与える衝撃としては充分なものだった。

「皆知つてのとおり、前団長の代からサーカスの経営が軌道に乗り始めた。そしてこれからもますますこのサーカスの発展を目指す。盗賊稼業をしなくても飢えや貧しい思いは決してさせない。約束する。だから　どうか俺を信じてついてきて欲しい」

水を打ったように静まり返った。

しかし、次の瞬間ワツと団員達の歓声が響き渡った。

「あつたり前だろー！　俺達はいつだって団長についていくぜえ！」
「しっかしまあ、よく決心したもんだぜ。貴族連中のお宝を盗めなのはちつとばかり残念だけどよ。せめて一言くらい俺に相談しろつての！　このやる」

スキルのこめかみにグリグリと拳を押し当ててブレンは飛びついた。次々と団員達も押し寄せ一気にスキルを取り囲んだ。

レイピアは遠巻きで、複雑そうな表情をしてその光景を見ていた。

スキルの宣言が終わった後は、サーカスの新しい門出を祝って飲めや歌えのドンチャン騒ぎになった。中央広場に設置されたテーブルの上には所狭しと料理が並べられたし、会場内にはワインの樽ごと運び込まれる始末で、それらは次々と団員達の胃袋に流し込まれた。

歌い出す者、ひたすら話に興じる者、大笑いをしすぎて転倒する者すらいた。

ソアラとヴォイルがダンスをし、それをうらやましそうに見る団員達。

リグは羽目を外しすぎて目を回した団員の介抱のために、会場中を駆けずりまわる。

シアはブレンをダンスに誘おうとして失敗。結果いつも通りの口喧嘩になりお互いそっぽをむいてしまった。

スキルはパーティーの主演として詰めかける団員達とお酒を飲みながら話に興じていた。

そしてレイピアはというと……。

団員達によって半ば強引に誘われ、ダンスをしていた。

彼らの間で踊られるものは貴族の社交場で踊られるものとは違って、型が決まっていない。軽快な音楽に合わせて自分の好きなようにくるくると回りながら踊る。時に手と足を鳴らしてリズムを取り、隣り合う人と視線が合ったらにつこりと微笑む。そんな踊りだった。初めての踊りに戸惑いながらも、レイピアは心の底から楽しんでいた。

パーティーは最高潮に達し、夜もだいぶ更けてきた頃。レイピアは会場を後にし、1人木に背をもたせかけて考え事をしていた。黒のピエロ団の解散を宣言したスキル。

その意図は……？

「こんなところにいた」

「！」

いきなり背後から声を掛けられ、レイピアは飛び上がるくらいに驚いた。なぜいつもスキルは気配も足音も無く現れるのだろうか。

心臓に悪い……。

「パーティーの主役がこんなところにいていいの？」

「まあね。あとは団員達で勝手にやるさ。君こそどうしてこんなところに？」

「私は……少し疲れたから」

人込みに酔ってしまったのだ。浅くため息をつくとき、スキルを見上げ問いかける。

「ねえ。どうして……」

盗賊をやめるなんて言ったの？

レイピアの言わんとしていることを察したスキルはレイピアが言い終わるよりも先に口を開いた。

「今回のことで、少し……考えた。俺はこのサーカスを守っていかなくてはならない立場だ。盗賊稼業で団員達を危険にさらすわけにはいかない」

スキルが盗賊稼業をやめようと決めた最大のきっかけはやはりユーズのことだった。彼の身に起こったことは何も特別なことではない。形こそ違っても、スキルの身にも起きえることなのだ。盗賊稼

業を続けている限りその危険は常につきまとう。

「いつまた君みたいに追いかけてくる貴族が現れるかわからないしね」

「そうね。きつと……それが1番いいのかもしれないわ」

心からの言葉だった。

団員達やスキルが捕まる姿など見たくはなかった。そしてユーザのような悲しい人を出してはいけないと思った。

「でも、このダイヤは……返さない」

スキルはそう言つて、ダイヤの入っている胸元にそつと手を置く。レイピアもまた彼のそんな態度に口元を笑みの形に歪めてみせた。

「望むところよ。絶対に、期限内に奪い返してやるんだから」

「さて、決意も新にしたところで……せつかくのパーティーですから踊りましょうか？」

半ば強引にレイピアの手を取り、踊り出す。似てるな、と思った。初めて会ったときに。

レイピアは領主の娘としてパーティーに参加し、スキルは『ランス』という名の貴族として現れた。

あの時もこんな風に踊ったっけ……。

軽やかなステップで優雅な振る舞い。リードが上手いと思った。

「香水つけてる。この香りは……スズラン？」

なんでそんなことまでわかるのよ、と思いつつ頷く。

「……ええ」

「君に良く似合ってる……」

真顔で言われ、不覚にも心臓が跳ね上がった。
うるたえるレイピアに

「毒があるところなんて、特に」

そう付け加え、ニツと唇の端を吊り上げた。またしてもスキルに
からかわれたと知り、怒りで顔を染める。

「ええ、そうでしょうとも。どうせ毒だらけよっ！」

くつくつとスキルが喉の奥で笑う。

苛立ちつつも、レイピアはそのやりとりで、最初出会った頃みた
いに明らかな嫌悪感を抱かずにいた。むしろ、心地よささえ感じて
いる自分に気がついていた。

ステップしていた足を止め、レイピアは1回深呼吸をすると、ま
るで独り言を言うようにつぶやいた。

「ありがとう。今回のこと……感謝……してる」

スキルはわずかに肩をすくめただけで答えなかった。

「あなたがあの時、言ってくれなかったら……私はユーザを永遠に
憎んだままだったと思う。本当にありがとう」

深々と頭を下げる、そしてそれからスキルを真っ直ぐに見据えた。

「でも、わからないことがあるの。なぜあなたは助けてくれたの…

…？」

レイピアの問いにスキルは苦笑をもらした。

「本当、鈍いね。まだわからないの……？ 前にも言っただろう、好きだからって」

「何言ってるの……。いつもそう、冗談ばかり言って……。からかわないで……」

視線を外し、顔も背ける。

「冗談なんかじゃない。好きでもない女のために命の危険を侵してまで闘ったりしないよ」

レイピアの髪の毛を一房すくい上げ、愛しげに唇を寄せた。

「美しいな……」

その熱を帯びた声に弾かれるように、スキルを見上げる。

何？何を言ってるの……。

おかしい、変だ。

「酔ってるの……？」

「いたって素面だよ」

「嘘。さっき飲んでたじゃない」

微かに上気した頬。

そして向けられたのは熱を帯びた視線。

その視線から逃れるようにレイピアは再び顔を背けた。自分の顔

に急速に血が集まっていくのがわかる。息が苦しくなっ
て頭がくら
くらした。

「おかしいかな？」

「変……。変よ、あなたさっきから自分で何を言ってるかわかっ
てるの？」

後ずさりする。

2歩ほど下がったところでトン、と背中に木の幹が当たる。動揺
し、顔を上げるとスキルが微かに笑うのが視界に映った。

「キスしてもいい？」

「え……。？」

それは問いかけというより合図のようなものだった。

レイピアが驚き、目を見開くよりも先に唇が重なった。まるで壊
れ物を扱うように軽く触れるだけのものが1回、2回。

以前のような薬を飲ませるためのものではなく、純粹に唇を重ね
るための行為。いつものからかうような態度とは明らかに異なっ
ているその態度。

「な……」

何で、と思う。

頭が真っ白になる。バクバクと鳴る心臓の音が耳にまで届いてく
る。逃れようとして手を突っ張って押しのけようとしたが逆に押し
戻されてしまった。

「逃げないで」

耳元で囁かれる、声。
ゾクリと体が震えた。

レイピアの顔を挟むようにして木の幹に両手をつくスキル。顔を背けることもできそうにない。

スキルと視線がぶつかる。

レイピアは若干の冷静さを取り戻した。ぼんやりと今、手を伸ばせばスキルの懐にあるダイヤを取り返せそうだと考えた。

隙を見せたことのないスキルが初めて見せた、隙。

絶好のチャンス。

少し手を伸ばせば……。

その手を伸ばしさえすれば……。

だが、実際にレイピアがとった行動はスキルの背に両腕をまわすことだった。碧色の瞳に吸い込まれるようにゆっくりと瞳を閉じる。再び重ねられる口づけ。

唇を割りスキルの舌が侵入してくる。

深い。

思考能力が奪われる。頭がくらくらする。木の幹に背をもたせかけていなかったら、その場にへたり込んでしまったかもしれない。

サワ……。

風が吹いて木々の枝がこすれ合う音がした。

「……………ッ！」

その瞬間、レイピアは夢から目覚めたように一気に現実を引き戻され、思いきりスキルを突き飛ばした。

「……………私……っ！」

唇を覆って絶句する。

スキルの碧色の瞳と視線がぶつかり、たまらずレイピアはその場から逃げ出していった。

がむしやりに走った。

頭が真っ白になってなにも考えることができない。途中、何人かの団員に出くわしたけれど、それを押しのけるようにしてひたすら走った。

「あ……っ！」

何かに足を取られ派手に転んでしまった。

運の悪いことにそこは小石がたくさん落ちているところで、転んだ拍子にワンピースのスカートが破け、擦りむいた膝からは血がにじみ出た。

それでもレイピアは怪我に構うこともなく呆然としてその場に座り込んでいた。

私、忘れてた……。

あの時の一瞬……ダイヤのことを。1番忘れてはいけないものなのに。それを取り返すことだけがレイピアの唯一の居場所。それなのに。

「何で……！？」

両耳を押さえてうずくまる。頭が混乱し、平静を取り戻すことができずにいた。

「どうしてっ」

どうしてダイヤのことなど、どうでもいいと思ってしまったのだろっ？

そんな風に思ってしまった自分が許せなかった。母親の顔が脳裏に浮かぶ。

「お母様……お母様、お母様……………っ」

ごめんなさい、ごめんなさいと何度も心の中で謝る。

ダイヤのことを忘れてしまっでごめんなさい……。

スキルの所為でいとも簡単に心が乱れてしまう自分がたまらなく嫌だった。初めて出会ったときからいつも、そう。

スキルの一挙一動に心が乱される。

第12章 サークスの夜4

ある者は困惑し、ある者は胸に熱情を抱き、ある者はそんなものとは無関係に飲み食いしに精を出し、ある者は片付けのために忙しく駆けずり回った。

様々な人の思いが交錯した長い、長いパーティーの夜が明けた。特にレイピアにとってはこの夜が永遠に明けないのではないかとさえ思えるほど長いものだった。

翌日。

朝早くからドタドタドタドタ、と地響きにも似た音を立ててスキルのテント目がけて走ってくるものが1人。

「ちよつとおおスキルウウウウ!!!」

栗色の髪の毛を揺らし、目を吊り上げて飛び込んできたものの正体、それはシアだった。今にも湯気が出そうなくらいにカンカンに怒りで顔を染め、怒鳴り声を上げた。そのただならぬ様子にスキルも、そして打ち合わせで話し合いに来ていたリグも目を丸くするばかりだった。

「あんたは　　っ!!　　レイピアに一体ナニしたのよお　　!?!
?」

いまいち、スキルには事情が掴めなかった。

「ナニって……その妙に誤解を招く言い方はやめてくれないか。……リグ、なんでそんな目で俺を見る?」

後半の言葉は半眼になってスキルを見るリグに向けたものだった。

「若君……一体ナニしたんですか」

「だから、どうしてそういう方向に話がいくんだ」

「うるっさ い！ 私の話に答えなさいよ。なんで、レイピアの服がボロボロになってんのよおっ！？ 膝は怪我して血が出てたしっ！ 震えてたしィ！」

「……は？」

スキルは初耳だとばかりに目を瞬かせた。シアもその様子に気がき、訝しげに眉をひそめる。

「……あんたが犯人じゃないの？」

「冤罪だ。何で……俺が……」

「だって、考えられる原因っていったらあんたしかいないじゃない」

断言されビシッと指さされ、スキルは苦笑する。

「酷い言われようだね。そんな心当たりなんてな ……あ」

そこでスキルの言葉が止まる。

もしかしてあれが原因で？

あの時、ひどく動揺して逃げ出すように駆け出したレイピアの姿が脳裏に浮かんた。あの動揺ぶりでは転んでもおかしくはないだろう。

だが、事情を知らないシアはスキルの一瞬考え込むような素振りを別の解釈で受けとった。

彼が無理矢理レイピアに何かしようとした、と。

「あ、あんたって奴はああ　！！　なんて最低なの　！」

シアは近くに置いてあったアルミ製の椅子を両手で持ち上げ振りかぶった。

「ちょ、ちよつと待てシア！」

いつも冷静なスキルもさすがにこれには慌てる。

「若君……あなたという人は……」

いつかやると思ってた、そんな言葉が聞こえてきそうな表情でリグ。頭を抱えてうめくスキル。

「……だから、何でそういう目で俺を見るんだ……リグ」

「ええい、つべこべ言つな。成敗してくれる！　天誅うううっ！！」

「……………ッ！」

その日、ガン、という鈍い音がテント内に響き渡ったとか……。

鏡を覗き込んだレイピアは目の下にできた隈を見てため息をついた。もともとレイピアは悩んだり憤慨したりすると眠れなくなるこゝとがあり、隈がしやすい体質なのだが今日のは特にひどい。とても見られた顔じゃない、と自分でも思う。

「酷い顔……」

原因は考えるまでもない。あのことだ。

昨日の、夜の。

無意識のうちに唇に手を当てた。

視線を膝に移す。膝には包帯が巻かれてある。あまりたいした傷ではなく痛みは引いたものの、触れると少しだけ痛む。

ここ最近怪我が絶えない、と思う。

スキルと出会ったパーティーの夜でついた短剣による傷。ライに噛まれたことによつてできた傷。そして昨日の転んだ拍子にできた傷。いずれも完治する前に負傷している。だんだんと情けない気持ちになつてきた。

「……少しいいかい？」

テントの外から掛かったその声に驚き、肩が跳ね上がる。

手にしていた鏡が手から滑り落ちた。割れはしなかったものの、床に落ちたときにガシャンと派手な音があがった。

レイピアはそれを拾わなかった。いや、鏡を拾うだけの心の余裕がなかったと言つべきだろう。

慌てふためき、顔を青ざめさせる。

見かねて代わりに鏡を拾ったのはスキルだった。

「怪我は大丈夫？」

スキルは鏡をレイピアの手に戻しながら、問い掛けてきた。視線が膝に向いていることから腕の怪我のことを言っているわけではなさそう。おそらくシアに聞いたのだろう。

ぶんぶんと言がしそうなくらいに思いつきり首を縦に振る。

「だ、大丈夫つ。そうだ、わ……私……シアに用事があるんだわ」

唐突に何かを思い出したようにレイピアは椅子から立ち上がり、半ば強引にスキルの問いかけを打ち切った。その動作はかなり不自然なのだが、本人に自覚はないようだ。なおも声を掛けようとしたスキルを振り切るようにして足早にテントから逃げ出した。

本当はシアに用事など何もない。ただ、あの場にいたくなかったのだ。

スキルと顔を合わせるのが恐い。だから逃げ出した。

朝から夕方まで、そんなことが続いた。

公演の合間を縫ってスキルはレイピアの所へ来るのだが、レイピアはというと彼の姿を見つけるたびに脱兎のごとく逃げ回った。公演中に声を掛けられたら逃げることでできなと不安に思っていたが、さすがにその間はスキルもプロとして仕事に徹していた。

1日の公演が終わり、片付けも全て終了した。

自分のテントへ戻るために曲がり角を曲がると、腕を組み木に背を預けたスキルの姿があった。

その姿を見るなりレイピアはギクリ、と身を強張らせた。まるで死神でも見たように顔を青ざめさせ、悲鳴を上げそうになった。

いつも気配もなく側にいるのだ、この男は。

そんなレイピアの様子を一瞥したスキルは特に気分を害した様子もなく静かに問い掛けてきた。

「避けられてるのかな？ 俺は」

レイピアは明らかにスキルを避けていた。それは事実だ。スキルも当然気がついていいるだろう。だが、わかっているくせにわざわざ疑問形で言うところが何とも人が悪い。

「……さ……」

「まさかあれだけ逃げ回ってて『避けてない』なんて言わないだろうっ。」

しらばっくれようと思ったがそうはいかなかった。

言いたいことを先に言われてしまい、レイピアはぐつと言葉を詰まらせた。退路を絶たれ、追い詰められてしまった気分になる。

どうしよう、どうしようと考えているとスキルの方が先に口を開いた。

「昨日は……」

弾かれたようにレイピアは顔を上げ、強引にスキルの言葉を遮る。

「き、昨日はっ！ 昨日は……パーティーに呼んでくれてありがとうっ」

眉をひそめた後、スキルは再び口を開こうとする。

「昨日……」

「りよ、料理もとてもおいしかったし。団員のみんなもとても楽しそうだったわ」

だが、またしてもレイピアは強引にスキルの言葉を遮った。明らかに必死になって「昨日の出来事」から話を逸らせようとしている。

これにはスキルも気分を害したようだった。

「話を逸らさないで欲しいね」

鋭くそう指摘され、とうとう観念したようにレイピアはスキルに
向き直った。

「……昨日のことだったら……あれは……気の迷いよ……」

昨日のキスは気の迷いだった。声を絞り出すようにしてレイピア
はそう告げた。

その言葉にスキルは微かに眉をひそめる。

「……気の迷い？」

「そう。少しお酒を飲んでいたの。だから……」

「飲んでなかったみたいだけどね」

再び鋭く指摘され、レイピアはまた言葉を詰まらせ黙り込んだ。
とことん退路が絶たれてしまう。沈黙が訪れる。スキルは腕を組ん
だままレイピアの解答を待った。

「でも……あなたは飲んでいたでしょう？ それにあの時は周り全
体が浮かれた雰囲気だった。だからあなたも私もその雰囲気に呑ま
れただけのこと。……ただそれだけなのよ」

2人が口づけを交わしたのは雰囲気になされたこと。だから、
あれは自分の意志じゃない。そう言い聞かせるように言った。スキ
ルだけでなく、レイピア自身も含めて。

「それに、あれは……あなたにとって悪戯みたいなものだったんで

しょう?」

「悪戯だつて?」

スキルは明らかに苛立ちを帯びた声を出し、顔を険しくさせた。

「そう。あなたにとっては挨拶みたいなもの。違う?」

「違うね。挨拶のキスで舌は入れない」

「……………なっ」

ストレートな物言いに、カッと顔を真っ赤にさせる。

「君が雰囲気流されてのことだったとしても、俺は違う。本気だった」

「やめて! とにかく……。あのことはもう忘れて頂戴」

もうそのことについてこれ以上話し合うことはないとにかくに鋭く言い放つとスキルに背を向けて歩き出す。

だが、3歩ほど歩いたところでスキルの言葉によって引きとめられる。

「恐いの?」

「……………ッ!」

レイピアは弾かれたように振り向き、歩みを止めた。スキルのその言葉はレイピアの抱えている思いの核心をつくものだった。

「俺が恐い?」

「……………」

恐くなんてないわ。そう言おうとしたのに、言葉は出なかった。

スキルの瞳と目が合ったから。

恐い。

恐かった。

レイピアの心に踏み込んでくるスキルが。いつの間にかすっかり
レイピアの心の半分以上を占めるようになったスキルが。

顔を俯かせる。

そして唇を噛み締めると再び歩き出した。いや、駆け出したとい
った方が正しいかもしれない。とにかく今は一刻も早くこの場から
立ち去りたかった。

スキルも引きとめはしなかった。

第12章 サークスの夜5

いつの間にかレイピアの心にはスキルが入り込んでいた。
気がつくとすぐ側にいて、さりげなく心を癒してくれた。

ユーザの剣に貫かれそうになったスキルを見たとき、心臓が凍り
つきそうになった。気がついたら短剣を手に行動を起こしていた。
恐かったのだ。

彼を……スキルを失うことが。

「私は……………」

私は……………。

スキルのことが……………。

好きなんだ……………。

もう誰も好きにならないと誓った。

だからこそ、その思いを認めたくなかった。

心の奥底に頑ななまでに閉じ込めていた思い。本当はその気持ち
に気付いていたのに、ずっと蓋をして気がつかない振りをしていた。
いつからだろう？

こんな思いを抱えるようになったのは。

きつと、最初に出会った頃からずっと。『ランス』としてレイピ
アの前に現れたときから……。けれどその頃はユーザへの憎しみが
心を占めるあまりに自分の心に生じた微かな思いに気がつくことは
なかった。ユーザのことが吹っ切れて、そこで初めて気がついた。
だが、その思いに気がついたところで一体どうしたらいいというの

だろう。

恋愛などもう2度としたくないのに。
もう何も考えたくない。

どうして、心というものは自分で操ることができないのだろう。
心なんていつそ無くなってしまうばいい。そうすればこんな風に
胸を締め付けるような苦しい思いを抱えなくてすむのに。

シャンナリーは焦れていた。

レイピアに対して憎しみと、嫉妬の念だけが膨らんでいく。盗賊
稼業をやめると宣言したスキル。それはシャンナリーにとって深
すぎるほどの衝撃を与えた。

彼がそう宣言した背景にレイピアの存在があったことはシャンナ
リーはおろか団員達誰もが知る事実だった。

それほどまでにレイピアのことが大事なのか。

「団長もとうとう本気の恋に目覚めたようだねえ」そう彼らの
口から言葉がもれるたびシャンナリーは唇を噛み締めた。

そしてとうとう彼女は行動を起こした。スキルのテントに向かう。

「シャンナリー……？」

スキルは目を通していた書類からわずかに顔を上げて、テントに
入ってきたシャンナリーを見た。「何か用か？」と声を掛けるより
も先にシャンナリーが動いた。

スキルの体に抱きつく。

ふわりと香水の甘い香りが鼻をかすめて、一瞬、スキルの体が強

張った。

「お願い……抱いて……」

耳元でそつと囁く。切なげで、それでいて熱を帯びた声で。

「シャン……ナリー……」

スキルが掠れた声でうめく。

彼が次に起こした行動、それは抱きしめることでも口づけを交わすことでもなく、そつとシャンナリーの体を自分から引き離すことだった。

1カ月前とは全く違う反応。

1カ月前の彼だったためらいもなくシャンナリーを抱いていただろう。

そのあまりに変わってしまった態度にシャンナリーは傷つき、今にも泣き出しそうな表情でスキルを見上げた。スキルはすまなそうな表情ながらも、ハッキリと目の前の少女に告げる。

「すまない……もう……抱けない」

「レイピアさん……？ あの人が大切だから？」

スキルは何のためらいもなく頷いた。

シャンナリーのマスカットののような瞳が絶望の色を灯して大きく開かれる。

「どうして!？」

声を荒げた。

「どうしてっ！　今まで誰にも本気にならなかったじゃない。なんで、レイピアさんのの！？」

どうして私じゃないの！

サーカスに入団した時から、ずっと。
ずっと見ていた。

スキルが本気で誰も愛さないことは知ってた。それでもいいと思った。そのスキルの性格を承知の上で最初に抱いて欲しいと言ったのはシャンナリーの方だった。彼は拒まなかった。

スキルはやさしい。やさしくて、酷く残酷な男だと思った。愛されていないのに、まるで愛されていると錯覚してしまう。いや、少しの愛情はあつたろう。けれどそれは本当の愛とは違う。

レイピアがスキルを追って来た時、嫌な予感がしていた。

彼女の存在は危険だと本能が告げていた。

だから彼女に嫌がらせをして追い出そうとした。色んな手をつかって。けれど予想外にレイピアはしぶとく全然帰る素振りも見せなかった。

そして、シャンナリーはある日気がついてしまった。スキルがレイピアに向ける視線は他の誰に向ける視線とも違うことに。今まで誰にも本気にならなかったスキルが変わってしまった。

嫌な予感が当たってしまった……。

「すまない。だが俺は、レイピアを……」
「言わないで！」

スキルの言葉を半ば強引に遮る。

「聞きたくない。あなたの口からそんな言葉！」

聞きたくなかった。

スキルの口からハッキリ「レイピアを愛している」という言葉を告げられなくなかった。いつそ「お前に飽きたから抱けない」とかそんな言葉を聞いたほうが良かった。ポロポロに傷つけてくれた方が良かった。

残酷な人。

やさしすぎる、残酷な人。けれど憎めない。憎めるはずも無い。まだスキルを愛しているから。

レイピアが眠りにつこうとベッドに入ろうとしたところで、思わぬ来客があった。

飛び込んできたシャンナリーはマスカットののような瞳を涙で潤ませ、いきなり右手を振りかぶった。そしてそのまま勢いよくパン、とレイピアの頬を張る。そのいきなりの出来事にレイピアは驚き、防ぐことはおろか少しも反応することもできなかった。

「どうしてあんななのよ……っ！」

たて続けにもう1回レイピアの頬を張る。張られた頬はみるみるうちに赤く染まる。それでもシャンナリーの行動は一向に止まらない。

「あたしの方がずっと、ずっとスキルを見てきたのに。あたしの方がずっとスキルのことを愛してるのに！」

ヒステリックに喚くシャンナリーの瞳からはポロポロと涙が零れ落ちる。

「いつもそうだった。スキルはいつも誰も本気で愛さないんだ！今のうちだけよ。……きつとあんただって飽きて捨てられるん……」

言葉が言い終わるか終わらないかのうちにパシン、とそれまで黙って聞いていたレイピアがシャンナリーの頬を張った。一瞬呆気にと取られたシャンナリーだったが、頬を押さえ噛み付くようにして怒鳴る。

「何すんのよっ！」

「そんなこと、わかってる！」

負けじとレイピアも怒鳴り返した。

「言われなくなつてわかつてるわよ！」

震える声で。

今にも泣き出しそうな声で。

「スキルは手に入らない玩具が欲しくてそれに執着してる子供と一緒。あの人の抱いている思いは愛じゃない！ そんなの……そんなの初めからわかつてるわよ！」

スキルの抱いている思いは本当の愛情ではない。彼は錯覚しているだけ。ただレイピアが少しだけ他の娘よりも毛色が変わっているから物珍しく思っているだけなのだ。

玩具を手に入れた子供はいずれその玩具に飽きてしまう。飽きた玩具は捨てられる運命。

スキルもいずれは……。

愚かだと思う。

傷つくとわかってる相手を好きになっちゃってしまっなんて。

2人して頬を打ち合って、顔を真っ赤に腫らした。

「馬鹿、大馬鹿、あんたさえ来なければよかったんだ！ 早く帰きなさいよ……っ」

「私だって、こんなところ来なくなかったわよ！」

盗まれたものが母親の形見のピンクダイヤモンドでさえなければ、こんなところまで追いかけてこなかった。予告状さえ送りつけられてこなければスキルと出会うこともなかった。

その一方で、スキルに出会えたからこそユーザへの誤解が解け、気持ちを整理することができた。けれどその代償として彼がレイピアに植え付けたのは冷めない熱病。

自分の思いは危険だ。その思いが育てば育つほど周りが見えなくなる。ユーザの件で痛いほどわかった。

こんな気持ちに気がつかなければよかった。

せめて最初に出会った頃の気持ちに戻れたらいいのに。お互い皮肉を言い合って、レイピアはダイヤを取り戻すことだけ考え、スキルはダイヤを守ることだけ考える。

その関係だけでよかった。他の感情はいらない。だが、それがもうできそうにないことはレイピア自身わかっていた。

1度動き出した感情は止められないくらいにどんどん膨らんでいく。

レイピアのスキルに対する思いはこれから成長を続けるだろう。彼女の気持ちとは裏腹に。

「入ってこないで……」

これ以上、心の中に。
踏み込んでこないで。

「どうして……」

どうして入ってくるの。

「入ってくるな……入ってくるな……」

呪文のように繰り返し唱える。両腕で自分自身をかき抱き、うずくまる。それは自分の心を守るための防衛行動。

怖い。

もう傷つくのは嫌なの。恋愛なんてしたくない。

捨ててしまいたい

こんな思いは。

早くピンクダイヤモンドを取り戻さなくては、と思う。取り戻して、スキルの元から離れたい。離れなくては……。逃げたい。

今ならまだ間に合う。

今ならこの思いも忘れることができる。

第13章 ゲームの行方1

ゲームの終わりまであと5日。

その数字は確実にレイピアを焦らせていた。

今、レイピアの心にあるのは最後の決着をつける　ダイヤを取り戻すことだ。そして、一刻も早くスキルの元から離れること。それだけだった。

「シア、教えて欲しいの。スキルの弱点を……何でもいいから」

ひどく追い詰められたような、沈痛な面持ちのレイピアにシアは怪訝な表情で眉をひそめる。

「レイピア……？」

「何でそんなこと聞くんだよ」

木の枝に腰掛け、足をぶらぶらさせていたブレンもまた怪訝な表情をして口を挟んだ。「それは……」と言ったきり黙りこんでしまったレイピアを見かねたシアが口を開く。

「私はあまりそういうこと知らないんだけど、ブレンは知ってる？」

「何で俺がそんなこと言わなきゃいけないんだよ」

「お願い……どうしても……知りたいの」

自分の親友の弱点を何で教えてやらなくちゃいけないんだ、とブレンは思ったのだが懇願するようなレイピアの瞳に見つめられ少々たじろいだ。彼女がこんな風に自分に頼みごとをしてきたことなど

1度もなかったから。

一時期レイピアに酷いこともしていたブレンだったが、今は改心しているし根は悪くない性格をしているのでこうした頼みごとになんか弱かったりする。

「う……そ、そうだな……。朝が弱いことかなあ。あいつ寝起きの胃にコーヒーを流し込まないと完全に目が覚めるってことがないんだ」

「朝……」

レイピアは口元に手を当て、何やら難しい表情で考え込んだ。

「それを聞いたところでどうすんだよ。まさか寝込みでも襲おうってんじゃ……」

「あーもう、あんたはうるさいっ！」

バシ、とシアは手にしていたタオルで木の上のブレンを叩く。叩かれた本人は痛いと言いながら文句をたれるが、無視する。

「他には何かないの？ もっと、すぐに使えるような……犬が嫌いだとか、刃物を見ると恐怖でくみあがるとか……そういうの」

「ねーよ。そんなもん。あいつには基本的に弱点なんてないんだよ」「そう……」

期待したような収穫がなく、レイピアはうなだれるように肩を落とした。

「ね、レイピア……どうしちゃったの？」

気遣わしげなシアのその問いかけにレイピアは力なく首を横に振

った。

ここ最近元気がないと思っていたが、今日はいつそうそれが激しい。シアには思い当たる節が1つあった。というよりそれしか思いつくことができなかった。

スキルが団長就任したパーティーの夜。

あの日が原因ではないかと考えている。だがそれを考えてみたところで今、目の前にいる落ち込んだ様子のレイピアにあれこれと追求するのは気が引けた。

こんな時、力になってあげることができない自分がひどく歯痒い。

パーティーの夜以降、スキルの姿を見るたびに脱兎のごとく逃げ出していたレイピアだったが、今日は違った。

スキルの姿を見つけると逃げ出すこともなく、目を逸らせることもなく、真っ直ぐ見据え唇を引き締めた。

「今日こそダイヤを返してもらおう……..!」

スキルの対しての宣言というより、まるで自分自身に言い聞かせるように言い放った。

スキルはそのレイピアの様子がこれまでのものと違うことに驚く殺気立っていて、ひどく追い詰められた表情をしている。

「どうか……したのか……?」

気遣わしげにレイピアの顔を覗き込もうとする。
しかし。

「べつにどうもしない! あなたには関係ないっ」

スキルがこれ以上言葉を紡がないように。鋭く言葉を放つことで強引に振り払う。

「レイピア……」

「言っなっ！」

もう何も聞きたくない。

これ以上彼の言葉を聞いたら自分の感情を押さえ込む自信がなかった。一滴の水を落としただけで決壊してしまうダムのように心がギリギリの場所にある。

「くだらないこと言っ……これ以上私の心を乱さないで！」

言い終えると同時に地面を蹴り上げた。

レイピアの手には武器も何も握られていない。ただ狙うのはピンクダイヤモンドのみ。

このまま闇雲にスキルの懷に手を伸ばしても避けられることは目に見えている。すばやさでいうとスキルの方がはるかに上なのだから。

何とか地面に引き倒し逃げ場を無くさなくてはならない。これまでに何度も繰り返してきた攻防戦でレイピアが学んだことだった。

懷に飛び込み、身を屈めるとスキルの足を払った。スキルは若干体勢を崩したものの、倒れこむということはなくすぐに体勢を立て直してレイピアと距離を取った。

彼は崩れたバランスを即座に立て直すことができる。サーカスで幼い頃から鍛えられているためできる芸当なのだろう。

だがレイピアにとってはこんな時ですら風のように避けるスキル

がたまらなく憎らしかった。

この気迫が伝わっているならダイヤを返してくれたらいいのに。
ピンクダイヤモンドなど、今まで彼が盗んできた宝物に比べたら
価値が低いものだろうに。

どうして返してくれないの、とレイピアの心は焦れるばかりだった。

「どうして返してくれないのよ……っ！」

声に出して叫ぶ。

その瞬間、動きに隙が生じてしまった。スキルはそれについてレイピアの手首を掴んだ。

「……………ッ！」

弾かれるようにレイピアは体を仰け反らせた。咄嗟にスキルから逃げようとしたのだろう。足がもつれ体勢が崩れる。

視界が反転して 転げてしまった。

同時に掴まれていた手も離れる。砂埃が上がって白い頬を汚す。

地面に倒れこんだままの自分の目の前にスキルの手が差し伸べられた。だが、その手を叩くようにして振り払う。汚れのついた顔を手の甲で拭い、涙で滲む瞳で睨みつける。

一瞬、スキルが怯む。

「泥棒っ！」

感情のままに叫ぶ。

「返してよ、返してっ……。私の……っ」

ピンクダイヤモンドと心を。
喉を詰まらせ、最後の方は言葉にはならなかった。

ブレンとシアに頼み込んでスキルの弱点を聞き出そうとした。弱点についてダイヤを取り戻そうと考えたのだ。けれど期待したようなスキルの弱点はなく、やむなくいつも通り正攻法でダイヤを奪い返そうとした。

だが、結果はあのとおり。

完全に負けた、と思った。

戦意は完全に消えてしまった。

けれども戦意と共に胸にうずまいている熱だけはどうしても消えてくれそうになかった。

もう駄目だ、もう……駄目。

「うつ……あ、うつ……」

苦しかった。

だんだんと病魔に蝕まれていくように、強くなっていくその思いはレイピアの心を締め付ける。

楽になりたかった。

苦しみを無くしてしまいたかった。

その苦しみを取る方法 それは……。

1つの考えがレイピアの脳裏をよぎった。

そしてレイピアにはその方法以外楽になる術を知らなかった。その方法を使うことによって後々レイピアの心はさらに苦しみを深めるかもしれない。

だが一時、苦しみを消すことができる。その一時の安らぎが今のレイピアには必要だった。

吐き出してしまうおうと思った。

胸にうずまいている思いを……全部。

のろのろとひどく億劫そうな足取りで向かった先　それはスキルのテントだった。

湿り気を帯びた風がレイピアの頬を撫でる。この1カ月ほどで吹く風の温度はだいぶ変わってしまった。

あの時はまだ吹く風も冷たかったというのに。サーカスに来た初めの頃の夜　スキルのテントを訪れたときは。

あれ以来、夜にスキルのテントを訪れることはしなかった。

あの時の夜に彼が言った言葉は冗談に過ぎないものだったのだろう。けれども用心するにこしたことはないし、団員達の間も痛かったことも加えて、自然と足を赴けることは控えていた。

スキルのテントの前まで来て、レイピアは足を止めた。

テントから明かりが漏れている。まだ眠っていないのだろう。浅くため息をつくと言悟を決め、幕を開いた。

正直、今のレイピアを見ているのは辛かった。

ひどく追い詰められた表情でダイヤを返せと叫んだ姿が目には焼き付いて離れない。彼女をあそこまで追い詰めてしまったのはまぎれもなく自分だ。

スキルはピンクダイヤモンドを懐から取り出した。シャラリと音を立てて手のひらに収まる。

このダイヤがレイピアの母親の形見の品であることを知ったのはつい先日のことだった。だから自分の危険も顧みずたった1人で追いかけてきて、ダイヤを取り返そうと必死になっていたのだ

それを知ったとき、もちろん罪悪感は生まれた。だがそれ以上に彼女を離したくないという思いの方が強かった。

たとえそれがレイピアの思いを無視していたとしても。

レイピアがダイヤを取り返すために向かってくるときはいつだって本気で相手をしていた。その中に多少のからかいはあったけれども。

最初の頃は仲間達と自分自身を守るため。

そして今ではその思いも変わりレイピアを帰さないために必死になってダイヤを守っている。

ダイヤを取り戻した時点でレイピアの目的は達成され、彼女の性格からいつて絶対に帰ろうとするだろうから。

レイピアの腕はなかなか筋がいい。

油断しているとあつという間に取り返されてしまうだろう。表情では平静を装っていたものの、何度かひやりとさせられたこともあった。自然体でいるようできて、実は常に気を張っていた。

だが、それも今日までのこと。

スキルは明日にでもダイヤを返そうと決意した。あくまでもダイヤを返すだけであつてレイピアを帰す気はない。

明日になったら改めて自分の思いを伝えようと思った。

好きだと言ったことは冗談ではなく本気だということを。
自分の側から離れないで欲しいということを。

拒まれることは目に見えているけれど……それでもかまわない。
諦めるつもりはないから。

パサ、とテントの幕が開く音がした。

もうすでに夜更けといえる時間だというのに。一体誰が？そう思
って顔を上げると昼間の時と同様にひどく追い詰められた表情のレ
イピアが立っていた。

第13章 ゲームの行方2

スキルはレイピアの夜更けの来訪に驚いた様子だった。呆然とした表情で椅子から立ち上がり、ゆっくりと近づいてくる。

自分がどんな表情をしているのかわからなかった。顔を赤くしているのかもしれないし、青くしているのかもしれない。いずれにしてもきつと酷い顔をしているに違いない。

「どうしたの……？」

スキルが少し心配そうに問い掛けてくる。

おそらく昼間のことを気にかけているのだろう。

「……中、入る？」

何も答えずにいると顎で中に入るよう促す。それでもやはり顔を俯かせたまま答えずにいるとスキルは少し困ったような表情をして背を向け、歩き出す。

レイピアは一瞬ためらいを見せたが、覚悟を決めるとその背にそっと額を寄せた。

「……………」

スキルは普段あまり動揺を表に出さない人なのに、今は違った。石のように固まるという言葉を使ったら丁度この時だろう。

ぎこちない動きで肩越しにレイピアを振り返り、半ば掠れた声を出した。

「あ……の……？」

「……昼間はごめんなさい……。少し……あの時はどうかしていたみたい」

レイピアの声はよく聞いていないと聞き逃してしまいそうなほどか細い声だった。

今の君の方がどうかしてる、とスキルは半ば混乱する頭でそう思ったのだが言葉には出さずにいた。ただ驚いた表情でレイピアを見つめるだけ。

顔をスキルの背に埋めたまま、レイピアは身動き1つしなかった。

やがて数秒の沈黙の後。

「……前に言ったこと覚えてる？」

突然、スキルがそう切り出した。

前に言ったこと それは以前ダイヤを取り返そうとレイピアが夜にスキルのテントに忍び込んだときの言葉だ。その時スキルは「次に来たら襲っていいものと見なすぞ？」と言った。

もちろんあの時は冗談で言ったのであって、本気ではない。今もそう 警告の意味を込めて言ったただけだ。

だが、レイピアは無言で頷いた。覚えている、という意味を込めて。

言葉を失ったスキルの代わりにレイピアが口を開く。
今まで溜め込んでいたものを吐き出すように。

「私……あなたが好きなの……」

スキルはその告白に動揺を隠し切れず、信じられないという表情をつくる。

「くやしいからずっと認めないようにしていたけれど……もう限界みたい。たぶんあなたに最初に会った時から惹かれていたの……」

彼はそこで理解した。レイピアが夜更けにも関わらずテントを訪れた理由を。

今にも消えてしまいそうなレイピアを腕の中に抱き込む。スキルの腕の中にいる娘は逃げ出すことも、拒むこともなかった。顔を俯かせたまま、おずおずと両手をスキルの背にまわした。

「俺も……最初に会った時から君に惹かれていたんだ」

顔を上げたレイピアは微かに微笑んだ。今にも泣きそうな顔で。胸を詰まらせたように。

お互いどちらからともなく瞳を閉じて口づけを交わす。

スキルは息ができなくなるくらいに強くレイピアの体を抱きしめた後、横抱きにして軽々と抱え上げた。それほど筋肉があるように見えないのにどこにこんな力があるのだろうか、とレイピアはぼんやり思う。

ベッドにレイピアの体を降ろすと、上から覆い被さるようにして華奢な体を押し倒した。しゅる、とりボンが解かれ胸元が開く。

恥じらい、顔を赤らめたレイピアに微笑をもらすとスキルはもう一度唇に口づけを落とした。

やがて唇が離れ、頬から首筋、胸元へと場所を移動していく。時々混じる浅い吐息と何度も重ねられる唇にレイピアはだんだんと思

考能力を奪われていった。

ポツポツとテントを弾く雨音で目が覚めた。

やけに体が重い、と思ったらスキルの腕によってしっかりと抱きこまれているからだった。わずかに顔を傾けると静かに寝息を立てて眠るスキルの顔が見えた。ドクン、と心臓が鳴る。

あの時のような狸寝入りではなく、本当に眠っている。そのことがわかると安堵のため息をもらす。

レイピアはスキルの腕を持ち上げ、その拘束を解いた。だいぶ熟睡しているようで起きる気配は少しもなかった。

ブレンの言うとおり本当に朝が弱いのだ。

毛布を巻きつけたまま体を起こし、ベッドの下に落ちているスキルの服に手を伸ばした。シャラリと音がして服の中からピンクダイヤモンドが転がり落ちた。それを拾い上げ、胸に抱きこんだ。

1カ月ぶりの感触。

あれほど取り戻すことができなかったダイヤがこんなにも簡単にレイピアの手の中にある。

やっと取り戻すことができた。

ハラハラと涙が零れた。

それはダイヤがこの手に戻ってきた嬉しさでもあり、別の理由でもあった。

楽になりたくて、苦しみを消したくて彼に身を委ねた。

一瞬の安らぎを得るために。だが、やはりそれは一瞬だけのことだった。満たされた心はすぐにさらなる望みを欲する。

ずっと側にいたい。

愛して欲しい。

それが無理なことはわかっているのに。

彼は女性に執着しない人だから。いつかは冷めてしまう人だから。

彼と肌を重ねたのは抱かれないと望んだからでもあり、ダイヤを取り戻すことでもあった。

朝が弱いというブレンの言葉に従って。

朝ならば確実に取り戻すことができるから。

ダイヤを取り戻すこともなく帰ることができなかった。それどころかスキルへの思いを植え付けられてしまった。このまま帰るのは屈辱的であり惨めだった。

どのみちゲームの期限が終わったら団員達ともスキルとも別れなくてはならないのだから、せめて最後まで一矢報いたかった。

これ以上自分が惨めにならないように。

だが、こんな方法でしか一矢報えない自分は何て愚かなんだろう。

ダイヤを手にしたレイピアを見て団員達は、そしてスキルはどう思うだろうか。

軽蔑し、最低だと罵るだろうか。けれどこれで彼に対して一矢報いた女として記憶に残ってくれるだろうか。それとも他の女性達と

同じようにいつかは彼の記憶からなくなってしまうのだろうか。

そつとスキルの頬に手を当て、口づける。

相変わらず目を覚ます気配がない。わざと眠ったふりをしているんじゃないか、とさえ思える。

青色の瞳を翳らせ、かぶりを振るとベッドから下りて服を身につけ始めた。

レイピアはスキルを追ってこの場所に来たとき、ほとんど荷物を持ってきていなかった。ダイヤさえ取り返すことができれば他の荷物などどうでもいいようなものだったから。

着替え終わるとのろのろと酷く遅い動作でテントの入り口まで向かい、幕を持ち上げた。そして顔だけ動かしてスキルの方を振り向く。

今、スキルが目を覚まして引きとめてくれたら……。

一時の感情だけの言葉でもいい。

嘘でもいい。

行かないでくれ、と。

愛してる、と言ってくれたら……。

この先どんなことがあってもスキルの言葉だけを信じて側にいる道を選んでしまふのだろう。

たとえ彼の自分に対する気持ちが冷めてしまっても。

他の女性に心が傾いてしまっても。

（私はどうしようもなく……愚かね）

周りが見えなくなってしまうくらいにスキルのことを愛してしま

った自分も。ダイヤを取り戻したいがためにこんな方法を取ってしまった自分も。彼の気持ちが変わってしまうのを恐れて逃げ出すことしかできない自分も。……全て。

そう、自分は逃げ出すのだ。

サーカス団と、彼の元から。

ポツポツと最初は小さく控えめだった雨音がだんだんと大きくなっていく。どうやら雨は本降りになってきたようだ。

雨雲がたち込めた今の空のように心は晴れそうになかった。

第13章 ゲームの行方3

スキルのテントを後にすると雨は滝のように、とまではいかないけれどだいぶ降り注いでいて地面に浅い水溜りを作っていた。その容赦ない雨はレイピアの体温をゆっくりと奪っていく。

深くため息をついて空を見上げた。

最後に1度スキルのテントを振り返ると、覚悟を決めたように背を向けて歩き出した。

時間は早朝。団員達が起きだしてくる気配はまだ無い。

今ならば誰にも見咎められずにここからサーカス団から抜け出すことができる。自分の行動に後悔はしていないけれど、やはり胸の奥底に後ろめたさがある。誰にも見つからずに済むのならその方が良かった。

「……レイピアさん？」

レイピアの思いもむなく、誰にも見つからずに出て行くことはかなわなかった。その背後から掛かった声にギクリと身を強張らせた。青ざめた顔で振り返るとそこにはヤカンを片手にして立っているリグの姿があった。

「リグ……」

おそらくコーヒーを入れるために井戸へ向かう途中だったのだろう。そのタイミングの悪さにレイピアは舌打ちをせずにはいられない気分だった。

「こんな朝早くに何をしてるんですか……？」

首を傾げるリグだったが、次の瞬間にはアッと息を呑んだ。彼の視線の先にはピンクダイヤモンドを握っているレイピアの手があった。

リグの表情に気付き、慌ててスカートのポケットにしまい込む。だが、リグには全てわかってしまったようだった。

なぜレイピアがダイヤを持っているのかも。どうやってそれを取り戻したのかも。

「……あの……少しお話をしませんか？ コーヒーを入れますから」

視線をずらし、顔を俯かせて黙り込んでしまったレイピアにリグはそう声を掛けた。

「軽蔑したでしょう？」

顔を俯かせたレイピアは掠れた声で、その言葉だけしぼり出した。

「……え？」

「正攻法で取れなかったんだもの。仕方ないじゃない、こうするしかなかったんだから」

体を使って、ダイヤを取り返した。そう語っているのだ。だが、その言葉の内容とは裏腹に表情は今にも泣き出してしまいそうで、ひどく見ていて痛々しい。

「……あなたはそんな女性じゃありませんよ。そんな風に自分を貶

めてはいけません」

リグはゆっくり首を左右に振った。途端にレイピアはムツと唇を歪め、険しい顔つきになる。

「あなたに……何がわかるの」

「わかりますよ。レイピアさんはいつも一生懸命でがんばってます。そんなことをする女性じゃありません。私は知ってます」

「……………ッ！ どうして……………そんな……………」

「私は人を見る目だけは確かなんですよ」

そう言ったリグの表情は穏やかなもので、レイピアは言葉を詰まらせたようだった。

「若君のことを本気で愛しているんですね。だからあなたはそんなにも追い詰められてしまった。……………そうでしょう？」

レイピアは数秒の沈黙の後、無言で頷いた。

「……………私の思いはこれから先どんどん膨らんでいく。でも、スキルは違う。彼の思いと私の思いは違うの……………。いつか……………彼の気持ちは変わっていくんじゃないかって、そんなことばかり考えて不安になって……………。そんなことになったら……………きっと耐えられない……………」

ああ、やはり。

やはりレイピアがここ最近表情を暗くして思いつめていたのはそのことが原因だったのだ。

だが、レイピアはそう言っけれどリグには本当にそうだろうか？
と思う。

スキルはたぶんレイピアが考えている以上に彼女のことを深く愛

しているのではないだろうか。少なくともリグにはあんなにも1人の女性に熱くなっているスキルを見たことがない。

お互い相手を深く思い合っているはずなのに、どこかがすれ違ってしまっている。

今ここで「若君は本気であなたのことを愛しているんです」と言ってしまったかった。けれどそれでは結局何の解決にもならないと思うのだ。たとえそれを言ったところでレイピアは納得しないだろう。彼女はスキルの態度から「愛されている」という事実が知りたいのだ。

「……そろそろ行くわ」

そこで話を打ち切るとコーヒークップをテーブルに置いて、立ち上がった。そのレイピアに声を掛ける。

「本当に……行ってしまうつもりですか？」

引き止めるために声を掛ける。

今ならまだ間に合う。目を覚ましたスキルとレイピア、2人が話し合う時間を持ちさえすれば、すれ違っている心が寄り添いあうことは充分可能なのだ。

「もう……ここに用は……ないもの」

だが、レイピアにはここに留まる気持ちはないようだった。

「……本当にそれでいいのですか？」

問い掛けに無言で頷いた。

「シアには会っていかないのですか？ ソアラ様にも……」

レイピアはその言葉に一瞬心が揺れ動いたようだったが顔を俯かせたまま、何度も首を横に振った。

「会わないわ。2人にはごめんなさい、って……伝えておいて……」

会えば決心が揺らいでしまうと考えたのだろう、頑ななその決意は変わることがなかった。深くため息をつく、リグはとうとうレイピアを引きとめるのを諦めた。

「……わかりました……」

「リグ、あなたが最初、親切にしてくれたから……私は頑張れたのよ」

団員達に冷たくされていても頑張れたの。……ありがとう。

そう言つて、笑った。その笑顔は以前1度だけ見た心から笑っていた時の晴れ晴れしいものではなく、愁いを帯びているものだった。胸を詰まらせる。

「私こそ……あなたがいた1カ月はとても楽しかったですよ」

レイピアにはいつもハラハラさせられていたし、心が休まることになかったけれど本当に楽しかった。最近では、レイピアが本当にサーカス団の一員になったのだと思ってしまうほどだった。

あつという間の1カ月だった。

楽しい時には終わりが来るのが早いというのは本当だ。

「……お元気で」

「さようなら、リグ。……元気で」

レイピアが手を差し出した。リグは半ば涙のせいではやけてしまった視界でそれを捉えると、手を伸ばし握手を交わした。やがてするりとレイピアの手が離れる。

その日、サーカス団から領主の娘が姿を消した。

第14章 消えた領主の娘1

「レイピアッ！ レイピア！」

スキルが血相を変えて、レイピアを探しテント街を走り回る。いつもの彼らしくなくひどく取り乱している。

彼はリグの姿を見つけると、駆け寄ってきた。

「彼女を レイピアを見なかったか？」

「朝早くに、ここを出て行きましたよ」

顔をこれ以上ないぐらいに青ざめさせる。

「……………ッ！ どうしてだ！？ どうして引き止めなかった！」

まるでリグに掴みかかりそうなぐらいの勢いで、怒鳴る。対するリグはあくまでも冷静に首を横に振った。

「……………私にはレイピアさんを引きとめることはできません。彼女は……………悩んでいました。『私とスキルの抱いている思いは違う』と、そう言っていました。彼女の中にあるその思いが消えないかぎり引きとめたところで、いずれ再び逃げ出すでしょうね」

静かな声で伝える。

スキルはリグを通して、レイピアの言わんとしていることを理解した。

自分の、レイピアに向ける気持ちがいつかは冷めてしまうものだと彼女は考えたのだろう。

「クソッ！」

ダンッと片手を木の幹に打ち付ける。

ようやく気持ちを通じたのだと思った。

レイピアに向ける気持ちが遊びではなく、本気だということを。そしてスキル自身、これからもずっと彼女のことを愛していけると確信した。

だから、抱いた。けれど朝になって目が覚めたらレイピアは消えていた。スキルの前からいなくなってしまった。

まるで最初から存在していなかったように。

むしように腹が立った。

何も告げず、ダイヤだけ持ち出して逃げたレイピアに対しての怒りが少しと、それ以上に自分に対しての怒りだった。レイピアがそう考え、思い詰めてしまった最大の原因はまぎれもなく自分にある。

「報い……か」

今まで女性に対して本気にならずに、軽い付き合いばかり続けてきた報い。レイピアが誤解しても仕方がない。それだけのことをしてきたのだから。

「あなたがレイピアさんを本気で愛しているのなら追うことです。けれど、そうでないのなら気持ちを切り替え仕事に打ち込んでください。あなたはサーカス団を率いる団長なのですから」

「そうだな……俺は……団長だ」

レイピアを愛している。

その気持ちはこれから先も変わらない。そして追いかけてい
う気持ちも大きい。だが、自分には団長としての役目があり、60
人もの団員達をまとめていなくてはならない。自分の都合で団を
離れるわけにはいかない。

目を閉じ、深くため息をつくと力を無くしたように木にもたれか
かったまま、ずるずると座り込む。肩を落とし、意気消沈した様子。
リグは黙ってスキルの背中を見つめた。

どれほど時間が経過しただろうか。

シアとブレンが息を切らせながらスキル達の元へ走って来た。

「レイピアがいなくなっちゃったって聞いたの！」

「おい、本当なのか!？」

スキルが肩を落とし、力無く座っているのを見て、2人はそのこ
とが事実であると悟る。

「……その様子だと、本当みたいね」

唇を噛み締めるシア。

「どうして何も言わずに行っちゃったの・・・レイピア」

「そんなの決まってるじゃないの。合わせる顔がなかったからだわ」

声のする方向を振り向くと、いつのまに來ていたのかシャンナリ
の姿があつた。

「……シャンナリー、それどういう意味なの!？」

微かにシアの顔が強張る。

「あの人、スキルに色仕掛けで迫って、ダイヤを取り返して逃げたのよ。だから合わせる顔がないんだわ」

「何てこと言うの！」

シアとシャンナリーは真っ向から睨みあう。険悪な空気が流れる。それを打ち破ったのはスキルの静かな声だった。

「あいつは……そんな女じゃない」

「どうしてそんなにあの子の肩を持つのっ！」

「……ずっと見てたから、わかるんだ」

この1カ月の間、ずっと。

彼女のことを考えない日はないぐらいに。

ダイヤを取り返すためとはいえ、好きでもない男に体を預けられるほどレイピアは器用な女ではない。昨夜聞いたレイピアの告白。あれには間違いなく嘘偽りはなかった、彼女の本心からの言葉だ。

「俺は……彼女を愛してるから」

シャンナリーは唇を噛み締めるとくるりと背を向けた。

「だったら、すぐに追いかけたらいいのよ！」

「……シャンナリー？」

「そんな顔するスキルは、もう私の知ってるスキルじゃないもの！
勝手にしたらいいのよ」

言い終えると、シャンナリーは駆け出して行ってしまった。次に

スキルに声をかけたのはブレンだった。仏頂面で、言う。

「シャンナリーの言うとおりだぜ。お前はこのサーカス団の団長だろ。自分の思うとおりに行動したらいい」

「だが、俺には団長としての役目がある」

「つか～～～！ わかってない、お前」

ブレンはガリガリと頭を搔きむしると、スキルを小突いた。

「サーカス団ごと移動すりゃいいんだよ。団長はお前だ。俺達はどこへだってついていく！ シャンナリーだってそういう意味で言ったんだ」

「そうよ、スキル！ みんなレイピアのことが大好きなんだから」

あの子はもう私達の仲間なのよ、と言う。

小突かれた頭を押さえ、スキルは驚いた表情でブレンとシアを交互に見つめていたが、やがて微笑を浮かべる。シャンナリーの最後の言葉、あれはもしかしたら彼女なりにスキル達のことを認めてくれた証なのかもしれない。瞳を閉じ、感謝に胸を震わせた。

「ありがとうブレン、シア。シャンナリー……」

「レイピアを追いかけよう！」

そう言ったスキルの顔には迷いも、落ち込んだ様子も見あたらなかった。中央広場に集まった団員達は威勢良く頷く。彼らの気持ち

も同じだった。

レイピアともう1度会って、そして再びサーカス団内に戻って来て欲しいのだ。

リグの顔にも微笑が浮かぶ。

「でも、一体どこへ行ったのかしら……レイピア」

シアの呟きにスキルは首を横に振る。

「わからない。だが、とにかくしらみつぶしに探すしかないな。もしかしたら……このまま一生会えないのかもしれないけれど」

「おや、めずらしく弱気な発言ですね。あなたらしくもない」

リグが言った。

「仕方ないだろう。世界は広い。たった1人の人間を探すのは容易なことじゃない」

「いつものあなたなら自信満々な表情で、不可能なこともやってのけるはずでしょう？」

「簡単に言っけどな……」

何か含みのある表情で見つめているリグに訝しげな視線を向ける。

「……リグ、お前何か知ってるのか？」

その言葉を待っていましたとばかりに、リグはにっこりと笑った。自信満々に。それはいつもはスキルが得意としている顔なのに、今日ばかりはリグのものだった。

「これ何だかわかります？」

彼の手に握られていたのはスキルも見覚えのあるものだった。

「お前……それ……」

「はい、探知機ですよ。以前レイピアさんが若君を追ってきたときに使っていたものです」

探知機の画面上には光が点滅している。その光はレイピアの居場所を指し示している。

「レイピアさんの服にこっそりとオリハルコンをくっつけておいたんですよ」

「いつの間に……」

最後に握手を交わしている時に、隙を見計らって。にっこり笑ったままリグは言った。スキルは呆けた顔でリグを見た後、笑いを堪える形に表情を移す。

「お前って……」

「絶対若君はレイピアさんを追いかけるだろうって思っていましたからね。準備に抜かりはありませんよ。ふふふ、すごいでしょ？」

やがてスキルは堪えきれなくなったように吹き出す。体を折り曲げて笑い、リグの背中をバシバシ叩く。

「ああ、なんてすごい奴なんだ！」

「出発は一週間後ですね」

まずはホトリープでの公演を終了するビラを街に配らなくてはならない。最終公演をして、テントをたたんで、レイピアを追うために次の街へ移動する準備が終了するまでにかかる期間は一週間。一週間我慢すればレイピアを追いかけることができる。

スキルはニツと唇の端を上げて笑った。

「……ああ。忙しくなるぞ」

第14章 消えた領主の娘2

サーカス団を出たレイピアはそのままの足でホットリップの自分の屋敷へと戻ってきた。

ダイヤが盗まれた日、レイピアは屋敷の者に何も告げずすぐにスキルを追った。そのためレイピアが行方不明になったとして屋敷では騒がれていたのだ。屋敷に帰ると、使用人達は駆けより口々に「無事だったのですか!」「今まで一体どこにいたんです!？」と言った。レイピアはそのことに関しては適当に言葉を濁して父のいる書斎へと向かった。

「レイピア……お前」

驚き、目を見開いてレイピアを凝視する父親の目の前にダイヤを突きつける。

「盗まれたピンクダイヤモンド、盗賊から取り戻して来ました」

「これ……は。お前、今まで行方不明だったのはこれを探していたのか?」

レイピアは頷く代わりに冷たく言葉を放った。

「あなたのためではないわ。これは……お母様の思い出を守るためにやったこと。あなたにしてみれば……単なる宝石にしかすぎないのでしょーけど」

その言葉に、レイピアの父の瞳が微かに寂しそうな色を帯びて揺らめく。やがてしばらくの沈黙の後、ポツリポツリと語り始める。

「このダイヤはな……私があれに送った唯一のもので、あれも生涯大事にしていたものだ」

母を思い出し、懐かしむように父は目を細めた。

自分がダイヤを母の思い出として大切にしていたように、父もまた同じ思いを抱えていたというのか。

信じられないという思いでまじまじと父の顔を見る。

だが、そこにあつたのはまぎれもなく母への愛情に溢れている父の姿だつた。母が亡くなってから初めて見る姿でもあつた。

思わず息を呑む。

「……この宝石だけは、どうしても盗まれるわけにはいかなかったのだよ……」

そう言つて、とても大切そうに宝石を握りしめる。レイピアは混乱を隠し切れず言葉も出せない。その心情を察しているように、父は言葉を続けた。

「……今さら信じてもらえないかもしれないが……」

「当たり前じゃない……。今さらよ！ あなたは1度だつてお母様のお墓参りに行かなかつた」

怒りで震える声で言う。

「それどころか毎日毎日仕事ばかりでお母様のことすら口に出さなかつた。まるで存在すらしてなかつたように……っ」

「すまない。だが……私も辛かつたのだ。あれのことを思い出さないように仕事に逃げることしかできなかった」

そうすることでしか孤独感を紛らわすことができなかった、そう父は語る。

そこにはいつもの気難しい顔の父の姿はなく、代わりに人間らしい弱々しさが垣間見えた。レイピアはそんな父から顔を背ける。

「……あなたはこの2年、私を探しにすら来なかった」

屋敷を飛び出してから、父からは一度も音沙汰がなかった。その気になればレイピアの行方を探すことなど容易にできたであろうに。

「私の存在なんて、どうでもいいようなものだったんでしょ？」

そのレイピアの言葉を聞き、彼はハツとしたように目を見開く。

「探さなかったのは少し冷却期間を置いたほうがいいと思ったからだ……お前は私の顔など見たくないだろうと思っていた。だが、それが余計にお前を傷つけていたとはな……すまなかった」

戸惑いながらも、撫でるようにレイピアの頭にそつと手を置いた。父に、こんな風に触れられたのは何年ぶりだろうか……。

「……………」

「……盗賊から予告状が来た時、お前を呼び戻すいい機会だと思った」

けれど実際2年ぶりに会うとどう接したらいいのか、どう声を掛けていいのかわからなかった。

無口な男は何度も言葉を途切れさせながらも、レイピアに自分の気持ちを伝えていく。

「これだけはわかって欲しい。……お前が旅に出てからは、毎日無事でやっているのか不安でたまらなかった」

レイピアはわずかに顔を父の方に振り向かせた。
家を飛び出した時、本当はずっと探してもらいたかった。「家に帰ろう」と、たった一言父の口から聞きたかった。

「あなたの愛情は……わかりづらいわ。私は……鈍いから今みたいに言葉にしてもらわないとわからないのよ」

「私達は……少し、話し合う機会が少なかったのかもしれない……すまない、レイピア」

途切れ途切れながらも、言葉にもらってようやくわかった。
父はちゃんと母のことを愛していた。そして、自分のことも。
愛する者を失って仕事に没頭することしかできなかった父の思いも、今ならわかる。2年前とは違い、レイピアも今は大切な人を失うことの苦しみも悲しみを知っているから。

思い出すのはスキルの顔。

いつも、さりげなくレイピアの心を癒してくれた人。

スキルとユーザと決闘をする時、なぜあなたがそんなことをする必要があるのと問いかけたレイピアに対して彼はこう言った。

それはまるで謎かけのような、言葉。

「なぜ、ね。さあどうしてだろうね？ あいつが気に入らないから、ゲームに決着がつかないうちに君を連れて行かせるわけにはいいかない、このどちらでも当てはまりそうで……実はそうじゃない」

意味がわからなかった。いくら考えても考えてもわからなくて。いや、違う。わからなかったのではない。わかるうとしなかったのだ。その時は、その言葉が表している意味を知ってしまうのが恐かったから。

彼の言った言葉の意味、それは　　。

『君をユーザに渡したくないから』

謎かけのような言葉は、遠まわしだけどレイピアに対する思いが確かに込められている。

スキルはレイピアに対して『愛している』という言葉を一度も言っていないけれど、彼は自分が考えているよりもずっと自分のことを愛してくれていたのかもしれない。逃げ出してしまわずに、話し合って、きちんと彼の気持ちを確かめるべきだったのかもしれない。

だが、もう遅い。

彼のことを信じることができず、いつか捨てられてしまうのではないかという不安にかられて自ら離れてしまったのだから。もうサ―カス団に、スキルの元になど帰れるはずがない。

「……レイピア？」

不思議そうに自分を見つめてくる父と目が合って、ハッとすると慌てて何でもないという風に首を左右に振る。

「これからどうするんだ……？」

「……旅に出ます。お父様のことが嫌いだからとか、そういうこと

じゃなくて……私には冒険者が合っているみたいなんです」

少し寂しげに父の瞳が揺れる。

「そうか……。お前の好きにするといい。屋敷のことは気にするな」

無言でレイピアは頭を下げる。

「でも……いつかはお父様の顔を見に、立ち寄ろうと思っています」
「いつでも歓迎する」

2年間、見ないうちに増えてしまった顔のしわをさらに深くして父は笑った。レイピアも微笑する。2人の間に深く、修復のきかないほどに広がっていた溝がゆっくりと埋まっていった瞬間でもあった。

遠慮するレイピアに父は旅の資金としてかなりの金額を援助してくれた。そのため馬車を1台借り切ることができた。それほど大きくない馬車だったが、レイピアと荷物を乗せてもまだ余裕がある。

「お嬢さん。どちらへ？」

御者に問われ、レイピアは顎に手を当てて考え込む。

まだ具体的にどの街に行こうか考えていない。

「そうね……。これから暑くなるから北へ」

「北？ 具体的な場所などは？」

「どこでもいいわ。ホットリープを離れた場所なら……どこでも」

レイピアのことを自由気ままな旅人だと理解したのだろう。御者の男はそれ以上深く尋ねず、思いついた考えを提案する。

「それじゃあここから馬車で3日ほど行ったところにあるアクアクリスの街はどうですかね？ 水の都って呼ばれていてこれからの季節にはうってつけですよ」

「うん！ 決まり。そこがいいわ」

ゆつくりと馬車が動き出す。

遠ざかっていくホットリープののどかな景色を見ながら、レイピアはスキルのこと、そしてサーカス団の仲間達のことを思い出していた。

楽しかった1カ月間。

たぶんこの先どんなことがあってもあそこにいた1カ月ほど楽しいことはないだろうと思う。

知らずのうちに涙が頬を伝っていた。御者に不審がられないように慌てて拭くと、荷物を枕がわりにして眠りについた。

眠ってしまえば泣いてしまうこともないから。

馬車はゴトゴトと揺れながらホットリープの北 アクアクリスの街を目指して進んでいく。

第15章 領主の娘の帰る場所1

アクアクリスの街、宝石商人ロワーズ宅。

街に2日ほど前についたレイピアは現在ここに住み込みで働いていた。働いているといっても宝石の売買というわけではない。冒険者としてロワーズの屋敷とロワーズ自身を護衛をしているのだ。

アクアクリスの街は現在盗賊団が多く出没している。裕福な家庭や商人宅 特に宝石商などは狙われやすい。

実際ロワーズの屋敷も盗賊に何度も狙われたという。そのため冒険者を屋敷の護衛として雇い入れている。

住み込みも可ということで仕事と滞在場所、両方を探していたレイピアはすぐに飛びついた。しばらくここに滞在してこれからのことを考えようと思つて。

宝石商人ロワーズは護衛の仕事をしたと言つたレイピアに最初は驚きこそしたけれど、女だという理由で差別はしなかった。もつとも、本当に仕事ができるかどうかテストをさせられたけれど。

「お願いします、ここで働かせて欲しいんです」

「君が……護衛に？」

ロワーズは30代半ばぐらいで、口髭をたくわえた穏やかな感じの男だ。パツと見、宝石商人には見えない。客との駆け引きをする商売よりも、のんびりと園芸でもしている方が似合っている。

その彼は驚いた顔で、レイピアを見る。無理はない、いくら給料

がいいからといって好き好んで盗賊と対峙する危険な仕事につきたがる女性など滅多にいないから。

少し困った様子で、ロワーズは口髭をさする。

「うーん……。護衛の仕事はきついよ？ 危険も伴う。ちゃんとこなすことができるかい？」

「大丈夫です！」

レイピアにとってはその方が好都合でもあった。忙しく働いていれば、いろいろ考えないで済む。2年前の父も、きつとこんな気持ちだったのかもしれない。

「ふむ。それじゃあテストをしようか」

「……テスト？」

眉をひそめるレイピア。

「これは君だけに限らず全員にやっているテストだから。なに、簡単なものだからあまり固く考えなくてもいい。……ラグス」

ロワーズは『ラグス』と声を掛けた。

レイピアとロワーズのいる応接間の奥の扉が開き、ラグスと呼ばれた男が入ってきた。

レイピアの体の2倍はあるのではないかと思うぐらいの屈強な大男だった。顔にも腕にも体にも至るところに刃物の傷があつて、何度も死線を越えてきたことを伺わせる。護衛者というより、むしろ彼の方が盗賊に見えなくもない。

思わずごくり、と息をのむ。

「ほーお。今度はどんな奴が来たのかと思ったたら小娘か」

ラグスはレイピアを見るなりおもしろそうに鼻を鳴らす。

「彼と、戦えということですか？」

ロワーズはにこやかに笑ったまま、レイピアのその問いには答えなかった。

屋敷の庭園に出たレイピアとラグスはそれぞれ刃を漬した剣を手に対峙した。

「止めてもいいんだよ？」

「いいえ、やります」

ロワーズの声を振り払い唇を噛み締め、キッとラグスを睨みつけた。

勝負はそれほど長くは続かなかった。

ラグスは一撃で勝負が決まると過信していたのだろう。

上段から振り下ろされた剣をレイピアは頭上すれすれのところで受け流した。その際に剣と剣が甲高い音を立てる。

「……つな!？」

受け流されるとは露ほども思っていなかったらしい、ラグスが驚きの声をあげる。

スキルとユーザの剣の腕には適わなかったものの、レイピアの腕は決して悪いというわけではない。2年間のうちに剣の腕を上げたレイピアはそこら辺の者に負けないほどの力を身に付けている。

剣を引き、素早くラグスの背後に回り込むと腰に下げていた鞘でもって大男の膝の裏を打った。

思わぬ攻撃をくらったラグスはバランスを崩し、どう、と派手に地面に倒れる。

呼吸を整えると剣を鞘へと収める。

「いや、なんというか……お見事」

戦いの行方を見守っていたロワーズが、少々驚いた表情でパチパチと両手を打つ。相手に怪我をさせることもなくラグスを見事に倒したレイピアに対する素直な賞賛の証だった。

「まさかラグスを倒すとは思わなかった」

「……そういうテストでしょう？」

女だと思って、ラグスを倒せるはずがないと思われていたのだから……。レイピアはムツと顔をしかめる。

「ははは。このテストはね、別にラグスを倒さなくてもよかったんだよ。彼と対峙して、逃げ出さなければ合格だったんだ」

「……はっ!？」

ロワーズの口から出た意外な言葉にレイピアは目を丸くした。

「私はラグスと戦えなんて一度も言っていないよ」

確かに彼は一言も言っていない。レイピアがそう思い込んだだけだ。だが、あの状況だったら誰でも戦うものだと考えるではないか。

「最初に言ったよね？ 簡単なものだって」

ロワーズのテストとは、盗賊を目の前にしても逃げ出してしまわないかどうか確かめるテストだったのだ。ラグスの顔立ちと体格、それを見ただけで怯え、逃げ出してしまふ者は多いだろう。

そこで逃げ出してしまえば雇い入れはなし。

逃げなければ雇い入れる。そういうことだったのだ。

確かによく考えてみれば刃を潰した剣とはいえ、本気で戦えばどちらか怪我をしてしまう可能性が大きい。普通に考えたらこれから雇い入れようという相手に怪我をさせるはずがない。戦力にならなくなってしまうのだから。

そういうことだったの……。

レイピアは一気に脱力感を覚える。

「それなら、本気で戦う前に止めてくれればよかったのに……」

「ははは、すまないね。なんだか君の勇ましい姿を見ていたら止めるのを忘れていたよ」

ロワーズはにこやかに笑う。

やはり商人をしているだけあって、食えない性格だと脱力したレイピアは心の中で思った。そして宝石商人のその人を食ったような態度はどこかスキルを思い出させるものだった。

ちく、と胸がざわめく。

感情の揺れを、深く息を吐くことによって胸の奥に押し込めた。

こうしてレイピアは正式にロワーズの屋敷の護衛として雇われることとなった。寝所として屋敷の一室を与えられたため、そこに向かおうと歩き出す。

「待ってくれ！」

起き上がったラグスが巨体を揺らし、レイピアの元へ走ってくる。さっきは油断したとか、納得いかないもう1度勝負しろとか、そういった内容の言葉が彼の口から出てくるのだと思った。

だが、ラグスの口から出た言葉、それは。

「おみそれしやした、姐さん！」

だった。

大男はレイピアの前に跪き、手を取り目を輝かせる。

「……………姐、さん…………？」

ヒク、と口の端が引きつる。

「俺は今まで誰にも負けたことがなかった。自分の腕を過信しすぎていた……………恥ずかしいことです。……………姐さんに負けてようやく自分が井の中の蛙であることに気がついた。それを気付かせてくれたあなたは女神だ……………っ！」

感動にうち震え、巨体が揺れる。先程までの威圧感はどこへやら、凶暴な大型犬を思わせるラグスは今はまるで従順な子犬のようにしか見えない。

「……………俺を導いてくだせえ！」

「……………」

ぐら、と心なしかレイピアの頭が揺れる。

頭痛を堪えるように、片手で額を押さえた。

第15章 領主の娘の帰る場所2

ロワーズの屋敷で働き始めてから1週間が経った。

もともとレイピアは仕事覚えがいい方だったので、1週間も経った今ではだいぶ慣れたものである。いつものように朝早くに起き、仕事に向かうため準備を始める。

「姐さ〜ん！ 姐さん姐さん」

服を着替え、腰のベルトに剣を差し入れたところで、朝もまだ早いというのに辺りを憚らないラグスの大声が扉越しに響いた。レイピアは苦笑する。

ラグスと戦ったあの日以来、すっかり彼はレイピアのことを姐さん扱いしている。尊敬の眼差しで見つめ、子犬みたいに後をくっついてくるのだ。特に害を与えてくるものでもないから好きにさせている。

扉を開けるとラグスが目の前に立っていた。

「ラグス……朝からそんな大声出したらみんな驚くわ」

「へ、へえ。すみません」

注意を受けると、顔を赤くし巨体をこれ以上ないくらいに小さくして反省する。しょんぼりとした様子はどこか憎めないものがある。思わずくすつと笑う。

「一体どうしたの？」

「姐さんは今日1日フリーだそうですぜ」

「え？」

ラグスの口から出た言葉はレイピアにとって意外なものだった。目を丸くする。

「1週間働きっぱなしだったから今日はフリーで構わないって、ロワーズの旦那から言付けられました」

「そんな……」

レイピアがあまり嬉しくなさそうな顔をしているのを見て、ラグスは首を傾げた。思っている疑問を正直に口に出す。

「姐さんは休みが嬉しくないんですかい？」

「休みなんていらないわ」

キツパリとレイピアは答える。

自由な時間が多ければ多いほど、忘れなくてたまらない人の顔を思い出してしまうから。

休みなんていない。

「私、ロワーズさんに言ってくる！」

言い終えるか終わらないかのうちにロワーズの部屋に向けて歩き出す。

「困ります、休みなんて」そう訴えたレイピアに対してロワーズは困った顔をした。

「休みがいらぬ……？　休みといつても有給だから気にすることはないよ」

「いえ、そういうわけではなく……働いていたいんです」

頑としてレイピアはゆずらなかつた。

その頑な態度から何かを察したようにロワーズは口髭を撫で、ジッとレイピアを見つめた。まるで心の中を見透かされしまつようだった。

思わず居心地の悪さを覚える。

「どうしてかな、商人なんていう仕事をやっていると相手の心の動きというものが自然と見えてきてしまふ」
「……………」

どう答えて良いのかわからず沈黙する。

「仕事に打ち込むことで、何かから目を背けようとしている……君はそんな風に見えるよ」
「あ……………」

口元に手を当て、顔を俯かせる。

「そう……かもしれません。きつと逃げているんです、私は。でも、決して仕事に支障はきたしません。だから働かせて欲しいんです」

ロワーズは１つだけため息をつく、レイピアに向けてにっこりと笑いかけた。

「わかつた。そこまで言うのなら自由にしなさい」

そして言葉を続ける。

「だが、君がもし君の抱えている事情と向き合う日が来たら迷わず正しいと思った行動を起こしなさい」

それは自分の抱えている事情と向き合う日が来たらこの仕事を辞めてもかまわないということなのだろうか、そう思ったがあえて尋ねようとはしなかった。ただ無言で頭を下げてロワーズの部屋を後にした。

ロワーズの部屋から外へと向かう長い廊下には大きな窓がいくつもあつて、庭園を見渡すことができた。何気なくレイピアが窓の外へ目を向けると警備にあたっている男達の姿が視界に映った。

そこで彼女は表情を凍りつかせる。

警備の者は3人いて、その中の1人……ちょうどレイピアから背を向けていて顔はよく見えないのだが、彼の髪の毛は金色だった。サラサラの。

そう、あの人と同じ。

「……………ッ！」

違う、別人だ。

頭の中ではそのことを理解しているのに、過剰に反応してしまった。

「レイピア姐さん？」

ロワーズの部屋から出てきたレイピアを追いかけて来たラグスが

不思議そうに首を傾げて、その顔を覗き込む。レイピアの顔色は真っ青で、今にも倒れてしまいそうだった。けれど視線だけは同じ場所をずっと見続けている。驚き、レイピアの視線を追うと金髪の男が立っている。

「あの金髪野郎が何かしたんですかい!？」

いきり立ったラグスは金髪の男に殴りかかるため、袖をまくり上げる。窓から飛び出そうとしたところで、それを止めたのはレイピアだった。弱々しく首を振る。

「違う、違うのラグス……」

そうつぶやいたきり、レイピアは顔を俯かせも言葉が続けられなかった。

レイピアはその日の仕事をいつも通りきちんとなしていたけれど、顔はずっと青ざめたままで、話し掛けてもどこか虚ろでほとんど返事が帰ってこなかった。仕事が終わると食事も取らずに部屋に戻った。半ば駆け込むような形で。

そんなレイピアを見てラグスは心配で仕方がなかった。

「一体どうしちゃったんだ姐さん……っ!？」

思い当たる原因といえば庭の警備についていた金髪男を見てからだ。どう考えてもそれしか思い浮かばない。

だが、レイピアは彼には全く関係がないという。関係がないのに、なぜあんなにも怯えるのだろうか？

金髪が関係しているのだろうか？

おろおろとラグスはこれからどうするべきか考えた後、レイピアに夕飯を持っていくことにした。

「レイピア姐さん！ 食事を持ってきやした」

ドアをノックする。

しかし、しばらく中からは何の反応もなく、ラグスの不安は高まった。もう1度ドアをノックしようと手を伸ばしたところでようやく返事が返ってきた。

「……ごめんね……食べられないわ。食欲がないの」

ドア越しに響く弱々しいレイピアの声。
ますますラグスの不安が高まる。

「でも姐さん、食事をちゃんと取らないとぶっ倒れちゃいますぜ？」
「今は胸がいつぱいでとても食べられないの。明日はちゃんと食べるから……」

「姐さん……」

巨体に似合わぬ今にも泣きそうな声を出した。

ラグスが見ている限りレイピアはここに初めて来た日から今まであまり食事を取っていないように思えた。もともと食が細いのかもしれないが、それでも仕事量に比べあの食事量は異常なほど少なかった。

現に最初に会った日よりも痩せているような気がする。
ラグスの不安は頂点に達していた。

その翌日のこと。

門の警備をしている男が、暇を弄びくあゝと欠伸をする。ここ数週間、特に事件もなく平和な日々が続いている。

だが気を緩めてはいけない、そう思い直した男は頬をピシヤリと叩き気持ちを引き締める。と、そこへいつの間にかやってきたのか1人の青年がすぐ側まで来ていて、にこやかに片手を上げて挨拶してきた。

「やあ、こんにちは。今度この街でサーカス公演を行なうことになってね。ビラを配りに来たんだ」

青年はそう言って、ビラを1枚警備の男に手渡す。ビラには青年の言うとおりサーカスのプログラムや舞台の写真が載っている。身元がハッキリとしていて、なおかつ昼間から堂々と侵入してくる盗賊もいないだろうと考えた警備の男はわずかに警戒を緩める。彼らの目の前にいる青年がどこから見ても盗賊の類には見えなかったことも大きな理由の1つにある。

髪の毛はサラサラで、貴族の血を濃く継いだ金色。娘に黄色い声を上げられるような甘いマスク。ビラ配りをしているよりもテラスで優雅に紅茶でも飲んでいる方が似合う青年だった。

「ほお。サーカスか……1度も見たことがないな。おもしろいものなのか？」

「もちろんさ。見て必ず損はさせない、保障するよ」

余程自信があるようで、キツパリと断言してみせる。思わず警備の男は苦笑する。

「はは、すごい自信だな」
「まあね」

得意げに口の端を上げてニツと笑う。

警備の男は不思議な感覚に捕らわれる。目の前の青年が言うところまであまり気にもしていなかったというのに、サーカスに対する興味がわいてくるのだ。

数分ほどサーカスについて雑談を交わした後、青年が話題を変えた。

「それにしてもこの屋敷はずいぶんと警備が厚いようだけど？」

「ん、ああ……。これはな、盗賊対策なんだ。最近アクアクリスは物騒でなあ……」

「ふうん、なるほどね」

青年は門に寄りかかり、チラと屋敷を見上げる。何か言うために口を開きかけたが、それは言葉にすることができなかった。

「おい、コラ ツ！」

こちらに向かって駆けてきたラグスの怒声によって阻まれたのだ。警備を怠って話をしていたことを怒られるのかと思って、警備の男は身をすくませたがラグスの怒りは別のものだった。

「金髪野郎は屋敷に近づくんじゃねえ！」

という内容のものだった。明らかに金髪だけを限定している。シッシツ、と蠅を追い払うように手を払う。青年はそのラグスの行動に特に気分を害した様子もなく肩をすくめてみせる。どこことなくおどけた感じで。

「ひどい扱いようだね。ここでは金髪差別でもしてるのかい？」

「そういうわけじゃねえ。ただ、金髪を見ると姐さんの気分が悪くなるんだ！」

「……姐さん？」

ラグスの言葉を耳に留めた青年の目が、一瞬鋭くなった。探し求めていた獲物を見つけた獣のように。それは本当に一瞬のことだったので大男は少しも気がつかなかった。

「ああそうだ。俺はあの方の表情が曇るのを見ちゃいらねえ！ああ、おいたわしいレイピア姐さん……。っ。いいか、わかったらあっちへいっちなえ！」

目を潤ませて拳を握り締める大男に青年は少々呆氣に取られるものの、すぐに表情を元に戻すと納得したように門から離れる。

「わかった。それじゃ俺はこれで失礼するよ。もしよかったらあんたもサーカスを見に来てくれ」

そう言い残し、踵を反して走り去る。それはとても軽やかな身のこなしだった。

第15章 領主の娘の帰る場所3

「おかえりなさい、若君」

金髪の青年 スキルがサーカス団に戻ると出迎えたのはリグだった。

ここはアクアクリスの街の中央広場に立てられた公演用のテントの中である。つい先日この街に着いたばかりのスキル達はその日のうちにアクアクリスの領主の元へサーカス公演の許可を取ると、テントの設置に取り掛かった。

団員達のテントと獣舎は街の外れに設置することにして舞台となる大テントだけは人が賑わう中央広場に立てることになった。

スキルは団員達にテント設置のための指示を与え、その一方でレイピアの居場所を探した。

探知機が指し示しているのは宝石商人としてこの街で有名といわれているロワーズの屋敷だった。

それがわかるとスキルはいてもたってもいられず、また団員達の勧めもあって現場の指揮をリグに渡してロワーズの屋敷に向かったというわけだ。

「まだテントを立ててる途中だったのに、抜け出して悪かったな」
「構いませんよ。ここに来た1番の目的はレイピアさんと再会することなんですから。どうでした、いましたか？」

リグの問い掛けにスキルは腕を組み、眉間にしわをつくって少し複雑そうな顔をした。

「……………番犬が、いたな」

スキルの脳裏に巨体を揺らし、怒鳴り込んできた大男の姿が浮かぶ。しきりにレイピアのことを「姐さん、姐さん」と叫んでいた。そうとは知らないリグは「はあ、番犬……ですか」と曖昧に相づちをうつ。

「困ったな。あの屋敷は少し警備が厚いようだ」

状況から考えてレイピアがああ屋敷で働いているのは間違いない。問題はどう接触するかということだ。

正面から訪ねて行って、果たして彼女が会ってくれるかどうか。

まず無理だろうな。

スキルはそう考えた。

それどころか自分が来たことを知ったら再び逃げ出すかもしれない。レイピアの性格からいって充分ありえることだった。

「さて、どうしたもんかな……………」

今日もまた1日の仕事は何事もなく無事に終わった。レイピアが屋敷の仕事についてから現在まで盗賊と接触する機会はなかった。けれども1日中立ちっぱなしの仕事であるから体力をかなり消耗する。

部屋に戻るなりレイピアはぐったりとベッドに倒れこんだ。今日はこのまま寝てしまおうと思い、うとうとしかけたところで扉がノックされた。

連続で3回強く叩く　このノックの仕方はラグスだ。

ベッドから体を起こすとのろのろとした足取りで扉を開ける。案
の定ラグスが立っていた。

食事を乗せた盆を持っている。

「姐さん！ 今日こそ食事を取ってもらいますぜ」

「……あの、今日もあまり食欲がないの……」

「そう言うと思ってとっておきの秘密兵器も持ってきてやした！」

失礼します、と言うなりラグスは部屋の中に入ってくる。少々呆
気にとられながら彼の後を追うようにレイピアもまた部屋に戻る。
ラグスはテーブルの上に食事の盆を乗せ、それまで小脇に抱えて
いたワインを取り出した。

「秘密兵器って……お酒なの？」

「へい。とっておきのもんですぜ」

得意げに言うラグスとは対照的にレイピアは困った表情をする。

お酒にはあまりいい思い出がない。

以前シアと飲んだときはブレンをユーザと間違えて大騒ぎを起こ
してしまったのだ。そういった苦い経験があるのでお酒は飲むまい
と誓ったのである。

「私、飲めないのよ。弱い」

けれどラグスは2つのグラスにワインを注いでしまう。

「酒を飲むと食が進みますぜ。医学でちゃんと説明されてます」

医学……。ラグスの口からそんな言葉を聞くと不思議な感じた。

「その上嫌なこと、みーんな忘れて楽しい気分になっちまう！」

「でも……」

「1杯ぐらい俺に付き合ってください。1人で飲むのはどうも味気なくて」

ラグスはなおもしぶるレイピアに半ば強引にグラスを握らせた。しばらくグラスを握りしめて眉間にしわを寄せていたけれど、やがてゆっくり口をつけ始めた。

少しぐらいなら……大丈夫だろう。よく眠れるかもしれないし。ラグスを横目で見ると、上機嫌でぐいぐいと飲んでいる。見た目通りお酒はかなりいける口らしい。

「ねえ、ラグス……」

問いかけるとラグスはワインの入っているグラスを置き「なんですかい？」と顔を上げた。

「……あなたには帰る場所がある？」

彼は少し驚いた表情をした。

考えてみればラグスとは仕事の話や簡単な自己紹介以外に突っ込んだプライベートの話をしたことがなかった。それは今までそれとなく避けていた話題でもあったからだ。

レイピアはあまり自分のことを話さなかったし、ラグスもレイピアのそんな素振りにうすうす気づいていたらしくあえて聞いてくることはなかった。そして彼もまたあまり自分のことは話さなかった。問い掛けに対してラグスはレイピアと虚空に交互に視線を彷徨わせ、眉間にしわを寄せてうなった。

「うーん……。俺の帰る場所……」

しばらく考えた後、彼はポツリともらした。

「普通は故郷って答えるべきなんでしょうけど、運悪く山火事に襲われちまってもうとーっくの昔に無くなっちまったんですよ」

レイピアはハツとしたように口に手を当て、慌てて頭を下げる。

「……ごめんなさい」

「あ、いや、あやまらねえでくださいよ！ なんせもうずっと昔のことなんで両親の顔すら忘れちまってる親不幸者ですぜ、俺は」

その軽い口調と同じくラグスの顔は実にあっけらかんとしたものだった。彼はぐい、と再びワインを飲むと逆に問い掛けてきた。

「姐さんにはそういう場所、あるんですかい？」

「……そうね……。私、ついこの間まで父と喧嘩をしていたの。そのことが原因で家まで飛び出して……。でも、ようやく仲直りをすることができたわ」

「そりゃあよかった！」

パツと顔を輝かせるラグス。それに対しレイピアは曖昧に笑い、寂しそうに瞳を揺らした。

「でもね……。本当に帰りたい場所は……。もう……」

レイピアの脳裏に浮かぶのはサーカス団のこと、気のいい仲間達のこと、そしてスキルのこと。もう2度と帰る事のできない場所。膝を抱え、顔を俯かせる。

「その場所は無くなっちまったんですかい？ 俺の故郷みたいに」
「ううん、ちゃんと存在してる。人も、みんな」

「なら大丈夫です。帰る場所がちゃんど残っていて、帰りたいていう気持ちが姐さんにある限り、絶対に帰れる日が来やすよ」

まるで確信でもしているように力強い言葉。

顔を上げ、ラグスを見ると彼はレイピアを力づけるようににっこりと笑った。

「帰れる場所があるっていうのはいいことです。俺は姐さんがうらやましい」

「ラグス……」

レイピアはワインを一気に飲み干すと再び膝を抱え、顔をうずめた。

「……ラグス」

「ん、どうしたんです？」

「……眠い……」

そうつぶやいたと思ったら、いきなりバツタリと床に倒れこんだ。驚いてラグスが振り向くとレイピアの口からすーすーと規則正しい寝息が聞こえる。

どうやら酔っ払って眠ってしまったらしい。

「うあ、姐さん……っ本当に弱いつすね……」

途方に暮れた表情でポツリとラグスが洩らした。

ベッドにレイピアを寝かせると毛布を掛け、見かけとは裏腹に几帳面な性格の大男はきちんと空き瓶とグラスの片付けをして出て行

った。

レイピアは夢を見ていた。
とてもいい夢を。

第15章 領主の娘の帰る場所4

これは夢だとわかっている。

会いたいという気持ちが強すぎて、とうとう夢の中まで出てきてしまったのだろう。

何度も求めた姿。

彼は自分に向けてこれ以上ないくらいとろけそうな笑顔を向ける。そして1番囁いて欲しい言葉を言うのだ。

現実の彼が決して言いそうにない言葉を。

だから、これは夢だということはわかっている。

深夜。

アクアクリスは大きな街だったが、酒場が建ち並ぶ通り以外は夜も更けると眠りに落ちる。

ロワーズの屋敷がある通りもまた同様だった。もっとも警備の者だけは盗賊に備えて眠りにつくことはなかったけれど。

ゆら、とロワーズの屋敷を囲む塀の上で影が動いた。

その影の動きは無駄がなく、体重を全く感じさせずに軽やかに地面に降り立った。それはまるで猫のような動きだったが、猫ではない。

人間 スキルだった。

彼は黒ずくめの服を身に纏っている。足音も気配もさせずに動くものだから完全に闇へと同化している。

「盗賊稼業を辞めたつていうのに再び人の家に忍び込むはめになる
とはね」

そうぼやかずにはいられなかった。

正面からレイピアを訪ねても彼女はきつと会ってほくれないだろ
う、それどころか逃げ出してしまうかもしれない、そう考えたスキ
ルは奇襲作戦に出た。

ロワーズの屋敷の周りは深夜ということもあり昨日の昼間に来た
時よりもはるかに警備が厚かった。庭には数分おきに代わる代わる
見回りが来るのだ。スキルはその度に植木の陰に身を潜めたりしな
がら、警備の目を巧みにかいくぐっていとも簡単に屋敷へ辿り着く
ことができた。

レイピアがいそうな部屋の目星をつけると、屋敷の外壁を登り始
めた。窓枠に足を掛けながらすると上へ上へと登っていく。

この外壁はただけでないな、とスキルは胸中でつぶやく。

非常に登りやすいのだ。この外壁では盗賊の侵入を手助けしてい
るとしか思えない。庭の警備さえかいくぐってしまえば屋敷内へ侵
入するのは容易いだらう。

もつとも、今のスキルにとってはこの方が都合がいいのだが
。

屋敷の2階部分の部屋を2つほど覗いたところで、目的の人物を
探し出すことができた。

鍵がかかっていると思っていた窓には鍵がかかっておらず、いと
も簡単に開けることができた。鍵を外す手間が省けるので好都合で
はあるのだが、無用心じゃないか、という気持ちの方が大きくてス
キルの心中は少々複雑であった。

レイピアはベッドの中で毛布にくるまるようにして、すうすうと

寝息を立てて眠っている。近づいてみても眠りが深いのか目を覚ます気配はない。

1週間ぶりだが、もうずっと長く会っていなかったような感覚だった。思わず抱きしめたい衝動に駆られる。

ずいぶん痩せた。もともと華奢な方なのにさらに痩せて見える。

抱きしめてしまったら壊れてしまいそうで、何とか理性を働かせ気持ちを押し止める。

代わりにそつと髪の毛を梳いた。

頬に片手を這わせて、ひんやりとした唇に口づける。

「ス……キル……？」

気がついたらしい。わずかに目を開けたレイピアは、掠れた声で彼の名を呼んだ。だが、その瞳も声もどことなく虚ろで半分夢の中にいるような状態だった。

「やあ、お嬢さん。久しぶり」

につこり笑って片手をひらひら振る。

大きく目を見開くレイピア。

逃げ出してしまうかな、と警戒したスキルはそれとなく体をずらしレイピアの逃げ道を無くす。だが、レイピアが起こした行動は彼の予想に反しているものだった。

「わ……」

ぐい、と体が引つ張られ不意を付かれた形のスキルはレイピアの体に覆い被さるような形で倒れこむ。

驚き、目を丸くしてるスキルを抱きしめレイピアが「あつたかい……」とつぶやく。

微かにレイピアからお酒の匂いがする。
ああ、だからこんなに素直なのか。
妙に納得してしまったスキルである。

夢の中のスキルは相変わらず憎たらしいくらいにマイペースで飄々としていた。「やあ、お嬢さん」なんてまるで最初に会った頃のままの態度ではないか。夢の中でぐらい思い切り抱きしめて「会いたかった」という言葉を言ってもらいたいものである。少し彼を驚かせてみたくもあり、また夢の中だから自分の気持ちを素直に解放させてみようととも考え、手を伸ばし彼を引き寄せてみた。あっさりと倒れこんでくる。

案の定、驚いたようでスキルは目を丸くしてレイピアを見つめる。

「あったかい……変ね」

レイピアのつぶやきにスキルが反応する。

「変って……何が？」

「夢なのにどうしてあったかいの」

小首を傾げる。

「夢じゃないよ」

「嘘。だって……ふわふわしてるもの」

頭がぼうつとしていて、体がふわふわとしている。これが現実のものだとは到底思えない。それに彼は今ホットリップでサーカスの公演をしていてアクアクリスになどいるはずがないのだ。

「それは君がお酒を飲んでるからだ」

スキルは苦笑し、上体を起こすとレイピアから離れてしまった。
ギョツと胸が締め付けられる感覚に襲われる。
スキルがいなくなる……夢が終わってしまう……。

「大丈夫。どこにも行かない」

よほど不安な顔をしていたらしく、彼はそんなことをつぶやいた。
その言葉に胸を撫で下ろす。同時にある疑問も胸の中に生じる。

「どうしてここにいるの？ あなたはホットトリップにいるはずなのに……」

「追いかけてきたんだ」

「追いかけて？ 一体どうやつ……」

レイピアの言葉は最後まで続かなかった。急にスキルに抱きしめられたからだ。呼吸すら苦しくなるほどの抱擁。ドクドクと心臓が脈をうつ。

「スキル……？」

「会いたかった。……リグから聞いた。君が俺の元からいなくなっ
てしまった理由を」

「だったら……こんな風に抱きしめないで！」

顔を背け、手を突っぱねてスキルから離れようとする。

「……期待してしまうじゃない。期待して傷つくのは嫌なの。恐いのよー」

だが、彼はレイピアの頬を両手で挟み込み逃げることも顔を背けることもできないようにした。

「どうしてわかってくれない？ 遊びのつもりなんかじゃない……愛してるんだ。これからもその気持ちは変わらないと確信した。だから君を抱いた」

レイピアの顔が赤く染まる。嬉しそうな顔をしたのも一瞬のことですぐに表情を暗くし瞳を伏せた。

「やっぱりこれは夢……なのね。現実のスキルはそんなこと言わないもの」

スキルはその言葉を聞いて、呆れかえった表情を浮かべたため息をつく。

「……俺の寝起きの悪さもたいしたものだと思うが、君の寝ぼけっぷり……いや、酔っ払いぶりもたいしたものだね。いい加減これが夢じゃないってことに気がついて欲しいんだけど？」

「だって……」

「確かに俺は今までその……女性に対して不真面目だった。君がそのことで思い詰め、追い詰められてしまったのも仕方がなかったと思う。だが、君に対する気持ちは今までのものとは違う。本気なんだ。俺なりに精一杯気持ちは伝えたつもりだった。そしてそれは通じているものだと思うってた。だから朝起きて君がいなくなっていたときは……正直辛かった」

驚き、伏せていた瞳を上げると暗闇の中に浮かび上がるスキルの表情があった。その表情はまるで置いてけぼりにされた子供のよう

に傷ついたものだった。

胸をつかれ、思わず彼の頬に手を伸ばし、触れる。

「スキル……」

「逃げ出してしまうのではなく、君の口から言って欲しかったよ。君の抱えている気持ちを……」

「……ご、ごめんなさい……」

「こんな風に逃げているばかりじゃ何も解決はしない。そうだろうか。だから……逃げないで俺と向き合って欲しい」

「向き合う……?」

スキルは頬に伸ばされたレイピアの左手を取るとすばやく行動を起こした。

「これ……!?!」

彼がレイピアの指にはめたのは銀の指輪だった。

以前レイピアはスキルに銀の指輪のことを話したことがある。ホットリップでは銀の指輪は結婚を申し込むためのものであり、求婚者は相手の薬指に指輪をはめ、もらった相手はその求婚を受け入れるなら指輪に口づけ、拒否するなら指輪を地面に落とすというものである。

目を見開いたレイピアは指輪とスキルの顔を交互に見つめる。

「あなた……この指輪の意味がわかっているの?」

「もちろん。記憶力はいいい方でね。意味をわかってやっているんだけど?」

「そんな……」

スキルは急に真剣で、それでいて緊張した面持ちになる。

「これが俺の気持ち。これからもずっと側にいて欲しい。君が必要なんだ」

「わ、私……私は……」

レイピアは自分の身に起こった事態にすっかり困惑しきっていて、今にも泣き出しそうに言葉も詰まらせ、何も答えられずにいた。

ふとスキルはその真剣だった表情を和らげる。

「もう2度と俺と会いたくないと思ったら、明日この指輪をサーカス団のテント内にでも投げ入れて。そしたらもう2度と君の前には現れない。でも、もし指輪がテント内になかったら」

一旦言葉を切って、それからレイピアを見つめると不敵に笑った。

「絶対に諦めないから」

「……………！」

「覚えておいて。俺は狙った獲物は逃さない。だから君の答えを知るまでは何が何でも逃がさないから」

「スキル……」

「明日、答えを聞かせて欲しい。いいかい？」

一瞬考え込んだ後、無言で頷いた。その答えに満足した表情を浮かべたスキルはレイピアから離れ、足音も立てず窓枠に近づき足をかけた。そして顔だけレイピアの方に向ける。

「もう一度言うよ。俺の気持ちはこれから先も変わらない。……愛してる」

これ以上ないくらいのとろけそうな笑顔で言った。

「それじゃあおやすみ。……また明日」

そう言い残すと、体重を全く感じさせない動きで外壁を伝い降りていった。慌てて窓から見下ろしてみるのが、彼の姿はすでに闇の中へと消えて見えなくなっていた。

「……明日……」

後に残されたレイピアはしばらく外を見つめていたが、やがてずるずると床にへたりこんでしまった。

第15章 領主の娘の帰る場所5

「う……ん」

翌朝。

この日は朝から日差しが強く、レイピアは窓から差し込む光が眩しくて目を覚ました。

昨夜お酒を飲んだせいで二日酔いで頭が重い。頭を押さえ、のろのろと体を起こす。

昨夜はとても良い夢を見た。

会いたくて会いたくてたまらなかった人が現れ、そのうえプロポーズをしてきたのだ。

良い夢を見ると気持ち弾み心が軽くなるものなのだが、レイピアの胸中は少々複雑であった。寂しさと切なさの心の半分ぐらいを占めている。

「やっぱり……あれは夢だったのよ……ね」

夢は夢であって現実ではない。覚めてしまえばそこで終わる。

それにしてもやけにリアルな夢だったと思う。いや、そうとも言い切れない。感触は確かにリアルだったのだが、内容はそれとはほど遠いものだったから。

彼はホットリップに伝わる風習をちゃんと覚えていてくれて、銀の指輪をはめてくれたのだ。そして「ずっと側にいて欲しい」と言った。

愛してる、とも言ってくれた。

これ以上ないくらい真剣で、緊張した面持ちで。

レイピアは特に結婚という形にこだわっていたわけではない。むしろ彼と結婚したいという思いは一度も抱いたことはなかった。どう考えてもスキルは結婚などするようなタイプではない。彼は何者にも縛られることなく、風みたいに自由に生きる人だから……。意図的に考えないようにしていたのかもしれない。

形などどうでも良かった。ただ彼に愛されて側にいることができたならそれだけで良かったのだ。

だが、夢というのは心の奥底にある願望を表すともいう。あんな夢を見てしまったということは自分は心の奥底では彼と結婚することに憧れを抱いていたのだろうか？

「銀の指輪。……結婚、か」

何気なく左手の薬指を見て、レイピアはその動きを硬直させた。まぎれもなく夢の中で見たものと同じものが薬指にはまっていたのだ。

「うそ……」

視線だけは指輪に落としたままで絶句する。

「あれは夢じゃなかった？ うそ、うそ」

頭を抱え、しきりに「うそ、うそ！？」と繰り返しつつやく。一体どこからどこまでが現実でどこまでが夢だったのだろうか。

それとも全部現実のものだったのかもしれない。

しばらく頭を抱えてうなつているとドンドンドン、と扉がノックされた。続いて「姐さん！」と呼ぶ声。

「どうしたの、ラグス？」

「あ、姐さん。明日の仕事が終わったら息抜きにサーカスでも見に行きませんか？」

「サーカス！？」

「なんでも明日から公演があるらしいですぜ」

そう言っただけでラグスはサーカスのビラをレイピアに見せる。

「どこで、これを……？」

「昨日屋敷の前にサーカスのやつがビラ配りに来たんですよ」

それはまぎれもなくスキル達サーカス団のビラだった。団ごとレイピアを追って来たのだ、彼は。呆けたようにそのビラを見ていたレイピアだったが、突然額を押さえ泣き笑いを始めた。

「何て無茶苦茶なのかしら……あの人は……」

「わあ！　ね、姐さん。どうしたんですかい！？」

突然レイピアが泣き笑いはじめたので戸惑い驚くラグス。大丈夫、と言っただけで首を振って涙を拭く。

「私……っ。行かなくちゃ！」

「へ？　行くって……どこへ」

「……私ね、ある人の元から逃げ出してしまったの。その人と向き合っただけで……でも、その人は私を追って来てくれた。そして逃げるなって。逃げないで自分と向き合っただけでいいって言

ってくれたの」

「姐さんが昨日言っただけで帰りたい場所……。そいつが姐さんの帰る場所なんですね」

頷くレイピアを見てラグスは自分の両手を握り締め、顔を輝かせる。まるで自分のことのように喜んでくれている。レイピアの胸に熱いものが込み上げる。

「だったら姐さんはそいつのところへ行くべきです！……そうと決まったらこんなところでグズグズしてちゃあいけやせん。ロワーズの旦那には俺から言っておきますから姐さんはそいつのところへ行ってくださいえ」

「ラグス……ありがとう。今すぐにあの人に伝えたい言葉があるの。それが終わったらまた改めて挨拶に来るから！」

時間を惜しむようにして駆け出す。

一刻も早く、スキルに答えを伝えたかった。

彼のプロポーズを受け入れようと思っている。
嬉しかった。

彼の申し出は本当に嬉しかった。

自分はもう一生、結婚とは縁がないと思っていたし、何よりその申し出を受け入れることによって彼とずっと一緒にいられるのだから。

もう迷わないし、逃げない。

すれ違いを繰り返してしまったけれど、今ならわかる。彼と一緒にいたら、きっと上手くやっていけるに違いないと。

温かい仲間達のいるサーカス団と、スキル。

（あそこが……私の帰る場所）

レイピアがロワーズの屋敷の門まで差し掛かったとき、突如それは起こった。

一瞬、閃光が空を走り、続いてドオン！と地を揺るがすほどの凄まじい爆発音が響き渡った。

「きゃあっ！」

そのあまりの大きな音にレイピアは耳を塞ぎ、悲鳴を上げた。恐る恐る片目を開けて音のした方向を見て、凍りつく。

真っ黒い煙を上げて屋敷の一部が燃えていた。

窓を突き破って炎が上がり舞い散った火の粉は次々と別の部屋を焼いていく。その勢いは凄まじく門の付近にいるレイピアの元にまで炎の熱が伝わってくる。

「な、なにこれ……？」

状況を理解することができず、しばらく呆然と屋敷を見上げる。

「レイピア姐さーん！」

名前を呼ばれ、その方向を振り向くと屋敷の窓から飛び出してきたラグスの姿があった。駆け寄り、彼が無事であることを確認する。

「ラグス！ 無事だったのね。ねえ、これは一体どういうことなの？」

「盗賊団が爆弾を使って攻めて来やがったんです。ここは危険ですから、姐さんは早く行ってくださいえ」

「盗賊団が！？」

爆弾を放って屋敷を燃やし、その混乱に乗じて盗みをする。火を

消すために人出の大半が流れてしまうので火の回りにさえ気をつけていれば捕まる心配もなく盗みを行うことができる。リスクを伴う方法だがある意味効率のいいやり方である。

レイピアはハツと我に返って辺りを見回す。使用人達が次々と逃げ出してくるが、いくら目を凝らしてみても屋敷の主人の姿がここにもないのだ。

「ロワーズさん！　ロワーズさんはまだあの中にいるの？」
「そ、そういえば……　ロワーズの旦那が見あたらねえ！」

口を押さえて絶句する。

「大変！」

屋敷から離れるどころかそちらに向かって駆け出したレイピアを見て、慌てふためいたラグスもまたその後を追う。

「姐さんっ！　何する気ですかい！？」

「何って助けに行くのよ。賊も放っておくわけにはいかない」

「何を馬鹿なことを！　危険です。下がっててくださいえ」

「そんなことこの仕事に就くときに覚悟していたことだわ！　今は一刻を争うのよ。こんなことを言い合っている場合じゃない」

「姐さん！」

半ば叫ぶようなラグスの制止を振り切る。

「ラグス、あなたの心配は嬉しいわ。でもね、本当にこのままだと危険なの。屋敷全体に炎がまわってからでは遅いわ。ロワーズさんを助け出せなくなってしまう」

「だったら俺も行きやす！」

「駄目よ！ あなたは消火のために人を集めてきて。広場にいるサーカス団に助けを求めるの。きつと……手伝ってくれるわ。そして外にいる護衛の人達を集めて屋敷から出てきた盗賊を捕まえるよう指揮してちょうだい！」

なおもレイピアと共に屋敷に入ろうとしたラクスだったが「これはあなたにしかできない仕事なの！」と言われ、結局彼の方が折れた。

だが、その表情は心配と不安で暗く沈んでいた。

「……わかりやした。でも、姐さん。くれぐれも無茶はしねえてくださいよ。俺は、俺はあなたに何かあつたら……」

「ありがとう。気をつけるわ。……お願いね、ラクス」

レイピアは屋敷へ。

ラクスは逃げ出してきた者達に、盗賊対策の指示を与えると助けを求めるため、サーカス団へと向かった。

屋敷内の廊下は火の手はまわっていないものの、煙が立ち込めていて視界が悪い。

レイピアはタオルを口に当て煙に喉を焼かれないようにし、できるだけ姿勢を低くして進んでいく。盗賊と遭遇する危険も考えて空いている方の手で剣の柄を握りしめる。

ロワーズがどこにいるのか見当もつかなかったので、まずは彼の部屋から確かめることにした。

「ロワーズさん！ いたら返事をしてください」

声を掛けながらロワーズの部屋へ向かう。

階段を上がるにつれて熱気も上昇していく。とうに暑いという段階を越えていて体が焼けそうなほどに熱い。滝のように汗が流れていく。せめて水を被ってから中に入ればもう少し状況は違っていたかもしれない。

（馬鹿ね、私は……）

いつも冷静な判断を失って行動に移してしまうのだ。

ピンクダイヤモンドを取られてスキルを追って一人、乗り込んだ時もそう。そして今も。もう少し配慮をしていれば状況はずっと良くなっているはずなのに。

だが、今さら悔やんでも仕方がない。
やるべきことをやるだけだ。

ロワーズを助け出して、絶対に帰るのだ。彼の元に
の返事をするために。

だから絶対にこんな場所で力尽きるわけにはいかない。
再び前を見据えるとロワーズを探すべく歩き出した。

昨日

第15章 領主の娘の帰る場所6

「目の下が青いですよ若君」

早朝訓練をするためにやって来たスキルにすでに準備を終え、待機していたリグが声を掛けた。

欠伸を噛み殺しながら答える。

「ああ……。昨日あまり眠れなかったからな」

「そうですね……。さすがに神経の太い若君でもプロポーズを断られたらどうしようと思うと眠れませんよね」

「……………」

「……………」

「……………何で そのことを……………知ってるんだ？」

「え？」

「何で俺がレイピアにプロポーズしたって知ってるんだよ」

スキルはまだ誰にも昨日のことを話していない。当然リグも知っているはずがないのだが……。

目を半眼にしてリグに詰め寄る。

「ふふふ、私の情報網を甘く見ないでください」

にやにやと楽しそうに笑うリグ。同じように早朝訓練に来ていたシアも意味ありげに笑いながら話に参加してきた。

「そうそう。もう団のみんな全員知ってるわよー。あんたが振られるかどうか賭けしてる人もいるんだから」

視線を他に向けると団員達も皆同じようににやにやと含み笑いをしながらスキルの方を見ていた。

「……………」

スキルは盛大にため息をつき頭をうな垂れさせた。こいつらには隠し事はできないな、と心の中でつぶやく。

「上手くいくといいですね」

「放つといってくれ……ん？」

ふてくされるスキルの耳に爆発音が届いた。そしてざわめく街の人の声でその異常さに気がつく。

「一体何の騒ぎだ？」

「……何かあったんでしょうか？」

スキルとリグはお互いに顔を見合わせ、舞台のあるテントから外へ出る。すると外にはすでに数人の団員達が出ていて、その中にブレンの姿があった。

「どうかしたのか？」

「それが、よくわからねえんだ。何か爆発騒ぎでもあったんじゃないかって街の奴らは言ってる。ずいぶんと物騒な話だよな」

こえー世の中だぜ、とぶつぶつ言いながらブレンは何事かと様子を見に行く人の流れを見つめている。

その人の流れに逆らうようにしてスキル達の元へ大男が走ってきた。大男の顔に見覚えがあることに気がつく。

「……あんたは、ロワーズの屋敷にいた……」

大男もスキルに気がつくなり、すがりつくようにして助けを求めてきた。

「助けてくれ！」

そのただ事ではない様子にスキルは眉をひそめる。

「どうかしたのか？」

「大変なんだ。屋敷が……屋敷がつ！」

「屋敷がどうした！？」

「盗賊団に襲われて爆弾を投げ込まれた。消火作業のために人出がいる。手伝って欲しい」

その言葉にスキルはある悪い予感が頭をかすめる。荒く息をしているラグスの肩を掴む。

「レイピアはどうした！？」

「……へ？　なんで姐さんのことを知って……」

「そんなことはどうだっていい。レイピアはどうしたんだ！？」

「そ、そうだ。姐さんは……屋敷の主人を助けるために屋敷の中へ……」

「なん……だって！？」

スキル、そして2人の話を聞いていたリグ達も絶句する。

「……っあの無鉄砲娘！」

スキルは言葉を終えるか終えないかのうちに屋敷に向かって駆け出す。その後をラグスとリグ達が追いかける。

彼らがロワーズの屋敷に着くと、屋敷はますます勢いを上げて燃えていて屋根の一部分が崩れて地面に落下している状態だった。

その現場の状態に全員が言葉を失う。

「これは……まずいな」

屋敷の天井が崩れ始めるのにそう時間はかからないだろう。スキルの額を汗が流れる。

「消化作業だ！ 団員達を全員呼んできてくれ」

「はい！」

アクアクリスが水の都と呼ばれているのは街中のいたるところに水路が走っているからである。

屋敷の使用人達はすでに水路から水を汲み上げ、消化活動に入っている。サーカスの団員達もそこに加わるようになった。

スキルは彼らが汲み上げているバケツの1つを受けると頭から水を被った。全身水浸しになって、服も水を吸い重くなる。軽くしぼって余分な水分を落とす。

「若君？ 一体何を……」

「あの無鉄砲娘を救出してくる！」

ラグスにロワーズの部屋の位置を聞き出し、レイピアはそこに向かったのだと確信し彼もまたそこに行くことにした。

「若君！」

リグが制止の声を上げるが、駆け出したスキルにはレイピアを助け出すことで頭がいっぱいで聞こえていないようだった。

レイピアがロワーズの部屋を開けると、後ろ手に縛られ床に転がされている主人の姿があった。

「ロワーズさん！」

急いで駆けより、その縄を解く。衣服が寝巻きのままなところから、眠っていたところに盗賊に侵入され、縄で縛られたのだろう。その際殴られたらしく頬や腕が赤くなっている。

うめいているロワーズの口から猿ぐつわを外すと彼は苦しそうに息を吐き出した。

「大丈夫ですか！？」

「……ああ、すまない……」

大きく肩で息をし、のろのろと立ち上がる。

「……君は1人で来たのか……。何て無茶なことを……」

レイピアが1人でここに来たことを知るなりそうつぶやいた。ダメージが大きく残っていたようで、体をふらつかせる。すかさずレイピアが彼の体を支える。

「ロワーズさん……しっかりして」

レイピアの言葉にロワーズは静かに首を横に振った。

「助けに来てくれてありがとう……。だが、私のことはもういい。君だけでも逃げるんだ」

その瞳はひどく穏やかなものだった。まるで死を受け入れることを静かに望んだように。

ロワーズの手が力を無くしたようにレイピアの肩からするりと外れる。

ドクン、とレイピアの心臓が脈をうつ。

「何を……何を言ってるんですか！」

外れたロワーズの手を再び自らの肩にかけて支える。

「絶対に生きてここから脱出するんです。絶対に……絶対に！」

レイピアの瞳にあるのは強い生への執着。ほとんど諦めていたロワーズはそれにつられるように少しずつ生への希望を持ち始め、弱々しくであつたが微笑んだ。

「ああ。……それじゃあもう少しだけ頑張るとしようか……。だが、本当に危険な状態になったら……私のことは置いて逃げるんだ、いいね？」

「……はい」

「まだ近くに賊がいるかもしれないから気をつけて行こう……」

ロワーズを支えたまま廊下に出たレイピアはすぐに顔を青ざめさせることになる。先程彼女が通ってきた道から火の手があがってい

たからだ。炎の燃える音が唸り声のように耳に響く。

「うそ……」

声を恐怖に震わせ、絶望的な思いでその光景を見つめる。ロワーズもまたその光景を見つめ絶望のうめき声を上げた。

「まだ……大丈夫。大丈夫です。反対側の廊下から……行きましょう」

幸いにもまだ反対側の廊下は火の手があがっておらず、脱出への望みは消えていない。ロワーズの体を支え直して、2人は再びのろのろと歩き出した。

だが、すぐにレイピアは次の問題と向き合うことになった。体力の限界が近づいていた。彼女の力ではロワーズを支えるだけでも大変なことなのだ。足も腕も痺れて小刻みに震えていて気力だけで歩いている状態。その上熱さと焦りとで汗が次々に全身から流れ落ち、ますますレイピアの体力を奪っていく。

とうとう堪えきれずロワーズの手を離してしまい、2人はそろって廊下へと倒れこんでしまった。肩で大きく息をして、咳き込む。

「ロワーズ……さ……、ごめ……なさ……」

息が上がって言葉を出すことすらできなかった。

「もういい、もういいんだ……。君の体力はもう限界だ。1人で逃げなさい」

レイピアは嫌だ、と首を何度も横に振る。

廊下に倒れこんだままの状態で、必死に呼吸を整える。

「もう大丈夫です。……行きましょう」

ロワーズの方に手を伸ばすが、それはいきなり開いた扉によって阻まれることになる。

驚いて目を見開いたレイピアの視界に黒づくめの男の姿が映る。

その男は背中に大きな袋を抱え、彼は驚いた様子でロワーズの方を見つめていた。

すぐに賊だ、と頭では理解したが、疲れきっていた体ではすぐに反応ができなかった。

「こんな……時に……っ」

レイピアが腰の剣を引き抜くより盗賊が行動を起こす方が早かった。殴られたロワーズの体は壁に打ち付けられ、ぐったりと廊下に倒れこんでしまった。

「ロワーズさん！」

その悲鳴を聞き、振り返った盗賊は次の狙いをレイピアに定め向かってくる。

このままやられるわけにはいかないとほとんど気力だけで立ち上がり剣を構える。盗賊もまた同じように短剣を抜き放つ。

「死にな！」

低く、ぞつとするような声音だった。

男が振り上げた短剣がレイピアの喉元を狙ってくるが、それが実

行されることはなかった。

カシャン、と金属音を上げて短剣が床に落ちる。彼の右手に短剣が深々と突き刺さったためだ。男が短いうめき声をあげる。

すかさずレイピアが体当たりをして男の体を跳ね飛ばした。

恐怖と疲れとで荒く息をしながらも、盗賊に短剣を投げレイピアの危機を救ってくれた人物を見上げる。

「まったく、君って本当に俺の寿命を縮めるのが得意なんだな」
「スキル……」

驚き、目を見開きその人物の名を呼んだ。
疲れが見せている幻覚というわけではなく現実のものだ。彼はいつものように唇の端を上げて笑みを浮かべている。

信じられない、という思いでスキルを見つめていたレイピアだったが、その顔を急に強張らせた。

「後ろ！」

突如、スキルの背後から火が上がった。

盗賊は状況が不利になったと悟ると右腕の出血部分を押さえたままさっそうと身を翻した。その際に持っていた小型の爆弾を投げつけ、辺りを炎で包ませスキル達の脱出する最後の道を完全に塞いってしまった。

「なっ！ ……くそっ！」

不覚にも盗賊を逃がしてしまったことと炎が上がったことに大きく舌打ちをする。だが深追いするのは諦めすぐさまレイピアに駆け寄り無事を確かめる。

「怪我はないか？」

怪我は見あたらないものの、息が上がっていて膝をつき辛そうな状態だった。瞳を閉じぐったりとしている。スキルが抱き寄せるとわずかに目を開き、弱々しく微笑んだ。

「来て……くれたのね……嬉しい……」

「よく頑張ったな。後は俺にまかせて」

レイピアはその言葉にゆっくり頷き、安心したようにスキルの胸に顔を埋め意識を失った。

「……とは言ったものの、どうしたものかな」

先の廊下も後ろの廊下も炎にまかれて完全に脱出口を絶たれている。どう見ても絶望的な状態であることに違いなかった。

今まで何度か危険な目に会ったことのあるスキルも、さすがにこれほどまで死を身近に感じたのは初めてだった。生きて戻れるだろうかという考えが脳裏に浮かぶ。すぐにスキルはかぶりを振ってその考えを否定し、レイピアを抱きしめた。

「死なせるものか……」

意識の無いロワーズとレイピアを左右に抱え1番近くにある扉を開け、部屋の中へと逃げ込む。

その部屋もまた炎が上がっている状態だった。かろうじて炎にまかれていない場所を通り一気にバルコニーへと向かう。

「ここは2階だったな……飛び降りるのは無理か……？」

彼1人だったら何とか下へ降りることが出来るだろう。だが、今はレイピアとロウーズがいて2人とも意識のない状態だ。せめて下が土か芝生だったら2人を抱えて飛び降りても助かる可能性は大きい。怪我を負うというリスクはあるけれども。

コンクリートでないことを祈りながらバルコニーから身を乗り出す。

「……はははっ」

突然、スキルが笑い出した。

炎がすぐ背後に迫っているこの状態では何とも異様な光景といえた。だが、炎のせいで頭がおかしくなったというわけではない。彼は極めて正常な状態にある。

「俺は、世界で1番最高の仲間達を持っているかもしれない」

彼の視線の先にはリグ達サーカス団の団員達がいて、なんと厚手のシーツを広げて待機していたのだ。さらに驚いたことに屋敷から逃げ出した盗賊を捕らえたらしく庭には何人かの賊が縛られ転がされていた。

バルコニーから姿を現したスキルを見るなり、リグは大きく手を振った。

「若君　　っ！ 私達が支えますから、この上に降りてきてくださ　　いっ！」

「わかった！ 最初に屋敷の主人を受け止めてくれ」

ロワーズを抱え、バルコニーから下へと降ろす。団員達は落下してきたロワーズの体をシートで受け止めることに見事成功した。ホッと胸を撫で下ろし次はレイピアを抱え上げる。

「……スキル……」

名を呼ばれハッとしてその方を見ると、気を失っていたはずのレイピアが微かに瞳を開け、彼の方を見上げていた。

「……私……？」

「少しの間気を失っていたんだ。でも、もう少し眠っていた方が良かったかもしれない」

気を失っていたままの方が恐怖を感じることなく下に降ろすことができるから。

「これから君を下に降ろす。リグ達が受け止めてくれるから少しの間恐くても我慢しててくれ」

「……あなたは？」

「後から行くよ。一緒に降りるより1人ずつの方が危険は少ないから」

レイピアは突然目を見開き、悲鳴を上げる。

「危ない！」

その悲鳴のような叫びにハッとして後ろを振り向くと、燃えた外壁の一部がスキルの背中に崩れ落ちてくるところだった。間一髪でそれを避ける。まともに直撃していたら彼の体は火に包まれていただろう。

「……急ぐ」

レイピアを抱え直し再びバルコニーに向かう。背後ではズズズ…と建物が嫌な音を上げているのが聞こえる。

「スキル、駄目。一緒に降りましょう」

レイピアは懇願するような瞳をスキルに向けた。

もうこのバルコニーがいつ崩れてもおかしくない状態なのをレイピアもわかっているのだ。リグ達がレイピアを受け止め、次にスキルを受け止める準備をするのでは間に合わない。

「一緒に……お願い、スキル」

絶対に離れまいとスキルの服を強く握りしめている。レイピアの思いを知ったスキルはゆっくりと頷く。

「レイピア……わかった。一緒に降りよう」

「私……あなたと一緒にだったら……」

死んでもかまわない、そう言おうとしたレイピアだったがその言葉はスキルの言葉によって遮られる。

「……俺は死ぬ気はないよ。もちろん君も。返事を聞くまでは何が何でも生きのびてやる」

ニツと不敵に笑う。

そしてスキルはレイピアを抱え上げたままバルコニーに足をかけ、躊躇うことなく飛び降りた。それとほぼ同時に彼がいた場所に外壁

が崩れ落ちバルコニーが炎に包まれた。

落下の時間は実際は一瞬のことなのに、彼らにとってはとても長い時間のように感じられた。

レイピアを固く抱きしめ、落下への衝撃に耐え瞳を閉じた。

次にスキルが目を開けたのは、シートに受け止められる感触を背中に感じてからだった。包み込まれるようにやわらかい感触。思っていたよりずっと衝撃が少なかった。

「……助かった……」

抱きしめているレイピアを見ると彼女もまた無事で怪我1つ負っていない。大きく安堵の息をついた。

瞳を開けたレイピアもまたスキルを見上げ、おずおずと問い掛けてくる。

「スキル……私達……無事なの？」

「ああ。どうやら悪運が強いらしい」

レイピアは安心したように深く息をつき、それからクスツと笑い出した。

「あなた、服も顔もドロドロよ」

スキルの顔も体もバケツの水を被ったのと汗とススとが混じってドロドロの状態だった。くすくすと笑っていたレイピアの声は次第に涙声へと変わっていく。

同じようにススで汚れているレイピアの頬を涙が伝い落ちていく。

「助けにきてくれて……守ってくれてありがとう……」

2度と離れまいとするように、固くスキルを抱きしめたまま瞳を閉じた。スキルは微笑み、愛しげにレイピアの頭を撫でた。

視線を感じて顔を上げると、声を掛けようか掛けまいか悩んだ様子で見下ろしているラグスとサーカス団の皆の姿があった。

「……みんな……」

レイピアは胸がいっぱいでそれ以上言葉にならずラグス、リグ、シア、ブレン、団員達の顔を見渡すだけで精一杯だった。

「姐さん。俺は……俺は！ 心配したんですぜ」

「ラグス、ごめんなさい……。でも、あなたが知らせに行ってくれたおかげね。ありがとう」

ラグスは大きな体を揺らし、ワツと涙を流して泣き崩れる。団員達は驚いた表情その様子を見つめていたけれど、誰も彼のことを苦笑いしたり馬鹿にしたりはしなかった。

「レイピアさん……よかった。心配したんですよ」

リグもまたラグスと同様に今にも泣き出しそうな顔で深く息を吐き、胸を撫で下ろした。

レイピアとスキルが無事であることを喜んでいた彼だったが、それも束の間のこと。すぐに顔を真っ赤にしてカンカンに怒り出した。

「まったく、あなたときたら！ もう無茶はしないって私と約束したじゃないですか！」

レイピアは申し訳無さそうにこれ以上ないくらい身を縮みこませる。

「ご、ごめんなさい……リグ」

「本当に今度という今度は心臓が破けてしまうかと思いましたよ！ 私が早死にしたらどうしてくれるんです！？」

今度は笑いを堪えて震えているスキルをキツと睨みつけた。

「若君！ あなたもそうです。笑ってる場合じゃありませんっ！ あんな状態になってる屋敷に入るなんて無茶もいいところです！」

スキルは苦笑しながら手をひらひらと振った。

「今後は気をつける。悪かった、リグ」

言葉ではそういつつも、態度にはちっとも反省の色が見られないスキルに再びリグが「若君　！」と怒鳴った。

「レイピアの馬鹿、馬鹿、大馬鹿　　っ！」

次にレイピアの元にきて大声を張り上げたのはシア。こんな風に彼女がレイピアに対して怒鳴りつけるのは初めてのことだった。

「一人で悩んで、勝手に出て行ってしまっなんて！ その上炎の屋

敷に飛び込むなんて！ いっぱいいっぱい心配したんだから　！」

彼女の怒りはもつともなこと。色々とレイピアのことを気にかけてくれて、いつも助けてくれたシアに対してレイピアがしたことといえは何の相談もせずに黙って出て行ってしまったことだ。

その行動がどんなに彼女を傷つけてしまったかと思うと申し訳なさでいっぱいになる。

「シア……ごめんなさい。本当にごめんなさい……」

シアはペチ、と軽くレイピアの頬を叩き、それからニコツと笑う。

「これで許してあげる」

「シア……」

「レイピアも辛かったんだものね。でもね、これからは1人で悩まずに私に相談して。……それとも私じゃ頼りにならないかな？」

何度も何度も首を振って否定する。

「そんなことない！　ありがとう……シア。大好きよ」

シアに飛びついて抱きしめる。

すると周りからパチパチパチ、と拍手が沸き起こった。

驚いてシアから離れ、顔を上げてみると屋敷の庭には見物にきたたくさんの方の人達がいて、「俺、感動した！」とか「いいもの見させてもらったぜ！」とか口々に叫んでいる。

レイピアは恥ずかしさで顔を真っ赤にさせて俯く。

「この屋敷を救ったのは俺達サーカス団さ！　中央広場で公演を行なってるのでぜひ見に来て下さいねー！」

そんな中、何人かの団員達は屋敷の様子を見に来ていた町の人1人1人に「よろしくねー」と言ってビラを配り歩いていく。

レイピアは団員達とスキルとを交互に見た後、お腹を押さえて笑い出す。

「まったく……。みんな商売根性が逞しすぎるわ」

「はは、これが俺達の新しいサーカス団のやり方さ。宣伝活動はどんな時でも抜かりなく、ってね」

「……あなたらしいわ」

2人してひとしきり笑った後、お互いを見つめ合う。

先程にも増して顔を赤らめたレイピアは、スキルが見つめている前でゆつくりと左の薬指にはまる銀の指輪に唇を落とした。

それは求婚を受け入れるという証。

「私ね……夢だと思っていたの。あなたが逃げるなって言ってくれたこと、結婚を申し込んでくれたこと。でも……それが夢じゃないとわかって……とても嬉しかった」

「うん」

「……あなたはいつでも私を守ってくれるのね」

「そりゃあ……惚れてますからね。これ以上ないくらいに」

照れくさそうに頬を掻いて笑う。同じように照れてしまったレイピアも顔を俯かせる。

「明日からとても忙しくなる。サーカス団で暮らしていくっていうのは大変なことも多い。それでも一緒についてきて欲しい。いいかい？」

「はい！」

顔を上げたレイピアは満面の笑みを浮かべ、幸せそうな表情で答えた。スキルはこんな表情をするレイピアを初めて見る。たまらなく綺麗だと思った。

自然とお互い瞳を閉じ、引き寄せられるようにゆっくりと唇が重なる。

ワツと団員達と街の人々の歓声が上がる。「おめでとー！」という祝福の声をもらうレイピアは顔を真っ赤にして俯きながらも嬉しそうだった。その光景を見つめていたラグスは「お幸せに、姐さん」と言いながら唇を噛み締めこっそりと涙を流した。

翌日、街では2つの出来事に話題が集まっていた。

盗賊に襲われ半焼してしまったロワーズの屋敷のこと。そしてロワーズの命を救ったサーカス団のこと。

屋敷はすぐに建て直しがされることになり朝から屋敷には大工が詰め掛け大いに賑わっていた。

一方サーカスの方は屋敷とは違う賑わいを見せている。昨日の一件が元で一躍有名になったスキル達を見ようと朝からステージとなるテント前には人が押し寄せている。チケット売り場は大変な混雑で売り場の者達は、忙しさと嬉しさの悲鳴を上げっぱなし。

公演が始まり、観客の前には団長としてステージに立つスキルと、その婚約者として傍らに寄り添うレイピアの姿があり、誰の目から見ても2人は幸せそうだった。

ステージは大成功。

観客からの割れんばかりの拍手が上がり、ステージの幕はゆっくりと閉じていった。

E
N
D

番外編 その1・・・ユーザ編（前書き）

11章読後推奨。過去編の話。

番外編 その1・・・ユーザ編

嬉しかったんだもの。来いよ、って言ってくれたユーザの言葉が。

真っ直ぐな瞳で。

娘はそう言った。

ホットリップの街中で助けた娘、名はレイピアと言った。いや、あれは助けたというものではない。道を塞いでいた男が邪魔で退かしたのを娘が勝手に助けられたと勘違いしたのだ。

娘を連れて行こうと考えたのはある考えがあつたからだ。親切心から困っているのを見かねて面倒をみようとしたのではない。

セレイラの街にいたら娘を売るつもりだった。

そこでは「花街」というものが存在しており、娘……特に生娘は娼館に高く売ることができる。売って、金を受け取ってそれで終わるはずだった。

そのはずだったのだが……。

何度も花街に連れて行こうと考えた。

冒険者ギルドの保険に加入させて事故を装って殺すことも考えた。もちろん受取人は自分にして。

だが、どうしてもその一歩が踏み出せなかった。行動を起こそうとするたびに娘の言葉と笑顔が頭を反芻した。

ユーザは私を助けてくれた人、私にとっては光みたいな人なの。

光などという自分とは最も縁遠いものに結び付けられたのは初めてだった。

世の中のことを何も知らない世間知らずの貴族の娘。

だから、こんなにも愚かなのだろうか。

素性もわからない自分のことを少しも疑うこともなくついてきた愚かな娘。

その愚かな娘にはまった自分はもつと愚かだな、と自嘲する。

「レイピア……」

幸せそうに自分の隣に眠る娘の髪の毛を梳き上げる。薄暗い中ですら、その滑らかな銀色の髪の毛は輝く。

「……………ん」

微かに身じろぎしただけでレイピアが目を覚ます気配は無かった。レイピアの背に腕をまわし、引き寄せるとその閉じられた瞼に唇を落とす。愛しさがこみあげてくる。

まだレイピアに話をしていないことがある。

自分の過去のこと　盗賊団に所属しているということを。それを話したとき、一体目の前の娘はどんな表情をするのだろうか。

その青の瞳は灰色に染まるのかもしれない。

言えるはずがなかった。

これまでに何人もの命を殺めた。剣士としても、盗賊としても、かつては逃げ惑い、泣き叫んで助けてくれと懇願する者すら手にかけたこともある。仲間達と共に街を焼き払い、掠奪した金品を手には薄く笑った。

もう掠奪行為をしようとは思わない。

あれほど虚しいものはないから。

仲間とも手を切ろうと考えている。

しかし、人の血で真つ赤に染まった手……こればかりは洗い流しても洗い流してもその罪が消えることは決して……無い。

レイピアに触れるのが躊躇われるぐらいにこの手は血に染まっている。だが、たとえこの手が穢れていたとしても、この娘だけは幸せにしたいと思った。

初めて誰かを幸せにしてやりたいと思った。

レイピアを愛している。

だから、言うことができずにいる。知られたくない。自分に対して絶対の信頼を寄せているこの無垢な娘には……。

知らずのうちにレイピアの背にまわしていた腕に力が入ったのだろう。苦しそくに眉間にしわを寄せる。

「……ユーザ……?」

微かにレイピアが瞳を開ける。

どうしたの?と問いたげに眠そうな瞳のまま見上げてくる。

「何でもない。いいから……もう少し休め」

そう言って微かに笑みを浮かべると、それを見たレイピアは安心したようにまた幸せそうな表情ですうつと眠りにつく。

守りたい。

この先、どんなことがあってもレイピアだけは……………。

番外編 その2・・・スキル編（前書き）

1 2 章読後推奨。過去の話。

番外編 その2・・・スキル編

シアは幸せそうに笑っていた。「私、幸せになってくるから」そう言ってサーカス団を抜けたのはつい先日のことだった。

貴族の男にサーカス団で働くのを辞めて、自分の所に来ないかと言われたらしい。シアはサーカス団の重要な戦力であり、彼女がいなくなってしまうのは大きな痛手となる。話を聞いたときは驚いたものの、シアの嬉しそうな顔を見ると反対する気分もなくなり、心から幸せになって欲しいと思った。

だが今日、サーカス団に戻ってきたシアの姿……それは見ていて痛々しいものだった。

殴られた顔は腫れ、紫色に変色しているし体中痣だらけだった。

小刻みに肩を震わせ、嗚咽をもらしている。シアは何も言わなかったが彼女の身に起こったことは容易に想像がついた。

騙されたのだ、あの貴族に。

「あの野郎……」

ブレンは幼なじみの少女の肩を抱き、こめかみに青筋を立てた。彼の心の中にはシアを騙した貴族の男への怒りでいっぱいだった。そしてスキルもリグもまたその気持ちは同じだった。

「若君！？ どこに行くんですか」

「……散歩」

「わ、若君！」

スキルはそう言っただけで出て行ったけれど、とても散歩に行くような雰囲気ではない。怒った様子などその表情からは感じられないけれ

ど、静かに怒っているのは付き合いの長いリグにもブレンにもわかった。

「シアを頼む」

「ブレンまで！？ 待ちなさいっ！」

リグの止める声を見捨ててブレンもまたスキルの後を追った。

スキルの心中は苦々しさでいっぱいだった。

今回のシアのようなケースは初めて起こったというわけではない。以前にもたびたび団内で起こっているのだ。流れ者として各地を点々としている彼らはこうしたトラブルに非常に巻き込まれやすい。

幼い頃からそんな男女のいさかいを見てきたスキルだったから恋愛というものに対して少々冷めている部分がある。

シアの話聞いたときもその可能性があることに気がついていたのだが、しつかり者の彼女が選んだ相手ならば大丈夫だろうと軽く考えていた。

だが結果はあの通り。

スキルは唇を噛み締め、シアを騙した貴族の家へ向かった。

屋敷には正面から入らず、警備の目をかいくぐって裏口から侵入した。誰にも見咎められることもなく貴族の男の部屋に入ると、突然の侵入者に驚いたらしい男は慌てふためいた。

「何だお前は……っ!？」

スキルはその問い掛けを無視し、無言で近づいていく。

「お前は……シアの仲間か！」

男の言葉にスキルは表情を険しくさせる。

「……シア？　うちの団員のことを気安く呼ぶなよ」

吐き捨てるように、忌々しげに言う。

「勝手に屋敷に入り込むなんて……っ。どうなるかわかっているんだろっな？」

「へえ。どうなるんだ？」

その言葉を言い終えるなり、スキルは握りこぶしで男を殴りつける。

ガッ

鈍い音を立てて貴族の男の体が飛ぶ。

「シアの顔を殴った分だ」

淡々と言葉を言い放つその表情は氷のように冷めきっている。

「……痛いかな？　でもシアの受けた痛みはこんなもんじゃない」

男の腹を蹴り、そのまま足で踏みつけ、逃げられないよう壁に縫いとめる。ポケットにしまい込んでいたナイフを取り出すと男の首筋に押し付けた。

少しの無駄もない流れるような動作だった。

「ひ、ヒイ……」

ひんやりしたナイフの感触に男は表情を凍りつかせる。

「今度同じようなことをやったら、こんなもので済むと思うな……」

男にわざと見せつけるように大げさにナイフを振り上げると、そのまま男の首筋をかすめて壁に突き刺した。

つ、と男の首に糸のような血が流れる。

「次は……殺す」

低く、ぞつとするような声音だった。その言葉は効果絶大だったようだ。男は失神し、へなへなと床に崩れ落ちてしまった。

そして効果絶大だったのは貴族の男だけでなく、ここにもまた一人。

「こ、こえええ ……」

ブレンだった。スキルの後を追って来たブレンはその現場を一部始終見ていた。

両手で頬を押さえ絶句し、顔を青くしてスキルからじりじりと後ずさりする。かなり引いてしまった様子。スキルはやれやれとため息をつく。

「なんだよ、ブレン。お前が恐がってどうするんだ」

「いや、だってさあ……。お前があんなに怒ってるの初めて見たから」

スキルは笑う形に唇を歪める。

「最後のアレは単なる脅しで本気じゃない。あれだけ脅かしておけば後から問題が起こる心配も無いからな」

確かにその脅しは効果絶大だったようであの男の怯えようでは今後シアはおろか、サーカス団に危害を加えるとは考えにくい。

「あーなるほど。てっきり俺は本気で殺っちまうのかと思った……」
「馬鹿だな。俺は人殺しはしないよ」

現にスキルは男の首筋に押し当てたナイフを一旦引き、わざと見せつけるように振りかぶってから再び壁に刺した。本気で殺すつもりだったらナイフを引かずにそのままかき切ってしまった方が早い。スキルは盗賊だけれど、彼なりに信念はある。

絶対に人殺しはしない。女子供に刃物は向けない。その信念はこれから先も変わることはない。

「それにしても、お前ばっかりいいところどりじゃねえ？」

ブレンは口を尖らせてぶつぶつ文句を言う。

「遅れてくるのが悪い」

「ちえっ」

「お前にはもつと大事な役目があるだろ？ シアのことを支えてやつてくれ」

スキルの言葉にブレンは目を丸くさせて驚いた表情をする。

「俺が？」

「人の心を癒すとか、……俺はそういうのよくわからないからな。」

それに、シアはお前の大事な幼なじみだろ？」

シアが笑顔を取り戻すのには時間がかかるだろう。

彼女を傷つけた男に報復することはできる。やさしい言葉をかけることもできる。だが、シアを完全に癒すことはできない。スキルは自分自身でそのことをよくわかっていた。

その点ブレンなら大丈夫だ。

彼女の幼なじみでもあり、態度こそ悪いがシアを本当に大切にしているから。

「……ああ」

スキルの予想通りブレンは真剣な表情で頷いた。

「さて、帰るとするか。早いところ戻らないとリグがうるさい」

「もう遅いと思うぜ！。どうせまた『勝手に飛び出していつて！

心配したんですから』とか何とか言って延々とお説教されるんだぜ」

「……ありえる」

くるくると手の中で弄んでいたナイフをしまう。

大きく伸びをしてから2人は再び警備の者に見咎められないよう屋敷を後にすることにした。

番外編 その3・・・スキル編『戸惑い』（前書き）

8章読後推奨。その時スキルが思っていたこと。

番外編 その3・・・スキル編『戸惑い』

子供達の笑い声が響き渡る。

いつだって子供達は元気だ。あの事件　ライの処分によって団員達が暗く沈んでいる中からいちはやく抜け出したのも子供達だった。まだ生き物の死というものについてあまり理解していないのかもしれない。けれどもその明るい声につられるように大人達が立ち直りつつあるのも事実だ。

スキルはテント街の外れにひっそりと造られたライの墓の前に足を運んでいた。土が盛られたその上に小さい墓石が置かれただけの簡素な造りの墓だった。

スキルはそこに膝を折ると墓石の隣に今朝手に入れたばかりの一轮の白い花をたむける。

人の手によって処分されてしまった若い雄ライオン。ライのことを考えると胸が痛んだ。ライを処分したことはスキルとて辛いことだったのだ。団長である父の意見に従って最終的に判断を下したのスキルだったが、ライを処分せずに済むのならどれほど良かったか。

スキルのいるサーカス団は曾祖父が最初に始めたもので、古くから続いているものだった。今のようになって興行収入が上がったのはごく最近のことで、曾祖父の時代には思うように収入を得られない時期が続いた。その曾祖父の時代に同じようにライオンが人を噛んだ事件が起こった。その時は調教師がライオンを叱り付けただけで処分はされなかったのだが、数日後に人を噛むことを覚えてしまったライオンはその調教師を噛み殺してしまった。猛獣を相手にするというのは犬や猫を相手にするのとは違うということを改

めて思い知らされる事件だった。

それ以来サーカス団では1度でも人を噛んだライオンを処分することに決めた。これは曾祖父の代から続いているルールなのだ。

団員達の安全を考えた上での処分だった。

「ごめんな、ライ」

ライに対して謝罪の言葉を口にした後、立ち上がる。

「若君何してるの？」

先程までテント街の方で走り回っていた子供達3人がいつの間にかスキルを囲むようにして、不思議そうな顔をして首を傾げていた。

「祈っていたんだよ、ライの魂が安らかになりますようにってね。お前達も祈ってくれるか？」

子供達はスキルの言葉に大きく頷くと、ぎゅっと目をつぶって手を合わせた。その一生懸命な姿に思わず顔をほころばせると、くしやくしやと子供達の頭を撫でた。

「ありがとう。さ、向こうに行って遊んでおいで」

「あのね、僕達これ取って来たの」

男の子は小さい手にいっぱい握りしめていた草をスキルに差し出した。その新緑色の草は薬草で、煎じて飲むことも絞り汁を塗り薬として使用することもできるものだった。

「どうしたんだい？ これ」

「僕達が取ってきたの！ お嬢さんにー！」

「……お嬢さんに？」
「うん！」

誇らしげに顔を上気させて頷く子供達。

子供というのはいつだって大人の口調を真似したがるものだ。周りの大人達がスキルのことを「若君」と呼ぶから自然と子供達もスキルのことをそう呼ぶようになったし、スキルがレイピアのことを「お嬢さん」と呼んでいるものだから自然と子供達も同じように呼ぶようになった。

「どうして俺に？ お前達が直接持つて行った方が喜んでくれるんじゃないか？」

スキルの問いかけに子供達は困ったような表情を浮かべてもじもじと体を揺らす。

「あのね、あのね、僕達若君とお嬢さんに仲良くなってもらいたいの。だって若君ってばお嬢さんをいじめてるんだもん」
「い……いじめて……？」

確かに怪我をしているレイピアに対してもスキルは一切手加減をしなかった。隙を狙ってはダイヤを奪おうと手を伸ばすレイピアの腕を掴んでは引き倒す。そもそもゲームについて詳しく内容を知らされていない子供達からしてみればその様子が彼女をいじているようにも見えるのかもしれない。

思わず苦笑してスキルは降参の形に両手を上げた。

「わかったよ。これは俺からお嬢さんに渡しておくから」
「本当？ 仲良くしなくっちゃ駄目だよ」
「ああ、努力はしてみるよ」

薬草を受け取り、そのままレイピアのテントに向けて歩き出した。

「……まさか子供達にまで言われるとはね」

スキルもレイピアについては少しやりすぎかと後悔している部分がある。しかし手を抜いたらレイピアに怒られることは容易に想像がついたし、スキルもついレイピアの顔を見ると本気で相手をしてしまう。

調子が狂っているのだ……。

「君は案外不器用なんだね」

レイピアのテントに入ったスキルがそうつぶやいたのは、レイピアが右手に巻かれた包帯を取るのに悪戦苦闘している姿を目にしたからである。

スキルの言葉にカチンときたレイピアは顔を真っ赤にして睨みつける。

「う、うるさいわねっ！ 片手で包帯の結び目を解くのって難しいんだから！」

スキルはレイピアの隣の空いている椅子に腰掛けると、先程子供達から受けとった薬草の束をレイピアの前に突き出す。

「この薬草は子供達からもらったものなんだ。傷口に塗ると回復が早くなる……と言ってもその様子じゃあ塗れそうもないみたいだな」

なかなか包帯が取れずに苛立ちはじめたレイピアに苦笑して、スキルが代わりに結び目を解く。驚いて目を丸くしたレイピアだったが「ありがとう」とぶっきらばうに言い放つとそれきりスキルに任せる形で大人しく腕を突き出した。

解かれた包帯からは生々しい傷跡が見えた。縫ったために皮膚が大きく引きつれたようになって痛々しい。一生残る傷跡だが、それでも腕が引きちぎられなかっただけ幸いというべきだろう。

レイピアの手を取って薬草の絞り汁を丁寧に塗りこんでいく。

驚くほど白くてほっそりとした腕だ。

ほんの少し、胸の中に熱が生まれる。

恐らくスキルが少し力を入れて手前に引くだけであっさりとレイピアは体勢を崩して倒れこんでくるだろう。

いっその手を思いきり引いてしまおうかという衝動に駆られたその時。

「も、もういいからっ！ 終わったんでしょ？」

うわずったレイピアの声がスキルの耳をうち、一気に現実を引き戻された。顔を上げるとレイピアの戸惑うように細められた青い瞳と視線が絡み合い、思わず先程胸に生まれた熱を誤魔化すように口元に笑みを浮かべた。

「あとは……自分でできるわ……っ」

半ば強引にスキルの手を振りほどいて、視線を外す。顔を俯かせた状態のまま自分で包帯を巻いている。必死で。

スキルの態度に戸惑っているような感じにも見える。

「そうかい？ ぐるぐる巻きにしてミイラにならないように注意した方がいいよ」

軽口を叩いてスキルはその場から退散する。「そこまで不器用じゃないわ！」そう怒鳴りつけるレイピアの声を背にして。

テントから出たスキルはそのまま天を仰ぎ見てため息を洩らした。
あの時胸に生まれた熱。

今まで何度もレイピアの手に触れる機会があつたし、それ以上の
ことすらしていたというのに何故今さらになつてこんな思いが胸に
生じるのか。

「本当に調子が狂うな……」

誰に言うでもなくポツリとつぶやいてスキルはもう一度ため息を
洩らした。

番外編 その4・・・帰宅（前書き）

ロワーズの屋敷から脱出した後の話。糖度注意報。

番外編 その4・・・帰宅

燃えたロワーズの屋敷の消化が終わり、騒ぎが収まったのは夕暮れ時だった。屋敷は半焼の状態で、残った部分もいつ崩れ落ちるかわからなかったため、一から建て直しをしなければならなかった。だが、死者も大きな怪我を負った者もいなかったのは不幸中の幸いといえよう。

ロワーズもまた「建物が燃えてもまた建て直せば済むことさ」と快活に笑った。

レイピア達はロワーズ宅を離れ、アクアクリスの街の外れに構えたサーカス団のテント街へと戻って来た。サーカス団に戻ってくるのは2週間ぶりぐらいなのだが、もうずっと長い間離れていたようにも感じる。

「私は食事の準備をしてテントの方へ持っていくますから、とりあえず2人ともお風呂に入っちゃってくださいね。すすだらけなんですから」

リグに言われ、あらためて自分達の状態を見るとかなり酷いものだった。服はあちこち焦げているし、顔も手足もすすで所々黒くなっている。

あまりの格好に2人はただ苦笑するしかなかった。

「えっと、荷物を置きたいんだけどどこへ置けばいいのかしら？」

以前、ホットリップのテント街にいたときはレイピア用のテントがあったけれど、今はアクアクリスに移ってきてしまったからレイ

ピアのテントは無くなっている。

「俺のテントでいいよ。ついてきて」

スキルが立ち上がってレイピアを手招きした。

彼のテントに荷物を置く、ということは今日はそこに泊まるということなのだろうか。

カーツと顔が赤くなる。

婚約もしたし、久しぶりの再会だし、状況としてはおかしくないのだが何とも気恥ずかしいものがある。

その上、団員達がみんなにやにやと笑って見送っているのだ。

スキルなど団員達に寄ってたかつて背中をバシバシと叩かれたり、小突かれたりしている。その度に半眼になって「痛い」とうめいている。

そのことがますますレイピアの頬を赤くさせた。

急にスキルによって手を取られた。団員達を振り切るために駆け出すのかと思ったら、そういうわけでもないようだ。ただ手を繋ぐという行為。

ピュー、と団員達の口笛が聞こえる。

その中を2人で歩いていく。

レイピアが急に黙り込んでしまったので、スキルが問い掛けてきた。

「どうかした？」

「手、繋いで歩くのは初めてだから……」

レイピアはこんな風に手を繋いで歩くという経験をしたことがなくて。恥ずかしい気持ちもあったけれどそれ以上に嬉しかった。

ふふ、と笑うとスキルもそれにつられるようににっこりと笑う。

「じゃあ今度手を繋いでデートでもしましょうか？ お嬢さん」
「デート……！」

再びレイピアは驚いた顔をする。

実は、デートというのもしたことがないのだ。ユーザと一緒にいた頃は冒険や戦いばかりの日々で、デートと言えるようなものはなかったから。

「嫌？」

デート、というのはどこへ行けばいいのかもよくわからない。何しろレイピアはそういった方面に疎いのだ。でもスキルに任せておけば上手くりードしてもらえそうな気がする。

スキルの言葉に対して首をぶんぶんと振って否定する。

「ううん、そんなことない。行きたいわ！」

そんなことを話しながら、2人はスキルのテントに入った。
彼のテント内は相変わらず余計なものは置いておらず、簡素な感じだった。荷物を下ろす。

スキルは椅子に腰掛け「お風呂、先にどうぞ」とレイピアを促す。

「あ、ありがとう。いいの？」

彼だつてすすだらけの状態なのだ。先に入っていいものなのだろうか。レイピアが躊躇していると、スキルはにっこり笑った。

「もちろん。それとも一緒に入る？」

心底楽しそうに言うのだ。冗談とも本気ともつかなくて。
カーツと顔に血が昇ってくる。

「ば、ば、ば、馬鹿！」

慌てふためき、手元にあったクッションを彼に向けて投げる。避けられてしまつて、当たることはなかったけれど。

あちこち軽い火傷を負つてしまつていたため、お湯に浸かるとヒリヒリと焼けるような痛みを感じたけれど、何とかすすを全て落とすことができた。

テントに戻ると、机の上にはリグの用意してくれた食事が2人分あつた。サンドイッチと温かいスープだ。

スキルは先に食べて、と言つたけれど彼がお風呂から上がるまで食事は待つていようと思い、椅子に腰掛けて休むことにした。

ひどく瞼が重い。

疲れが出たのか、机の上に頬杖をついたままうとうと頭を揺らす。

無理も無い。男のロワーズを支えながら炎の屋敷を動き回つていたのだ。体は相当疲労している。

まだスキルと話したいことがあるし、食事も2人で取りたいし、起きていたいと頭では考えているのに襲つてくる睡魔には勝てず、やがてとうとう堪えきれなくなったように机の上に顔を置いて、すーすーと寝息を立てはじめた。

しばらくして、スキルがガシガシとバスタオルで髪の毛を拭きながらテントに戻ってきた。

彼もまたところどころに火傷を負つていて、お湯に浸かったらか

なりヒリヒリと痛んだようだ。だが、そんなことは微塵も表情に出さずに痩せ我慢するところはさすがと言つべきか。
スキルはしん、と静まり返ったテントに首をひねった。もう日も落ちたというのに電気すらついていない。

「レイピア？」

問い掛けてみるが返事はない。

またどこかへ行ってしまったのでは、という不安に襲われる。

明かりを点けてみるとレイピアは椅子に座ったまま、頭を机の上に置いて眠っていた。ホッと安堵する。

近寄つてみても、全く起きる気配がない。疲れているのだろう。

穏やかな寝顔だった。思わず微笑がこぼれる。

起こさないように気をつけながら、レイピアを抱き上げてベッドに運び、毛布をかけた。

「お疲れさま」

体を屈めて、レイピアの頬と頬に唇を落とす。

くあーっと大きな欠伸をして、首をコキコキと鳴らすとスキルは机に向かった。今日やるはずの公演がロワーズの屋敷の火事騒ぎで中止になってしまったため、いろいろと調整を行なわなければならぬのだ。

まだゆっくりと眠るわけにはいかなそうだ。

深い眠りから目覚め、目を開けると、微かなランプの光が入ってきた。その方向へ顔だけ向けてみるとスキルが机に向かっていて、

書類にペンを走らせていた。

レイピアが目覚めた微かな気配に気付いたのだろう。スキルがこちらを向く。

「ごめん、起こしちゃったね」

「私、眠って……？」

スキルを待っているうちにいつの間にか眠ってしまったのだ。ハッとして慌てて上半身を起こす。

「ごめんなさい！」

「疲れてるんだよ。まだ夜中だから、もう少し眠っているといい」「ううん。もう、大丈夫」

起き上がって、机の方に向かう。

「何か手伝えることはない？」

「いや、平気だよ」

「でも……」

「これから、ゆっくり覚えていけばいいよ。時間はいっぱいあるんだしね？」

だから休んでいなさい、と言わんばかりにベッドへ押し戻されてしまい、その上毛布までかけられる。

仕方がないので、ベッドに入ったままスキルをじっと見上げる。視線に気付いたスキルが首を傾げた。

「何？」

「怒らないの？あなたにもいっぱい迷惑かけてしまったわ。だから……もっと色々言われると思ったの」

無鉄砲な行動ばかりして！と怒鳴られることを覚悟していたのだ。自分でももう少し考えて動けば良かったとか、馬鹿なことをしてしまったという自覚があるから。だが、彼はそのことについて何も言わない。

「言いたい事はもちろんあったよ。でも、君の無事な姿を見たら……どこかへ行ってしまった」

「スキル……」

「もう危険なことはしないようにね。俺の寿命を縮めないで欲しいな」

「うん……。気をつける」

レイピアが頷くと、その答えに満足したように彼もまた頷いた。そして、とろけそうな笑顔で笑う。

「スキルがやさしいわ……」

信じられない、といった表情でレイピアがつぶやく。

「じゃあ、今までの俺は何だったのかな？」

心なしか、少し肩を落としたように見えた。

「前のあなたは、もっと……何ていうか……そう、いじわるだったもの」

スキルが苦笑する。

思い当たる節があるという感じた。

確かにスキルには、レイピアにいじわるをしていた覚えがある。いや、いじわるというよりからかっていたという方が正しいかもしれない。

すぐにムキになるレイピアを見るのが楽しかったのだ。それは、好きな子をいじめたくなるという心境によく似ている。

「まあ、どっちも俺なんだけどね？」

「そうなんだけど。でも、何か変……」

とろけそうなほどの彼の笑顔は、間違いなく恋人に向ける笑顔だ。そしてそれは自分に向けられていて。
いまだにそのことが信じられなくて、夢ではないだろうかと思え
思う。

「こういうのは嫌？」

スキルの問い掛けにふるふると首を振って、否定する。

「ううん。嫌じゃない……」

もちろん嫌なわけがない。

ただ、慣れていないのだ。こんな風に甘い笑顔を向けられるということに。慣れていない上に、スキルの変わりぶりに戸惑っているだけだ。あまりに自分の記憶の中にある彼とかけ離れているから。

「まだまだあなたの知らない所、いっぱいあるわ。これからもっと知っていききたい……」

「俺も同じ意見。俺達が年寄りになるまでまだまだ時間はいっぱいあるわけだから、これからゆっくりと、ね？ 未来の奥さん」

奥さん、などと不意打ちのように呼ばれてしまい顔を赤くし、あたふたと戸惑う。

「奥っ！……そっか、そうなるのよね」

これからは、このサーカス団の一員として暮らさなくてはならない。

ダイヤをめぐって滞在していた時も大変だったけど、これからはもっと大変になるに違いない。いずれは団長の妻として、サーカス団を盛り立てていかななくてはならないのだから。

でも、彼と一緒にいたら何でもやっていける気がするのだ。それに気のいい仲間達もいる。

レイピアは体を起こし、ベッドの上に緊張した面持ちで膝をつき、深々と頭を下げた。

「あのっ、ふつつか者ですが……よろしくお願いします」

キョトン、とした顔でその様子を見つめていたスキルだったが、すぐに笑いを噛み殺すように肩を震わせた。

「な、何よ！」

「いや、かわいいなと思って」

「だったらどうして笑うのよ」

「それは、愛が余って」

そう言うスキルを疑わしげな目で睨みつけて、頬を膨らませた。

「嘘つき！ 前言撤回、やっぱりあなたっていじわるだわ」

「でもそんなところも好きでしょ？」

「……自信過剰」

「じゃあ嫌いなのかな？」

嫌いなわけではない。

わかっていて、こんな質問をするなんて、本当に。

「……いじわる」

拗ねたようにボソリとつぶやくレイピアに対して、スキルは満足そうに微笑んだ。本当に、何ていじわるな人なんだろう！

ピンクダイヤモンドをめぐる勝負は終わったけれど、彼には当分勝てそうにないと心の底から思った。

番外編 その5・・・リグは見た（前書き）

本編、完結後。あの2人は幸せらしい。リグの不運の話。

番外編 その5・・・リグは見た

その日行なわれる全ての公演が終了し、明日の準備が終わった頃。団員達は団長とその婚約者、スキルとレイピアの姿がないことに気づく。その理由を何となく察しているので特に気にすることなく自分達のテントに戻るためにそれぞれ解散した。

肝心の2人はというと、倉庫として使っているテントの中にいた。

「ね、ちょっと……スキル！」

衣装箱に背をもたせかけたレイピアは、顔を真っ赤にしながら抗議の声をあげる。

なぜこんなことになったのか。

単純なことだった。

小道具の片付けのために倉庫に入ったら、同じように片付けに来たスキルがいて、抱き寄せられてしまったのだ。初めは軽くキスをしているだけだったのに、あれよあれよという間に押し倒されてしまった。

「誰か来たら……」

「誰かが来るかもしれないシチュエーションって燃えるよね」

などと、本気だか冗談だかわからないことを言う。

「なっ何言ってるのよ……！」

「大丈夫、誰も来ないよ」

言いながらも手は休まることなくするとレイピアの服を脱がしていく。上着を脱がし、服のボタンに手をかける。

「ちょっと待つ……ん」

制止の言葉は最後まで続かず、唇を塞がれてしまった。
と、その時。

シャツとテントの幕が開く音がした。

「まったく、どうして私がブレンの忘れ物を取りに来なくちゃいけない……んがつ！？」

ぶつぶつ言いながら入ってきたリグはスキル達を見るなりカキン、と石のように固まった。固まったのは彼だけでなくレイピアも同様だった。

「わ、私っ！ 顔を洗ってくるっ！」

いち早く立ち直ったレイピアがスキルを突き飛ばし、衣服を直し、弾丸のように外へと飛び出す。その場に残されたのは顔を俯かせたままのスキルとリグの2人だけになった。
重苦しい沈黙が訪れる。

「わ、わ、わ……」

顔を青ざめさせて、体を震わせるリグ。

「やあ、リグ」

顔を上げ、にっこりと天使のような笑顔で微笑むスキルの姿があ

った。ゆつくりと近づいてくる。
だが、目は少しも笑っていない。

「一体、どういう、理由があつて、ここに、やってきたのかな？」

にここにこしたまま、ひと言ひと言区切りを入れながら喋る。彼の
背中から黒いオーラが出ているのが見えるのだ。

怖い。

ハッキリ言つて怖い。

「ああああ……」

リグはへびに睨まれたカエルのようにその場から動けずにいた。

「ここ数日公演の方が忙しくてね、ようやく今日になってレイピア
に触れることができたんだよね」

「あううああ……」

震えるリグをよそに数日ぶりだったのにねえ、と繰り返す。

真綿で首を絞められる、というのはまさにこういう状況のことを
言うのかもしれない。いっそ思い切り怒鳴られた方がいいのに、と
リグは思ふのだった。

恐ろしいその時間からようやく抜け出し、肩を落としてトボトボ歩
くリグの視界に

「ぶはーっはっは、まさか本当に行くとは思わなかったぜ」

と言いながら足をばたつかせ、ヒーヒー涙を流して地面を叩くブレンの姿があった。あー苦しいー、と何度もつぶやきながら。

彼はわざと倉庫内に忘れ物をしたふりをして、リグに取りに行かせたのだ。その結果どうなるかも予測済みで。

何のことかわからずポカン、としていたリグだったが、その意味に気づくとみるみるうちに怒りで肩を震わせる。

「ブ、ブレン！ やりましたねあなたは、あなたって人は~~~~~
！！」

「こんな手に引つ掛けるお前がバカなんだよ。ブワァーカ！」
「バ、バカとは何ですかー！」

取っ組み合つての喧嘩が始まる。

「ほんと、ガキなんだから」

傍からその様子を見ていたシアがため息をもらす。

まるで男子学生のやるようないたずらだ、と思う。20代の若者がやるようなものではない。

顔を洗い、気持ちを落ち着かせ真つ赤になった顔が元に戻ったのを確認してからレイピアはスキルのテントへと向かう。

まだ結婚をしていない2人はテントが別々になっている。どちらかがもう一方のテントにいる時が多いのであまり関係ないのだが、一応はじめはつけてあるのだ。

ベッドの上で資料を読んでいるスキルはレイピアに気づくなり手招きをした。近づいていくと腕を引つ張られすっぱりと彼の腕の中に包まれてしまった。

目を丸くするが、大人しくベッドに腰掛けスキルの胸に頭を預ける。

「リグのこと、怒ってるの？」

問い掛けると、スキルは軽く笑ってみせた。

「まさか。リグはいじめると楽しいから」

「やっぱり……。あまりいじめるとかわいそうだわ」

「まあ、あんまりいじめないようにしてるんだけど、なんせ俺の生活の一部だしね」

昔からこんな感じだったんだから仕方ないんだ、と言う。レイピアは軽いため息をついただけでそれ以上たしなめようとはしなかった。

「ふふふ。こんな風にゆつくりできるのって久しぶりね」

スキルに寄りかかったまま、レイピアがつぶやく。その顔はとても嬉しそうだ。

「最近忙しかったからね」

アクアクリスの一件があつて以来サーカス団は以前の2倍ぐらいの賑わいを見せている。サーカスを見たいという客が増えればそれに応えるためにも公演回数を増やす。そのため毎日がてんでこ舞いの状態なのだ。当然団長であるスキルにも負担がかかっている。ここ数日彼があまり睡眠を取っていないのを知っている。

「体を壊さないようにしてね。今日はゆっくり休んで」

スキルの頬に唇を寄せてから離れようとする。だが、それは彼に阻まれてしまつて離れることができなかった。

「君つてわかつてないな。そんなセリフを言われると男は弱いんだ。特にそれが自分の惚れてる相手だつたらなおさらね」

「疲れてるんじゃないの……?」

「そんなの、吹き飛んだ」

レイピアをこれでもかというくらいに強く抱きしめる。

「さっきの続き」

頬を染めたレイピアの顎をくい、と上げて口づけようとする。
と、その時
シャツとテントの幕が開いた。

「あの、若君……さっきはすみませんでし……んがっ!？」

スキル達を見、再び石のように固まるリグ。

「わわわ……レイピアさん!? さっき顔を洗いに行つたんじゃない……」

「わ、私……! 自分のテントに戻ろつと」

スキルを突き飛ばし、弾丸のように飛び出すレイピア。後に残されたのは先程と同じように顔を俯かせたスキルとリグの2人だった。たらたらと冷や汗が流れていく。

「やあ、リグ」

顔を上げたスキルはにっこりと笑いかけた。
だが、背中からは先程よりもさらに黒いオーラを発しているように見える。サーツと顔が青ざめていく。

「わ、わ、若君……！」

その後、リグの絶叫ともつかぬ涙声が響いたとか、響かなかったとか。

番外編 その5・・・リゲは見た（後書き）

完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6993/>

盗賊と領主の娘

2010年10月8日22時20分発行